

日本古典全書

井原西鶴集 一



監修

佐佐木信綱  
柳田國男  
山田孝雄  
和辻哲郎

新村出  
津田左右吉

# 井原西鶴集

一

朝日新聞社  
刊  
日本古典全書

日本古典全書

「井原西鶴集」一 藤村作校註

昭和二十四年九月三十日初版發行

昭和三十一年四月三十日第五版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二八〇圓



# 目次

解 説	三
-----	---

一、西 鶴	三
-------	---

二、好色一代男	一三
---------	----

三、好色五人女	一七
---------	----

四、文 體	二三
-------	----

五、西鶴を生んだ社會	二四
------------	----

凡 例	三三
-----	----

## 好色一代男

卷 一	三九
-----	----

目 録	四〇
けた所が戀のはじまり	四〇
はづかしながら文言葉	四三
人には見せぬ所	四五

## 卷

## 二

袖の時雨は騒るがさいはい……………哭  
尋てきく程ちきり……………三

煩惱の垢かき……………番  
別れは當座はらひ……………兵

六

## 目録

六

誓紙のうるし判……………七

はにふの魔道具……………三

旅のでき心……………七

髪きりても拾られぬ世……………三

出家にならねばならず……………七

女はおもはくの外……………三

うら屋も住所……………七

## 卷

## 三

## 目録

八

一夜の枕物ぐるひ……………七

戀のすて銀……………三

集禮は五匁の外……………七

袖の海の看寶……………三

木綿布子もかりの世……………七

是非もらひ簀物……………七

口舌の事ふれ……………七

## 卷

## 四

## 目録

一〇

夢の太刀風……………一〇

因果の關守……………一〇

替つた物は男傾城……………一三

形見の水櫛……………一七

雪のつり狐……………一六

一〇

八

目次三月……………二八  
火神鳴の雲がくれ……………三三

## 卷

五

目録……………二五

命捨ての光物……………二四

後は様つけて呼……………二六

一日かして何程が物ぞ……………二七

ねがひの搔餅……………二九

雷流の男を見しらぬ……………二九

欲の世中には是は又……………三三

今爰へ尻が出物……………三三

## 卷

六

目録	二四	寢覺の榮好	二五
喰さして袖の桶	二六	詠は初姿	二六
身は火にくばるとも	二七	匂ひはかつけ物	二七
心中箱	二八	全盛歌書羽織	二八

卷

## 七

目録	七二	さす盃は百二十里	七八
其面影は雪むかし	七三	諸分の日帳	八八
未社らく遊び	七五	口添て酒輕籠	八八
人のしらぬわたくし銀	七六	新町の夕暮鵜原の曙	九二

卷八 ..... 一七

目録 ..... 一七

らく寝の車 ..... 一八

情のかけろく ..... 二〇

一盃たらいて戀里 ..... 二〇

都のすがた人形 ..... 二〇

床の寶道具 ..... 二〇

歌 ..... 二二

好色五人女

卷一 姿姫路清十郎物語 ..... 二五

目録 ..... 二五

戀は闇夜を書の國 ..... 二七

太鞍による獅子舞 ..... 二三

狀箱は宿に置て來た男 ..... 三五

くけ帶よりあらはるゝ女 ..... 二九

命のうちの七百兩のかね ..... 三八

卷二 情を入し樽屋物かたり ..... 三二

目録 ..... 三二

戀に泣輪の井戸替 ..... 三三

京の水もらさぬ中忍びてあひ釘 ..... 三九

こけらは胸の瀬付さら世帯 ..... 四〇

踊はくづれ桶夜更て化物 ..... 三三

木屑の杉やうじ一寸先の命 ..... 四八

卷三 中段に見る曆屋物語 ..... 三五

目 録……………三

人をはめたる湖……………三六

妻の關守……………三

小判しらぬ休み茶屋……………三六

してやられた枕の夢……………三

身の上の立聞……………三七

## 卷四 戀草からけし八百屋物語……………二七

目 録……………二

雪の夜の情宿……………二八

大節季はおもひの闇……………二

世に見をさめの櫻……………二八

蟲出しの神鳴もふんどしかきたる君さま……………二

様子あつての俄坊主……………二八

## 卷五 戀の山源五兵衛物語……………二九

目 録……………二

衆道は兩の手に散花……………二九

連吹の笛竹息の哀や……………二

情はあちらこちらの違ひ……………二九

もろきは命の鳥さし……………二

金銀も持あまつて迷惑……………二九



井原西鶴集一

藤村作



## 解 說

### 一、西 鶴

井原西鶴の傳記は資料の極めて乏しいために、立派に纏まつたものはない。斷片的なものを集めて、その生涯を臚げに纏め舉げてゐるに過ぎない。

先づ井原西鶴とは何人であるか。これに關して昭和四年一月發行の國語と國文學、新資料の研究と題する特輯號の中に、余は

今年春の頃とおぼえてゐる、友人笹野堅君が訪れられて、井原西鶴の實名は既に世に知られてゐるかと問はれた。余は嘗て聞いたことはないと答へると、それではまだ多く世に知られてゐないであらうといつて、日本藝林叢書第八卷見聞談叢の一節を示された。余は一讀して、その注意すべき珍しい新資料であると考へたから、君に進んで考證研究をなして世に發表されんことを請うたが、謙遜な君は然るべくと發表のことを余に譲られた。

ので、「一先づ筆を執つて單に學界に報告することとした」といつて、見聞談叢の左の一文を掲げた。

貞享元祿の頃、攝津の大坂に、平山藤五といふ町人あり、有徳なるものなれるか、妻もはやく死し、一女あれども盲目、それも死せり、名跡を手代にゆつりて、僧ともならず、世間を自由にくらし、行脚同事にて頭陀をかけ半年程諸方を巡りては宿へ歸り、甚俳諧をこのみ、一品をしたひ、後には又流義も自己の流義になりたる、西鶴とあらため、永代藏又は西ノ海、又は世上四民雛形なといふ書を、作れるものなり、世間の吉凶悔吝患難予奪の氣味、よくあしらひ、人情にさつく生れつきたるもの也、又老莊ともみえず、別種のいき形とみゆ、黒田侯歸國の時、大坂の御屋敷へ、大阪にて召して、次にてはなし聞き給ひ、世上へ出し、使番聞番留守居の役に云付侍らば、かゆき所へ手のとゝくやうにあらん人からと稱し給ふよし、云々(以下略)

なほ余はこれに關して、

この新資料について、余の先づ喜ぶ所は、見聞談叢の著者が、その人物に於て相當信頼をなし得べき人であり、またその記録された年代が西鶴の在世時に近いことである。この二點において本資料は相當に敬意をもつて取扱はるべきものであらう。

この新資料に據れば、西鶴の實名の平山藤五であつたことが知られる。井原といふのが苗字でなかつたとすれば、井原西鶴は雅號のやうなものであらうか。次ぎに彼を武家の出身であらうかといつた疑

も、單に疑に止つて、大阪の町人であつたことになる。作品から察すると、いかにもこれが眞實らしい。元祿太平記が彼を貧乏者と傳へて、誰も疑ふものはなかつたやうであるが、この資料に依ると、もと相當富んでゐた家に生れたが、後その家を手代に譲つて、俳諧や浮世草子などに筆を執つて、専ら世を自由に暮らしたといふから、生得の貧乏者ではなかつたこととなる。この點も彼の作から考へ、これまで知られてゐた經歷と照らし見て興味多く思はれる。

獨身者であつたらしいといふ想像はよく當つてゐたこととなるが、しかし嘗ては妻も持つたが、夙く死なれてしまひ、一女子も盲目の上に早世してからは、全く獨身であつたと見える。一目玉鉤の著述のあることや、好色本その他の作が三都ばかりでなく廣く地方にわたつて材を得てゐる趣から察して、彼が旅行家であつたといふ想像もこれに依つて確められるわけである。一年の半分も旅に出てゐたといふことはいかにもさうであつたらしく思はれる。ここに疑問となり、その解決の望ましいことは、著作についてこの資料の傳へる所である。永代藏はいいが、西の海、世上四民雛形といふのは永代藏の別名の意でいふのか、文が不明確であるが、今日傳へてゐる日本永代藏の二種の本には新長者教の別名を傳へて、西の海とも世上四民雛形とも傳へてゐない。永代藏の外にこの二書があるの意かとも取られるが、それにしても、余の寡聞まだかかる著作を見たことなく、またかかるもののあることを傳聞したこともない。偏へに特志家の研究示教を俟つのである。



と記して置いた。爾來將に二十年に垂んとしてゐる。この間に世の西鶴に關する研究も進んだが、この資料の所傳を否定すべき新發見もなく、學者は寧ろこの資料以上に彼の素性などを知るに價値ある資料は、今迄のところないと諦めてゐるやうである。

さうすると、西鶴は平山藤五と稱した、大阪町人の出で、もと相當の家に生まれたが、(其角の句兄弟に「されば難波江に生れて住よしのくまなき月をめ云々」とある。)後家業を手代に讓つて、自分は自由の境遇に入つた人であり、妻子もあつたが、妻は彼に先だつて死に、一女子は盲目の上に早世したのである。自由の身となつてから、所々の旅行に日を送つた。文藝の生活に入つたのは、十五六歳から俳諧に親しんだのを皮切りに、四十歳を超えて浮世草子の作に従つた。有名な好色一代男は實に天和二年四十一歳の年出版されたのである。

生歿の年は彼の遺作の一たる西鶴置土産巻頭に載せた辭世の發句の日附が基礎になつて、寛永十九年の生まれで、元祿六年に死歿したと知られる。この辭世句の日附は「元祿六年八月十日五十二歳」とあるが、この八月十日といふのは、辭世句を詠んだ日のことか、死んだ日のことか、この文だけでは明瞭を缺くのである。大阪東區上本町四丁目誓願寺に在る墓碑には「元祿六年癸酉八月十日」とあつて、右と全く一致してゐるから疑ひはないやうなもの、唯一つ遺作の一である「俗つれ／＼」の巻頭門人北條團水の序文に

花の春もみちの秋去て、さためなき時。雨月のはしめ此俗つれ／＼をなかきかたみにして、松壽西鶴のかきりある今はの時云々

とあるので、八月十日は辭世句の日附で、それから中一ヶ月病褥にあつて十月に死んだと解することも、常識上妥當であるから、一概にはいひ難いやうな氣もする。余も誓願寺の墓石が元祿時代のままのものとしては、餘りに磨滅破損のないので、専門的な理學者の意見を徴して見たいと考へてゐる。

大矢數に「予俳諧に入て二十五年晝夜心をつくし云々」とあり、この大矢數は延寶八年の出版であるから、十五歳の少年期から俳諧に入つたことは確實であり、爾來生涯斯道に盡瘁したことはその俳諧關係著作の出版のほぼ晩年まで通じてなされてゐることとわかる。俳人としては、彼は談林派に屬し、西山宗因を師とした。その發句の如きは談林派の發句が今日すでに定評があつて、高い文藝價値を認められないやうに、彼の句も不朽に傳はるべきものはないが、その連句にあつては、多數吟の驍將として、自他共にゆるしたもののやうである。彼は數度矢數俳諧を催して、多數吟の競争を行つた。その中で特に著しいのは最後の興行で、一日一夜の獨吟實に二萬三千五百句に達して、世人を驚倒せしめてゐる。

このことは餘りに莫大な句數なので、後世から眞偽の疑はれるところもあつたが、置土産卷頭の追善發句中に如貞の「月に盡ぬ世かたりや二萬三千句」があり、其角が五元集に、

住吉にて西鶴が矢數俳諧せし時に後見たのみければ

## 驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

ともあり、さらに寶永二年西鶴十三回忌追善の「心葉」の中に北條團水の記した文に、

近比井原西鶴と云者あり、攝の浪速の産なり。西山梅花翁の門より出で、俳諧を以て名を天下に飛とす。……西鶴一日獨吟の千句を誦して、後四千句を獨吟して、梓行世に蔓る。これより多武峯の紀子、仙台の三千風、才鷹、一晶等各數千句或は一万句餘まで獨吟したりけり。世に矢數俳諧と稱する蓋は西鶴に始りける。

さる程に貞享元年六月五日攝の住吉の神前に於て西鶴亦一日一夜の獨吟二万三千五百句を唱て、然も緒上に顯はす。……これより自號して二万翁と呼。見聞の徒神を以て稱せずと云ことなし。……其日席にあるもの高瀧似船、前川由平、岡西惟中……、此日江府其角來り合せて、蠅拂の句を吐く。遠近の輩神前に群り觀ること堵の如し。

とあるのは、何よりも動かし難い事實の證據である。蠅拂の句といふのは、前掲五元集中の句を指してゐること疑ひない。既にこの事實を肯定する以上、この超凡の事蹟を成し遂げた能力を推定することは出来るはずである。そもそも談林連句の附合は聯想を基礎とすることの最も著しいものであり、また西鶴らの連句の一特徴は卑近な實生活中に材を取ることであるから、次ぎの二つの能力を推定することは決して不當であるまい。その一は彼は人生に驚くべき豊富な知識を有した非凡な記憶力の持主であつたこと。さう

してその豊富な知識を、連句の中に自由自在に驅使し得る超凡な聯想力を有してゐたことである。この二つの能力の超凡なことによつて、彼は普通の人の神技視し、不可能視したことを成し遂げ得たに相違ないのである。これは獨り彼の俳人としての特徴を考へるべき要諦たるのみならず、また彼の浮世草子の特徴を考へるために甚だ有益な條件たるべきものである。

彼の日常生活については、行脚旅行に一年の一半を送つてゐたことを、見聞談叢は傳へてゐる。それを信ずるとしても、なほ餘の一半はどうしてゐたであらう。元祿太平記は彼の傳記閱歷を知るに信賴すべき資料を與へてくれる書とはし難いが、それでも

此の道の作者西鶴といふ男出生して、春の花の朝秋の月の夜毎に伊丹諸白を引かけ、二人機嫌の酔興の餘り、寄太鼓を叩き、戀の湊を引舟に乗つて、色道のよしあしを悉くおしはかり

とあるのは、好色本の作者としてかうした方面の生活を有した人であることを肯定させる一資料たるに足るやうである。また實際かうした生活の體驗なしに、彼の好色本のやうなものの書けるといふことは想像し難いことである。併しそれも單に遊蕩好色の耽溺者であつたことをいふのではない。前にも引いた心葉の中の湖梅といふ人の句の詞書に

井原入道西鶴は風流の翁にて机に蘭麝を這し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさととりて、俳諧の通達なる事浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ。下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯へ

人に喰せて樂む。おもへば一代男。

幾秋を生て居やらば下手であろ

湖梅

とある。これは俳人などの所謂風雅、風流の生活を思はせるものである。時代の生活と、俳人の生活とを思ふ時、彼にかうした生活の一面も存したことを想ひ浮べずにはゐられまい。「下戸なれば飲酒の苦をのがれて」とある一句は興味ある言葉である。西鶴は生來の下戸で、飲酒の樂しみ、酔中の興を解しないで、寧ろその苦痛のみを知つた人とする、彼が某大盡の腰巾着であつたといふ元祿太平記の所傳を眞として、好色生活に伴なふ飲酒宴樂の場に、酔餘の人々の中に交つて、どういふ態度を持したであらうと想像して見るところに興をおぼえられるではあるまいか。さうして彼の浮世草子の好色的享樂生活を取扱ひ、また俗つれ／＼や本朝二十不孝などに、飲酒家を取扱つてゐるところに、常にそれらを客觀する餘地を存し、比較的冷靜であつたことが、それと聯關なしには考へられない氣がある。彼は饗宴の席にあつて下戸の眞摯さを失はなかつたやうに、一般享樂の世界にあつても享樂に酔はなかつた人のやうに、その作品を通して推定されるものがある。

今ここに彼の浮世草子の年表を作つて置かう。ただし眞偽未だ判明しないものは、疑問の符を附して列しておく。

天和二年(四十一歳)



好色一代男刊（十月）

元祿元年（四十七歲）

貞享元年（四十三歲）

日本永代藏（正月）

好色二代男刊（四月）

武家義理物語（二月）

貞享二年（四十四歲）

色里三所世帶？（六月）

西鶴諸國咄「大下馬」（正月）

新可笑記（十一月）

梶久一世物語？（四月）

元祿二年（四十八歲）

貞享三年（四十五歲）

本朝櫻蔭比事（正月）

近代艶隠者？（正月）

新吉原つね／＼草？

好色五人女（二月）

元祿三年（四十九歲）

好色一代女（六月）

眞實伊勢物語？（六月）

本朝二十不孝（十一月）

元祿四年（五十歲）

貞享四年（四十六歲）

元祿五年（五十一歲）

男色大鑑「本朝若風俗」（正月）

世間胸算用（正月）

懷硯（三月序文目附）

好色盛衰記

武道傳來記（四月）

元祿六年（五十二歲）

浮世榮花一代男？(正月)

西鶴俗つれ／＼(正月)

西鶴置土産(冬)

元祿九年

元祿七年

萬の文反古(正月)

西鶴織留(三月)

元祿十二年

元祿八年

西鶴名残之友(四月)

(右表中、書名の下括弧内は奥附けによつて刊行月を記したものであるが、その記載を見得ないものは序の日附けを取つた。)

## 一、好色一代男

無署名、美濃紙形。奥附けの書肆名に三種ある。大坂思案橋 荒砥屋孫兵衛可心板とあるのが初板本であり、大坂安堂寺町五丁目心齋筋南横町 秋田屋市兵衛板行とあるのが第二板本であり、大坂住 大野木市兵衛板とあるのが第三板本である。いづれも同板木を使用してゐる。挿畫の筆者名は見えない。外に半紙形本で、本文の漢字を假名書きにあため、挿繪を菱河吉兵衛師宣筆にしたのは江戸で板行されたもので、いはゆる江戸板本である。これあるがために前の三種を上方板と稱してゐる。江戸板本も奥附けの異同で第三板まであつたことが知られてゐる。

さて好色一代男は、小説の満足な形態を有する長編とはし難い。長篇小説に似た形は有してゐるが、それは外形的に見るので、本質的にはさうばかりもいへない。一代男は世之介といふ一貫した人物を有して全説話を構成してゐるには相違ないが、それは全巻を通じて一貫した性格を有する人物でもなければ、また信じ得べき性格の發展を示してゐる人物でもない。むしろ一章一章には夫々に別の主人公が存して、世之介はそれらの一章一章を外面的に繋ぐ、機械的人物たる觀さへあるのであるが、また必ずしもそれと斷ずることも出来ない。すなはち世之介は好色人としては一貫してゐるし、その環境、生活の變化にも發展の自然の順序が存するからである。

いま世之介を中心として一代男の梗概を辿つて見ると、一代男は世之介の七歳から六十歳までの好色の生活綴つたもので、五十四章から成り立つてゐる。さうしてこの五十四章は五十四年に分け配してある。これは恐らく源氏物語の五十四帖に倣つた著意であらう。世に一代男は著想を源氏物語に得たといはれるのは、これを信すべき多くの證左があるが、五十四章の如きもその一である。

この五十四章は、世之介の環境、生活の變化發展の上から四期に區劃される。第一期は短く、春の目覺め期で、世之介の七歳から十歳までの四年間である。傍近く侍した腰元に對する淡い戀慕に始まり、次いで同じ家に起臥した従姉や隣家の中居に對する、幼い思慕となり、ある中年男に思はれて、その寵童となるなど、これを一般人の少年時代に較べると、異常に生熟したもので、遺傳的素質と解される春の目覺

めである。第二期は世之介の十一歳から十九歳までの九年間で、これは思慮の足りない少青年期の性慾的衝動に驅られて、奔放な放蕩生活に耽る時期である。すなはち若い血汐の湧くに任せた若氣の無分別の一時期である。さうして十九歳の時、つひに親の勘當を受けるのである。かかる耽溺生活には金銀の媒介を要する。世之介は勘當によつて、貧困に落ちるとともに第二期に終止符を打つの已むなきに至り、ここに彼の第三期が開けるやうになつた。第三期は放浪の時代であつて、彼の二十歳から三十四歳までの十五年間である。親に見限られて寄るべなくなつた彼は江戸支店の手代の斡旋で、將來の宥免をあてに出家謹慎の身となつたが、香具賣りに接して忽ち心亂れ、寺を逃亡して諸國放浪の旅に出た。この諸國放浪は一面、好色行脚、色修行の一時期で、彼はこの間に全國各地の色里を觀察經驗して、いはゆる色道の奥を探るとともに、人間と人生とにその目を開くことを得た。これこそ後の粹人世之介のために大切な修養時代である。この期の末、泉州堺の舊奉公人の家に辿りついて、ここで實父の死亡を知り、母からの勘當赦免の知らせと迎への使に接し、素浪人の境遇から、一躍して二萬五千貫目の遺産の相続人となつたのである。第四期は彼の三十五歳から六十歳までの二十六年間である。京の富豪の列に入つた世之介は大盡生活の手始めに、極めて優れた遊女吉野を落籍して妻とした。かうして前期に學び得た色界の知識經驗に磨きをかけたであらう。その上になほ大津、室、堺、宮島などの地方屈指の遊里に遊び、京宮川町の茶屋までも見巡つて、色修行を重ね積んだ末、京、江戸、大阪の然るべき遊女、粹人、幫間らを相手に粹大盡の生

活を営むのである。年を重ね、齡六十に達せんとし、ここに日本の遊びに飽きた彼は、違つた遊びの刺激を求めて長崎に行き、さらに話にのみ聞くとところの女護の島を好色の理想郷と信じて、それを求むべく、伊豆を出帆して行方知れずになるのである。

この四期にわたつた世之介の生涯は、情慾好色の方面から見て、素質と發展との自然の徑路を指向してゐるのである。もし社會の拘束とか、舊人の倫理的自制とかいふものから解放された環境があつたら、人間の性慾好色の生活がかういふ發展徑路を取ることも信じられることであらう。ただし我々は國家的、社會的、家庭的に幾重もの拘束のもとに生き、また尊い道義性を與へられてゐるのであるから、世之介のやうな奔放な生活は一般の文化人に在つてはゆるされないものであるから、かかる世之介を取り扱つた一代男は、從來世の一般水準の眼には晦淫の書同様に見られて來たのである。しかしまた一方には世之介の相は人間自然の相であり、この自然の人間像を描いた西鶴の作品には、藝術的の香の高い非凡な力が認められるので、これを理解し得る人は一代男を稱揚し、歎美するのであつた。かうして從來西鶴是非の二つの聲があつたが、右の立場を異にする人々のある限り、この二つの聲は絶えないであらうが、偏狹な時代の再び現はれず、公正な判斷と、自由な鑑賞の出來るかぎり、一代男の譽は盡きないであらう。

好色一代男の創作における作者の意圖は、世之介を中心として見た上にばかりは存してゐない。半ば世之介を主人公として、長篇物語を綴るの意圖とともに、世之介を方便的に使つて、諸國の遊里と、各種の

色遊び、さまざまなその戯れとを描くの意圖を有してゐたと見える。それは一代男全體についていへることであるが、特に著しい例を挙げると、卷一の「煩惱の垢かき」の章は須磨の蜚人と稱するもの、兵庫の風呂屋女の敘述であつて、世之介は蔭の存在である。卷四の「晝のつり狐」の章は世に隠れた戀の密會の模様の手段の敘述が主となつてゐるのである。一章一章には世之介以外にそれぞれの主人公を設けてあるが多い。

一代男が源氏物語とある關係を保つことは、すでに世の常識となつてゐる。しかしその關係の疎密、深淺については、人々の所見必ずしも全く一致してゐるとはいひ難からう。少くとも一代男が源氏物語の五十四帖と同數の五十四章より成つてゐること、世之介が某大盡と遊女との間に生れたことの、光源氏が帝と更衣との間の出であることに類似すること、世之介が中途親の勘當を受けて各地に放浪の身となること、光源氏が勅勘を蒙つて須磨に流謫の身となることとの似より、世之介の最後が女護の島を志して出帆したまま行方知れずになつた著想が、源氏物語の雲隠れの著想と頗る類似してゐるなど、大きな著しい點の相似から、恐らく二作の間の關係は誰にも肯定されることであらう。よし翻案と見ても、模倣の類でなくして、中古の時代を近世の時代に全く引き直し、中古貴族の人物を、全く近世町人の人物に化し、戀愛の生活を好色の生活に置きかへてゐるなど、源氏物語との關係は決して一代男の價值を低くし、西鶴の創作技能の評價を下げるものでない。

### 三、好色五人女

無署名。美濃紙形。奥附けの書肆名に攝州 書肆 北御堂前 森田庄太郎板とある本と、これに武州 書林 青物町 清兵衛店と加へてある本とある。けだし前者は初板、後者は再板であらう。他に改題本があつて、當世女容氣と書名を變へてある。

題簽には、書名の上に各卷「ひめぢにすけがさ」「てんまにたる」「みやこにこよみ」「江戸にあを物」「さつまにさらし」と夫々に置いてあり、また各卷に内題があつて、卷一は「姿姫路清十郎物語」卷二は「情を入し樽屋物かたり」卷三は「中段に見る曆屋物語」卷四は「戀草からけし八百屋物語」卷五は「戀の山源五兵衛物語」となつてゐる。卷一から卷四までは事件の性質は悲劇的であり、卷五のみ喜劇的である。悲劇的事件を取り扱つても、我々のいふ純粹悲劇を成してゐないところに、五人女の特徴が見られる。

卷一、お夏清十郎の物語は、姫路但馬屋の娘お夏といふ美人と手代清十郎との戀物語、二人は上方指しで出奔したが、追手に捕はれて引戻された。ところが偶然同時に但馬屋で七百兩の金が紛失した。(實は後日發見した)これについて清十郎に盗みの嫌疑がかかり、その無實の反證がないので終に死刑に處せられた。隔離されてゐてお夏はこの事を知らなかつたが、のち清十郎刑死のことをうたつた俚謡を聞いてこれ

を知つて、亂心した。百ヶ日に當る日自殺しようとしたが人々に止められ、尼となつて世の同情を惹いた。二人が出奔を遂げなかつたのは、乗合船に同乗した飛脚屋が書狀を陸上に置き忘れて、船が岸に引返した偶然のことのためで、清十郎が刑死したのも、但馬屋の金子紛失事件が偶然に同時に起つたためであるから、説話の上では偶然の機會が二人の悲劇の原因となつてゐるが、作者はその點を強調する態度を取らないで、淡々として眺め去り、そこに至る徑路の、お夏のませた戀や、花見の折の密會などに停滯してゐるので、戀愛の甘美な味の勝つた物語を成してゐる。この説話は寛文元年の事實に依るものと見える。作中の俚諺も實際に當時流行したものであらう。

卷二、樽屋おせん物語は、全五章の中、前四章は樽屋とおせんとの戀愛から結婚生活に至る愛の説話で、五の一章はおせんと隣家の長左衛門との姦通説話である。この不義事件の原因は長左衛門の妻の嫉妬に存して、根もない二人の不義の浮名を立てたのに對するおせんの憤激、復讐の念から、不倫の關係に陥つたといふ極めて珍しい、興味あるものであるが、作者は卷一と同じく、この心理を指示しながら、これを凝視し、解剖することをしてゐないので、結局、女は自殺し、男は刑死するといふ結末の、悲劇的作品としては不備なものとなり、卷一と同様に甘美な愛の物語といふ性質を持つてゐる。

卷三、おさん茂右衛門の物語。おさんの美しい娘姿に思慕の情を寄せて、大經師以春が彼の女を妻に迎へて、相愛の夫婦となり、おさんは實直の主婦となつてゐたが、たまたま夫が商用で遠方の旅に出た。その



不在中實家からおさんの世話役として遣はし置いた茂右衛門といふ實直な手代を、おさんは女中達と影待の夜の慰みに、惡戯して笑はうと謀つて、過つて身を汚した。おさんはこれを悔いたがおよばず、つひに深入りするやうになつてしまつた。二人は出奔して丹後に隠れてゐたが、とうとう見出されて刑に死んだといふのである。これも事實に據つて作つたものと信すべき理由があるが、詳細に原事實を知ることが出来ないで、本作がどういふやうに原事實を想化してゐるかは知られない。この物語は前二作に比べると、悲劇として、大いにその形が整つてゐる。例の五章に綴つて、説話は次第に悲劇の段階を辿つてゐるのである。

卷四、八百屋お七の物語。卷三までは上方の説話であるが、これは江戸の物語である。江戸本郷八百屋八兵衛の娘お七の家が火災に罹つたため、駒込吉祥寺に避難中、同寺の小姓吉三郎といふものと戀愛に落ち、新宅に歸つてからも、下女を通じて文通してゐた。逢はれぬ戀のもどかしさに、まだ十六歳に過ぎない少女のお七は、淺はかにも火災を利用して吉三郎に逢ふべき機會を作らうと思つて、自宅に放火した。このことが露顯し、捕はれて火刑に處せられた。折から病中の吉三郎はこの事を知らなかつたが、のちに知つて自殺しようとしたが、人々に止められて出家した。これも卷三と同じく悲劇的な物語である。それにしても前三章までは戀愛物語で、悲劇的性質は四五の二章の中に在るので、卷一二ほどには甚だしくなくとも、それに近い、悲劇的事件を取扱つた戀愛好色物語の特徴を帯びたものとして注意される。

卷五は薩摩源五兵衛物語で、衆道に耽つた源五兵衛は二人まで若衆に死に別れて出家した。以前から彼に戀してゐた琉球屋といふ富裕な町人の娘おまんが、男裝して彼の隠棲を訪ねて契り、同棲したが、二人ともに生活の根據がないので、上方の狂言を眞似て辛うじて生計を營んでゐた。おまんの兩親は娘の行方を探して、遂にこれを探し出し、二人の夫婦たることを許して家に入れ、自分達は隠居した。かうして二人はたちまち境遇が一轉して、一代何をしても費しつくし難い富を有する身となつた。かういふ好色的な喜劇物語である。

さてこれら五種の物語、いづれも事實に據つたものと知られる。お夏清十郎物語は前にもいつたやうに、寛文元年の事件と、傳奇作書後集、中興世話見年代記は傳へてゐるが、事件の全貌は所傳を知らない。樽屋おせん物語はこれも貞享二年正月二十二日の事實とは傳へてゐるが、當時の歌祭文などのほか、所傳の事實は見えない。歌祭文は本説話とは大分違つてゐる。おさん茂右衛門の物語も天和三年八月の刑死のことは知られるが、事件の委細はわからない。これも歌祭文となつてゐるが、説話は本巻とは相當違つた點がある。八百屋お七物語、これの原事實といふのが、天和笑委集と江都著聞集とに傳へられてゐるが、二書の所傳には相違がある。いづれに比べても、本書の説話は相當違つてゐる點が見られる。天和二年と三年にかけての事實である。薩摩源五兵衛の物語の原事實はわからない。單に寛文三年のことのみ傳へられてゐる。小唄にもあるので相當世の噂に上つたことであつたに違ひない。今日我々の知り得るか

ぎりでは、五人女の説話は、原事實のままとは見られない。相當に彼の想像の所産であり、藝術的美化されたものと察せられる。

さて好色五人女の特徴を知るためには、好色一代男と比較することを利便とする。好色一代男は全部を買通する世之介といふ人物を設けてあるが、事件説話は一章一章に獨立してをり、また各章は世之介以外に主人公を有するものが多い。ところが好色五人女は五巻から成り、各巻は五章から成り、その五章の間には首尾連續發展するところの事件を持ち、説話を構成してゐる。すなはち近代の短篇小説の形態をほぼ有してゐるのである。なほまた一代男の内容は近世の好色生活であり、大部分遊里を背景とするところのそれであり、従つて登場の人物も多くは遊女と蕩兒であるが、五人女は戀愛生活を取扱つてあり、いづれも普通の家庭、社會を背景としてをり、登場の人物も一般の家庭人であり、社會人である。好色生活と戀愛生活とは自ら異なる性質を有するものであり、好色生活は性欲を基盤とした社交的享樂生活であつて、男女おのおの一人がその一人づつを守つて行かうとする戀愛生活とは違つてゐる。一代男が一人の男性人物の周圍に多數の女性を配するといふ趣向を選び、五人女が各巻一人づつの男女兩性の人物を設ける趣向を取つてゐるのは、この好色と戀愛との本質的相違に基づいた自然のことといへるのである。しかし西鶴がこの物語を「好色五人女」と名づけてゐるところからも判るやうに西鶴が好色と戀愛とを明確に區別したとは考へ難いやうだ。

## 四、文 體

西鶴は大体から見て、俳諧から浮世草子に筆を轉じた人である。俳人から小説家へ轉じて行つた人である。随つて、浮世草子に表れたその物の見かた、捉へかた、表はしかた、構成の上に、文體の上に、著しく俳人的、俳諧的なところがある。そこに西鶴の浮世草子の特徴があり、この特徴を周圍の作家、後世の作家の上に殘し傳へてゐる。今はここに彼の文體の上のその特徴を一言して置かう。

彼の文體は、その用語、語法、修辭などの上に、古今雅俗を混淆したものである。それとともに、散文の中に韻文的、詩歌的なものを取り入れたものである。論理的、文法的なるべき一般地の文に、省略が多く、轉倒もあつて、文に引締りを與へるとともに文を難解にしてゐるのも、ここに一因がある。そのほかに文法的破格、修辭的破格なども存することは已に善く世に知られてゐるところである。余は大正十一年の早稲田文學誌上に「西鶴雜感」を述べた中に、これらのことをいつて、彼の文は一種特異な文體である、さうしてこれを解し易からしめるには、適當な補足と改作を試みるの要があるとして、左の二例を試みた。

貨物取に、長崎へ下る人に、我も跡より(下らん)のおもひ立あるのよし、(語りて)銀箱さきへ、  
預て遣し侍る。り(その人)何か唐物、御望あそばし候と尋ければ、(否)日本物を、買べき投銀

唐物御買入れの御望みありての事に候か

(なり)と仰られける。さては、丸山の御遊山計の御こゝろさしありや、ま(も)なく(御下りあらん日を)あれにてまちたてまつるのよし(申して)、六月十四日、けふは都の詠なほめのこす(最後の)月鉾のわたる時、我は玉鉾の商ひの道いそぐとて先(に)立たちぬ。世之介は思ふかぎりありとて金銀洛中に蒔ちらし、社塔の建立(をなし)常(夜)燈をとほし、役者子供に家を取らし、馴染せの女郎は其身(を)自由にしてとらせ、毎日遣ひ崩せども、まだ残る所の内藏(あり)、(是を)何にかすべし。遣ふき  
(今思ひつくこともなし)さらば、此度長崎に下り、よろしき慰の有事も(やあらば、それにつかはん)と、おもひ立日は八月十三日、いにしへ安部仲磨は、(住み馴れし京を遠く離れ、唐土に在りて)故郷の月を(おもひやりて、三笠の山に出でし月かもと)、思ひふかくは讀もれしに、我はまた、あつちの月(を、こゝから)思ひやりつると、淀の川舟(に一夜明かして)大坂の南の岸に着て、(好色一代男卷八)

日本紀(を)愚眼のそけに歌は、天地はじめてなれる時、ひとつの物なれり。形葦芽なの如し。是則神となる。國常立尊とまうす。それより三代は陽の道ひとりなして衆道の根元を顯はせり。天神四代よりして陰陽みだりに交て、男女の神いでき給ひ、なんぞ下髪なみのむかし、當流あたらのなれ、男女の道に於て何ぞ別あらんや。女の  
梅うめ花の油くさき、うき世風に、しなへる柳の腰、紅の内具うちぐ(は)あ

げ島田すものなり  
たら(男の)眼を汚しぬ。是等は美少人のなき國の事欠(のすさび)隱居の親仁の翫あそびのたぐひ

なるべし。(すべて女は)血氣榮んの時(男の)詞をかはすべきものにもあらず。總て(女に近づく男は)若道の有難き門に入事おそし(男色大鑑序文)

以上の二文中括弧内は補足したものであり、傍書したところは改作したものである。これらの補足改作は文をよくしたのでなく、省略を補ひ、破格を正して、その意を通じやすくしたのである。これによつて、散文の尋常の形を逸脱した特徴の一斑は見られるであらう。世にこれを俳諧的の形、俳諧的手法と稱してゐる。なほ俳諧的特徴の著しきは、その修辭の上に見出される。談林連句の聯想的な附合の手法を用ゐて、彼は著しく聯想的な修辭法を用ゐ、敘事法を用ゐてゐる。古風な枕詞を用ゐ、言ひ懸けを連發した、王朝風の香の見逃されないものであるばかりでなく、その敘事の論理的でなく、聯想的、附句的な連續とさへなつてゐるのは、彼の敘事の一弊とさへ思はれるものがあるが、そこに俳諧連句的特性が見出されるのである。

## 五、西鶴を生んだ社會

近世江戸時代はわが國二千年の歴史中の、最後の封建時代である。すなはち封建社會の爛熟期から、その没落期にわたる時代である。西鶴の出た元祿期は封建的支配者であつた武士階級が衰頽に傾き、經濟的支配者となつた町人階級が擡頭して、封建制そのものの衰頽没落の因を作りはじめた時代である。また、

これを經濟方面について見ると、古來の封建的經濟の様式が壞れて、商品經濟、貨幣經濟に移り、資本經濟初期の狀貌を呈した時代である。生産的に見ると、農業生産を主として、工業生産は手工業生産に止まつた時代である。

社會は階級社會で、政治上、軍事上の權力は武士階級がこれを獨占してをり、隨つて武士階級が社會の上位に立つて、その他の階級は農工商の順次をもつて武士の下に立ち、その支配を受けてゐた。しかもまた各階級のうちに身分の上下の區別が存した。かうして階級的、身分的の秩序を嚴守させるのが、施政上和平を保たせる途として重んぜられた。

武士も以前と違つて、特に高位を占めた大武士を除いてその他のものにあつては、みな、それぞれに主君に隸屬して、主君から俸祿、扶持を受けて、自分及び家族郎黨の生活を維持して、領土を有するものはすくなかつた。これがために多くの武士は純然たる非生産者となつてゐた。幕府をはじめ諸侯は多數の武士とその家族とを養つてゐたが、これに要するものは、主たる生産者たる農民からその生産物を徵集するほか途のないのが常であつたから、保護の名によつてかれらを拘束して、誅求をなすのであつた。それで農民はおほかた貧困で、文化の發展に直接干與するところは、極めて稀であり、微力であつた。

經濟の商品經濟化、貨幣經濟化が、武士の生活の衰頹を促したのに反して、都市の町人特に商人はこれがために活動の利便を與へられ、巨萬の富を作るの機會を惠まれることとなつた。かうして商人の勢力は

にはかに増大し、その社會的地位は自然に向上するに至つた。すなはち全國諸侯の領地内毎年の生産はこれらの商人の手によつて一應都市に集められ、ここで相場が立つてそれぞれに處分されて、また地方地方に分散された。さうして、これがために都市の商業、産業の資本は年々増大されて行つたのである。

かうして大都市の勃興は目ざましい勢ひであつた。江戸をはじめて大都市の繁昌、隨つてその商業の活潑なさまは著しいものがあつた。江戸について一瞥すると、旗本武士はその家族を率ゐて多數ここに常住し、そのうへに諸侯の參勤交替制が設けられて、定期的に各藩から來つて居住するものもすこぶる多數に上つた。この人口増加に伴なつた自然の結果として、都市諸般の事の繁昌を來したのは勿論であるが、その商賣の繁昌はひとりこれのみに原因したのではなく、地方における農業生産、工業生産の進歩發達に原因するところも多かつたのである。すなはち各地農産の米穀をはじめとして、織物、酒、醬油、油、その他の生産物も、次第に開けた水陸の交通運輸の便を借りて都市に集中されて、さらにここからそれぞれの交通路によつて各地に分散された。例へば中國、北國、四國、九州地方の諸侯領内の米穀は大阪に集められ、關東、奥州地方諸侯領内の米穀は江戸に集められ、兩地の米市場において賣買されて各地に散つて行つたのである。その他の商品にもそれぞれの途があつて集散されたのである。かうして江戸、大阪、京都の三大都市その他の大市場は大繁昌を來たしたのである。これに伴なつて、問屋、仲買、小賣、行商などが生じて、大小の商賣の途が自由になるとともに、また投機的取引も開けて、米市場の如き、實に莫大



な取引が瞬刻の間に行はれるに至つた。

このやうにして都市に集積された商品は、そこで貨幣資本に化して集積され、その集積された貨幣資本はさらに大名貸しや武士への貸付けとなり、新田、鑛山開發や田畑、宅地、家屋や、さまざまの工業、商業の資本として卸され、かくて西鶴のいはゆる、金銀が金銀を呼び集め、金銀が金銀を儲ける資本主義經濟的な傾向が大いに起つて、資本の支配的勢力は、西鶴の時代に至つて驚くべき發達をなした。これがために士農工商と社會的地位の最下位に在つた商人は、農工者は勿論武士をも經濟的に支配するに至つて、實際生活の上では最も贅澤を極めたものを生ずるに至つた。そればかりでなく文化の上でも儒者について儒學を修め、なかには醫術を修めるもの、または堂上家について和歌、蹴鞠、連歌などを學ぶものも生じたので、文化のうへでも、武士につぐ地位を獲得するに至つた。このやうな商業活動をなして、地位を獲得した商人を見ると、かならずしも都市の町人として生まれたものではなかつた。農村子弟の成功者がすくなくなかつた。これを大阪商人について西鶴のいふところを見ると、

昔こゝかしこのわたりにて纔なる人などもその時にあふて旦那様とよばれて置頭巾撞木杖替草履取るも是皆大和河内津の國和泉近在の物つくりせし人の子供。惣領殘してすゑ／＼をでつち奉公に遣し置。鼻垂て手足の土氣おちざるうちは。豆腐花柚の小買物につかはれしが。お仕著二つ三つ年をかさねけるに。定紋をあらため。髪のかげを吟味仕出し風俗も人のやうになるにしたがひ。供ばやし能舟

遊びにもめしつれられ。行末に數かく砂手習地算も子守の片手に置習ひ。いつとなく角前髪より銀取の袋をかたげ。次第おくりの手代ぶんになつて。見るを見まねに自分商を仕掛。利徳はだまりて損は親方にかづけ。肝心の身を持時親請人に難儀をかけ。遣ひ捨し金銀の出所なく其なりけりに内證扱ひ濟て。荷ひ商の身の行する幾人かかぎりなし。おのれが性根によつて長者にもなる事ぞかし。忽じて大阪の手前よろしき人代よつどきしにはあらず。大かたは吉藏三助がなりあがり。銀持になり。其時をえて詩歌鞠楊弓。琴笛鼓香會茶の湯も。おのづからに覺えてよき人付會むかしの片言もうさりぬ。

といつてゐるやうに、もともと地方貧農の家に生まれたものが、幸か不幸か、次男三男などに生まれあはせたために、少年のころから都市商工業者の家に、丁稚小僧として奉公にやられ、次第にそれらの業務を覺えて、手代番頭と出世し、年季を勤め上げてから、獨立の商工業者となるのであつたが、その頃に至つて、平凡な一生を送る途を辿るか、大成功を諂はれる富者となる途につくかの岐路に立つのであつた。幸ひに後の途を取つて成功者となるものは、勤勉、節儉人の能くしないものをなし得たとか、商才に長じたとか、發明工夫に富んだとか、幸運に恵まれたとか、なにか一節あつたであらうが、その努力の一生は實に立志傳をなすべきものであつたに相違ない。西鶴が作品中の町人物はかうした時代の相を生き生きと描き出したものであるとともに、特に町人の鑑鑑として世に弘められたものである。

當時の町人はその獲得した富の力で、階級社會の桎梏から幾分自身を解放し得たものではあつたが、その

拘束を全く排除することはなし得なかつた。依然狭い町人階級のうちに閉ぢ籠められて、ゆるされてゐた事業の範圍内でその活動を試み、そのなかで遂げ得べき成功を収めることを期するのほかはなかつたのである。すなはち商工の世界はかれらに與へられた唯一世界であつたが、この商工業の世界に在つても、商業のみがかれらの野心を満足させ得たのであつた。しかも、その商業には資本を要し、大きな資本は大きな商業を營み、大利を得る途であつたので、みな大資本を望み、大きな富に憧れ、金銀を尊ぶの風が町人の社會を蔽ふに至つたのは當然である。かうして金銀を收納した内藏には燈明を點じて神を祀るが如くし生命に次ぐ大切なものは金銀であるとするに至つた。一言にしていふと、金銀崇拜の思想は、當時の町人を支配したものであつた。さうしてかれらの社會における身分の高下を定めた唯一の基準は、富の多寡であつたから、西鶴がいつてゐるやうな「身代時めく人のいへる事は横に事も退いて通し、世を暮しかぬるもののいふ事は人の爲になりても是をよしとは聞かず、何につけても金銀なくては世に住める甲斐なき事今更いふまでもなし」といふやうなところまで發展して行つたのである。世の尊敬も榮譽もただこの富にかかるのであつたから、かれらのこの世に生きがひを感じ得るのは唯富者たることにあつたので、西鶴の町人物も、いまでこそ人間の眞實を寫したものととして高く評價されてゐるが、當時においては町人社會の世相の眞を寫したところに興味を持たれ、また、そこにかかる精神の支配的であつた社會への好教訓として受取られたものであつた。

金銀の崇拜と表裏して、町人の社會に支配的であつたのは現實享樂の精神であり、その實行であつた。かれらのなかには富のために富を得ようとしたものもあつたが、これに對しては、一般は寧ろ守錢奴として冷やかな眼を向けるのであつた。富は生の享樂のために存し、それによつて眞の價値を有するものと考へられた。支配階級であつた武士はその立て前として廉潔を重んじ、質實な生活を主とするのであつたが、それですらこの立て前を裏切るものの少なくなつたのは、和平の世に人間的慾望の刺激を制し得なかつたためである。まして富の力で半ば解放の喜びをうけた町人は、富の力を利用して官能的享樂の世界に活動する樂しみを抑制し得なかつたのは當然である。武士はその支配の威力をもつて、衣裳法度の如きもので、衣生活の質素を強要しても、それを長く實施せしめることは出來ず、奢侈をもつて法度を破つたものの、財産没收、居所追放のやうな嚴刑を實施して見せても、到底その思ふ通りに嚴法の威力を發揮させることは出來なかつた。いかに享樂の意慾の盛んであつたかは、富豪の所刑またその没落に關する幾多の事實がこれを證明してゐる。

享樂生活にもいろいろあるが、元祿町人の求めたものは官能の満足であつた。これを代表するものは好色生活であつた。好色生活といふのはいはゆる分里の遊びである。分里の遊びに性慾の一面のあることはいふまでもないが、これを總括的にいふと一種の社交生活といへよう。社交生活は兩性間の道義の嚴なる社會にも成立するが、好色生活のそれはこの道義のかかはりのない、特殊な社會のそれであつて、遊女と

稱するこの道義の拘束圏外に立つ女性との間に成立する社交的生活であつた。文化の水準のまだ低く、かういふ生活の存在を肯定してゐた當時の町人は、ここを一つの樂天地、極樂世界として憧れてゐたのである。西鶴が一般の家庭婦人と遊女とを比較して、遊女を教養、實踐の上で上位に立つものとして讚美してゐるのは、決して反語でも皮肉でもないのである。これら社會の實情を見れば、西鶴の好色本は生まるべきときに、生まるべきところに生まれたと考へざるを得ない。

西鶴が作品の年次を見ると、まづ好色本に筆をつけてから、諸國咄、武家物などと寄り路しつつ、町人物に落ち著いたといふ感じがする。西鶴はその眼で町人生活を見、また好色生活を體驗したに相違ないが、また一方古典文學から假名草子まで一通り眼を通してゐたのであるから、その浮世草子の作者であつたのは、短い年月であつたとはいへ、その間にかれこれと違つた方面に人間を見た作品を成したので、その順次に拘はつて考へるの要はあるまい。

## 凡 例

一、本文は原文のままにするのを原則とした。

ただし原文の漢字は書寫體の行草を用ゐてあるから、すべてそれらは活字體に改めた。また變體假名を普通の平假名に改めたのもいふまでもあるまい。

一、假名遣ひも原文のままにして、歴史假名遣ひによつて正すことをしなかつた。佐變の動詞に阿行の假名を用ゐた例が頗る多い。

いゝ。	(言ひ。)	おさえ。	(抑へ。)	こしらえ。	(こしらへ。)
ひかえ。	(控へ。)	とらえ。	(捕へ。)	わきまえ。	(わきまへ。)
そろえ。	(揃へ。)	たくはえ。	(貯へ。)	ならい。	(習ひ。)
かゝえ。	(抱へ。)	あしらい。	(待遇ひ。)	うつろう。	(うつろふ。)
まどい。	(惑ひ。)	かんがえ。	(考へ。)	教え。	(教へ。)
すい。	(吸ひ。)	とゝのえ。	(調へ。)		

又一端にう音便に書くところを

うたふて (歌うて)

あらけなふ (荒けなう)

わらふて (笑うて)

なふ (無う)

などのやうに書いてゐる。これらの外

なを (なほ、尙)

いる

(ゐる、居)

かほる

(かゝる、薫)

まいる (まゐる、参)

おかし

(をかし、可笑)

おり

(をり、折)

くらい (くらゐ、位)

をき

(おき、置)

すえ

(すゑ、据)

をき (おき、起)

若ひ

(若い)

みぢかく

(みじかく、短)

うすひ (薄い)

おんな

(をんな、女)

さほ

(さを、棹)

さいはい (さいはい、幸)

をと

(おと、音)

むくひ

(むくい、報)

くずす (くづす、崩)

あかひ

(あかい、明)

しおり戸 (しをり戸)

とをし (とほし、通)

おしむ

(をしむ、惜)

おりふし (をりふし、折節)

すゆる (すうる、居)

かういふ類のものも多い。なほこのほかにもある。また文法上の破格は、左の例などで知られる。

いかが書くべし。

なに惜しがるべし。

化<sup>は</sup>するぞかし

薄<sup>はく</sup>かりき所に

見るごとくぞかし

心覺<sup>こころ</sup>ほどにじり書をうらやましく

昔<sup>むかし</sup>しはかくはあらざらぬ者のはて成<sup>なり</sup>べし

我<sup>われ</sup>に語給<sup>かた</sup>ふも今宵<sup>こんしやう</sup>をかぎりなりしに何か名残<sup>なごり</sup>に申<sup>まを</sup>たまへる事もといへば

一、句讀點も原文の通りにした。一代男の文には繁く見えてゐて、一般の句讀點と同視し難い場合もあるが、その意を十分に知りがたいので、もとのままにした。五人女は大部分になく、一部にのみあるが、それももとのままにした。

一、漢字の用法に特殊なものがあつて、宛て字、誤用字、また昔特殊な用法によつたものなど、今日では用ゐないものもあるが、それも改めないことにした。すべてそれらも振り假名にたよれば、意を解くに不便はないから、學者研究のためを考へて改めなかつた。例へば

念<sup>かたみ</sup>記(記念) 拘<sup>かえ</sup>(抱へ) うは氣(上著) 興<sup>きよ</sup>風(ふと) 塹<sup>ぼり</sup>(埃) 風義(風儀) 内義(内

儀) 挑<sup>しら</sup>灯(提灯) 有<sup>おも</sup>増(概略) 有<sup>あ</sup>時(或時) 懸<sup>か</sup>る(斯かる) 忿<sup>おこ</sup>々しく(騒々しく) 暖<sup>あたた</sup>

(扱ひ) 明衣(浴衣) 櫛<sup>もみ</sup>(木綿) 面<sup>かほ</sup>子(顔色) 初<sup>はつ</sup>尾(初穗) 石<sup>いし</sup>流(流石) 肺<sup>はい</sup>布(脚布)



隔子（格子） 稠く（厳しく） 思日（思ひ） 嬢（娘） 藝愛し（懷かし） 念數（珠數） 足

踏（足袋） 屢し（暫し） 扣（叩）

一、送り假名の省略も頗る多く、「口惜」、「つき添」、「聞でも」などのやうに見えてをり、濁點の省略も多い。これらもその風を残して置いた。

一、頭註は語句の簡明な解釋を旨とした。随つて考證的なことは一切これを省いた。



# 好色一代男



# 好色一代男 卷一目録

七 歳

けした所ところが戀こひはじめ  
こしもとに心ある事

八 歳

はづかしながら文ぶん言ご葉は  
おもひは山崎の事

九 歳

人には見せぬところ  
ぎやうずいよりぬれの事

十 歳

袖そでの時とき雨あめはかゝるが幸  
はや念ねん者ものぐるひの事

十一 歳

たづねてきくほどの事  
伏ふ見みしもくまの事

十二 歳

兵へい庫こ風ふう呂ろ屋ゐの垢あかかき  
者ものの事

十三 歳

わかれは當あた座ざはらひ  
八坂茶屋はちさかちやの事

（一）手燭の火を消させたことが、世之介一代の戀愛性慾現象の始まり。

（二）花月に對する人間の樂しみは有限であるが、戀愛性慾のそれは無限である。本書著想の要點。

（三）但馬出石郡の歌名所の山。但しいづれとも判明しない。

（四）當時金鑢に朝日金山、中瀬金山あり銀鑢に生野銀山があつた。

（五）女色、男色。

（六）元名古屋の郷土。出雲お國を通じ、お國の藝を助けて歌舞伎の創始に力を致した。

（七）粹人として當時知られたものであらう。八はやつと訓むか。

（八）七所紋。ひしは菱か。菱形の七所紋を目印とした一連の粹人達であらう。

（九）京都一條通堀川に架かつた橋。

（一〇）若衆の扮装。前髪だちの風俗。

（一一）達髮臺。男達の風俗。

（一二）平氣の顔つき。太平記の大森彦七が美人に化けた化物を負つて驚かなかつたといふ傳説に出てゐる。

（一三）化物物に食ひ殺されるを表の意とし、美人に取り殺されるを裏の意とする。

（一四）いづれも京の遊廓島原の遊女の名。

（一五）三人の妓を思ひ思ひに落籍した意。

（一六）京都市伏見區深草町。

### けした所が戀のはじまり

櫻もちるに數き。月はかぎりありて。入佐山。爰に但馬の國。かねほる里の邊に。浮世の事を外になして。色道ふたつに。寐ても覺ても。夢介と。かえ名よばれて。名古や三左。加賀の八など。セツ紋のひしにくみして。身は酒にひたし。一条通り。夜更て戻り橋。或時は若衆出立。姿をかえて。墨染の長袖。又は。たて髪かつら。化物が通るとは。誠に是ぞかし。それも彦七が良して。願くは咀ころされてもと。通へば。なを見捨難くて。其比名高き中にも。かづらき。かほる。三夕。思ひく身請して。嵯峨に引込或は。東山の片陰。又は藤の森。ひそかにすみなして。契りかさなりて。此うちの腹より。むまれて世之介ト名によぶ。あらはに書しるす迄もなし。しる人はしるぞかし。ふたりの寵愛。てうちく。髪振のあたかも定り。四つの年の霜月は。髪置はかま着の春も過て。瘡瘡の神いのれば。跡なく六の年へて。明れば七歳の。夏の夜の。寢覺の枕をのけ。かけがねの響。あくひの音のみ。おつぎの間に。宿直せし女。さし心

（一七）三人の妾の一人の腹から。

（一八）兩親。夢介と生みの母親たる妾。

（一九）てうちてうち、かんぶりがんぶりと兒をあやすことから、嬰兒のぐらぐらした頭がしやんとするやうになつたことに懸けてある。

（二〇）二三歳頃から毛髪を蓄へる祝ひ。

（二一）三、五、七歳に行つた男兒の祝ひ。

（二二）小兒の大厄とされた天然痘。

（二三）小便に起きたこと。

（二四）欠伸。

（二五）長い廊下を行く足音。

（二六）災難除けの迷信から家の周圍に植ゑる植物。主に鬼門の東北隅に植ゑた。

（二七）小便。

（二八）割り竹。

（二九）戀心は盲目の意もあるが、ここは戀は闇がりに行はれる意であらう。

（三〇）希望通りに火を吹き消す。

（三一）諸冊二神の天の浮橋の故事を、男女交會の始めとする説に依つてある。

（三二）性慾的現象についていふ。

（三三）かりそめの遊戲にも。

（三四）徒然草中の「多くて見苦しからぬは文車のふみ」を引いていつてある。

（三五）世之介の居室。

（三六）折紙細工。

（三七）白樂天の長恨歌「在天願作比翼

得て。手燭ともして。遙なる廊下を轟かし。ひかし。北の家陰に。南天の

下葉しげりて敷松葉に。御しと。もれ行て。お手水の。ぬれ縁ひしぎ竹の。あらけなきに。かな釘の。がしらも御こゝろもとなく。ひかりなを。

見せまいらすれば。其火けして。近くへと。仰られける。御あしもと。大事がりて。かく奉るを。いかにして。闇がりなしてはと。御言葉をかへし申せば。うちうなつかせ給ひ。戀は闇と。いふ事をしらすやと。仰られける程に。御まもりわきさし持たる女。息ふき懸て。御のぞみに。なしたてまつれば。左のふり袖を。引たまひて。乳母はいぬかと。仰らるゝこそ。おかし。是をたとへて。あまの浮橋のもと。まだ本の事も。さだまらずして。はや御こゝろさしは。通ひ待ると。つゝます。奥さまに申て御よろこびの。はしめ成べし。次第に。事つのり日を追つて。假にも。姿繪の。おかしきをあつめ。おほくは文車も。みくるしう。此菊の間へは。我よばさるもの。まいるななど。かたく。關すえらるゝこそ。こゝろにくし。或時は。おり居を。あそばし。比翼の。鳥のかたちは。是ぞと。給はりける。花つくりて。梢にとりつけ。連理は是。我にとらすると。よろつ

鳥、在地願爲「連理枝」より出る。

(三六)性慾。

(三九)寶鼻御。

(四〇)兵部卿。香の名。

(四一)餘情。年少不相當に大人びた様子。

(四二)事もの下にせずとあるところ。

(四三)紙鳶。いかのぼり。風。

(四四)及び難いことを望むにいふ諺。

(四五)七月七日、七夕の傳説。

(四六)心柄から。

(四七)六十歳の誤りと推定される。即ち世之介の七歳から六十歳までの性慾好色生活が、この一代男の説話を成してゐるから、五十四年間とするか、六十歳までとすべきである。

(四八)美少年。

(四九)伊勢物語第二十三段の話にある。

(一〇)七夕。この日行燈、油さし、硯石の如き、平常掃除しない物を、小川に持ち出して洗ふ風習があつた。

(一一)上部を金物で作つた行燈。

(一二)物を洗ふために芥の流れることを、

藤津の芥川の川の名に懸けてある。

(一三)藤津三島郡磐手村に在る。

(一四)後醍醐天皇皇子恒良親王。太平記卷

四「八歳の宮御歌の事」の條に隱岐遷幸

の天皇を慕ひ「つくつくと思ひくらし

入相の鐘を聞くにも君ぞ戀ひしき」と詠

に。つけて。此事をのみ忘れず。ふどしも。人を頼まず。帶も。手つか  
ら。前にむすびて。うしろに。まはし。身にへうぶきやう。袖に焼かけ。  
いたづらなる。よせい。おとなも。はづかしく。女のこゝろを。うごかさ  
せ。同し友とちと。まじはる事も烏賊のぼせし。空をも見ず。雲に懸はし  
とはむかし天へも。流星人ありや。一年に。一夜のほし雨ふりて。あはぬ  
時の。こゝろはと。遠き所までを。悲しみこゝろと。戀に。責られ。五十  
四歳まで。たはふれし女三千七百四十二人。少人のもてあそび。七百二十  
五人手日記にしろ。井筒によりて。うないこより。己來腎水を。かえほし  
て。さても命は。ある物か

はづかしながら文言集

文月七日の日。一とせの塼に。埋し。かなあんどん油さし。杓硯石  
を。洗ひ流し。すみわたりたる瀬とも。芥川となしぬ。北は金竜寺の。入  
相のかね八才の宮の御歌も。おもひ出され。世之介も。はや小學に。入  
き年なればとて。折ふし。山崎の姨のもとに。遣し置けるこそ幸。むか



ませられたことが出てゐる。

(六)八歳のこと。

(七)山城乙訓郡。

(八)俳諧の祖山崎宗鑑の庵。但し一夜庵は彼が讃岐琴引山下興昌寺境内に營んだ庵の名。

(九)山城石清水龍本坊にゐた松花堂昭乗に創まる書道の一派。松花堂流。

(一〇)習字の手本を書く料紙。

(一一)文句を註文して手紙を書いて貰ふ。

(一二)手習師匠の坊。

(一三)大概。

(一四)おわかりだらう。

(一五)差支ない。

(一六)忍びて。ひそかに。

(一七)鳥の子紙で、前に出た手本の料紙を指す。

(一八)なほなほ書。本文に添へた文句。

(一九)普通の文句と違つたものだから。

(二〇)迎への人。

(二一)菜種油を搾る槌の音。

(二二)絹布の洗ひ張りに用ゐる竹箸状のもの、の両端に針を附けたもの。しんし。

(二三)御寮人。良家の娘。

し宗鑑法師そうかんぼうしの一夜庵いちやあんの跡あととて。住すまつゝけたる人の。滴本流たきもとりゅうをよくあそはしける程ほどに。師弟しでいのけいやくさせて。遣つはしけるに。手本紙てほんかみさゝげて。はゞかりながら。文章ぶんしょうをこのまんと申せば。指南坊しんなんぼう。おどろきて。さはいへ。いかゞ書かへしと。あれば。今更馴いまさらなとしく。御入候ごにっこうへ共。たへかねて申まいらせ候。大形目おほかためつきにても。御合点有ごがってんべし二三日跡ふたみよかちに。嬢おはさまの。昼寝ひるねを。なされた時。こなたの糸まきを。あるともしらす。踏ふまりました。すこしも。くるしう。御ござらぬと。御はらの。立さうなる事を。腹御立候はらごたてはぬは。定而さだま。おれに。しのふで。いゝたい事が御座るか。御座るならば。聞きまいらせ。候べしと。永ながくと。申程まうほどに。師匠しせうも。あきればてゝ。是迄これまでは。わざと書かづゝけて。もはや鳥とりの子も。ないと。申されければ。然しからば。なをく書かをと。のぞみける。又重かさね而たよりも有へし。先是まづこれにて。やりやれと。大形おほかたの事ことならねばわらはれもせず。外にいろはを書いて。是をならはせける。夕陽端山せきやうはなに。影かげくらく。むかひの人來きこりて里さとにかへれば。龜かめの初風はつふうはげしく。しめ木きに。あらし衣きうつ。槌つちの音おと。物かしまじう。はしたの女おんなまじりに。絹きぬばり。しいしを。放はなして。戀こひの染そめぎぬ是は。御ごりや

(二四)嬰麥は世之介の紋所。それを腰部に模様として置いたもの。

(二五)古今集俳諧歌纂性法師「山吹の花色衣主や誰問へど答へず口なしにして」を利かせる。

(二六)おりは居り。一年を一季とし、半年を半季として雇人を置く風習であつた。

(二七)世之介は京育ちであるからの意。

(二八)垢染みたのを。

(二九)叔母の子で、世之介の従姉。

(三〇)何の氣もつかず。何の疑もなく。

(三一)怒りをしづめて。

(三二)取りとめもない。

(三三)とはいつても、油断は出来ない。

(三四)あるまじい、とんでもない噂をした。

(三五)上を承けて、さう思ふことを他人へは漏されず。

(三六)わが心中一つにこめて。

うにんさまの。不斷着。此なでしこの腰形。くちなし色の。ぬしや誰と。たづねけるにそれは。世之介の。お寝巻と。答ふ。一季おりの女。そこ／＼に。たゞみ懸。さもあらば。京の水では。あらはいでと。の／＼しるを聞て。あか馴しを。手に懸さすもたびは。人の情と。いふ事ありと。申されければ下女。面目なく。かへすべき。言葉もなく。只御ゆるしと申捨て。逃入袖を。ひかえて。此文ひそかにおさか殿かたへと。頼まれけるほどに。何心もなふ。たてまつれば。娘更に。覺もなく。赤面して。いかなる御方より。とりてつかはしけると。言葉。あらけなきを。しづめて後。母親。かの玉章を見れば。隠れもなくかの。御出家の。筆とはしれて。しどもなく。さはありなからと。罪なき事に。疑はれて。その事こまかに。云わけも。なをおかしく。よしなき事に人の口とて。あらざらむ。沙汰し侍る。世之介嬢にむかつて。こゝろの程を申せば。何ともなく。今まではおもひしに。あすは妹のもとへ。申遣し。京ても大笑ひせせんと。おもふ外へは。あらはせず。我が娘ながら貌も世の人並とて。去方に申合て。つかはし侍る。年たに大形ならば。世之介にとらすべき。ものをと。心と

(一)物の道理、筋道に外れたことは。

(二)手紙書くこと。

(三)鼓は能の鼓。遊藝の一つ。

(四)謡曲「松風」の中の「起臥わかで枕より、あとより戀のせめくれば、せん方涙に伏し沈むことぞ悲しき」

(五)町人の男子の職業上必要とされた算盤、手習ひ、金銀貨の鑑別などをいふ。

(六)京都の町名。

(七)金銀の貨幣の性の良否、天秤で秤る方法などは、商人の學ぶべきものであつた。

(八)高利貸の一法で、未だ親がかりの者が親に隠して借金するに、親が死に自分が家督を嗣いだ時に、元銀を二倍にして返す契約で借りる方法。

(九)右の方法で借りる、證文の面三百目の借銀は、元銀百五十目であつた。

(一〇)端午の節供の前日に菖蒲湯を浴する風習は今も残つてゐる。

(一一)軒端に菖蒲を挿す風習も今に残つてゐる。

(一二)しのめ竹。小さい竹の一種。

(一三)人目除けの垣根。

(一四)腰巻。

(一五)行水する。

(一六)良家の奥と下との中間の用をなす女中。

こゝろに。何事もすまして。其後は。氣付けてみるほど點しき。事にそありける。惣じて。物毎に。外なる事は。頼まれても。かく事なかれと。めいわくせられたる。法師の申されける

### 人には見せぬ所

轡もすぐれて。興なれども。跡より戀の責くれればと。そこ計を。明くれうつ程に。後には親の耳にも。かしこましく。俄にやめさて。世をわたる男藝とて。兩替町に春日屋とて。母かたの所縁あり。此もとへ銀見習ふためとて。つかはし置けるに。はやしに一ばい三百目の借り手形いかに。欲の世中なれば逆。かす人もおとなげなし。其比九才の。五月四日の事をかし。あやめ贅かさぬる。軒のつま見越の柳しげりて。木下闇の夕間暮みぎりにしのべ竹の人除に笹屋嶋の帷子。女の隠し道具を。かけ捨ながら菖蒲湯を。かゝるよしして。中居ぐらいの女房。我より外には。松の声。若きかば。壁に耳みる人はあらしと。ながれはすねの。あとをものはぢぬ臍のあたりの。垢かき流し。なをそれよりそこらも襦袢にみだれて。かきわたる湯

(一) 吾人目のないところの意で、壁に耳の諺を利用してある。

(二) 腫物の一種。

(三) うきわたる。かきわたる。原本判讀し難い。いづれにしても意は通ずる。

(四) 遠目鏡でよく明らかに見える。

(五) たわいないこと。

(六) ふと。

(七) 家の壁などに取り附けた低い垣根。

(八) 午後八時—九時の鐘聲。

(九) くぐり戸。

(一〇) 何も氣にかけるところなく。

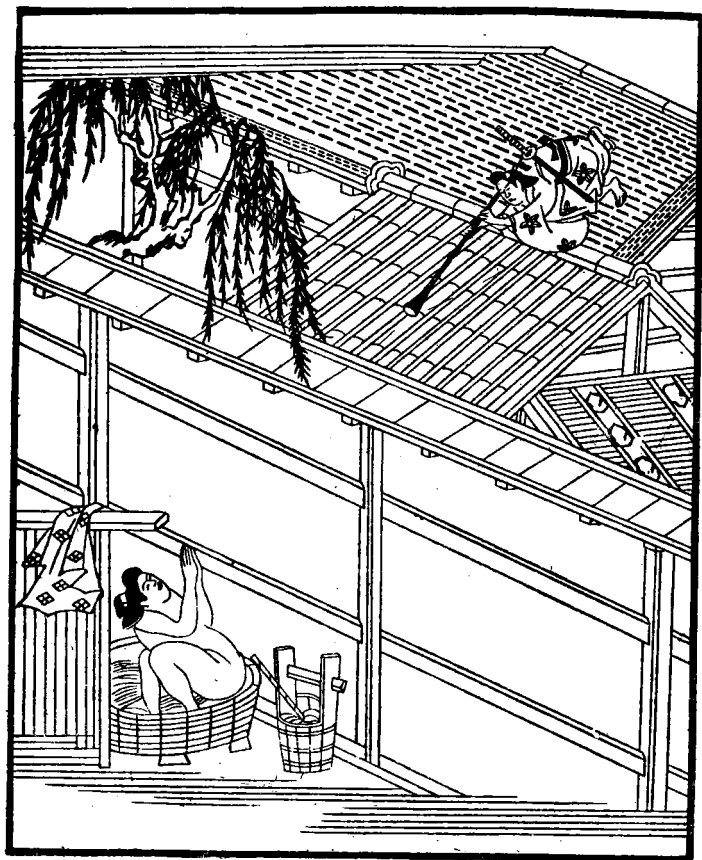
(一一) 極めて小さい人形の玩具。

(一二) 起き上り小法師、玩具の一種。

(一三) 雲雀の聲に似た音を出す笛の玩具。

(一四) 貴方さまに。

玉。油ぎりてなん。世の介四阿屋の。棟にさし懸り。亭の遠眼鏡を取持て。かの女を偷間に見やりて。わけなき事どもを。見とがめ。ゐるこそおかし。與風女の目にかゝれば。いとほづかし。声をもたてず。手を合て拜めども。なを貞しかめ。指さして笑へば。たまりかねて。そこ／＼にして。塗下駄をはきもあへず。あがれば。袖垣のまばらなるかたより。女をよび懸。初夜のかねなりて。人しづまつて後。これなるきり戸をあけて。我かおもふ事をきけとあれば。おもひよらすと答ふ。それならば今の事を。おほくの女共に。沙汰せんといはれける。何をか見付られけるおかし。女めいわくながら。ともかくもと云捨て。只何ころもなく。みだれし烏羽玉の夜の髪は。たれか見るべくと。はしたなく。つかみさがして。つねの姿なりしに。かの足音してしのぶ。女是非なく。御ころにかなふやうにもてなし。其後小箱をさがし。芥人形おきあがり。雲雀笛を取そろえ。これ／＼大事の物ながら。さまになに惜しがるべし。御なくさみに。たてまつると。是にて。たらせども。うれしさうなるけしきもなく。頓而子を。もつたらば。それに。なきやます物にも。なるぞかし。此を



(二) 小兒らしからぬところがある。

(三) 二日灸といつて、この日の灸は特に利き目があるとされた。

(三) ちりけもと、天柱は灸點の一。兩肩の間、首のうしろ。

(三) 灸の跡に鹽を塗る。

(三) 春の目ざめを指す。

(一) 年齢不相應に物事に聰きこと。

(三) 男色關係。

(三) 小八は未詳。がかりは風俗の特徴。

(四) 鬢の毛を切つて下げ、中剃りの上に立つやうに鬘を結つた髪風。

(五) なまめかしいこと。

(六) 自分の美顔に目をつける人があつたら、見逃しにはしない。

(七) 若衆關係に於ける風習を身に附ける。

(八) 年少の世之介がさういふことを、よく辨知しようとは世間の人とは思はない。

(九) 雪中の梅の花咲く時を待つが如し。

きあがり。そなたにほれたかして。こけ懸ると。いひさま。膝枕して。

なをおとなしきところあり。おんな赤面して。よもやたゞ事とは。人とも

見まじ。とくと心をしつめ。御脇ばらなどを。はゞかりながらなてさす

り。すぎし年。二月の二日に。天柱すえさせたまふおりふし。黒ぶたに塩

をそゝぎ。まいらせけるが。其御時とは。御尤愛しさも今なり。是へ御入

候へと。帶仕ながら懷へ入て。じつと抱しめ。それよりかけ出して。おも

ての隔子を。あらくたゝきて。世の介様の御乳母どのと。よび出し。御無

心ながらちゝをすこしもらひましよと。はしめをかたれば。まだ今やなど

かやうの事はと。腹かゝえて笑ひける

### 袖の時雨は懸るがさいはい

浮世の介點しき事十歳の翁と申べきか。もと生れつき。うるはしく。若

道のたしなみ。其比下坂小八かゝりとて。鬢切して。たて懸に結事。時花

けるに。其面影情らしく。よきとほむる人のあらば。只是通らじと常く

こゝろをみがきつれとも。また差別有へきとも思はず。世の人雪の梅をま

(二〇)鞍馬山、またその峯つづきの山など諸説がある。古今集紀貫之「梅の花にはふけるべはくらぶ山間に越ゆれどしるくぞありける」

(二一)小禽獵をすること。

(二二)霞網。空中に張つて、小禽を捕る。

(二三)小枝に薔を塗つて小禽を捕ること。

(二四)頭巾被らせし鴟鵂を棲り木に居らせ、傍に薔を塗つた木枝を置いて、小禽を誘うて捕る。

(二五)白氏文集凶宅詩に「梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」の句に依る。

(二六)慰みの過ぎる意からすぐに心残りしての意に轉じてある。

(二七)細雨の様子。

(二八)雨宿りすべき木蔭のないこと。

(二九)當時武家の下僕らは、書き髭をし、また作り髭を附ける風があつた。

(三〇)俄かに雨の身にかからなくなつたので、空が晴れたかと思つたこと。

(三一)再會の便り。

(三二)結髪道具の櫛。

(三三)亂れた毛髪を直せ。

(三四)きえ懸るは上下兩方にかかる。

(三五)隔て心なく。

つがことし或日暗部山の邊に。しるべの人ありて。梢の小鳥をさはがし。天の網小笹に。もちなどをなびかせ茅が軒端の物淋しくも。赤頭巾をきせたる。梟松桂。草がくれなぐさみも過がてにして。歸る山本近く。雲しきりに立かさなり。いたくはふらず。露をくだきて。玉ちる風情一木も含りのたよりならねば。いつそにぬれた袖笠。於戯。まゝよさて。僕が作り髭の落ん事を。悲しまるゝ折ふし。其里に。影隠して住ける男あり。御跡をしたひて。からかさをさし懸ゆくに。空晴わたるこゝちして見歸。是はかたじけなき御心底。かさねてのよすがにも。御名ゆかしきと申せど。それには曾而取あへず。御替草履をまいらせ。ふところより櫛道具。えもいはれぬ。きよらなるをとり出し。つきんぐのものにわたして。そゝけたる。御おくれをあらため給へと申侍りき。時しも。此うれしさ。いか計あるへし。まことに時雨もはれて。夕虹きえ懸るばかりの。御言葉數々にして。今まで我おもふ人もなく。徒にすぎつるも。あいきやうなき。身の程うらみ侍る。不思議の。あんにひかるゝ。此後うらなく。思はれたきとくどけば。男何ともなく。途中の御難義をこそたすけたてまつれ。全衆

(六)迷惑。

(七)鴨長明の方丈記冒頭の文の句調に擬してある。

(八)聖人ぶつた。

(九)方丈記日野山閑居の條に、小庵の在る山の麓に住んだ山守の小童と遊んだことが出てゐる。

(一〇)小庵。維摩詰の方丈の室に出た語。

(一一)不破の關に關する歌は多い。そこに月を詠んだ歌も多い。

(一二)豐臣秀次の寵を受けた小姓。彼に男色の戀をした武士が、主の眼を盗んで密かに彼と瀬田橋で會つた。行方を探しに來た秀次の臣は、鬭奢待の香で、それと察知したが、見逃してやつたのでその武士は感激して自刃したといふ話がある。

(一三)ただ長話といふことを、室町時代男色物語の一つの名に懸けてある。

(一四)寺から里へは物の顛倒にいふ諺。白糸のこと不明。

(一五)未詳。

(一六)東破は東坡。蘇東坡のこと。じせつすいは季節推。風吹土は風水洞。杭州の節度推官李泌が風水洞に先きに行つて、東坡を待ち受けた。その時の詩が東坡の詩集に出てゐる。

(一七)その人に與へたいとおもふ人にとの意。

道のわかち。おもひよらずと。取あけて。沙汰すべきやうなく。すこしは興覺て後。少人氣毒こにきはまり。年はふりても。戀しらすの男松。おのれと朽て。すたりゆく木陰に。腰を懸ながら。つれなき思はれ人かな。袖ゆく水のしかも又。同じ泪にもあらず。鴨の長明が。孔子ぐさき。身のとり置も。門前の童部に。いつとなくたはれて。方丈の油火けされて。ころは闇になれる事もありしとなむ。月まためつらしき。不破の万作。勢田の道橋の詰にして。蘭麝のかほり人の袖にうつせし事も。是みなかうした事で。あるまいかと。申をも更に聞も入れぬ。秋の夜の長物語。少人のこなたより。とやかく歎かれしは。寺から里への。お兒しら糸の昔し。いふにたらず。さあ。いやならば。いやにしてと。せめても此男。まだ合点せぬを。後には小づらも憎し。屢しあつて。かさねての日中沢といふ里の。拜殿にて出合ての上にと。しかくの事ども。うすやくそくして。歸ればなをしたひて。笹竹の。葉分衣にすがり。東破を。じせつすいが。風吹土にて。さき立て待しが。それ程にこそは。我も又と。かぎりある夕ざれ。見やれば見おくる。へだりて。かの男年比命はそれにと。おもふ



(六)男色關係の人の仲の節義。

(七)戀の仲介のこと。

(八)わが身の戀を犠牲にすること。

(一)千載集戀源雅定「まことにや三年も  
またで山城の伏見の里に新枕する」

(二)九月九日重陽の菊酒の酔。

(三)舶來品の店。

(四)京都稻荷神社の北に在る。

(五)撞木町。伏見の遊里。

(六)墨染寺には古來有名の井戸水があつた。

(七)撞木町の南の入口。

(八)公家らしき髪風。

(九)茶の名所宇治の茶製造者の手代。

(一〇)伏見の東に當る。

(一一)京阪交通の水路であつた淀川乗合船の伏見から大阪へ行くもの。

(一二)櫓と粽。愛宕参りの土産物。

(一三)錢一貫文をさし繩にさしたるもの。但し四十文を兌錢として引去つてあるから、實は九百六十文。

(一四)これも伏見の遊里。

(一五)吊格子。道路面へ造り出した格子。出格子。

若衆にかたれば。又あるべき事にもあらず。我との道話を忘れずとや。さりととはむごき。御ころ入。いかにして。捨置へきやとおもひの中の。中川の。橋かけそめて。身は外になしけるとなり

### 尋てきく程ちきり

新枕とよみし。伏見の里へ。菊月十日の夕暮。きのふ酌し。酔のまきれに。唐物屋の。瀬平といふ者をさそひ行に。東福寺の入相。程なくしもく町。ころざす所は爰也。鑓屋の孫右衛門の邊に。駕籠乗捨て息もきる。程の。道はやく。墨染の水。のみもあへず南の門口よりさし懸り。東の入口はいかにして。ふさぎけるぞ。すこしはまはり遠き戀をと。ありさま。ひそかに見たせば。都の人さうなる。色しろく。冠着さうなる。あたまつきして。しのぶもあり。宇治の茶師の。手代めきて。かゝる見る目は違はじ。其外六地藏の馬かた。下り舟まつ旅人。風呂敷包にしきみ粽を。かたけながら。貫さしのもとすゑを見合。若氣に入たるもあらばと。見つくして又。泥町に行もおかし。人のすき待て。西の方の中程。ちいさき釣

(二)水面に紅葉の散在した模様。

(七)言葉数の少い。

(八)發句の初句と察せられる。

(九)生まれつき上品ならぬ女もその身の持ち様次第で上品にも見られる。

(一〇)着古し。

(一一)甚だ手輕い。

(一二)ぞんざいに。

(一三)他人にわが本心を見られる。

(一四)物事に賤しくなる。

(一五)他人の物を欲しがる。

(一六)強い風の寒さを防ぐ、焼き炭とする小野産の木炭。

(一七)悲田村は非人のゐたところ。それらの造つた上穿き草履。

(一八)身錢をきること。

(一九)御幸の宮、五香の宮の祭禮。五月十日。この日は撞木町の紋日であつた。

(二〇)遊女のための書き入れ日。

隔<sup>かへり</sup>子。唐紙<sup>からみ</sup>の竜田川<sup>たつたがは</sup>も。紅葉<sup>もみぢ</sup>ちり／＼にやぶれて。煙<sup>けむり</sup>もいふせき。すいから<sup>すいから</sup>の捨所<sup>すて</sup>もなく。かすかなるうちに。やさしき女。こと葉<sup>こと</sup>に數<sup>かず</sup>なく。見られたき風情<sup>ふぜい</sup>にもあらず。袖<sup>そで</sup>の香<sup>か</sup>そけふの菊<sup>きく</sup>と。筆<sup>ふで</sup>もちながら。五文字<sup>ごふじ</sup>をきまといてあり良<sup>かほ</sup>也。ふかくしのばれて。此君<sup>このきみ</sup>は何として。懸<sup>か</sup>るしなくだりたる宿<sup>やど</sup>に。置けるを瀬平<sup>せへい</sup>が。物語<sup>ものがたり</sup>せしは。この人かゝえの親方<sup>おやな</sup>。此里<sup>このところ</sup>一人の。貧者<sup>ひんしや</sup>かくれなくて。いたはし。さもなき人も。もちなしから也。嶋原<sup>しまはら</sup>の着<sup>き</sup>おろし。あやめ八丈<sup>やちよう</sup>から織<sup>お</sup>のふる着<sup>き</sup>も。此里<sup>このところ</sup>におくりて。よき事に。似<sup>に</sup>せけると申侍<sup>まをさむらい</sup>る。かる／＼。なくさみ所成<sup>ところなり</sup>へし。斷<sup>ことわり</sup>りなしに。腰<sup>こし</sup>をかけて。わきさし紙入<sup>かみいれ</sup>。そこ／＼に置<sup>お</sup>なから。みるによき事。おほき女なり。いかなるしるべにて。此所<sup>このところ</sup>にはましますぞ。殊<sup>ことごと</sup>更<sup>さら</sup>うき動<sup>うご</sup>。さそと申侍<sup>まをさむらい</sup>れば。人<sup>ひと</sup>さまに。こゝろをあらはに。見<sup>み</sup>らるゝも。自物<sup>おのつかもの</sup>毎<sup>ごと</sup>はしたなくなりて。萬<sup>よろず</sup>不自由<sup>ふじゆう</sup>なれば。思<sup>おも</sup>はぬよくも。いできて。人をむさぶりに我<sup>われ</sup>か身<sup>み</sup>の外の。こし張<sup>は</sup>をたのみ。あらしふせき候<sup>こゝろを</sup>小野<sup>この</sup>のたき炭<sup>すす</sup>。よし野紙<sup>の</sup>紙<sup>かみ</sup>。非田<sup>ひでん</sup>院<sup>いん</sup>の。上<sup>かみ</sup>ばき迄<sup>いた</sup>もみつからして。それのみ。雨<sup>あめ</sup>の日のさひしさ風の夜<sup>よ</sup>はなを。まつ人も見えず。御幸<sup>ごきやう</sup>のまつり又は。五月の五日六日それ／＼の賣日<sup>うりひ</sup>

(三)ひとく催促されて。

(三)關係しない以前はしかたないが。

(三)この女の無事に勤めてゐる様子。

(三)決して訪ねて下さるなゝの意。

(三)染料として茜草の根を掘る。

(三)親の不面目な様を他人に知らせる。

(三)素姓を隠した心根。

(三)身請けしてやつたことを言外に含めてある。

迎。誰さまをさして。其日はと。いふほどの。たよりもなきに。あらくせがまれて。やうく日數程ふりて。二とせ計は暮し候へと。行末の事おそろしく。里はなれにまします。親立はいかに。世をおくらるゝぞ。其後はたよりもなく。まして爰に。尋ねたまはねばと。そゝろに涙を流す。其親里はときけば。山科の里にて。源八とかたる。かくあらぬさきこそ。ちかく尋で。無事のあらましをも。きかせ申へしといへと。うれしきやうすもなく。かならず。御尋は御もつたいなし。はじめの程は。赤根などほりてありしが。今はおとろいて往來の人に袖乞して然も因果は。人のきらひ候。煩ひありてと申侍る。起別れて。是を聞ながら。なをたづねゆかんと里に行てみれば。柴のあみ戸に。朝顔いとやさしく作りなし。鍵一すち。鞍のほこりをはらひ。朱鞘の一こしをはなさず。さつはりと。あいさつ過て。かくと申せばいかに女なればとて。其身になりて。我を人に。しらせ侍る事口惜しと涙を流す。いろく申つくし。かの女むかしを隠したる。こゝろ入をかんじて。程なく娘を。山科にかへして見捨す通ひける。其年は十一歳の。冬のはしめの事也

(一)垢かきは湯屋にゐた湯女のこと。垢すりの業と共に、遊女の業をも兼ねてゐたことを示してある。

(二)八月十三夜。

(三)八月十四日の月。

(四)名月、八月十五日の月。

(五)いづこも同様であるが。

(六)源氏物語須磨「なみたゞこゝもとに立ちくる心ちして」を引いてある。

(七)神戸市湊西區。

(八)西鶴の一目玉鉾には和田岬の西にこの名を記してある。吉田博士の大日本地名辭書には、武庫郡津門であらうといつてある。

(九)須磨の西に在る。

(一〇)熊谷盃といふ盃のことをいふのに、平敦盛をこの邊で捕つて抑へた熊谷直實のことを利かせてある。つげざしは酒盃に口をつけて、思ふ人にさすこと。

(一一)不詳。

(一二)源氏物語須磨「海少しとはけれど」

(一三)共に酒の銘。

(一四)白粉氣のないこと。

(一五)むやみに磯の臭氣がして。

(一六)藥の名。

(一七)在原行平がここに流されて、松風村雨の姉妹に契つたといふ傳説がある。

(一八)憂愁を慰める。

## 煩惱の垢かき

十三夜の月。待宵めい月。いづくはあれと。須磨は殊更と。浪爰元に。

借りきりの小舟。和田の御崎をめくれは。角の松原塩屋といふ所は。敦盛

をとつておさえて。熊谷が付さしせしとなり。源氏酒と。たはふれしも

と。笑ひて。海すこし見わたす。濱底に舍りて。京よりもたせたる。舞鶴

花橋の。樽の口をきりて。宵の程はなくさむ業も。次第に。月さへ物す

こく。一羽の声は。つまなし鳥かと。なを淋しく一夜も。只はくらし難

し。若ひ蛭人はないかと。有ものにまねかせてみるに。髪に指櫛もなく。

只に何塗事もしらず。袖ちいさく。裾みぢかく。わけもなふ磯くさく。こ

ちよからさりしを。延齡丹などにて。胸おさえ。昔し行平何ものにか。

あそさすらせ。しんきをとらせ給ひ。あまつさへ別に。香包衛士簪。しやく

し摺鉢。三とせの世帯道具まで。とらされけるよと。又の日は。兵庫迄來

て。遊女の有様。昼夜のわかちありて。半夜と。せはしくかきり定める

は。今にも此津は。風にまかする身とて。舟子のよびたつる声に。小歌を

(一九)香焼く籠。

(二〇)遊女の一日の勤めを二分して、晝賣り、夜賣りとしてある。

(二一)一夜の勤めを二分して勤めさせること。

(二二)客は大抵船客や船乗りであるから、船は風次第に出帆するので、ゆつくり遊んであらぬことをいつてある。

(二三)浮名即ち悪い評判が立つたら、邪魔をしてやる。

(二四)洒落をよくいふこと。

(二五)名前が聞きたい。謡曲忠度の「いかさまこれは公達の御なかにこそあるらめと、御名ゆかしきところに」の文句に採つて、下の忠度に響かせてある。

(二六)煙草盆。

(二七)髪を直す時用ゐる水油。

(二八)一張羅の著物。

(二九)剃れるか知らぬ。

(三〇)綿帽子の一種。眞綿製であるから、荒い壁の面にくつ附けて置くことがあつた。

三(後十二時と前二時の鐘の聲。

聞さし。或は戴て。さし捨てにして行は。こゝろのこす人は。のこるべし。何とやら念よく。是によこるゝもと。すぐに風呂に入て。名のたゝば。水さしますなと。口びるそつて中高なる貞にて。秀句よくいへる女あり。とらえて。御名ゆかしきと問へば。忠度と申。いか様是を。只は置れじと。うす約束するよりはや。あがり湯の。くれやう。ちらしをのませ。浴衣の取さばき。火入に氣をつけ。髪水を運び。鏡かすやら。其もてなし。何國も替る事なし。風義は。ひとつきる物。つままたかに。白帯こゝろまゝ引しめ。やれたらば親かたのそん。久三。挑灯ともしやと。いふかた手に。草履取出しくぐり戸出るより。調子高に。はうばいを諍り。朝夕の。汗がうすひの。はさみを。くれる筈じやが。たるゝか。しらぬと。ひとつとして。聞べき事にもあらず座敷に入さまに。置わたを壁につけ。立ながらあんどんまはして。すこし小聞き。中程にさして。雁首。火になる程はなさず。おり／＼あくびして。用捨もなく。小便に立。障子引たつるさまも。物あらく。からだを横に置ながら。屏風へだてたるかたへ。咄しを仕懸。身もだへして。蚤をさがし夜半。八つの。鐘のせんさく。我かこゝ

(三)客の物をつかひ。

(三)不自由。

(四)特殊の風俗。丹後守の邸前の風呂屋の女勝山の發明するところから丹前の名は起つたと傳へる。

(五)江戸神田松平丹後守邸。

ろにそまぬ事は。返事もせず。そこ／＼にあしらひ。鼻紙も人のつかひ。其後、野のみ。どこやらひえたるすねを。人にもたせ。たくよ。くむよと。寢言まじりに。いかに事欠なればとて。いつの程より。かく物毎をさもしくなしぬ。抑丹前風と申は。江戸にて丹後殿前に。風呂ありし時。勝山といへるおんな。すぐれて。情もふかく。髪かたちとりなり。袖口廣く。つま高く万に付て。世の人に替りて。一流はよりはじめて。後はもてはやして。吉原にしゆつせして。不思議の御かたにまでそひぶし。ためしなき女の侍り

### 別れは當座はらひ

(一)絹織り絹物の一種。原産地印度チャウルであるからこの名が附いた。  
(二)裁縫を専らする女寮公人。お針。  
(三)前方腰に附ける巾著。  
(四)小粒の銀貨。  
(五)丁稚。  
(六)同志の少年。下の清水に結んだ詞。  
(七)いづれも茶屋女のゐたところ。  
(八)茶屋女を抱へた茶屋。

茶宇嶋のきれにて。お物師がぬうてくれし。前巾着に。こまかなる露を。盗みためて。或夕暮。小者あがりの若き者をまねき。同し心の水のみなから。清水八坂にさし懸り。此あたりの事ではないか。日外物がたりせし。歌よくうたふて。酒飲て。然も憎からぬ女は。菊屋か。参河屋蔦屋かと搜して。細道の萩垣を。奥に入れば。梅に鶯の屏風。床には誰が引捨

(九) 檜の材を棹にした下等の三味線。  
(一〇) 黒味を持つ朱色。

(一一) 豪盃。

(一二) 脚つき盆。

(一三) 杉櫓。料理の一種。

(一四) 粹人風。

(一五) 幅の廣い帶。

(一六) 帯の結び方の一風。端を折つて挿んだもの。

(一七) 腰巻。

(一八) 下等楊枝。

(一九) 四つに折つた結髪の一風。

(二〇) 朱塗りの蓋の附いた燗鍋の鉦。(ツル)

(二一) 櫛の實。

(二二) 濱焼魚で、酒席のむしり肴としたもの。

(二三) 同じ盃で二度重ねて飲ませること。

(二四) 二木。二つの木枕から出た茶屋女の名。

(二五) 繪を織り出してある筵。寢筵。

し。かしの木のさほに。一筋切れて。むすぶともなく。うるみ朱の。煙草盆に。炭團の埋火絶す。疊はなにとなく。うちしめりて。心知よからず。おもひながら。れいのとさん出て。祇菌細工の。あしつきに。杉板につけて。焼たると。お定りの蛸。漬梅。色付の薑に。塗竹箸を。取そえ。おりふし春ふかく。藤色のりきん嶋に。わけしりだてなる。茶じゆすの幅廣。はさみ結びにして。朝鮮さやの二の物を。ほのかに。のべ紙に。數齒枝をみせ懸。髪は四つ折に。しどけなくつかねて。左の御手に。朱蓋のつるを引提。たち出るより。淋しさうなる事かな。少さうなど。是より給ましてと。いふもいやらしく。屢しは。實のなき栢をあらして。ありしが。無下に捨難く。いたゞけば。濱焼の中程を。ふつゝかにはさみて。おさえまするといふ。はしめの程は。たまり兼。さらに又。所を替てとおもふ内に。せはしく銚子かえる事あり。與風腰つきにえもいはれぬ所ありて。似トが。やりくり合点か。二つ折の繪むしろに。木枕の音も又おかしく。寂前のりきん嶋。うそよごれたる淺黄のに替りて。鼻歌などにて。人まつけしき今也。世之介十二より。聲も替りて。おとなはつかしく。はづるとは

(六) 夫婦二世の縁。

(七) 韻音様の略。

(八) 安産の御禮として神に供へる餅。

(九) 父。世之介自身。

(一〇) わるさ。いたづら。

(一一) 此跡はこの前。出替は奉公人の交替期、三月五日と九月五日と。

(一二) 一塊の雪。

(一三) 貴方様。

(一四) 京都の地名。

なくに。かくしばらくの事も。一世ならずくはんさまの。お引合。末く  
馴染て。若又お中に。やうすが。出来たらば。近所にさいはい。子安の。  
お地藏は御さり。太義なれど。百の餅舟は。阿爺がするぞ。機遣なしに。  
帯とけと。ひとつも。口をあかせず。わるこ有程つくして。物しける。  
うちとけて後。此女さしうつむいて。物をもいはず。涙くみてありしを。  
こゝろもなく尋ければ。二三度は。いはさりしがしめやかなる物こしし  
て。われ今こそあれ。此跡の出替りまでは。さる宮様かたにありしが。不  
慮におこゝろを。かけさせられ。すへかすへのわがすむもとに。しのび入  
せ給ひ。むつまじう。語りし其夜は忘れもやらず。雪のあさくと降そめ  
し。十一月三日。かたじけなくも。御手つから。一かたまりを。わかほか  
へは是しやと。ほゝに。投入させ給ふ時の。御すかた今かたさまにおもひ  
合。昔しが思はるゝと語るさては其宮様に似たとは。どこが似たと戯る  
ゝ。いつれを申へきや。ひとつとして。いきうつし。殊更風のはけしき  
朝。いかゞ暮するとして。白ぬめの。着物給り。又西陣に。母を一人持。候  
を。不便とて。米味噌薪。家賃までを。十一歳にして。かしこくも。あそ



△世之介の年齢に相應するやうな出放  
題な事を、相手次第にいふ。

ばしける。貴様も。よろつに。氣のつきさうなる。おかたさまと見えて。  
一しほお尤愛しう。おもふなと。はや。其年に。思ふまゝの事共。其相  
手を見て。是ぞ。都の人たらしぞかし。



# 好色一代男 卷二目録

十四歳

仁王堂飛子の寢道具の事

十五歳

髪きりても捨られぬ世  
後家なびける事

十六歳

女川はおもはくの外  
京原町の事

十七歳

暫紙のし判  
奈良木辻の事

十八歳

旅中のできこゝろ  
道中人どめ女の事

十九歳

出家にならねばならず  
江戸香具買の事

二十歳

うら屋もすみ所  
大坂上町者の事

(一) 殖生の家。田舎家。

(二) 四月一日。衣更への日。綿入れを始にかへる日。

(三) 小児服の長い袖の腋を縫ひ塞ぎ、大人風にすること。

(四) 大和初瀬の長谷寺を指す。

(五) 寺に登る途中の坂を雲井の坂といふといふ。やどりといふのは坊でもありしものか。

(六) 古今集春貫之「人はいさ心もしらず古里は花ぞむかしの香ににほひける」。この歌は詞書に「初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿らで程へて後にいたれりければ、彼の家の主かくさだかなむ宿りはあるといひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる」とある。

(七) 青葉なるの句は上と下とに懸けてある。

(八) 戀の成就を祈る。

(九) 大和の地名。下の十市、布留共に同じ。

(一〇) 大和多武峯村。

(一一) 麦秋即ち麦の收穫期の半ば。

(一二) 農具の一。麦の實を打ち落すもの。

竹の先きに木を回轉するやうに取り付けてある。

(一三) 麥稈を編んで造つた籠。

### はにふの寢道具

其年。十四の春も過。ころもあらためて。着更る朔日より。袖などをふさぎて。世の人に惜しまるゝも。後つきぞかし。聊おもふ事ありて。初瀬にこゝろさしける。一人ふたり。召仕を伴ひ。雲井の舍りといふ。坂を上りて。人はいさ心もしらずと。貫之が讀し梅も。青葉なる山ふかく。起誓かけまくも。かたじけなき返事をとる事。いつ迄かと。つぶやきけるを聞て。又此度もかなふまでの。戀をいのらるゝと。おもふ事ぞかし。歸るさは。過にし花の思はるゝ。櫻井の里をすき。十市。布留の神やしろを。北に詠こして。暮におよへば。掠橋山の禁に。かすかなる草の屋に。折しも。麥も繭のなかば。から卒の音のみ。里の童部。ねぢ簾。あまがへるの家なとして。塵塚より。なた豆といふ物。いと笑しく。生さがりたる。垣根を見れば。今こそ今とおもはるゝ。脇あけの。下人に風情を。つくらるゝもあり。髪結ふけしき常ならず。紙ひほの。編笠の様子。懸る所にはと。尋ねられけるに。此里は仁王堂と申て。京大坂の飛子。しのび宿なる

(四) 麥得で造つて家の形をしたもの。

(五) 若衆盛り。

(六) かかる田舎には珍しく思はれる。

(七) 大和櫻井附近に在る。

(八) 振假名にでいとある。客座敷か。

(九) 名を披露する。

(一〇) 若衆に附いた僕。

(一一) 心附けの金銀。

(一二) 少しは無理もいつて酒を飲ませる。

(一三) たわいない雑談。

(一四) 横綱。

(一五) 櫓。

(一六) 丸木のまま挽き切つて造つた木枕。

(一七) 五月の話であるから、作者の思ひ違ひであらう。

(一八) 靱糠。

(一九) 知らず知らず近よる。

(二〇) 疥癬。

(二一) かういふ深い關係になつては、隠すのもどうだらうの意。

(二二) 安藝の嚴島の市は六月で、その頃に芝居が興行された。

(二三) 吉備神社の所在。

と。よろつに付て。我しり貞に語りけるに。今宵一夜と。おもひながら。色なきかたに。舍りはといと。口惜しかりけるに。爰こそ。假寢の夢計よと密に才覺して。かすかなる亭に入れば。あるじそれ／＼の名をふれける。思日川染之介様。花沢浪之丞様。袖嶋三太郎様。いづれもおもしろ。笑しきさま。兎角酒にして。こんがうの角内。九兵衛を呼出し。よろこぶ物をとらして。後は龍れて。盃にすこしは。無理など云懸り。更行まで。月がゆがふたの。花がねぢれたのと。我がまゝつもれば。見合て。寢道具取さばきぬ。よこ嶋のもめん蒲團に。せんだんの。丸木。引切枕。夏をのがれたる。蚊もあればとて。摺鉢に。すり糠を煙らせける。烟と思へば。是も伽羅のこゝちして。おのつから近よる程に。ひぜんなをりて。いまだ。間もなき手を。うち懸らるゝも。嬉し悲しく有ける。さて勤なれば。尤愛しく。思はるゝ。すきにし程は。いかなる里。いかなる國／＼を。廻りけるぞ。懸るうへに。つゝむべき事も。何ならん。我をも／＼は。糸より權三郎殿にありしが。笛ふきの。喜八かたにわたり。宮嶋の芝居すきにさまよい。備中の宮内。讃岐の金毘羅に。ゆく事もあり。いづく

(四) 大阪市住吉區。

(五) 南河内郡。

(六) 大和高市郡。

(七) 大和磯上郡。

(八) 八幡、豆山共に山城愛宕郡の地名。

(九) 鍛鍊されて。

(四〇) 男色關係者の間の節義を重んじた風習。

(四一) それのみならず。

(四二) 奉公の年季明けること。

(四三) 人の性によつて、有封、無封に入るを稱した。有封に入る人は爾後七年間吉運が續くとされた。

(四四) 若衆、遊女などの交つた席上。

(四五) 年齢の吟味。

(四六) 控へるがよ。

定す。すみよし安立町に隠れ棲。又は河内の柏原。此里にきて。今井多武  
 峯の。出家衆を。たらし侍る。中にも更に。なさけなきは。八幡の學仁坊。  
 まめ山の四郎左衛門とて。無類の此道好是は飛子の。うき灘を越るがこと  
 し。此兩人に揉れて後。此勤ならざるといふ事なし。或時は片山陰の柴か  
 りて。適く手にふれし。銀子をしてやり。浦原の塩馴衣を。はだかにし  
 て。假にも取ル分別計。情なきは衆道こゝろは。外になりましてと語る。  
 皆うそにしても。偽とも思はれず。さて心にそまぬ人に。あふ夜はと尋ね  
 侍れば。譬ば。跣足一代に。齒枝つかはさる人にも。いやとはいはじ。  
 それのみ。宵より曉の夜の明るまで。とやかく。おもふ俣に成こそ。無念  
 いくたびか。人しらぬ涙にして。かく年月やうく。程ふりて。くる年の  
 四月には。身自由なると。思ふをたのしみ。心いはるに然も。明後日  
 金性の者は。有封に入まする。年の七年は。仕合と申侍る。金性ならば。  
 廿四の金か。我とは十違ひぞかし。假初にもかゝる一座にて。年せんさく  
 は。用捨あるへし

## 髪きりても捨られぬ世

(一) 道ならぬ男女人間の情事。

(二) 夫に死別して。

(三) 死別した夫との間に出来た子供。

(四) 遺産。

(五) 兩方から引き寄せて閉ぢる戸。店の戸であらう。

(六) 火災盗難の多い、冬、年の暮。

(七) 女では事の運び難い事もあつて。

(八) わがままになつて。

(九) お内儀様とこれまで呼び馴れた、敬稱の様を省くやうになる。

(一〇) 手代が無駄なこととしても、時經つて注意をするやうに遠慮する。

(一一) 男女情事の話。

(一二) 貞操の念を失ふ。

いたづらは。やめられぬ世の中に。後家程心に。したかふものはなきと。或人の語りぬ。馴染に別れての當座は。自害出家にも。成へき事やすかり。程經りて。後夫を求るもなきならひにはあらず。忘れ念記。たくはえに。欲といふ。物ありて。うきながら。跡立るも。身をおもふ故ぞかし。藏の鑰に。性根をうつし。めしあはせの戸に。くろくをおとし。用心時の自身番にも。人頼みすることあれ。いつとなく。前裁は落葉に埋み。軒も舊時を忘れ。雨の洩夜。神鳴のなる時は。ちかよりて。あたままで隠せし事。こはき夢見ては。申く起せしなど。今おもへば獨身はと悲しく。佛の道にこゝろさし。紋所の着物もうとみはて。世をわたる種とて。元來商のとくい。殊更にあしらい。手つから十露盤をかんがえ。銀みる利發も。女は埒のあき難き事もありて。万手代にまかすれば。いつとなく。我になつて。様といふ尻声もなく。大形は機嫌とりて。むやくしき事も。程すきて。こゝちよき下主共の咄しより。興風こゝろ取龍して。若

(二) 群列につく人達。

(四) 町人の用ひた禮装。武士の袴の如きもの。

(五) 兄弟分の親交。

(六) 成長の襟。

(七) 駈つけの櫛。

(八) 杉原紙。杉原は原産地播磨の地名。

(九) 青年若衆の髪風。額の兩端の毛を抜いて角を設けて、角前髪にすること。

(一〇) 色戀の出来る。

(一一) 花菱の紋を四つ組み合はせた紋。

(一二) 外國織。

(一三) 頭上に手拭を載せて、兩端を垂れたもの。

(一四) 身分ある人の妻か、歴々の町人の女房などと察せられる。

(一五) 手の先き。

(一六) 源氏物語。この物語は紫式部が八月十五日の夜、石山寺から琵琶湖上に映る月影を見て、著想を得て作つたといふ傳説をいふ。

(一七) 格子戸。

(一八) 三度引いて三度とも三が出た。それを不吉として忌んだ意味らしい。

(一九) 紫式部が寡居の際に、源氏物語を書いたといふ説を取つてある。

きものなどゝ名の立こそおかし。我後家を引磨る事。度々なり。葬禮の、つき／＼に様子尋て。男のはてられて。跡はかやうと申せば。しるべなくとも。はかま肩衣着て。我とは。兄弟一ぶんに。申かはせしにと。しみ／＼と吊ひ。其後子共の。なりさまを尋ね。火事などゝいふ時もかけ合。物毎たのもしくおもはせ。したしみてから。杉原にたより書つゝけ。いくたりが。心のまゝにと。申程に。小耳にも。おもしろき時は。十五才にして。其三月六日より。角をも入て。ぬれのきく折にふれて。螢みるなど催して。石山に詣でけるに。然も其日は四月十七日。湖水も。一際涼しく。水色の。きぬ帷子に。とも糸に。さいはい菱を。かすかに縫せ。あつち織の。中幅前にむすび。今はやる。ふき懸手拭。塗笠のうち。只人ともみえず。すゑ／＼の女までも。水くみ。石臼を引たる。つまはづれにはあらず。きざはしゆたかにあがり腰もとなどに。爰にてつくりし。物語を。あらましきかせ。組戸に立添。何おもふもしらす。鬘をとつて。三度まで三は。うらみに。存しまするといふを脇貞より見れば。惜べき。黒髪をきりて。ありける。さてこそうるはしき後家。かりに此世に。あらはるゝか



(三)人を介していふまでもなく。

(三)すぐに。

(三)話して納得させ。

(三)大津市の東南端。

(三)懐妊のこと。

(三)出所不明であるが、「あはれなり夜半に捨て兒の聲するは母に添寢の夢や見つらむ」。多少文句に相違はあるが、江戸時代の文獻に散見する。

(一)小鹽山は京都の西大原野村に在る。その麓の勝持寺に西行櫻といふ有名なものがあつた。

(二)吉岡兼房。剣法の達人、吉岡染の發明者。

(三)柔術。

(四)坐して刀を抜く術。

(五)月代を廣くし、鬢を小さくした髪風。男達の間に流行した。

と。おもへば。思はるゝ目つきして。袖すり合て通り侍る。かの女。人迄もなく。自よびかへして。今の事とよ。お腰の物の柄に。懸られ。我うすぎぬのあらう。裂たまふこそ。さりととはにくき御しかたまなく。もとのごとくにと申程に。いろ／＼わひても。聞いれす。是非／＼むかしの絹をとさいそくめいわくして。都へとゝのえに。遣し申べし。こなたへと申ふくめ。松本といふ里にきて。ひそかなる。かり家に入れば。かの女はづかしながら。たよるべき。たよりに。我と袖を裂まいらせ候と。ふかくたはれて。なを戀しくばと。わか宿を語り。つのればお中おかしく成。程なく生れけるを。せんかたなく。夜半に捨子の。声するは。母に添寢の夢の。浮世と。小町が讀し言の葉も。おもひ出されていとあはれは。爰六角堂の。其そこに。置てぞかへりける

### 女はおもはくの外

小鹽山の名木も。落花狼籍。今一しほと惜まるゝけんぼうといふ男達。其比は捕手居合はやりて。世の風俗も糸鬢にして。くりさけ。二すぢ懸の

- (六)色變りの絲で組んだ帯。
- (七)鮫皮の一種。
- (八)容貌に自信、自負心を持つ男。
- (九)北野天満宮。梅の名所。
- (一〇)東本願寺別院。藤の名所。
- (一一)火葬場の煙。
- (一二)一服の煙草の量の多い煙管。
- (一三)毛皮製の巾著。
- (一四)京都の地名。
- (一五)日光のよく入らない、薄暗い家。
- (一六)淫賣宿。
- (一七)京都小川通りの糸屋の雇女。密淫賣婦の一。
- (一八)京都室町通り呉服屋から呉服の取次ぎ、行商した女。密に賣淫をなしたものの。
- (一九)女工。
- (二〇)五指の四倍、即ち二十。
- (二一)雀斑。
- (二二)京都の地名。

髻。上髻のこして。袖下九寸にたらず。染分の組帶。せかいらげの長脇指。爰ぞとおもふ人大形は是。王城に住人の有様。いまにみくらべてむかしを捨るぞかし。北野に詣で。梅をちらし。大谷に行て藤をへし折。烏部山の煙とは。五ふくつぎの。吸喫筒。小者にへうたん。毛巾着。ひなびたる事にぞありける。山つゝき岡崎といふ所に。妙壽といへる比丘尼。草庵を結び。東南の明りをうけず。襖障子も假名文の反古張上書悉やぶりしは。わけらしく見えて。一間小間くこしらえけるこそ。くせものなれ。爰はと友どちにきけは洛中のくら宿なり。小川の糸屋者室町のすはひ。其外して殿。爰にたよらぬといふ事なし。といひもはてぬに小づくりなる女。年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ目のうちすゞしく。おもくさしげく見えて。どこともなふこのもし。氷昆弱に。海棠の花を折添。妙壽におくりて人々をはちらい。けふは今熊野のあたりに。目薬あるをととのえとの。お使にまいるのよし。事關しく立出るをあれはと。妙壽に尋ければ。あれは烏丸通。申せばおのく御存。去御隠居の。めしつかひなりしが。同じおも屋の。内さばく人と申かはして。外の方へは。思

(三) 出来ないといふ意を含めた、糺の森の地口。

(四) 柿の木の縁で、手に入れられる女の意。

(五) 行儀正しくする。

(六) 元服のこと。下の業平の縁で、伊勢物語冒頭の文中のこの句を用いたのである。

(七) 金兵衛、清八、万吉は恐らく、當時實在した男達の名であらう。

(八) 大いに推量が外れた。

(九) 古くはバツクンと訓んでゐた。雲泥の相違。

(一〇) 別宅。

(一一) 行商。

(一二) 京都の町名。

(一三) 多くの手紙。

日もよらずと申程に。是はならずの森の柿の木。口へはいる物こそと。薬罐たぎれば。茶碗みがきて。何かな。御馳走もがなと申侍る。昼も半時にかたふき。羽織も苦になり。重着もうたてかりしに。世之介頭巾はなさず。身をかためありけるこそ。氣詰りに見えて。ぬげといへどもぬがず。其方は十六なれば。初冠して。出来業平と申侍る。ちと似合たる。お貞を見むと。わるき者ありて頭巾とれば。左の鬢先かけて。四寸あまり血ばしりて正しく。うたれたる疵あり。一座おどろき。いかなる者にかかくは。いたされけるぞ。男中間にひけとらしては。何れも堪忍成難し。天狗の金兵衛。中六天の清八。花火屋の万吉にてもあれ我く有なから。其仕返しなくてはと申せば。各別の義也。すぐならぬ戀より。此仕合。かたれと申。いはねばならぬ。義理になつて。さりとて。各おもはるゝとは拔群の違ひ。我等か下屋敷。川原町に。小間物やの源介と申て。丹後宮津へ。通ひ商するものあり。留守など頼むと申かはしける程に。折ふしは見舞て。火の用心申付しに。此女さはらき町の。去御方にありしよしにて。いとやさしき有様を堪兼ていろく道ならぬ事を。書くどきて千束おくりけ

(四)直接に。ぢかに。

(五)目の前に劍の山を見せる。脅迫の言葉。

(六)廿七日は闇の夜。

(七)しるまじが正しい。

(八)奈良市街の北端に在る坂。「この」にかかる枕。謡曲文に「奈良坂やこの手柏の二面ともかくにもねぢけ人かな」と用ひ、その後淨瑠璃、小唄などにも用ゐてある。ここは下の晒布の奈良晒布の縁でいつたもの。

(九)やがて夏の來ることを知らすべし。

(一〇)文は伊勢物語の冒頭「昔男初冠して奈良の京春日の里に知るよしして狩りにいけり」から文句を採つてある。

(四)問屋。

(五)光ある虫は螢。それを飛火野の枕に置いてあるが、飛火野の名は昔狼煙を揚げてたことに起るといふので、螢の名所ではない。野は東大寺の前に在る。

(六)古今集春「春日野の飛火の野守出て見よ今幾日ありて若葉つみてむ」

(七)菩提院内にある鐘。この鐘の由來に昔十三歳の少年が、春日神苑の鹿を殺し法に依つて、石子詰めめ刑に處された。

(八)神苑の鹿の出ないやうに、大きな垣を結び回らして、犯罪を防止した。

るに。返しもなく。或時さしわたして。さなきだに思日もよらざるに。  
二人の子も有事を。さもしき御こゝろさしと。恥しむるをも顧す。申かゝるこそ因果なれ。したがり給はずば。劍の山を。目の前とくとけば。何とおもひけん。さ程におほし召とは。聊存ぜずさもあらば。今宵廿七日月もなき夜こそ。人もしらまし。しのはせられよと申のこして。世上もしまりて。門に立よれば。内よりくゞりをあけ懸。是へ御入候へと申もあへず。手ころの割木にて。此ことく。眉間を討て。私兩夫に。ま見え候べきかと。戸をさしかためて。入ける。世に又かゝる女も。あるぞかし

### 誓紙のうるし判

奈良坂や。このたびは。さらし布調へて。越中。越前の雪國に。夏をしらすべし。商賣の道をしらてはと春日の里に。秤目しるよしして。三条通の問丸に着て。けふは若草山の。しげりを詠。暮ては。ひかりあるむしの飛火野。いま幾日過て。京にかへるも惜しまれ。其比は卯月十二日。十三鐘のむかしをきくに哀れ。今も鹿ころせし人は。其科を赦さず大がきをま

（九）人の罪を恐れて鹿を憚るを鹿が知つて。

（一〇）山野から、更に町にまで出て来た。

（一一）雌鹿の親しむこと。

（一二）秋は鹿の交尾期である。

（一三）町名。それを利かせてある。

（一四）奈良に能の四座があり、それに關與するものが多く住んでゐた。その人達の特殊な風俗。

（一五）多數の神社奉仕者。

（一六）かざし扇。

（一七）奈良の遊里。

（一八）奈良の遊里。

（一九）遊女の風俗京都に劣らぬ。

（二〇）歸られまじの誤用。

（二一）遊女どもの名。

（二二）今から思へば。

（二三）遊女の身の上を水の流れに比した。

（二四）揚屋七左衛門が妻。

（二五）二人さし向ひで。

（二六）ありのままに話した。

（二七）酒の世話。

（二八）客の遊興について雑用をする男。

（二九）和泉湊村産の紙。襖紙などに用ゐる下等品。

（三〇）拙くない手蹟。

はすとかや。人のおそろゝを。わきまえて。山は山。野は又さらに。町にかけりて。おのがさまく。妻なるゝも笑しくて。なを籠の半おもひやられ侍る。さぞ是なる秋も薄も。其時は。花園といふ町すちを。西にいれば。一つわきさし指て。鬢つき厚く。いつれ笛太鼓の一曲なりさうにみえし人。罷出たるは。此あたりに。八百。八幡宜の子共。諸方の浪人。友噪ぎにしてかさえ扇は。何しのぶぞかし。あない知人。所自慢して。爰こそ名にふれし。木辻町。北は鳴川と申て。おそろく。よねの風俗。都にはぢぬ撥をと竹隔子の内に。面影見ずには。かへらましと。七左衛門といふ。揚屋に入て。借るもこゝろやすく。折節志賀。千とせ。きさ。など。盃計のさし捨。其後近江といへる女。是からみれば。たしか大坂にて。玉の井と申せしが水の流れも。爰にすむ事笑しく。其夜は客なき事を。さいはい。口鼻に約束させて。更行迄さしわたし。かしらから。物毎しらけて。かたりぬ。所ならいとて。禿もなく。女郎の手つから。間鍋の取まはし。見付ぬうちは笑しく。床にいれなと申て。あしらひ男先立て。小座敷にゆけは。六疊敷に。幾間もしきり。みなと紙の腰張に。あしからぬ手

(三二) 潜り戸。

(三三) 湯桶。

(三四) この手轆さ。

(三五) 伏見から大阪へ下る乗合舟。

(三六) 同室の夢輿客。

(三七) 遊女の名。

(三八) 應對の話の風。

(三九) 東大寺二月堂より出した符印。

(四〇) 西大寺で頒布した豊心丹といふ薬。

(四一) 粹人たることを得た。

(四二) 揚屋の主人。

(四三) 自宅で金銀の勘定してゐて、遊興などしない。

(四四) 世間すれしたものの。

(四五) 奈良晒の商標を縫つたもの。

(四六) 起請文に漆判をして。

にて。君命。われは思へなどゝらく書かのこし侍る。いかなる人か。爰に寝てと。つい居て。また。夢もむすばすありしに。寂前さいぜんの男おとこきり戸とをならして。若御茶わがみちやをまいらばと。ゆとに。天目てんもく置置きて歸かへる。此こかるさ。下り舟しりふねにのる心知こころしして。一夜いちやの事なれば。足のさはるも。互たひに御免ごめんと枕まくらも定めず。あひ床とこをきけば。伊賀いがの上野うのの米屋こめや。大崎おほさきといへるを。四五度ごど馴なたる。あいさつにて。あすは國本くにもとに。歸かへるよしの名残なごりとて。二月堂にがつだうの牛王ごおう。西大寺さいだいじこゝろを付て。遣つかし侍る。てきも笑わらしき。奴やつにて。古里ふるさとの山の神かみ見て。癡おろふるうたらば。是こゝろにて落おすべしと。笑わらふて立たさまに。亭主ていしゅをよび出し。惣そうして。此中このうちのしなし。物をもつかはず。おそらく。今いまといふ今いま。すいになつたと。存ぞんと。申せば。宿屋やどや笑わらしき者ものにて。まだたらぬ所ところがありまことのすいは。爰こゝへまいらず。内うちにて小判こばんをよふて居ゐますと申せば。一座いざ是こゝは寂もつとといふを。余所よそなから聞きに。かゝる所ところにも。すれものありやと。夜よも明あれば互たひに別わかれ。戀こひにのこる所ところありて。重かさね而して宿やどによびよせ。近江おうみにさらしの。縫ぬいしるしなどさせてかはいがられ。にくからず。かための舊紙せうし。うるし判はんの。くちぬまてとぞ。いのりける

## 旅のてき心

- (一) 大傳馬町。中央區、元日本橋區。
- (二) 商賣上の總ての知識技術の見習ひ。
- (三) 粟田山。古今集物名「そめどの、あはた。うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはたつ山の麓に」
- (四) 逢坂の關。新古今集春「駕のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろき逢坂の關」
- (五) 草鞋穿き初むる。旅に出立つ初め。
- (六) 商賣の見習ひ。
- (七) 鳴らすを習はすに轉じてある。
- (八) 伊勢鈴鹿郡の地名。
- (九) 口きくは仲間の上に立つ。やさ者は聽者、ここは美人の義。
- (一〇) 品評する。ここは評判する意。
- (一一) 三人の遊女の名。
- (一二) 柴賣り。
- (一三) 「山水の絶えず」は飲みみの枕に置いた句。固より所の縁で作った句。
- (一四) 鶏の聲。交會の男女の別れの鳥の意である。
- (一五) 駿河庵原郡。薩埵山麓の海岸。西鶴の一目玉鈴に「親しらず子しらずとて浪うちきわの岩組をむかしは旅人の難義」
- (一六) 貝の一種。
- (一七) 地方の風俗に關する話。

江戸大傳馬町三丁目に、絹綿の店有ける。万勘定聞べしとて。十八歳の十二月九日に。京都を出て。雲のあは立山を越。栴の葉しろき。關路はき初るより。ぬれ草鞋に。物すごき岩角を。智恵つけなればとて。踏ならはして。けふ二日目の泊りは。鈴鹿の坂の下大竹屋とて。所にならびなき。大座敷につきしが。草臥をたすくる。水風呂に入もあへず。さて此宿に口きくやさ者はと。品定ける。鹿山吹みつとて。此三人其比柴人の。すさみにもうたふ程の女とて。かれらを集め。夜のあくるまで山水の絶ず飲かはして。さらばの鳥に別れて日數程ふり。御油赤坂の戲女に。なをかり枕泊りく。有程の。色よき袖を重て。やうく駿河の國。江尻といふ所につきて。先けふまでの浮世。あすは親しらずの。荒磯を行ば。自然水屑と成なむも定難し。南は三穗の入海我が物になりて。松も手に取やうに詠め侍る。然もあるじは舟木屋の甚介とて。氣さくなる斷し。是なる岸にあるてふ。海鹿藻。みるくいを取摘。酒も大形に過て。所の仕置咄

△八 銀と錢との相場を尋ねたもの。

△九 最後の雨戸に後から棒を支ふこと。

△一〇 二人一緒に曲節を合はせて説経節をかたる。

△一一 旅の出發時の食膳。

△一二 西鶴の一日玉鉚江尻の條に「むかし爰に若狹若松といへる兄弟の遊女有」

△一三 若狹若松の口眞似をして「あれは云々」と語る。

△一四 まだ太陽の西の空に高くある頃に宿に着いて泊る。

△一五 出發を急がない。

△一六 目的地の江戸。

△一七 一旦江戸に著いたら、支店の人々もあるから容易く出られないが、ここにはさういふ止める人がゐないから、自由に

出來るといふ意を、江戸霞が關を引いて人を止める人々のことをいつてある。

△一八 在原行平と松風村雨のことを聯想して、謡曲松風の「あらうれしやあれに行

本の御立あるが、松風とめされさむらふぞや」の文句に採つてある。

△一九 今行平の意。

△二〇 抱へ主。西鶴文には抱に拘の字を屢用ゐてある。

△二一 身請けして。

△二二 濱名湖の切れ口。

△二三 婦人の關所通行券。

し。錢は一步に。何程賣ぞ。あらまし申付て。雨戸に尻さしをして。寝る計に。身ごしらえせし處へ。誰とはしらずに。貞隠して。連ぶしに歌説経。あはれに聞えて。今までは手枕。さだかならず目覺て。出立焼女に。あれはいかなる人の。うたひけるぞや。されば此宿に。わかさ。若松とて。兄弟の女ありける。其貌屋みせましたい其女郎の口まねをして。あれはと語る。さて其人に。あふ事もがなと。尋ければ。今いふて今。おもひもよらず。いかなる旅人も。日高に泊り。曙を急かず。或は。五日七日の逗留。又は作病して。此君まみえ給ふ事ぞと。聞より吾妻の空物すぐく。はやいかぬ氣に成。霞が關の。ないこそさいはい。爰ぞ住べき所よと。彼はらからの女に馴て。其夜の枕物語。左のかたにわかさ。右のかたに。わか松と。召れさむらうぞや。今中納言平さまと。名に立て。都へのぼらば。つれてゆかいではと。拘の人に隙とりて。今切の女手形も。人の情にて立こし。其暮は。ふた川といふ所に。旅寝して。過にし比往來を留てありつる。物語もおかし。水無月の程は。蚊の聲。もの悲しき夜は。萌黄の。二疊つり。次の間に釣懸。はだへみる人もなき物。いつそはだかよ



△(三)二川。三河渥美郡。

△(三)この海邊に二女の評判の高かつたと。

△(三)鶏の眠りを妨げて、早く鳴かせて、客を疾く歸らせる工夫。

(三)京都逢坂山の南。文は世之介が歸京をいつてある。

△(三)簞物を賣つて旅費を作つたこと。

(三)東海道の鳴海附近の驛。

(四)新古今集冬「駒とめて袖うちばらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮」

(四)琴歌吉野山の文句に「吉野の山を雪かと思れば、雪ではあああらでむ、やこをこれのはなあの吹雪いよのむ、やあこれの」とある。

(四)衰へか。

(四)三河碧海郡に在る。

△(一)陽光の窓などに映ること。

△(二)晝夜の別もわからないほどにの省略體。

と。獨事に申せば。其声につきて。お伽にまいろうかと。それより事調

ぬ。又冬の夜は。寢道具を。かすやうにしてかさす。庭鳥のとまり竹に。

湯を仕懸て。夜深になかせて。夢覺させて追出し。色くつらくあたりぬ

る。其報ひ。いかばかり今のがれての。有難さよと。いやましに。よろこ

び侍るに。ひとつの難義あり。いつ音羽の山を見るまで。道すからの。遣ひ

かねとてもなくて。ふたりの女の。うは氣などをしろなし。芋川といふ里

に。若松むかしの。馴染有て。人の住あらしたる。笹薺をつりて。所の

名物とて。ひら饅飴を手馴て。往來の駒とめて。袖うちばらふ。雪かと。

見ればなとゝうたひ懸て。火を焼片手にも音しめの。糸をはなさず。うか

くとおとろひ。後はふたりの女も。花蘭山の。しも里に。まことの髪そ

りて世にすてられ。たのしみし人に。捨られ。道心とぞなれる

### 出家にならねばならす

あかねさす日の。うつりを見て。夜かあけたと思ひ。燭臺の光に。けふも暮たとしりぬ。昼夜のわかちも。戀に其身をやつし。淺間敷姿と成て。

△三京都の本宅へは隠して。

△四放蕩の止むことなく。

△五富岡八幡宮前の茶屋。

△六江戸の岡場所。比丘尼といふ賣色婦

のゐたところ。

△七三崎。台東區谷中に在つた。

△八つまらぬ者。下等の賣淫婦を指す。

△九賣色婦の類か。未詳。

△一〇中仙道の驛。遊女また飯盛のゐたところ。

△一一橋場。新吉原附近。それで吉原の道

筋をいふのであらう。

△一二厳しい申し渡しが來た。

△一三支店の用を捌く重手代。

△一四住職。

△一五台東區日暮里延命院内。

△一六謡曲松風一里離れたる通ひ路の、月

より外に友もなし」

△一七ひとひ。一日。

△一八地獄を知らぬ以前。出家以前。

△一九念佛の數取りにした珠數の珊瑚珠。

江戸に行ば。おのくよろこび。御行かたのしれざりしを。御ふくろ様よりの。御戴き。いかはかりと。しのびて。いたはりしに。なをやむ事なく。深川の八幡。筑地本庄の三つ目橋筋。目黒の茶屋を搜し。品川の連飛。白山。さん崎の。得しれぬもの。浅草橋の内にて。うなづく事迄を。合点して。後は物縫の小宿。板橋の。たはれ女も見のこさず。次第に。はしばの道すぢを。とはるゝこそおそろし。此東京に隠れもな。勘當のよし。あらけなふ申來れり。うきながら此まゝ。置まいらせては。御命の程もと。店さばきせし。小分別ある者の。才覺にて。或長老を。たのみ。十九才の四月七日に。出家になして。谷中の東。七面の明神の邊。心もすむべき。武藏野の。月より外に友もなき。吳竹の奥ふかく。すいかづら。屋顔の。花踏そめて道を付。草薺の假屋。やうく身の置所も爰に。水さへ希に。はるかなる岡野邊より。笥の手して結びおのづから世を見かきりてひとひ二日は。阿彌陀經など。いと殊勝に見えしが。おもへばつらく。道心もおもしろからず。後の世は見ぬ事。鬼ちかづきにならず。佛にもあはぬ昔かましとおもひ切。珠數にかす讀し。珊瑚珠を賣て何かなとおもふ

（二〇）黒みを持つ茶色。

（二一）衣類の裾まはしに、表と同じ布を用いたもの。

（二二）上野高崎産の刺し足袋。

（二三）かずの誤りであらう。數雪駄。廉價な雪駄。

（二四）原本男の振假名におとこのとある。

（二五）香や香合はせの道具賣るもの。

（二六）香木。

（二七）買つてもすぐには歸らない。

（二八）港區に在る。

（二九）婦人化粧水の花の露を賣る店。

（三〇）上方製地方行きの盃。下等品。

（三一）一步銀貨一つ。

（三二）香具賣を自由にしたく思はば。

（三三）陰間。男色を賣るもの。

（三四）監視役。

（三五）差支へ、故障のある時。

（三六）壞さず。

折ふし。十五六なる少人の。との茶小紋の引かへし。かのこ縹子の。うしろ帯。中わきさし。印籠巾着も。しほらしく高崎足袋。つゝ短かに。がす雪踏をはき。髪はつとすくなに。まけを。大きに。高くゆはせて。つゞきて。桐の梓箱の上に。小帳。十露盤を。かさね。利口さう成男行は。人の目に立ぬやうに。こしらえて。みるほとうつくしき風情也。是なん香具賣と申。こゝろうつりて。よび返し。沈香など入のよし申て。調て。とやかく隙の入こそ笑し。御用もあらば重而と立かへる程に。宿もとをきけば。芝神明の前。花の露屋の五郎吉。親かた十左衛門とぞ申。何事も。勝手しらぬこそ笑し。其後去人に。尋ければ。譬は。くたり盃一つ。焼物一貝とりて。一角計とらせて。酒などすゝめければ。供の者。空寝入するぞかし。執心と思はゞ。万にはしめより。賤しく。直段する事なし。かれらも品こそかはれ。かけろうともし。或は小草履取の。鼻すぢけたかきをかやうに仕立。東國西國の。屋敷方。一年かはり。長屋住居の人を。だます物ぞかし。御門の不自由成にては。門番にとり入。横目にしなだれ。さし合有時は。ゐんぎんに仕懸。たしか成咄し計して。其座を。くずさすと

△(七)男色關係に於ける兄分。

△(八)禁止して。

△(九)抱へ。

△(四)台東區。元の下谷區。

△(四)料理したあとの鳥の骨。

(一)兼好の徒然草に「顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見んこと、さもおぼえぬべし」に文句を擬して、勘當されぬ身で戀人と二人、田舎に住みたい意を表してある。見るものは見たいものの意と察せられる。

(二)徒然草の「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ、人には木の端のやうに思はるるよ」を引いて、出家の世之介の上をいつてある。

(三)心にもなきの意と見られる。

(四)常香盤。佛前に香を絶やさぬやうにしたもの。

(五)こは一決心すべきところと考へ。

(六)明るい内。實はまだ年若い内。

(七)入り陽も向ヶ岡に傾く頃の意から、直に向ヶ岡を出て行けばと續けてある。

向ヶ岡は今東京大學の在るところ。

いふ。さて其草履取はと。尋ければ。是にはそれ／＼に。念者ありて。とりなり。着物をも。合力して。たのもしき事ありつとめも。旦那計には。其事もゆるして。外はかたく政道して。其屋形にも出入して。月に四五度は。我がものにつれて歸る事ぞかし。近年おぼくはすたりて己來は。寺方に拘侍る。この沙汰も。捨難く。菴には。葛西の長八といへる。小者を不便がり。香具には。池の端の万吉黒門の。清藏。此三人に。日夜龍れて。いつとなく。さん切になでつけ衣は雑巾となり。臺所には。白鴈の胸がら。鰯汁の跡。燃杭に火とは。この人の昔しにかへる

## うら屋も住所

配所の月。久離きられずして。二人みる物かはと。うつくしき女の書つるも。此身になりて。それはそうよと。思はるゝ。夕の嵐。軒やかましき。荻のともすれ。あしたの豆腐賣さへ希に。なを精進腹の。どこやら物淋しく。人に戀しらすのやうに。思はれ。無分別の。常香をもち。終にはきゆる命。爰はと咄を捨て。まだ足もとのあかい内に。入日も。向の岡

- (八)案内役の先輩。  
 (九)大和大峯山、山上藏王堂に修験者の登ること。  
 (一〇)金葉集僧正行尊「大峰にて。もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」の擬り。  
 (一一)旅の道を急がせ。  
 (一二)矢矧川に架けた長橋。一目玉鉤には「二百八間の長橋有」と記してある。  
 (一三)世之介がここから近い芋川に住んだことを指す。  
 (一四)行く先きの前鬼山をいふために、若狭若松を後鬼と考へてある。  
 (一五)岩の荒けきを荒けく踏み分けて。  
 (一六)吉野天川村。  
 (一七)同上。  
 (一八)大阪市谷町。  
 (一九)大阪市南谷町。  
 (二〇)今大阪上本町五丁目邊。  
 (二一)淫賣婦の一種。  
 (二二)月ぎめの妾。  
 (二三)奉公女の小宿で賣淫するもの。  
 (二四)浮浪者の吟味。  
 (二五)家の主人格にの意であらう。  
 (二六)大阪市天王寺區。  
 (二七)大阪市東區。  
 (二八)僧侶を騙して男色を賣るもの。  
 (二九)遊里通ひは世間態を憚る隠居。

を出て行に。最上の山伏。大樂院といふ人。先達して。峯入とて。由と敷通られけるに。衣にすがりて。吉野までの。供頼み侍るに。是を見てあはれと思へ山櫻。花より外に。隨は友とする人もあらずやと師弟の約束。ころの馬を急かせ。岡崎の長橋わたりて。すぎし年。若狭わか松と。住ける昔しをおもひ出。檜笠をかたふけ。旅の日數の今は。後鬼前鬼の。峯おそろしく。今までの。懺悔物語。ころと。心はつかしく。後世こそまことなれ。菩提の道。岩のあらけなく。踏分て。下向に爰。煙が茶屋とかや。又もとの水にかへりて。迎も泥川。すむべき心にあらねば。道かえし。難波の東南。藤の棚かりて。鯨細工。耳搔などして。一日暮しもはかなし。それとても。色にはこりず。小谷。札の辻のくら者。月懸りの。手かけ者。出合女。のこらすさがして。しらぬといふ事もなく。是に身をそめて。名の立は合点。名代男になりぬと申は。いか成事ぞ。小家ぎんみをおそれ。ひとりとは男分に。世間をたて。其身はいたづらを立。中寺町。小橋の坊主ころし。色町を。睨き兼つる。隠居の親仁の。とつて置銀を。みなになす事はぞかし。煩惱の垢。落し難し。簾ほのかに。洗濯屋と。書

(二〇) かかる人間のことだ。  
(二一) 色慾忘れ難い。

(二二) 北濱は問屋の多いところだから、問屋の若い者と察せられる。

(二三) かせ糸を買ひ集めるもの。  
(二四) 對手を取り替へること。

(二五) 杉の葉を束ねて軒に吊すのは酒屋の目じるし。請賣りする酒屋。

(二六) 壁を切り開いたやうに造つた窓。

(二七) 節の底を取りつける職業者。

(二八) 手品師。

(二九) 飛紗綾。さやに飛び飛びに模様のあるもの。

(三〇) 米糠を入れる小さい袋。昔石鹼代りに用ひた。

(三一) 徒然草に「命長ければ恥多し、長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ」とある。

(三二) 大組板の小口の金物の光。

(三三) 以前は相當の身分。

(三四) 小栗判官。常陸小栗城主小栗満重。彼は相模横山の郡司照手姫の聲となり、倭横山に毒殺された。

しるして。あかり障子たてこめ。あたらしき。疊しくこそ。様子ありぬべし。手懸るといふも。うへつかたの。世つきのなきを。なげき。あるいは。内義長煩ひのうち。なくさむ業にはあらず。其さもしさ。このわけしる程。うるさし。女一人して。けふは北濱のわかき人。あすはかせ買の誰。夜るは。去る侍方と。様替男。しらぬが。こゝろにくし。此道にも。たづさはりて。尋行に。相立て。請酒屋あつて。細路次。長屋作りの。入口をならべ。何れも北あかりの。きり窓よりのぞけば。とをしの底入。引白の。目きり。其隣は。はちひらき。其次は。放下師。世わたる品と。煙たえかちなる。風情おもしろさも。すこしはやみぬべし。大溝あつて。日影うつろうに。棹竹のわたし。とびざやの。胸布。糠ぶくろ懸て有しは。くせものなり兼好か見たらば。命盜人と申へき婆とあり。それが娘には。おとなしく。物もかくとみえて硯箱釣おまへの下に。くもり枕。第一目にかゝる物ぞかし。宿に似合ぬ。大組板。つぶれ懸りても。かな色あり。昔しは。かくは。あらさらぬ者のはて成べしと。いな所に。氣を付て。世之介是非に入聲。小栗もいにしへにあらず

# 好色一代男 卷三目錄

二十一歲

二十二歲

二十三歲

二十四歲

二十五歲

二十六歲

二十七歲

戀のすてがわ  
京手かけ者の事

袖の海の肴賣  
下のせき遊女の事

是非もあらざる物  
是き世小路はすは女  
事

一夜の枕物ぐるひ  
大はらざと寐の事

集礼は五匁の外  
越後寺泊り遊女の事

木綿布子もかりの世  
坂田の濱女惣家の身ぶりの事

口舌の事ふれ  
縣神子かまばらひの事

(一)世の人に交れば。  
 (二)禮服を著用して世間の義理をなすも面倒だ。

(三)世間の風俗として身の嗜みをする。

(四)法服の一種。

(五)古今集雜「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを」

(六)氣樂な出家の意。

(七)八幡山の南に當る。

(八)諸曲郡の一東に三十餘丈にしろがねの山を築かせては、云々の句を匂はせてある。

(九)薄い絹布。

(一〇)若狭遠敷郡。

(一一)勘當の身を、よるべなき浪に懸け、更に聲の縁で謡うたひに續けてある。

(一二)いづれも河内北河内郡に在る。

(一三)山城緩喜郡。

(一四)猿廻し。

(一五)攝津西の宮から出る人形遣ひ。

(一六)佛教の念佛踊から起つて、その曲に歌を合はせて謡つた乞食藝人の一種。この藝人の名に多く日暮らしと冠した。

(一七)諺を地名に呼び懸けてある。狐川は山城山崎附近を流れてゐる。

(一八)男色を賣る若衆。

(一九)尼姿の賣色婦。

(二〇)世之上をいふ。

## 戀のすて銀

世にすめば。袴肩衣も。むつかし。人の風情とて。朝毎に髪ゆはするも。こゝろに懸れば。十徳にさま替て。昔しは男山。今こそ。樂阿弥と。八幡の。柴の座といふ所に。たのしみを極め。東に三十万兩の。小判の内蔵を造らせ。西に銀の間。枕繪の。襖障子都よりうつくしきを。あまた取よせ。誰おそるゝもなく。或時は。はだか相撲。すゝしの腰絹をさせて。しろきはだへ。黒き所までも。見すかして。不禮講の。ありさま。是成へし。此人もとは。若狭の小濱の人也。北國すちの。舟つきのたはれ女。敦賀の遊女。のこらず見捨て。今上がたにすみぬ。世之介勘當の身と成て。よるべもなき浪の聲。飄うたひと成て。交野牧方。葛葉にさし懸り。橋本に。泊れば。大和の猿引。西のみやの。我まはし。日ぐらしの。歌念佛。かやうの類の宿とて。同じ穴の狐川。身は様々に。化るぞかし此所も。賣子。浮世比丘尼の。あつまり。朝にもらひためて。夕に。みなになし。のこる物とて。古扇あみ笠引かぶり。放生川をわたりて。常盤といふ町に



- (二) 謡うたひの必要品。  
 (三) 八幡山附近を流れてゐる川。  
 (四) 八幡山附近の地名。  
 (五) 寺院に使はれた小姓。僧侶が男色の弊ひとなつてゐた。  
 (六) 松の葉巻。くもゐらうさい「やまのは、いかな夜も、よも人こそしらね……我ふり捨てて、一聲ばかり、いづくへ行くぞ山ほととぎす」とある。弄齋節は當時遊里流行の歌曲の一。  
 (七) 忠兵衛風。忠兵衛不詳。  
 (八) 素人の平凡なものでない。  
 (九) 成り果てたさま。  
 (十) 都會人は批判の目が高いこと。  
 (十一) 室内遊戲の一。小さい弓矢で的を射るもの。  
 (十二) 楊弓は矢の當る數で位を立て、二百本の矢の中り矢五十乃至百本を朱書（しゆがい）といつた。  
 (十三) 弓と四本の矢を手にして射ること。  
 (十四) 的の眞中に設けた孔。  
 (十五) 琴を弾く態勢。  
 (十六) 琴爪。  
 (十七) 見すばらしい懷中。  
 (十八) 世之介の紋。  
 (十九) 世之介の素性を察して言葉つきを丁寧に改めた。

入て。竹一村の奥に。ちらりと。お寺屬從の。みえける。爰はと里人に、たづねければ。歴々のあそひ所と。かたるさては。うたひはかたし。我ふり捨てと。らうさい。一拍子あげて。忠兵衛かゝりに。しおり戸より。声もおしまずうたへば。耳かしこき人。たゞならぬうたなり。それをと。やうすを見るに。公家の。おとし子かと。おもはれて。賤しきかたちにあらず。つかひ崩して。親にうとまれ。こらしめのために。かゝるなりさまでと。京近くに。すめる。人の目もはつかし。おりふし。楊弓はしまりて。おのく。やうく。朱書くらいに。あらそはれしに。或御かたの。道具を偲て。取弓取矢にして。四本はつれず。一筋は。切穴に。通れば。座中目を覺して。なを所望するに。數あり。去御方は。琴をなをして。爪のなきを。ほいなく。おほしめしけるに。かすかなる。ふところより。うすむらさきの。服紗物より。瞿麥の。紋所ありし。爪出して。若御指に。あひ申べきやと。たてまつりける。是ぞ泥中より。玉の光かと。おもはれて。其後言葉も替て。しばらく。此里にとどめ。明日京都へ。女をかゝえにのぼり侍る。いざ同じ道にと。誘へば。有増やうすも。覺侍る。そも

(三) 水質が清く、随つて生まれつき美人が多い上に、幼少から磨く。

(四) 指環。指を小さくするのに用ゐた。

(五) 革足袋。足を小さくするに用ゐた。

(六) 毛髪のくせ直し。

(七) 一日二食にする。

(八) 美しくして、人の妾に育てる。

(九) 氣に入つた女を選ぶこと。

(一〇) 桂庵であらう。

(一一) 西國大名の抱へる妾だと披露して。

(一二) 美人繪の雛形。

(一三) 桂庵の老婆。

(一四) 女駕籠。

(一五) 思ひ思ひの衣裳つき。

(一六) 唐玄宗皇帝が楊貴妃と共に宮中の美女を集めて風流陣を催したといふ故事。

(一七) 京都の町名。

(一八) 支度金の類。前渡しのお金。

(一九) 同様に妾を蓄へさせて。

(二〇) 當時雇人の周旋料は一季即ち一年間の給銀の十分の一であつた。

(二一) これは京より歸ること。

(二二) 不明。豊前小倉の面する灣か、筑前宗像郡袖の湊のある海か、若しくは博多灣か。

(二三) 日の當が正しい。石清水四月三日の神事を見に。

く。京はきよく。少女の時より。うるはしきを。良はゆげに。むしたて。手に指かねを。さゝせ。足には。革踏はかせながら。寝させて。髪はさねかづらの雪に。すきなし。身はあらひ粉絶さす。二度の喰物。女のしつけ方を教え。はたに木綿物を着せず是に。したつる事ぞかし。おのつからの。女にはあらず。これに。そなはりし女は希也。當世女は。丸顔櫻色。万事目ずきにと。御幸町の。甚七かかたに行で。西國の御用と申なし。年の比は。はたちより。二十四五まで。勝れて妾繪に。あはすと。申わたせば。此ば、觸なして。其日七十三人。或は乗物にて。はした。腰もと召連。おもひく。の。着ながし。もろこしの花いくさも。是成へし。中にも柳の場との。縫箔屋の。おさつといへるを。拾金百五十兩。世之介にも。七条の笠屋のお吉。おとらず拘させて。宿にも十分の一の外。満足させて。けふ吉日の。都がへり。万の自由みやこなれや都

### 袖の海の肴賣

火の當見に。小倉の人。のぼられしに。此里の花も。おもしろからず。

(三)古今集雜「わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ」に採る。

(四)淀川沿岸の地名。この声は昔鑑纂を作るに用ゐた。

(五)淀川に注ぐ流れの一。

(六)攝津北河内郡。淀川沿岸の地名。

(七)江口の君の舊跡。西行者と傳へる撰集抄に西行が村時雨の日、ここを通つて隣が家に雨宿りを請うたが、主の遊女これを許す氣色がなかつたので、「世の中を厭ふまでこそかたからめかりの宿りを惜しむ君かな」と詠み、遊女がこれに返歌したことが載つてゐる。江口の君の跡といふのは今西成郡普賢院に在る。

(八)攝津三島郡。淀川沿岸。

(九)攝津河邊郡。淀川沿岸。

(一〇)白目は江口の遊女、大江玉淵の女として古今集に歌が出てゐる。しるど不詳。

(一一)潮水との境界點。

(一二)足の疾い小形の舟。

(一三)遊女の名。

(一四)女のこと。

(一五)天氣を見て出帆を決める役。

(一六)船から陸へ架けた橋の用をなす板。

(一七)船の方向をかへる。

(一八)指の血を取る。

(一九)血判する。

誘ふ水にまかせて。鵜殿野の芦も。まだ筆に見なして。旅のこゝろを。書つゞけて行に。左に天野川。磯嶋と。いへるにも。舟子の瀬枕。しのび女有所ぞかし右の方は。西行假の舍りと讀れし。君の跡とて。榎の木。柳かくれに。わびしき。一つ庵のこせり。同じ汀つゝきに。三嶋江といふ里も。昔しはうかれ女の。すみしとなり。なを行末に。神崎中町に。しろど。白目などいへる遊女の出し所也と。みぬ昔日も。なつかしく。浪は次第にあらく。しほさかいより小早に乗りつりて。風うれしく。備後の國。靱といふ所にあがり。名にきゝし。花鳥八嶋花川といへる。髪長を。定もあへず。そこへ寝て。何かたるべき。戀のもと末もなく。夢もむすばすありしに。日和見に。起され。帆をまく音。酒うる声。さも聞かはしき。ちきり。其夜あふて。其曉の名残。しかと。顔さへ見しらず。御ゑんがあらばと。あゆみの。板をあけて。取かぢになをして。はや二三里も出て。世之介鼻紙入。取のこして。ふかく惜しむをきけば。花川といへる女に。起請を書せ。指しぼらせて。名書の下を染させけるに。と申せば。油斷もなき所に。めいよの女郎たらしと。舟ばりたゝきて。大笑ひ。行に程

(三) 遊女の客ずれして狡いこと。

(三) 不思議な。

(三) 船端。

(三) 豊前小倉市。

(三) 散らし模様。

(三) 下げ髪。

(三) 櫻色した小貝。

(三) 貝の一種。あげまきに似て長い。

(三) 豊前大里。

(三) 魚賣女。方言。

(三) 棚板を取り付けてない舟。

(三) 下の關の遊里。

(三) 綱縋。

(三) 流行妓。

(三) きけは聞けばの意。さんば (三八) は太夫と天神との間の妓。

(三) 然るべく風習をつけておいた。

(三) 追従。お世辭。

なく小倉に着て。朝げしきをみるに。木綿かのこのちらしがたに。茜裏を。ふきかへさせ。どしの帶前結ひに。平髻ふとく。すべらかしに。結びさげ。盤切の。あさをいたゝきつれて。我からぬらす袂。まくり手にして。浮藻まじりの。櫻貝。鱒いとより。馬刀石王餘魚。取重て。大橋をわたりて。おもひく。道いそくをきけば。是なん。此所の肴實。内裏。小嶋より出る。たゝじやうと申。伊勢こと葉に。やゝといへり。所によりて。替りたる事笑しくて。なを尋ければ。いづれにても。肴をかへば。草履をぬぎて。奥座敷にも。あがるとかや。浦風のかよひて汐ふくみし。肺布も。折節は興あり。或日伴ひし人と棚もなき舟。飛がごとく。磯をさせて。下の關いなり町に行て。詠やるに。女郎は上方の。しなしあつて取龍さす。髪さげながら大形は。うち懸。物いふにすこし。なまる所なをよし。今はやり物長崎屋のにな川。茶屋の越中。たばこ屋の藤浪。かゝらは此三人。太夫の中にも外はなくて。尋常なり。内證きけ三八と申侍る。揚屋町に行ば。日來の大臣。よろしく。さばき置るゝとみえて。大座敷わたり。亭主内義が入替り。けいはく。數を尽し上方のお客さまに。何

(毛) 盃の獻酬の度毎に重ねて飲ませる。

(元) 酒席の幹旋。

(元) 客について尋ねること。

(四〇) 上の問ひに對する辯明。

(四二) 手管。

(四三) 五日間、七日間ここに遊蕩する内。

(四四) 多くの妓を手なづけたこと。

(四四) 輕蔑されたこと。

(一) 旅衣をいふ。

(二) 豊前下毛郡。

(三) 日の吉凶。ここは吉運。

をかひなひたる事をも。咄しの種になど申。とやかくの内に。一所にお  
てき御さつて。銚子もうごき出ける。いまだ古風やめず。一度くにおさ  
えて。酒ぶりがたし。膳をすゆる事。たびくにしてやかまし。是を馳走  
とおもへば也無理まじりに。歌の三味線の。只やかましくなつて。取じめ  
なく。おのづからかうした。座配開し。女郎寝まはせば。男は酔て。前後  
をしらず。何かたるとおもへは。友とちに。あふ事のせんさく。其いひ  
分。仕懸。どの床も。替る事なし。人とは。物をもいはせずせはしく。氣  
のつまる事にぞ。五七日噪ぎの内に。のこらず。密夫となれる。さすがお  
ろか成。やりくりにて。後はあらはれて。むごく見かきられて。爰をも。  
暇乞なしに上りぬ

### 是非もらひ着物

かり衣。しらぬ道すちを尋て。中津といふ所を過て。いかなる方に。舍  
るべきたよりなく。其夜は辻堂にあかして。明日の日並を待しに。遙なる  
里はなれに。矢倉太鞍の聞え侍る。是は藤村一角が。旅芝居と声立てよひ

(四) 晶原にして。

(五) 難方。

(六) 今更。

(七) 唄がうたへるから。

(八) 着古した。

(九) 長袴の歩きにくい意から、舞台馴れない意へ。

(一〇) 舞台へ出る時の唄。

(一一) 専門の藝人並に頭を振りながらうたふ。

(一二) 好色の心深く。

(一三) 不思議に難儀を凌ぎ、日數を重ねて旅行を續けて。

(一四) 大阪高麗橋筋と、今橋筋との間の小路。

(一五) 柿色の暖簾。

(一六) 肌につく着物には。

(一七) 褐染め。濃い紺染め。

(一八) 縞縹子。

(一九) 一幅を二つに割つて作つた帶。

(二〇) 粗末な下駄。木を挽き割つたまま、よく削らないやうな下駄の意。

(二一) 堅縹。

(二二) 唄の字を分けたもの。

ぬ。看板をみわたせば。都にて目を懸て。羽織などくれし。はやしかたの庄七といへる。役者はにたよりて。あらましを語れば。定なき世のならひ。今歎き給ふ事なかれとたのもしく。一ふしあそばしたれば口すぎとおもはれて。舞臺勤たまへと。着おろしの長袴。足もとも定兼。品之丞が出はのうたに。人なみに頭をふつて。間をあはすこそおかし。色ふかくて。身のほどをしらす。若女方をそゝのかし外の勤の。邪魔なして。又そこをも。追出されて。不思議の日數へて。けふ大坂の。うき世少路に。我が事忘れぬ。人ありと尋行に。花屋。たばこきり。駕籠昇の。西隣に。何して世をわたるともなく。柿そめの暖簾かけて。女の一人暮せり。是は乳をのませしうばが妹なり。此乳母も。二三年跡に。はかなくさりぬされども。むかしの御恩とて。あしからず。もてなし奉りける。其暮方に。色つくりたる女。はたには。紅うこんのきぬ物。上にちらん染の布子。嶋縹子の二つわり。左の方に結び。赤前だれして。桐の引下駄をはきて。たばね牛房に。花袖などさげてかの小家に。はしりよりて。日外の。立嶋のきる物の。質の札を。手もとに御さるか。口鼻にさゝやきける。こゝろ

- (三) 臺所近く働く女。下女。  
 (四) 下女にしては立派な身なり。  
 (五) 給金を多く取る機織女でも、取る給金は支拂ひの目途がある。  
 (六) 半季の約束で雇はれる一般家庭の奉公女。西鶴織留巻第五第二話を見よ。  
 (七) 境遇の變化のために世之介が心づかひの變つてゐること。  
 (八) 蓮葉女。問屋の女中で、兼ねて賣色をなしたものだ。  
 (九) 容色の相當なもの。  
 (一〇) 問屋には東國西國諸方の手代が泊つた。  
 (一一) 相手の客に貰ひ。  
 (一二) 有るに任せて費ふこと。  
 (一三) 正月過ぎると間もなく。  
 (一四) 高麗橋を渡つて浮世小路へ歸る、その路を忘れるほど話に夢中になる。  
 (一五) 細い幾筋かの糸のまま、一本の緒に組まない鼻緒。  
 (一六) 小聲話し。  
 (一七) 神佛參詣の歸り路。  
 (一八) 男女奉公人密會の家。  
 (一九) 斷られない程度の額。  
 (二〇) 仲仕。  
 (二一) 船の上荷を運ぶもの。

なから笑しく。あれはいかなる女と尋ねける。人の召つかひ。龜近きものと申。それにはよろしき身のまはり。はた織女さへ給分のつもりあり。爰は半季居のまれなる所かと申せば。昔しと替り。こまか成事まで。御ころのつく事ぞ笑し。あれは。問屋方にはすはと申て。眉目大形なるを。東國西國の。客の寢所さすため拘て。おのがこゝろまかせの。男ぐるひ小宿を替てあふ事。いたづらの。屋夜に。かぎらず。出ありく事も。おや方の手前をはぢず。妊娠ば。苦もなふ。おろす。衣類は人にもらひ。はした銀も。あるにまかせて。手にもたず。正月着物は。夏秋をしらす賣て。蕎麦きり酒に替て。三人よれば。大笑ひして。高麗橋を。わたる事忘れ佛神に詣でけるにも。置綿ばら緒の雪踏。音高く。道すがらの。一口咄しにも。人の耳をこすりて。夕は夜更て。起されたもしらず。狀かきながら寝入た。龜甲のさし櫛が。本蒔繪にて。三匁五分で出来るなど。はしたなく申せしは聞て戀も覺ぬべし。下向もすぐには歸らず。中宿にあかして。物つかふ男をまねき。いやといはぬ程の。御無心を申。世をうかくと暮し。其果は中衆。上荷さしなど。夫婦となりて。貌たちまち賤しく。前に抱。うし

(四)量を一一吟味する。

(四三)その種の女に氣が移つて。  
(四四)全く暮れること。

(一)能の狂言に枕物狂といふのがある。老人が年若い女に戀することゝ綴つてある。この一話中にそれに類する事體があるから、この語を採つて標題にしたのであらう。

(二)甚だしい貧苦に火が降るといふ。大きな火の降る意で大貧苦を表してある。

(三)大晦日の借金取りを恐れること。

(四)一切の懸賣りを記す帳簿を萬懸帳といふ。この家はすべての懸賣りをこの帳に記したまま、支拂ひをしない家の意。

(五)惡口されながら。

(六)正月の縁起物の扇を賣る商人の呼び聲。

(七)これも正月の縁起物である、恵比須の像を賣る呼び聲。

(八)元日。

(九)世間に時めく人。

(一〇)年始客の案内請ふ聲。

(一一)羽子板の繪に夫婦の子を愛するところを書いてあるから、それを羨む。

(一二)正月街頭に懸想文賣りと稱するものが出た。男女良縁を得る縁起物として、艶書に擬したものを懸想文と稱した。

(一三)その年の男女交會のはじめ。

ろにおひ。惣領の手を引。小米屋にゆきて計吟味するも。あさまし。自も其女の。出合宿。隠してもしるゝ事ぞと。のこらすはなせば。又それに。うつりて。たはけを尽し侍る。此行末何にか。なるべし。廿三年の。かい暮になりぬ。

### 一夜の枕物ぐるひ

内證は。挑灯程な火がふつて。大晦日の。空おそろしく。万懸帳埒明す屋の。世之介と。しかられながら。留守つかはせて。二階にしるび。くゝり戸のなるたび。胸をおさえ。耳をふさき。今の悲しさ。命ながらへたらば。末の世かたりにもなりなん。扇は。おゑびす。若ゑひすくと。賣声に。すこし春のこゝちして。日のはしめ。靜に。ゆたかに。世に有人の門は。松みどりなして。物もふく。手鞠つけば。羽子板の繪も。夫婦子あるを。うらやみ。化想文よむ女。男めづらかに思はるゝ。唇のよみ初。姫はじめおかし。人のこゝろも。うき立きのふの事を忘れ。けふも暮ぬ。二日は越年にて。或人鞍馬山に誘はれて。一はらといふ。野を行は。



(四)大晦日の苦勞。

(五)年越。

(六)市原野。山城愛宕郡の地名。

(七)翌年厄年に當るものの厄を豫め拂ふと稱して、年の暮街頭に出て錢や米を貰つた乞食。

(八)惡夢を吉夢とする符。猿は夢を食ふといふ獸。それを印刷した紙片。

(九)吉夢を見るための符。寶舟の繪。

(一〇)節分に軒端に挿んで、惡鬼を拂つたもの。

(一一)不詳。

(一二)寺社の拜殿階の上に吊した鉦の形したもの。それに附けた緒を引き、これを鳴らして拜する。

(一三)女の手。

(一四)後拾遺集、和泉式部が貴船に詣でた時の歌に、「物思へばさはの螢もわが身よりあくがれ出づる玉かとぞ見る」とある。詞にも扇のことはないが、この歌を指してゐるらしい。

(一五)節分の夜鶏の鳴き聲を眞似るのは、社寺に參詣する人達の默禱の後したことである。また厄拂ひもこれをなした。

(一六)山城愛宕郡大原に近く江文大明神といふ社がある。節分の夜、また正月十四日の夜、所の老若男女集まつて、茶や酒を飲んで楽しんだ後、燈火を滅して一夜

厄はらひの聲。夢違ひの猿の杓。寶舟賣など。鰯松をさして。鬼打豆。宵より扉をしめて。懸がねといへる。坂をすぎて。鰯口の緒にすがれば物やはらか成手のさはりけるも。はや。戀てふ種と成て。昔し扇見て。爰に籠り。おもひあればわが身よりと。讀し女の事迄も。おもひ出されて。心も空に成しに。庭鳥の眞似さす事有。是に目覺。おの／＼かへる折ふし。友とする人にさゝやきてまことに今宵は。大原の里のざこ寝とて。庄屋の内義娘。又下女下人にかぎらず。老若のわかちもなく。神前の拜殿に。所ならひとて。みだりがはしく。うちふして一夜は。何事をもゆるすとかや。いざ是よりと。臆なる清水。岩の陰道。小松をわけて。其里に行て。牛つかむ計の。闇がりまぎれにきけば。まだいはけなき姿にて。逃まはるもあり。手を捕えられて斷をいふ女もあり。わさとたはれ懸るもあり。しみ／＼と語る風情。ひとりを二人して。論ずる有様もなを笑し。七十におよぶ。婆とおどろかせ。或は嫉を。のりこえ。主の女房をいやがらせ。後にはわけもなく。入組。なくやら。笑ふやら。よろこぶやら。きゝ傳えしより。おもしろき事にぞ。曉近く一度に。歸るけしきさま／＼

を明かした。吾らなこともこの夜は人こ  
れを見逃がす習慣であつた。  
(二七)大原の名水、瓢の清水。  
(二八)甚だ暗いことをいふ。

(二九)一生涯連れ添ふ意か、または一世は  
二世の誤りで、夫婦の約束しての意か。  
(三〇)木隠れして契るの意。

(三一)伊勢物語に、昔男が或女を盗み出し  
て、武藏野に隠した時、野を焼き拂はう  
としたものがあつたのを、女が歌を詠ん  
で難を逃れた話が出てゐる。  
(三二)人目忍ぶ戀。

也竹杖をつきて。腰をかゞめ。かしら。わたぼうしにつゝみまはし。人の  
中をよけて。わき道をゆく。老女ありけり。すこし隔たりてから。足ばや  
になり。腰のかゝみも。おのつからのひて。跡見かへる面影。石灯籠の光  
にうつりぬ。世之介不思議におもひつけ。みるに案のことく。廿一二の  
女。色しろく。髪うるはしく。ものごしやさしく。京にもはつかしから  
ず。これはと。くどき様子をきけば。都の人ならば。なをゆるし給へ。我  
にこゝろを懸し人かぎりなきをうるさく。姿を替て。やう／＼のがれ侍る  
にと。かたるに。なをやめがたく。一世の約束して。見すてな。捨まい。  
末は千とせの。松陰に木隠れ。かゝる所へ。たくまじき。若きものゝ。五  
人七人。又は。三四人爰のかしこの。せんさく。此里の美人がみえぬと。  
声／＼にのゝしるは。此女の事にぞありける。身ちゝめてなをだまりぬ。  
此時のこゝろは。むさし野に。かくれし人もやと。事しつまりて。かの女  
つれて。下賀茂邊にゆきて。或人を頼みてすみぬ。朝の煙かすかに。いた  
ゝきつれたる黒木賣に。見付られてはと。しのぶ内こそ。おもしろの花の  
都近くや

(一) 諸入費。

(二) 年末から年頭にかけて社寺に参詣すること。

(三) 紙帳の破れを、身代の破滅にかけてある。

(四) 相川の金山。

(五) 越後三島郡。

(六) 新潟と出雲崎との中間に在る。

(七) 格子。上方などの遊里では、上等の太夫、天神などは格子の内にゐて店を張り、次位の團女郎は局といふにゐて客を招いた。この區別はここにはない。

(八) 竊物を。

(九) 金糸を交へ織つたものを襟にする。

(一〇) 錦欄の當時日本で織つたもの。

(一一) 毛髪が生え際に墨を塗ること。

(一二) ぐるぐるに巻いた簪。

集礼は五夕の外

年籠の夜。大原の里にて。盗し女に馴染。二十五の六月晦日切に。米櫃は物淋しく。紙帳もやぶれに近き進退。是も置ざりにして。佐渡の國。かな山に望を懸行に。十八里こなた。出雲崎といふ所に。渡り日和を待て。明暮只も居られず。舟宿のあるじを招き。此所のなくさみ女はと。尋ければいかに北國のはてなればとて。あなどりたまふな。寺泊といふ所に。傾城町あり。いざ見せ申さばやと。暮方よりそこに行て見るに。隔子局といふ事もなく。軒まばらなる。板屋に。或は五人三人居なかれて。其さま笑し。おりふし八月十一日の。夕風。はや此所は袷をきるぞかし鳴をよきとおもへばこそいつれも。紬の品をかへ。金入の襟をかけぬといふ事なし。帯は今織の短きを。無理にうしろにむすび。二布は越後晒赤染にして。其まゝ美しき貞にも。是非おしろひを。塗くり。額は。只丸く。きは墨こく。髪はぐるまけに高く。前髪すくなくわけて。水引にて結添。赤ひはな緒の雪踏をはき。懐のうちより。手をさし入裾を引あげ。ちよこゝと

(一)遊女に上下の區別なく、揚代五匁の規定。

(二)極上の美人。

(三)莫莖の縁を布で包んだもの。

(四)童話の一。

(五)俳優。當時の立役者。

(六)大津繪と稱した泥繪の戯書。

(一)上方遊女は客の前で物を食はぬを上品とした風の傳はつてゐること。  
(二)行燈などの燈心をかき立てるのに、その道具を用ひず、指でする粗野なわざをいふ。

(三)笑ひをこらへる。

(四)同行の人。

(五)合唱の拍子が合ふ合はぬ。

ありくなりふり。いやながら外に。何もなければ。其中でも見よきがとく也。よしあしのへだてもなく。五匁宛に定め置こそ。正直なれ。爰での人ころし。小金といふ約束して揚屋といふ事もなく。親方七良太夫が内に。新しき薄縁敷し。奥の間にやさしくも。屏風引廻して有ける押繪を見れば。花かたげて。吉野参の人形。板木押の弘法大師。鼠の煙入。鎌倉團右衛門。多門庄左衛門が。連奴。これみな。大津の追分にて。書し物ぞかし。見るに都なつかしく。おもふうちに。亭主膳をすえける。いま日が暮て。間もなき夜食。先蓋をあげぬれば。小豆食はおもしろひ。鯖きさみて。穂蓼置合こそ。心にくしと思へば。湯を吞まで。終に香物を出さすます。女郎は箸をもとらず。上方の事。誰がいふて聞しけるぞ。しほらしきと思へば。油火指にてかゝげ。それをすぐに。小鬢につけしは。笑はれもせず。腹おしなで居るに。又あるじの出で。後にひもじにならぬ程。まいれといふ。返事もせず。友とせし人。假寝を引起し。酒事にして。此おかしさを忘るゝ。壁一重あちらにも。酒のみ懸。六七人声して。三國一しや。拍子が。あうの。あはぬのと。同じ事のみ。うたひける程に。亭主

(二四)明暦年中に盛んに行はれ、天和頃衰へた踊。

(二五)莫産の縁の闇を組んで、その解けないやうにしたもの。

(二六)遊女を指す。

(二七)ひたすら。

(二八)はじめて會つた高雄太夫。

(二九)おもしろからましの意と察せられる。誤用か。

(三〇)諸拂ひ、心附けなど。

に様子きけば。此比上方より。さゝんざと申。小歌が時花きたり。爰元の若ひ衆。いろ／＼稽古致せども。声がそろはぬと申侍る。さても世は廣ひ事を。今おもひ合。柴垣踊は。しつてかと尋けるに。夢にもしらずと申。何をいふても。是じやもの。只寝ませうと申。耳組の御座一枚。松竹鶴龜を。そめこみの。もめん夜着。されども枕は二つ出して。さあ。お寐やれと申。こゝろえたと。南かしらに。ひつかふり。今や／＼と待ほとに。君様のあし音して。床近く立ながら。帶とき捨。きる物もかしこへうち捨。はだかです／＼とはいりさまに。是もいらぬ物と。臍布ときて。其まゝし。かみつきて。いな所を搜て。ひた物身もだへするこそ。まだ宵なから笑し。我江戸にてははじめの高雄に。三十五までふられ。其後も首尾せず。今おもへば惜ひ事哉。この女か。其太夫にて。是程自由にならば。尤おもしろかるまし。昔をおもひ出し。うそ腹たつて。むく起にして。罷歸と同道の人に。付とゞけ能やうにと頼めば。心得て。あるじに三百口鼻に百。はたらく女共に。貳百。合六百文蒔ちらせば。いづれもおどろき。さても大氣な大じんと。近付に成し女良。袖をかざし。舟ばたまておくり

(三)遊里の出口。大門口。

(一)人生の假りの世と、木綿布子の借り着とを、かりの同音に依り懸けてある。  
(二)鮭を開いて鹽して乾燥したものの。  
(三)霜のおりる前に、その年の寒期の健康のために薬用として肉食すること。  
(四)渡船のないのと、渡世の業のないのを懸けてある。

(五)遠く所々を行商すること。

(六)羽後の酒田。

(七)西行の象潟の詠「象潟の櫻は波にうづもれて花の上漕ぐ蟹の釣舟」

(八)象潟の干満寺。

(九)唄などうたつて米錢を乞ひ、かたがた賣淫を業とした尼妾の女。もと牛王賣りの熊野比丘尼から出たもの。

(二〇)黒頭巾かぶつた風俗をいふ。

(二一)かやう。斯様。

(二二)御寮。比丘尼の上に立つ老尼。

(二三)百文で二人の客を取る意か。

(二四)千代田區、舊神田區。

(二五)比丘尼の名。

(二六)比丘尼の弟子。

(二七)大きな菅笠被つた年少の尼のさまをいふ。

て。互にみゆる内は。小手招ぎ。京にて出口まで。送らるゝ心知ぞかし。彼女郎舟にのりさまに。私語しは。こなたは日本の地に。居ぬ人じやと申ける。心にかゝれど。今に合点ゆかす

### 木綿布子もかりの世

干鮭は霜先の薬喰ぞかし。其冬は佐渡が鳴にも。世を渡る舟なく。出雲崎のあるじをたのみ。魚賣となつて。北國の山／＼を過こし。今男盛二十六の春。坂田といふ所にはじめてつきぬ。此浦のけしき。櫻は浪にうつり。誠に花の上漕ぐ。蟹の釣舟と讀しは。此所ぞと。御寺の門前より詠れば。勸進比丘尼声を揃て。うたひ來れり。是はと立よれば。かちん染の布子に。黒輪子の二つわり。前結びにして。あたまは。何國にても同じ風俗也。元是は。嘉様の事をする身に。あらねど。いつ比よりおりやう。猥になして。遊女同前に。相手も定ず。百に二人といふこそ笑し。あれは正しく江戸減多町にてしのびちぎりをこめし。清林がつれし。米かみ。其時は菅笠がありくやうに見しが。はやくも。其身にはなりぬと。むかしを語

(一) 世之介の零落姿。

(二) 遊蕩に飽満した意。

(三) 腹ごなし。

(三) 商賈人。

(三) 妻、主婦の追従。

(三) 誰ぞ氣に入つたら。

(二四) 一步の金貨。

(二五) 金貨の珍しさに。

(三) 賣色のこと。

る。さて此お姿はと尋けるに。世之介申せしは。遊あそひ尽つくして胸むねつかえて。虫むしこなしに。すこしの商あきなひすると語り捨て。それより去い問屋に。知しべありてつけば。此津のはんにやう。諸國しよこくのつき合。皆みな十露盤じゆらんにて。年としおくる人也。亭主ていしゆのもてなし。おかたのけいはく。とかく金銀ひんぎんの光ひかりぞ有難ありがたし。上方かたのはすは女と。おぼしき者もの十四五人も。居間ゐまに見えわたりて。其有様笑あやしなげに。髪かみぐるく巻まて。口紅くちべに粉こなむさきほと塗ぬて。鹿子紋かこもんの。袖そでちいさき着物きものに。しゆちんの帶おびして。いづれなりとも。お目に入いばと。思おもはれ姿すがたして。客きやく一人に。獨ひとりつゝ。或あるは十日。廿日。三十日も。逗留とうりうのうちは寢道ねどう具ぐの。あけおろし。朝夕あさゆふの給仕きよひ。其外腰そとこしをうたせ。或時あるときは髭ひげをぬかせ。自由じゆにつかひて。立たさまに。壹歩いちぶとらせば。金かねめづらしくよろこぶ事也。是皆これみな問屋とんやの。召仕めしつかひの女にはあらず。銘めいくくに宿やどを持もて有ありながら。旅人たびを見懸みかけてあつまるよし。是をおもふに。此徒津このたつの國有馬くこありまの湯女ゆなに。替かる所なし。異名いめいを。所言葉ところことばにて。しやくといへり。人の心をくむといふ事かと。その人に問へ共。子細しさいはしらず。世之介はそこくくに。應答おうたはれて。是非ぜひもなく。やうく下男しもだこをかたらひ。暮方くれかたより濱邊はまべに出て。兼而かねて聞及きこおよし様子やうすみる

△(七)そのままにして。

△(八)事情あつて獨り暮らししてゐる一度嫁した女。

△(九)客を得る。

△(一〇)住宅から四五町の間は。

△(一一)全歌詞は不明。惣嫁などのうたつた唄。

△(一二)職人などの代表的な名。

△(一三)肥料舟や野菜を市に運ぶ舟。

△(一四)早朝になつて店や門口の戸の開かれる。

に。人の娼らしき者。わざと舟子に捕えられて。浪の枕をならべ。只しどけなく打とけて後。物をとらせば。とる。やらねば。其通にして歸る。是此所にて。干瓢と申侍る。夕貝を作りて。ひらしやら。磨くといふ事ぞかし。京大坂にありし。惣嫁といふ者に違はじ。其所作はと。尋ける。或は。縁遠き女。又は四十におよび。独過の口鼻。屋はふせりて。暮より身こしらえて。古着をぬき捨。脇あけの鼠色。黒き帯にさまをかゆると。はや。暗がりにて。つかむ事をかし。住家四五丁は。帷子の上張。置手拭して。跡つけの男を待合。あそこの辻爰の演なみに立つくし。夜更ては君か寐巻と。うたひ連て。三藏仁介が夢を覺させ。夜番に戯れ。明方近く馬子に取つき。在郷舟に声を懸。つとめ數かさなりて。髪も笑しくなり。腰其ぶらつきて。間なく大あくびして。跡より竹杖を引するは。とがめる犬の爲ぞかし。見世門も明はなれそれより。足はやに成て。露次に走入ば。人の目をしのふころもやさし。小娘は親のため。又は我男を引連。我子を母親にだかせ。姉は妹を先に立。伯父姪嬢の。わかちもなく。死なれぬ命の。難面くて。さりととは悲しく。あさましき事共。聞になを不便なる世



(一) 尋涙の雨と降ると、雨の降る夜とを懸けてある。

(二) 月末の諸拂ひの心當てのない。

(三) 借家をかへて轉居する。

(四) 小半酒は小半合即ち二合半の酒で、兩隣を買収する。

(五) 束ねた薪。

(六) 現金買ひ。

(七) 諸曲江口に「月雪のふることもあらよしなや、思へば借りの宿」

(八) 常陸の鹿島神宮から毎年出て全國を巡り、次年の豊凶の豫言を觸れ回つたもの、後はそれに擬した物貰ひ。

(九) 縣巫子の詞。靈神はもと奥津日子、奥津日女命。後三寶荒神といつた。

(一〇) 鳴らして神の御心を清めしめる鈴。

(一一) 神託を受ける巫女。

(一二) 巫女の著る袖無しの上着。

(一三) 立派な。肩にかける帶。

(一四) お初穂だけではこの身粧は出来まい。

(一五) 神に奉仕するものの清潔な、神々しい姿。

(一六) 普通の女の姿に變ること。

(一七) 御神酒。

(一八) 身を許す承諾の意を巫女の縁で洒落てある。

や。泪は雨のふる夜は。下駄からかさまでも。損料出して。思へばかりの

うら店。三十日も。定なくあそこに隠れ。爰に替へて。家請の機嫌を取。

小半酒に兩隣をかたふけ。たばね木の當座買。頓而立きゆる煙なるへ

し。夜發の輩。一日くらし。月雪のふる事も。盆も正月もしらず

## 口舌の事ふれ

あらおもしろの靈神や。おかまの前に松うえてと。すゝしめの鈴をなら

して。縣御子來たれり下にはひはた色の襟をかさね。薄衣に。月日の影を

うつし。千早や懸帶むすひさげ。うす化粧して。黛こく。髪はおのづか

らなでさけて。其有様尋常なるは。中くお初尾のぶんにて成まじ。不思議

と人に尋ければ。よき所へころのかよふ事ぞ。あれも。品こそ替れ。

のそめば遊女のごとくなれるもの也。それ呼返して。男住居の宿に入て。

其神姿。取おかして。あらたに。女躰あらはれたり。勝手より。御三寸出せ

ば。次第に醉心。かたじけなき御詫宣。ありつる告をまたんとて。其まゝ

抱て寝て。覺るや名残の神樂錢。袖の下よりかよはせて。みる程うつくし

(二)十月は神無月。

(三)事ふれの唱へた詞に擬してある。

(四)天神の縁目。

(五)神と遊女とを同じ天神の語に懸けてある。

(六)遊女。

(七)禁制の嚴なる意。

(八)表面廻挽く勞働女で、陰で賣淫する女。

(九)奉公の下女。

(一〇)出してやる。

(一一)家中。武家屋敷の町。

(一二)相談に應じる女は、こちらでいやと思ふ女。

(一三)馴染の男。

く。あは嶋殿しまの。若も妹かと思はれてお年はと問へば。うそなしに。今年ことし二十一社と。茂りたる森は。おもひ葉となり。世之介よしかい二十七の十月じゅうがつ。神のお留守くしゅきく人もなきぞと。さま／＼くどきてそれより。常陸ひたちの國鹿嶋かしまに伴ひともな行て。其身そのみも神職しんしやくとなつて。國／＼所／＼に廻る。水戸みづうの本町ほんまちに入て。是こゝやこなたへ御免ごめんなりましよ。過つる二十五日の口舌くつご。天神てんしんに。まけさせられ。大じん御腹立ごはらだちあつて。則すなはち戀風こひかぜをふかせ十七より二十までの。情しらすの嬢ぢやう。りんきつよき。女房にようばうを。取ころさんとの御事也。こはひ事哉。是こゝおそろしおもはゞ。文の返事へんじもしたり。こゝろを懸る男おとこによるこばせたがよいとわけもきこえぬ事ともを。ふれて。さて此所のなくさみ物ものはと尋たづねければ。御仕置ごしちかたく。定ての遊女ゆうじやといふ事もなくて。物の淋さびしきあしたは。御藏ごくらうの廻挽もみとて。やとはるゝ女の有ぞかし。是は人のつかひ下主かみ。隙ひまの時はつかはしける。數百人つれたふて屋敷町やしきまちを行。其中そのうちによきもの見立みだてて。袖をひけども合点かてんせず。なるはいやかたぎ也。しほらしき女は。大形おほがた知音ちおんありて。そこにたよりぬ。所／＼にそれ／＼の戀は有て。夕暮ゆふぐの歸姿かへりすがたは。前たれ提ひきて。すその摺襦すりじゆをはらひ。身をもみ。骨ほねおりて。かたちのあ

(二五)きまつた金銀を取つて歸れば文句はない。

(二六)世之介がこの種の女にも親しんで。

(二七)妊娠する。

(二八)奥州筋。

(二九)岩代安積郡。

(三〇)本宮の誤りか。本宮は安達郡。

(三一)新後撰集「つれなくもなほあふことを松島や雄島のあまと袖はぬれつ」

(三二)千載集「わが戀は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかはく間もなし」

(三三)陸前宮城郡。

(三四)熱湯を身にかけて、神託を受ける巫女。

(三五)勵ます。

(三六)亭主持ちの巫女の舞姫。

(三七)威せば。脅迫すれば。

(三八)膝を固め。

(三九)巫女の亭主は。

(四〇)妻の巫女には何の罪もない。

(四一)文句はいはず、片髪剃り落されて。

しきをうらむ。しふりかはのむけたる女は。心のまゝ昼寝して。手足もあれず。鼈甲のさし櫛。花の露といふ物もしりて。すこし匂ひをさす事親方も見ゆるすぞかし。一日三十六文の定め。是さへとりてもどれば也。是にも馴染て。腹むつかしくなると申せは聞捨て。なを奥すぢにさし懸り。八町の目。大宮の。うかれ女を。見尽し。仙臺につきてみれば。此所の傾城町はいつの比絶て。其跡なつかしく。松嶋や雄嶋の人にも。ぬれて。見むと。身は沖の石。かはく間もなき。下の帯。末の松山腰のかゝむまで。色の道はやめしと。けふ塩竈の明神に來て。御湯まいらせける人を。みるからこひそめ。社人に近寄我は鹿嶋より。當社に參。七日の祈念して。歸れとの靈夢にまかせ候と申せば。いづれも有難き事かなと。様くいさめけるうちに。かの舞姫。男あるをそゝのかして色くおとせば。女こゝろのはなく。をしこめられて声をも得たてず。此悲しいか計。道ならぬ道ぞと。ひさをかため。泪をなかし。こゝろのまゝにはならしと。かさなればね返して。命かぎりとかみつきし所へ。男は夜の御番勤しが。夢心に胸さはぎ。宿に盗人の入と見て立歸り女は科なき有様。世之介を捕えて。と

かくはかたこ片小鬢ひんせう刺れて。其夜そのよ沙汰さたなしに。行方ゆきかたしらすなりにき

# 好色一代男 卷四目錄

廿八歲

因<sup>よ</sup>果<sup>は</sup>の關<sup>かん</sup>守<sup>し</sup>  
信<sup>しん</sup>追<sup>お</sup>分<sup>ぶん</sup>遊<sup>ゆう</sup>女<sup>にょ</sup>の事

廿九歲

形<sup>かたち</sup>見<sup>み</sup>の水<sup>みづ</sup>くし  
女<sup>にょ</sup>郎<sup>らう</sup>に爪<sup>つめ</sup>商<sup>しやう</sup>の事

卅歲

夢<sup>ゆめ</sup>の太<sup>た</sup>刀<sup>たう</sup>風<sup>ふう</sup>  
女<sup>にょ</sup>の起<sup>き</sup>請<sup>しん</sup>化<sup>くわ</sup>出<sup>で</sup>る事

卅一歲

替<sup>か</sup>つた物<sup>もの</sup>は男<sup>おとこ</sup>傾<sup>かたむ</sup>城<sup>じやう</sup>  
江<sup>え</sup>戸<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>敷<sup>しき</sup>方<sup>は</sup>女<sup>にょ</sup>中<sup>なかつ</sup>の事

卅二歲

昼<sup>ひる</sup>のつりぎつね  
京<sup>きやう</sup>手<sup>て</sup>だて宿<sup>しゆく</sup>おどり子の事

卅三歲

目<sup>め</sup>に三月  
花<sup>はな</sup>見<sup>み</sup>がへり御<sup>ご</sup>所<sup>しよ</sup>女<sup>にょ</sup>の事

卅四歲

火<sup>ひ</sup>神<sup>かみ</sup>鳴<sup>な</sup>の雲<sup>くも</sup>がくれ  
泉<sup>いづみ</sup>左<sup>さ</sup>野<sup>の</sup>加<sup>か</sup>葉<sup>は</sup>寺<sup>てら</sup>の事

## 因果の關守

(一)人々一年中の吉凶の運を、その人々の年齢干支に依つて占ふもの。

(二)平安時代陰陽道の名家安部晴明の姓を取つて、後の卜占業者が自己の姓にしたもの。

(三)天眼通の卜占業者。

(四)鳩の飼ひ奴。欺偽者。もと熊野神社、八幡神社などの鳩の飼料と稱して、米錢を欺偽したもののから出た名。

(五)伊勢物語に「信濃なる淺間の嶽に立つ遠近人の見やは谷めぬ」とあるを信濃の縁で引いてある。

(六)信濃北佐久郡。木曾と善光寺兩海道の分岐點。

(七)信濃の縁で、信濃に關する謠曲木賊を想起してある。

(八)布片を裂いて、それを横糸として織つたもの。

(九)麻衣は木曾の名産。

(一〇)氣の利いた者。

(一一)酒盞を受けて返すこと。

(一二)木強漢。不意氣な男。

年八卦の。あふ事。かならず疑ひたまふな過し極月の末に。安部の外記といへる。世界見通しの。算置が申せしは。二十八の年は。出來心にて。人の女をこひて。一命浮雲く。片輪にも成程の事有ぬべし。兼てつゝしめといへるを何をか申事ぞ。胡散なるはとのかいめと。なんでもなふ聞捨しに少もたがはず。此身に成こそ。不思議なれと。刺落されしあたまを隠し。遠近人に。あふも。愧しく。信濃路に入て。碓井峠を過。追分といふ所に。遊女と名付て。色のあさ黒きをみがき。木賊かる山家者を。胼胝を。なをさせ。さき織の。肌馴しを。木曾の麻衣に。着替させ。女郎に仕立ぬるこそあれ。都忘れて。是も爰にては面白し。折くは。媚たる者の泊り合て。ならはしけるか。盃のまはりも覺あいするといふ事もしるぞ。すこしは愚にもなりて。まんざらの木男よりはまさるべし。旅寝の一夜をあかし。曙はやく道いそくに。宿はづれの山陰に。新關をすえられ。手負を稠く改め。往來の笠はち巻をとらせけるに。世之介ありさまを

(一) 信濃西筑摩郡栢原。

(二) 強盜。

(三) 人を傷つけて。

(四) 小鬘。

(五) 意外なる。

(六) 新來の入獄者。

(七) 胴上げする。

(八) 胴上げする。

(九) 近づきになるための謠ひ舞ひ。

(一〇) いじめる。

(一一) 遊里に流行した歌曲の名。

とがめぬるこそ。物うし。此御ぎんみは。何ゆへぞ。されば。此國の西にあつて。かや原といふ里に。押入有て。物を取のみならず。人をあやめて。逃てゆく。主起合。あまた手を負せぬ。夜の事なれば。おもてを見しらす。所より。つまりく。番をすえ。かゝる。人改なるぞ其方が。片髪鬘。いかにしても合点のゆかぬ事ぞ申わけあらば今也。さもなくば。此僉義の濟までは。爰を通さじと。關守稠しく申渡す。塩竈にての。女ノ首尾残ず。かたれば。なを胡散成者也。重而せんさくすべしと。ひとやに入られ。思日の外なる。難義にあふ事。天罰たちまち。身にあたりぬ。朝夕の暮しも。公儀のめしとは。悲しく。はじめの程は。目もくらみ。涙にしづみ。前後もしらずありしに。奥より。十人計の声して。今入の小男。籠屋の。作法にまかせ。胴をうたすと。立かさなる。貌は。色くろく。髪ながく。兩眼にひかりあつて。そのまゝ。世界の圖に。見し。牛鬼嶋のごとし。左右に。取つき。手玉につきて。あぐる時。息はきれおろさるゝ時。息つき。是でも。死なれぬ命と。起あがるを。又。なれこ舞。何にても。藝をせよと。いじる。是非なく。立て。花の都の。ぬめりぶし。

(四)淋敷座の慰の吉原浮世たたきの文句。「……又ある方を見てあれば、爰に買ひ手のとんてき者、長い刀に長脇指をぼつこんで、日本堤をすんよいいすんずとぬめりあるいて云々」とある。

(五)唄の囃し詞。

(六)權輿もない。思ひがけもない。

(七)歌詞不詳。

(八)信濃伊那郡。

(九)當世の大賊。熊坂長範は義經傳説中の東海道の大盜賊。

(一〇)希望する賽の目。

(一一)對手の邪魔をする手。

(一二)對手を閉ぢ込める手。

(一三)唐の玄宗皇帝の時楊貴妃と虜子君とが双六で位を争つたと傳へる。

(一四)家出事件に罪たるべき惡事があると云ふので。

長<sup>三六</sup>ひ刀に。長脇指<sup>三六</sup>を。ぼつこんで。を<sup>三六</sup>せさ。よいさと。うたへど。權輿<sup>三六</sup>もなひ。顔<sup>三六</sup>して。居<sup>三六</sup>る。これはと。様子替<sup>三六</sup>て。松原越<sup>三六</sup>と踊<sup>三六</sup>れば。一度<sup>三六</sup>に。手をうつてよろこぶ。後は地獄<sup>三六</sup>にも。近付<sup>三六</sup>と。枕<sup>三六</sup>をならべ。薄端<sup>三六</sup>に。肌<sup>三六</sup>なれてかたる。我<sup>三六</sup>は。此度<sup>三六</sup>の盜人<sup>三六</sup>にはあらず。ふせやの森<sup>三六</sup>に居<sup>三六</sup>て。旅人<sup>三六</sup>をころし。渡世<sup>三六</sup>にして。今長範<sup>三六</sup>といはれしが。其科<sup>三六</sup>のがれず。終<sup>三六</sup>には。捕<sup>三六</sup>られて。此仕合<sup>三六</sup>とかたる。暮<sup>三六</sup>ての物うさ。明<sup>三六</sup>ての淋<sup>三六</sup>しさ。塵紙<sup>三六</sup>にて。細<sup>三六</sup>工<sup>三六</sup>に。雙六<sup>三六</sup>の。盤<sup>三六</sup>を。こしらへ。二六。五三と。乞目<sup>三六</sup>を。うつ内<sup>三六</sup>にも。そこを。きれといふ。切<sup>三六</sup>の字<sup>三六</sup>。こゝろに。懸<sup>三六</sup>るも笑<sup>三六</sup>し戸口<sup>三六</sup>を。しめて。出さぬといふは。なを嫌<sup>三六</sup>ふ事也。唐土<sup>三六</sup>にも。此慰<sup>三六</sup>を。楊貴妃<sup>三六</sup>。虜子君<sup>三六</sup>の手<sup>三六</sup>にふれてといひながら。明<sup>三六</sup>り取<sup>三六</sup>の。狹間<sup>三六</sup>より。隣<sup>三六</sup>をみれば。やさしき女有ける。あれはと。尋<sup>三六</sup>ければ。連<sup>三六</sup>そふ。男憎<sup>三六</sup>みして。家出<sup>三六</sup>をせし。其首尾<sup>三六</sup>。あしき事ありとて。有<sup>三六</sup>のまゝを語<sup>三六</sup>る。是<sup>三六</sup>は。おもしろき事かなと。天井<sup>三六</sup>の煤<sup>三六</sup>を。齒<sup>三六</sup>枝<sup>三六</sup>にそめて。返<sup>三六</sup>すくも。書<sup>三六</sup>くどき。命<sup>三六</sup>ながらえたらはと。互<sup>三六</sup>に。文取<sup>三六</sup>かはして。人<sup>三六</sup>の目をしのび。夜更<sup>三六</sup>て。隔<sup>三六</sup>子<sup>三六</sup>に取<sup>三六</sup>つき。蚤<sup>三六</sup>。しらみに。くはれながら。逆<sup>三六</sup>もならぬ事<sup>三六</sup>を。歎<sup>三六</sup>きける。



## 形見の水櫛

(一) 徳川將軍家の法事。そのために行く大赦。

(二) 伊勢物語の昔或男が女を盗んで、雨の降る暗い夜芥川を行く時、あばら家に女を入れ置いて、自身は戸口に番をしてゐたが、夜の明ける前に鬼一口に女を食つた話を利かせて、世之介の女を誘つて筑磨川を渡ることを書いてある。

(三) 粗末な家。

(四) 右の伊勢物語の話に、女が草葉の露を何かときいたことがあつたので、男の女を失つた後、「白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消なましものを」と詠んだことがある。そこをもちつてある。

(五) 萬葉集の「家にあらば筈にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」を利かせてある。

(六) 樵夫の用ひる天秤棒。

(七) 荆棘の叢か。

(八) 極樂の意。

(九) 自然に、自然との意。

(一〇) 正氣づくこと。

御法事に付。諸國の簞ばらひ。有難や。あぶなき。此身を。のがれて。彼女を。負て。筑磨川わたりぬ。其夜は。大電のふりける。くす屋の軒に。つらぬきしは。味噌玉か。何ぞと。人のひもじがる時。麓引捨し。柴積車の。上におろし置て。其里にゆきて。椎の葉に。粟のめしを。手もりに。茄子香の物を。もらひてころの急ぐ。道の程。今二丁ばかりに成て。女の声して。世之介様と。なくにおどろき。近く。走着てみるに。あらけなき男。四五人。竹のとがり鐘。鹿おどしの弓。山桜。ふり上て。だいたんなる女め。命たすかりなば。宿にかへるべきを。親の方への。道を替て。何國へ。いかなるやつが。連ゆくぞ。兄弟にも。かゝる。難義。おもへば憎し。唯うちころせといふ。世之介取付。わびてもきかず。さては。此男めと。立かさなりて。うつほどに。荊。梔の。ぐろのもとに。ふして。びりく。と。身ぶるひして。出る息。とまつて。入息。次第に。とうとい所へ。まいる計になりぬ。梢の雫。自然の口に入て。誠の氣を取直

(二)白樂天の長恨歌中の句「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」を滑稽化して擬したもの。

(三)黄楊は告げに普通するところから、昔黄楊の櫛を持つて辻に立つて吉凶を占つた。

(四)この僂師の言葉が辻占になつたもの。

(五)四五本の竹を墓の周圍に立てて、上部を一つに結ぶのは當時の風であつた。

し。其女は。やらぬと起あがれば。影も貌もなく。車は。ありし人の。寢すがた。是非。今宵は。枕をはじめ。天にあらば。お月さま。地にあらば。丸雪を。玉の床と定め。おれがきる物を。うへにきせて。そうしてからと。思ひしに。悲しや。互に。心ばかりは。通はし。肌がよいやら。惡ひやら。それをもしらす。惜ひ事をしたと。邊を見れば。黄楊の水櫛。落てけり。あぶら嗅きは。女の手馴し念記ぞ。是にて。辻占を。きく事もがな。と。唄づたひ。岩の陰道をゆくに。鉄炮に。雉のめん鳥懸て。ひとりごとに。さてももろき命かな。雄が歎ふといふ。身に引あてゝ悲しく。其六七日も。野を家となして。尋けるに。霜月廿九の夜。おのづと。ころの闇路をたどり。人家まれなる。薄原に。かぎり火の影。ほのかに。卒都婆の。數を見しは。いかなる人か。世をさり。惜まるゝ身も有ぬべし。竹立て。ちいさき石塔。なをあはれなり。さぞ此したには。疱瘡の歎き。或は。疳にてさきだち。母に。思ひをさせしもと。せんだんの。本陰よりみるに。此所の。百姓らしき者の。ふたりして。埋し棺桶を。掘返す。ころの程の。すぐくなりぬ。人の足音を。聞て。隠るゝ事のあやしく。そ

(二) 吾刀を抜く用意をして威す。  
(三) 貧故に暮らしかねて種々の悪心起つて。

(二七) 眞ごころ。

(二八) 情夫。

(二九) 情夫以外の富裕の客。

(三〇) 貴方のために。

(三一) 一生。

(三二) 軽々にすべきでない。熟考を要するところ。

れはと懷めて。近よる。當惑して。返事もせず。ありのまゝに。此事かたらずは。後とは。いはじと。反を返して。いかれば。御ゆるし候へ。月日をおくりかね。さま／＼の。こゝろに成て。今こゝに。美しき女の。土葬を。堀返し。黒髪。爪をはなつといふ。何のためにと。きけば。上方の。傾城町へ。毎年。しのびて。賣にまかると。かたりぬ。求て。これを。何にするときけば。女郎の。心中に。髪を切。爪をはなち。さきへやらせらるゝに。本のは。手くだの男に。つかはし。外の大臣へ。五人も。七人も。きさまゆへにきると。文などに包こみて。送れば。もとより。人に隠す事なれば。守袋などニ入て。ふかくかたじけながる事の。笑しや。兎角。目のまへにて。きらし給へと申。今まで。しらぬ事なり。さも有べしと。死人を見れば。我尋ぬる。女。これはと。しがみ付。かゝるうきめにあふ事。いかなる。因果の。まはりけるぞ。其時。連てのかずば。さもなきを。これ皆。我なす業と。涙にくれて。身もだへする。不思議や。此女。兩の眼を。見ひらき。笑ひ顔して間もなく。又本のごとく成ぬ。二十九までの一期。何おもひ残さじと。自害をするを。二人の者。色

く押とめて。歸る。分別所也

### 夢の太刀風

- (一) 宇宙ここでは人間は五大即ち五元素の地水火風の假りに形となつたものと傳説に依る。
- (二) 假り物を借り物に懸けて、取り返しに來たら返す。人間終命のことをいふ。
- (三) 世之介は當時三十歳である。
- (四) 羽前最上川沿岸の地名。
- (五) 奉公口を探してゐる意。

(六) 平安時代の僧。圓仁。最澄の弟子。

(七) 十一面觀音。

(八) 武家奉公の希望を遂げず

(九) 焔爐。

(一〇) 飯炊釜。

(一一) 扇の要の代りに紙縵を用ひてあるもの。

(一二) 飯をねつて糊を作るへら。

(一三) 荒民を制する道具。

(一四) 捕縄。

(一五) 蠅捕蜘蛛に蠅を捕らせる遊戲。

世は五つの借物。とりにきた時。閻魔大王へ。返さふまで。合て。三十年の夢。是からは。何に成ともなれ。身の置所も。定まらず。最上の。寒河江といふ所に。我若年の時。衆道の念比せし人。住家もとめてありしを。今悲しさに。尋くだりてあひぬ。十九年。跡に別れし。面影。さすが見忘れず。互に。泪の隙なく。昔をかたるこそ。外の因とはかはりて。替らぬしるしには。和扇。中沢の拜殿にて。物せし時。慈覺大師の作の。一寸八分の。十一面。守本尊を。送りけるが。身をはなさず。信心したまふこそ。うれし。此人も。望の。奉公はかどらず。小者の。一人も見えず。ちんからりに。羽釜ひとつのたのしみ。明日の薪には。風を待て。落葉かき集て。里芋より。外には味噌こしもあらず。壁に。懸たる物とは。かなめ。こよりにて。くよりし扇。粘篋。唐がらし。鼻ねぢ。取縄。さりとてはあさましき世の暮し。何をか遊して。かく。年月かと。きけば今江

(一) 玩具の長刀。

(二) 砥石の面を平滑にするための小砥石のこと。

(三) 弓を張つて野獸を捕へる道具。

(四) 梯子。

(五) 京都川端通り四條下ル茶屋町。

(六) 怨み。

(七) 護身用の脇差。

戸に。はやるのとて。蠅取蜘蛛を。仕入。或時は。壹文賣の。長刀を削。なく子をたらし。天道。人を。ころしたまはず。けふまでは。日をおくりぬ。はるく。爰にきて。久しぶりなれば。せめて。盃事をと。一盃の。鏝をはづして。見せぬやうに。徳利を。提てゆくを。色く留て。まづ。此程の。足休めに。今宵は寝て。残る事共。明てかたらんと。手もとに有し。あはせ砥を。枕として。臥ける。夜更。あるじは。古き。葛籠を明て。鳴子。はり弓。取出し。近の山陰に。狸の。かぎりもなく。あれける。これを捕えてもてなしに。せまほしと。出てゆく。まだ。身もぬくもらず。目も。あはぬ内に。二階より。はしの子をつたひて。頭は女。あし鳥のごとし。胴躰は。魚にまぎれず浪の。磯による声のして。世之介様。我を忘れ給ふか。石垣町の。鰻屋の。小まんが執心思ひしらせんといふ。枕わきさし。ぬきうち。手ごたへして。うせぬ。うしろの方より。女。口ばしをならし。我は。木挽の。吉介が郷。おはつが心魂也。ふたりが中は。比翼といふて。おもひ死をさした。其うらみにと。飛で懸るを。是もたちまち。きりとめぬ。庭の片すみより。長。二丈斗の女。手足。楓の

(三三) 一生を契る夫。

(三四) 毒殺する。

(三五) 一生の終り。

(三六) 山城宇治郡。

(三七) 出家の身と成ること。

(三八) 怨み。

(三九) 喉笛。

(四〇) 怨みを捨てての意。

(三三) 起請文中の神の名を書いた部分。

(三三) 起請文のこと。

やうに見えしが。風ふき懸る声して。我は是。高雄の紅葉見に。そのか  
 されて。一期の男に。毒を飼て。そなたに。思ひ替しに。はやくも。見捨  
 たまひぬ。次郎吉が口鼻。見しつたかと。かみつくを。くみ臥て。討とめ  
 ぬ。此時目もくらみ。氣勢もつきはて。浮世の。かぎりとおもふに。又空  
 より。十四五間も。續きし大綱のさきに。女の首ありて。逆に舞さ  
 り。我こそ。上の醍醐あたりに。身をころもになし。後の世を大事と。お  
 こなひすましてあるを。二たび。髪をのばさせ。ほどなく。迷はし給ふ  
 事。執着そこをさらせじと。はひまとひて。息をとめ。喉びに喰つく所  
 を。すかして。指殺し。もはや是までと。念佛申。心の剣を捨て西の方を  
 拜み。あやうかりしに。彼牢人。立歸て見れば。そこら。血しほに染て。  
 世之介。前後をしらず。おどろき耳近く。呼返して。正氣の時。やうすを  
 問ば。はじめをかたる。不思議と。二階にあれば。世之介。四人の女  
 に。書せたる起請。さんぐに。切やぶりて。有ける。されども。神おろ  
 しの。所くは。残り侍る。これおもふに。假にも書すまい物は。是ぞか  
 し

(一)男娼。

(二)古淨瑠璃書き出しの文を擬した體。

(三)貴人の奥方。

(四)貴人に仕へる奥女中達。

(五)上の奥女中に奉公する女。

(六)色戀の心のない年齢頃。

(七)春書。

## 替つた物は男傾城

さても其後。物のあはれをとめしは。去大名の。北の御方に。召つかはれて。日のめもついに。見給はぬ女郎達や。おはした也。其ころも。なき時より。奥の間。近くありて。男といふ者。見る事さへ希なれば。まして。そんな事を。した事もなく。あたらず。二十四五迄も。このもしき。枕繪。一人笑ひを見て。こりや。どうもならぬ。あゝ。氣がへると。顔は赤くなり。目の玉すはり。鼻息。おのづとあらく。齒ざりして。細髭もだえて。扱もく。にくひ女が。ある物かな。かまはずに。寝てゐたさうなる。男の腹の上へ。もつたいなや。美しいなひ足で。踏おつて。あのまなこを。糸のやうにしをつて。人もみる物じやに。まる裸になつて。脇ばらから。尻つき。大きなからだ。下な。お人様が。おもたかろに。いかに。繪なればとて。此女房めと。眞實から。つまはぢきして。書物やぶりぬ。女郎がしら。其一人。つかひ番の女を頼み。錦の。ふくろをわたして。御長は。これより。すこしながく。ふとひぶんは。何程にて

(八)眞情から。

(九)奥女中頭。

(一〇)屋敷外の使をする女。

(一一)陰相、張り形と察せられる。

△(三)主従二人の女。門の通行券の文句。

△(三)江戸丸の内から日本橋本町通りへ架した橋。

△(四)陰相。婦人自瀆の用具。

△(五)買ひ主の心を察して、物心のない少女を使つたのである。

△(六)主人が出て差支へはないと許した意。

△(七)杉山丹後様の語つた淨瑠璃節。

△(八)江戸町奴の一人、蟠隨院長兵衛の乾兒。額を廣くしたので、世に唐犬額と稱した。世之介もその髪風を模してゐたのである。

△(九)男ぶり勝れて。

△(一〇)だしぬけの。

△(一一)人柄を見込んで。

△(一二)敵討をなし得ない。

も。くるしからず。けふのうちにと仰せける。お中間に。風呂敷包ひとつ。此女。上下貳人。御通し。あるべしと。切手を見せて。御裏門を出て。常盤橋をわたり。堀町邊に。御用の物の。細工人の。上手ありける。かれが許にゆけば。小座敷に通して。七ツばかりの。少女に。彼道具を。持せて出し侍れ共ひとつも。氣にいらすして。くるしからずとて。あるじ呼出して。望の程。申付て歸る。折節。芝居。はじまり時分。丹後か本ぶし。これじやとよばはる。其比。世之介は。又江戸にきて。唐犬權兵衛が。かくまえてありける。あたまつき。人に替り。男も勝れて。女のすくべき風也。木戸口に。入懸る時。かの女。連たる小者を遣し。さるかた。卒度。御目に懸りて。申上度義の。御入候と申。曾而。おもひよらね共。いかなる御事と。立寄。女。小聲になつて。近比。指あたりたる。御難義に候へども。まづは。御人跡を見立。是非に。頼たてまつり候。私は或御屋敷方に。勤て奥さま。まちかくありし。身にて候。かたれば長し。親の。敵程に。存じ候人を。けふといふけふ。見付申候。女の身なれば。及難し。御うしろ見。あそばし。此所存。はらし候やうに一向。涙をなが



（三）よく事情はわからねど。

（四）男達の退かれぬ場合。

（五）同様に鎖入りの鉢巻。

（六）婦人が外出の際鏡の小形のを携へた。

（七）盥盆の敷入。奉公人の休暇を得て外出をゆるされる日。

す。世之介。思案に及ばねども。何とも。ひかれぬ所にて。まづ。人中な  
り。偷に様子もきくべし。と。其邊の。茶屋に入て。暫く。是に御入候へ  
と。宿に立歸。くさり帷子を着て。同じく。はち巻。目釘竹に。こゝろを  
付て。さいぜんの方に。走着。さあ。子細はと。聞懸る。せく風情もな  
く。くだんの。錦の袋を。出して。是にて。我こゝろの程は。しれます。  
御らんと。申もあへず。襟に。顔を。さし入てありける。世之介。紅  
の。緒をときて見れば。七寸貳三分あつて。もとぼそなる。形の。何年  
か。つかひへらして。さきのちびたるなり。興さめ。顔になつて。是はと  
いふ。されば。此形さまを。つかふ時には。死入ばかり。おもふにより。  
命の。敵にあらずや。此敵を。とりてたまはれと。世之介に。取付。刀ね  
く間もなく。組ふせて。首すぢを。しめて。疊三でう。うらまで。何やら  
通して。起別れさまに。鏡袋より。一包取出して。袖の下より。おくり  
て。又七月の十六日には。かならずと申のこせし

## 昼のつり狐

(一)歌舞伎小舞十六番の歌は、舞曲扇林に掲げてあるが、その十番目「十しのめ、いつも今朝うつ太鼓」とあるのが、それだと察せられるが、當時の小唄集松の落葉巻一の古來十六番舞謡歌には十二番に「いつもより」が掲げてある。その歌詞に「いつもよりけさうつ太鼓の音のよさよ、うゑのお寺かあんこく寺か、アノ扱はかゝの大せうじか云々」とある。

(二)前夜から徹夜して日の出を拜した。これを日待といつた。後は遊宴歌舞を樂しむを主とした。

(三)遠江佐夜の中山觀音寺の傳説に、この寺に在る鐘を撞くと、その人は現世では大金持ちになれるが、來世では無間地獄に墮ちるとあつて、その鐘を世に無間の鐘と稱した。

(四)京の踊子舞子を見ないこと。

(五)伊勢物語業平東下りの條の「名にし負はふいざこととはむ都島わが思ふ人はありやなしやと」

(六)京都東山古門前町。

(七)刀の柄卷きに用ひた鯢皮の一種。

(八)嚴めしく。位勝は宛て字。

(九)寺院の外部から通つた僧侶の妾で、小姓の少年風を裝うた女。

(一〇)廊の遊女とも、茶屋女ともつかぬ女

十六番の拍子歌。加賀の大正寺の時太鼓。夜明をいそぐ。日待の遊び。此御客のうちに。夢山様と申。親もなく。子も持ず。七代の。大分限。先祖は。無間の鐘を。つかれけるかや。毎日まきちらしても。滅事なし。遊山遊興に。數を盡しぬ。いまだ。躍子。舞子といふ者を見ず。世之介。のぼらば。いざ事問む。都のやうす。万事をまかせて。ゆく程に。知恩院のもと。門前町に。かし座敷。十日限の。手懸者を置いて。夜のなぐさみ昼は。十人の舞子。集ける。一人。金子一步也。顔うるはしく。生れつき。艶しきを。ちいさき時より。是に仕入て。とりなり。男のごとし。十一二三四五までは。女中方にも。まねき寄られ。一座の。酒友だちにもなりぬ。其程すぎては。月代を刺せ。聲も男に。つかひなさせ。裏付け。袴の股だち。とつて。ばつばの大小。おとしさし。虚無僧あみ笠。ふかく。太緒の雪駄。位勝げに。はきなして。やつこ草履取をつけ。これを。寺がたの。通ひ扨従と。申侍る。其跡は。あいの女とて。茶屋にもあらず。けいせい

(二) 抱へ主の手から離れること。

(三) 身分ある家の寡婦。

(四) ごまかし手段の出来ない。賽の目を  
ごまかして出す手段から出た言葉。

(五) 密會。

(六) 竹又は狭い板を並べた床。

(七) 都合悪く、邪魔があれば。

(八) 未詳。

(九) 模様を白あがりにして、上繪を墨ば  
かりで書いたものといふ。

(一〇) 謀つて人をだます意。

(一一) 内室。

(一二) 相當な身分の人妻。

(一三) 手に入れる。

(一四) 眩暈。

(一五) 男女密會の茶屋。

にでもなし。其後は、遊び宿の口鼻となりながら、自由になりぬ。それか  
ら。婆々になりて。すたりぬ。何事も。世は。若ひ時の物と。むかし藝愛  
しがる女に。其身。一生のうちの。いたづらを。語らせきくに。四条の。  
切貫雪隠といふは。ゆへある。後家など。中居。晋もと。つきん。おほ  
く。手目のならぬ御かたは。彼。雪隠に入て。それより内へ。通ひあり  
て。事せはしき。出逢也。しのび。戸棚と申は。是も。内證より。通路仕  
懸て。男を入置。逢する事也。あげ疊といふ事は。簀子の下へ。道を付  
て。不首尾なれば。ぬけさす也。空寝入の。戀衣と申は。次の間の洞床  
に。後室模様のきる物。大綿帽子。房付の念敷。など。入置て。符作り女  
より。さきへ男を廻し。かの衣類を。着せて。寐させ置。去かみさまと。  
申なして。下／＼に。油斷させて。逢する。手たてもあり。後世の。引入  
といふは。美しき。尼をこしらえ。身は。墨衣をきせ置。なりさうなる。  
おかた達に。付てつかはし。我宿は。是。ちと。御立寄と。取こむ事もあ  
り。しるしの。立ぐらみといふは。出合茶屋の。暖簾に。赤手拭。結び置  
ぬ。かならず。此所にて。わづらひ出して。爰をかるとて。はいる事あ

(二五) 漆塗りの板。

(二六) 男性性器。

(二七) 謡曲、假名草子などに擬した文句。

(一) 三月の美しい花を目に見るやうに、他人の遊樂を傍から見た意。

(二) 謡曲館野に「誰かいつし春の色、げに長閑なる東山、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣……」とある。

(三) 頂妙寺。寛文十三年に高倉中御門から二條東河原に移轉したと雍州府志にある。

(四) 鴨川沿岸の石垣。寛文年中の工事。

(五) 知恩院山門の南。慈鎮和尚が「わが戀は松をしぐれの染めかねて眞葛が原に風さわぐなり」と詠んだのはこのことだと雍州府志にいつてある。

(六) 人家の建ちつづく意。

(七) 右の慈鎮和尚の歌の句を引いてある。御上家は上流の家。

(八) 茶屋の名。

り。氣を付て見て。それとしりたまふべし。ちぎりの。隔板と。いふ事あり。是は。小座敷の。片隅に。ぬぐひ板。敷合。女。らく寐をすれば。ろてんの通ふほど。落し穴あり。男は。板の下に。あふぬきて。寝やうに。一尺あまりの。すきを置いて。拵をきぬ。湯殿の。たゝみばし子といふ物あり。是は。外よりは。手桶の。通ひもなく。たしかに。見せ懸。はだかになり。入せられ。内より。戸をしめたまふ時。天井から。細引の。階の子。おろして。上へ。運ばせ。事すまして。おろしぬ。惣じて。加様の。くら事。かれ是。四十八ありける。女さへ。合点なれば。あはせぬと。いふ事なし。なんぼう。おそろしき。物語にて御座候。人の内義。むすめに。きかず事にあらず。汰沙なしく

### 目 三 月

げにく花の都。四條五條の。人通り。むかし見し。山の姿もかはり。長明寺も。こゝへひけ。川原おもての。石垣。慈鎮法師の。よまれし。眞葛が原と。いふ所迄も。建つてきて。我戀は。唯。御上家の女中と。浪屋

- (九) 水色の鹿の子染め。
- (一〇) 波の染め模様。
- (一一) 銀の薄板からはの字を切り抜いた紋を五つ所に附けたもの。
- (一二) 紫色の衣裳と同色の帯を左巻きにする。
- (一三) 帯のくけ目に鉛の重りを入れる。
- (一四) 黒布で作り、顔面を包み目のみ出す頭巾。

# (五) 公家。

(一) 主人の意で、奥方をいふ。

# (七) 大阪俳優の女方。

- (八) 扇を折つて賣る店に勤める女。
- (九) 扇の地紙。
- (一〇) 女人禁制の高野山で見たら、この醜さでも我慢されよう。
- (一一) いひ消されて。一言の下に非難されて。

が腰懸に。しはらく居て。遠國とは違ふて是はく。それはと。見るに。下には。水鹿子の白むく。上には。むらさきしほりに。青海浪。紋所は。銀にて。ほの字。切ぬかせ。五所のひかり。帯は。むらさきのつれ左巻。結びめ。後に。絆目のすみに。鉛の。しづを入。髪は。水引懸て。黒縹子のきどく頭巾。まづは。首すぢの白き事。木地のつら笠に。しろき紐を。上にむすばず。足踏は。白綸子に紅を付。ぼたん懸にして。ばら緒の。蕨草履はきつれて。二十四五人。同じ年比。同じ風俗。供の女も。男もはるかに。さがりて。ゆく。是は何人ぞときくさる御所方の。御女郎さま達。あのうちに。上ひとり。様もまぎれて。御入のよし。どれとも。見分がたし。毎日の御遊山。かはりたる。御物すきとかたる。けつこうな事かな。此跡。松本名左衛門申せしも。よい夢とや。みる事も。きく事も。ならぬ事を。おもふより。世之介が。智恵自慢。自由になるものこそと。あふぎやの女に。いまはやる。地などを。もつてまいれのよし。宿に。呼よせ。是はといふ。雨のふる日の淋しさか。又は。高野山で。見たらば。堪忍もならう。京に来て。よい事。見た目で。大形の事はと。けされて。

(三)行かう。

(三)大小よしや組の男達風をして。

(四)正月十六日頃島原に人形店を出したことは、島原大和曆に見えてゐる。

(五)人出の多く自由に通行し難い。

(六)玩具。

(七)遊女達に高價な人形を買はされるのが、客の迷惑である。

(八)無心の人形の種類。

(九)男盛りのこと。

(三〇)邪魔をすれども。

(三一)揚屋の名。

是も。かいやりて。とかくは。夢山様の御望。嶋原へをせとて。隠れもなき。善吉申は。世之介。はじめての。遊女狂ひ。兩人共に。此善吉。仕懸を見ならへと。はさみ箱持。小者と召つれ。よき風の大男。袴高く。すそとつて。大小よしやがりに。編笠。ふかく着て。指かゝる。其比は。正月十六日。此里に。人形見世出して。揚屋の。門より。をしわけがたし。いかなる太夫も。十兩。十五兩が。もてあそびを。調え。なぐさむ事ぞかし。其日の。大臣めいわく也。此豊なる賑ひ。こゝろなき。藤六。見齋粉徳。麦松も。うき立ばかり。見えわたりて。おもしろし。善吉男は今なり。江戸では。小太夫に。ほれられ。逆も。名の立次手に。人の。ならぬ事をせんと。或時。雪の。かはいらしく。降日歸るを。太夫。まくり手になり。からかささし懸。しかも。はだしに成て。門口まで。善吉おくる事。前代には。ためしもなし。是沙汰になりて。親方せけども。それもかまはず。身を捨て。女の方より。ふかく。敷く程のおのこ。思日の外。よき所あれば也。色町に。此人。しらぬ者なし。此里には。しるべもなく。丸太屋の。見世のさきに。はさみ箱をおろさせ。髻懸て。内を見やれば。

(三)遊女。

(三)遊女の名。

(三)石州が盃を受けて戴く時。

(三)三味線の棹の接ぐやうに出来たものを接棹といふ。黒檀はその木材。六すぢ懸は三味線線の大きさ。

(三)弄齋節。小唄の一種。

(三)善吉を指す。

(三)遊藝を以て遊興の席を助けた女郎。今の藝者に類したものだ。

(一)雷鳴りに降雨の前徴と、日照りの前徴とされるものがあつた。火神鳴りは日神鳴りで、日照りの前徴の雷鳴り。

(二)富裕人の大屋敷。

(三)天秤の針口。棹の中間に、針を仕掛けてあるところ。

(四)利慾のためには利用しない。

(五)来いといへば、金銀の力で、十人でも一緒に返事をするやうにしてみせる。

(六)寄せつけるな。

(七)親不孝の事ども。

(八)精進の境界。

色人計あつまり。酒のみてありしが。石砦。ひとつうけて。禿に申付て。

門に居る。善吉に。しらぬ御方さまへさしますといふ。是はと。ふたつ飲

てかへす。女郎。戴く時。善吉。御肴とて。はさみ箱。接竿のこくた

ん。六すぢ懸を取出し。僕。うたへといへば。かしこまつて。らうさい。

其声の美しさ。彈手は上手。去連は。石砦が見立。おのゝ感じて。彼男

を。内に入て。其日は。是非に。あいたひと。戀を求めて。馴染の方へ。

断の文遣し。善吉と。語るにわけよし。世之介は。たいこ女郎にさへ。

ふられて。此口惜さ。人に。買てもらうて。遊べき所にあらず。おれも一

度は。中く。是では。果じとぞおもふ

### 火神鳴の雲がくれ

奥ぶかなる家にて。天秤はり口の響きさもしくも耳に入て。今おれに。

何程もたせたりとも。欲にはせまひ。物の見事に。つかふて。世界の揚屋

に。目を覺さして。こいよとよべば。一度に。十人計。返事を。さす事じ

やに。親仁一代は。よせなと。おもひきつての。こゝろ根。更にうらみと

(九)眞如は實相。實相は不變であるが、人の慾の縁に引かれて變現する。それを水は不動であるが風に随つて波立つに譬へていふ。ここは苦樂などの及ばない境界をいつてある。

(一〇)和泉泉南郡。

(一一)同右。

(一二)紀伊海草郡。

(一三)廣く世に知られた、婦人の不品行なところ。

(一四)田舎育ちの女も、都風にまぎれて。

(一五)加太の淡島の神は女神で、婦人病の神と迷信されてゐた。

(一六)新古今集「由良の戸をわたる舟人楫をたえ行方もしらぬ戀の道かな」

(一七)世之介が滞在中彼此の女に關係して戀みをいはれるのである。

は。思はれず。我。よからぬ事ども。身にこたえて。覺侍る。いかなる山

にも。引籠り。魚くはぬ。世を送りて。やかましき。眞如の浪も。音なし

川の。谷陰に。ありがたき。御僧あり。是もとは。女に身をそめて。是

よりひるがへしたうとき道に。入せたまふ。此人に尋と。浦づたひに。

泉陽の。佐野。迦葉寺。迦陀といふ所は。皆獵師の。住居せし。濱邊な

り。人の姫子にかぎらず。しれたいたづら。所そだちも。物まぎれして。

むらさきの締帽子。あまねく。着る事にぞありける。男は釣の暇なく其留

守には。したひ事して。誰とがむる事にもあらず。男の内に居るには。お

もてに權立てしるゝ也。こゝろへて入事せず。夕暮は。あは嶋の女神おも

ひやり。詠につゞく由良の戸。戀の道かなと。我よりさきに。あはれしる

人ありてよめり。磯枕の。ちぎりもかさなり。爰もすみよかりけりと。日

數経るうちに。尋きてうらみいふ女。其かぎりなし。いづれか顔あけて。

言葉もかへされず。よい加減にたらしめて。おもひを。臂にあまらせける。

此身ひとりを大勢して取ころされてから。何か詮なし。責而は。かたぐ

の。鬱氣晴しに。酒をすゝめ。むかしをかたりて。慰め。年月の難儀。い



△二〇大阪邊でいふ、山地の方に出る夕立雲。これを見て風雨を豫知した。

△二一和泉泉南郡。鶴の名所。

△二二堺の大通り筋。

△二三早稲籾。

△二四あり得まじきこと。

ま爰に小舟數ならべて。沖はるかに出せしに。折節の空は。水無月の末。  
山々に。丹波太郎といふ。村雲。おそろしく。俄に白雨して。神鳴。臍を  
こゝろ懸。落かゝる事。間なく。時なく。大風いなばかり。女の乗し舟  
共。いかなる浦にか。吹ちらして。其行方しらす。され共。世之介は。浪  
によせられて。二時あまりに。吹飯の浦といふ所にあがりぬ。屢しが程  
は。氣を取うしなひ。そのまゝ。眞砂の埋れ貝。しづみはつるを。流れ木  
拾ふ人に。呼びけられ。かすがに。田鶴の声のみきゝ覺て。浮雲き。生死  
の堺まで來て。大道すぢ。柳の町に。むかし召仕ひし。若ひ者の親あり。  
此もとにたよりゆくに。夫婦よろこび。唯今も。御事のみに。人々手分し  
て。國々を尋侍る。過つる六日の夜。御親父様。御はて遊しけると。かた  
る内に。又京より人來りて。是は不思議にまいり候。お袋さまの御なげ  
き。いかばかり。兎角いそいで。御歸あそばせと。はや乗物程なく。むか  
しの住家にかへれば。いづれもつもの。涙にくれて。煎豆に。花の咲心知  
して。今は何をか惜むべしと。もろくの。藏の鎗わたして。年比あさま  
しく。日々おくりに替りぬ。こゝろのまゝ。此銀つかへと。母親氣を通

三三 證文の文句を借りてある。

三四 わが言を確める言葉。

三五 多數の幫間の意。百二十は伊勢内外の未社敷に出てゐる。

三六 最大の大盡客。

して。貳万五千貫目。たしかに渡しける。明白實正也。何時成とも。御用次第に。太夫さまへ進じ申べし。日來の願ひ今也。おもふ者を請出し。又は名たかき。女郎のこらず。此時買ひではと。弓矢八幡。百二十末社共を集て。大大じんとぞ申ける。

# 好色一代男 卷五目錄

卅五歲

後のちには様さま付てよぶの事  
よし野のはこんぼんの事

卅六歲

ねがひの搔か餅もち  
大津つ柴は屋や町の事

卅七歲

播は州しゅうの世よ中ちゆうには父  
播は州しゅうむろつの事

卅八歲

京きやうのちぢ捨すてのひかり物  
京きやうみや川がわ町の事

卅九歲

一いつ日にちかいして何程ほどが物ぞ  
泉いづみ州しゅう界かいふくろ町の事

四十歲

當あた流りゅうの男おとこを見しらぬ  
あきのみや嶋の事

四十一歲

今いまこの波なみ遊あそもどりに夜よ見み世よの事  
離はな波なみ府ふ遊あそもどりに夜よ見み世よの事

## 後は様つけて呼

(一)吉野を身請けした佐野屋三郎兵衛即ち灰屋紹益が吉野追悼の歌と傳へる。この吉野は元和寛永頃遊里の京六條に在つた時、その妓で、二代目である。

(二)小刀鍛冶の弟子が夜業として刀を打つたことを、伊勢物語の「人知れぬわがかよひぢの關守は宵々ごとにうちも寝ななむ」を利かせていつてある。

(三)島原太夫の揚代五十三匁。

(四)淮南子に見える故事。楚王の宋を攻める時、魯般といふものをして雲梯を作らしめたこと。意は企て及び難いこと。

(五)涙の意。偽りなしは十月の時雨を偽りの時雨といひならはしてゐるのに依つていふ。涙に偽りなしの意。拾遺愚草藤原定家「偽りのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけむ」

(六)禰祭。御火焼ともいふ。十一月八日稻荷神社の祭禮。鍛冶屋は特に稻荷神を尊信した。

(七)吉野は遊女だから、金銀で誰も買ふことが出来る女なのに、自分の身分の卑いために金銀を持つてゐても、買へないことを歎いた意。

(八)句の下に忘るべきが省かれてゐる。(九)年來の希望は今吉野に面會したので満たされた。

(一〇)大阪市西成區。木綿織りの産地。

都をば。花なき里になしにけり。吉野は死手の山にうつしてと。或人の讀り。なき跡まで名を残せし太夫。前代未聞の遊女也。いづれをひとつ。あしきと申べき所なし。情第一深し。爰に七条通に。駿河守金綱と申。小刀鍛冶の弟子。吉野を見初て。人しれぬ我戀の關守は。宵々毎の仕事に打て。五十三日に五十三本。五三のあたいをためて。いつぞの時節を待ども魯般が雲のよすがもなく。袖の時雨は神かけて。是ばかりは偽なし。吹革祭の。夕暮に立しのび。及事のおよばざるはと。身の程いと口惜と歎くを。或者太夫にしらせければ。其心入不便と。偷に呼入。こゝろの程を語らせけるに。身をふるはして。前後を忘れ。うそよごれたる只より。泪をこぼし。此有難き御事。いつの世にか。年比の願ひも是迄と。座をたつて逃てゆくを。袂引とゝめて。灯を吹けし。帯もとかずに抱あげ。御望に身をまかすと。色々下より身をもだえても。彼男氣をせきて。勝間木綿の下帶とき懸ながら。誰やらまいると。起るを引しめ。此事なくては。

(二) 未熟に。

(三) 粹人。

(四) 一同の過失、責任にはしない。

(五) 世之介さまの略稱。

(六) 至急に事を運ばせる。

(七) 品位、資格の具備すること。

(八) 遊女を娶つたのを難じて絶交する。

(九) 別邸。

(一〇) 外妾。

(一一) 仲裁。

夜が明ても歸さじ。さりとは其方も。男ではなひか。吉野が腹の上に適くあがりて。空しく歸らるゝかと。脇の下をつめり。股をさすり。首すぢをうごかし。弱腰をこそぐり。日暮より枕を定。やうく四ツの鐘のなる時。どうやらかうやらへの字なりに。埒明させて。其上に盃迄して歸す。揚屋よりとがめて。是はあまりなる御しかたと申せば。けふはわけ知の。世之介様なれば何隠すべし。各の科にはと申うちに。夜更て介さまの御越と申。太夫只今の首尾を語れば。それこそ女郎の本意なれ。我見捨て。其夜俄に揉立て。吉野を請出し。奥さまと成事。そなはつて賤しからず。世間の事も見習ひ。其かしこさ。後の世を願ふ佛の道も。旦那殿と一所の法花になり。煙草もおきらひなれば吞どまり。万に付て氣に入事ぞかし。是を一門申よりは道ならぬ事とて。見かぎりしを。吉野が身にしては悲しく。御異見申お暇乞て。實而は御下屋敷に。置せられ。折節の御通ひ女にと申せ共。中く御聞分もなし。さもあらば御一門様の御中を。私なをし申べしといふ。出家社人のあつかひをも。きかざる者ども。いかにしてと仰ける。まづ明日。吉野は暇とらせて歸し候。今迄の通に

- (二) 婦人方を招待したき由。
- (三) 案内状。
- (四) 深い僧しみあつて絶交したのではない。
- (五) 乗物など屋敷内に引き入れて。
- (六) 雌造り。
- (七) 廣座敷。客間。
- (八) 木綿綿入。
- (九) 下賤の女の風俗。手拭のやうな布片を頭上に置くこと。
- (一〇) 折敷。
- (一一) 熨斗鮑の切つたものか。
- (一二) 酒盃獻酬の際、少々取り分けて相手におくる肴。
- (一三) 三筋町。寛永十八年以前に室町に在つた時の遊廓を指す。
- (一四) 恍惚となること。
- (一五) 砂時計、分銅時計などの、砂を盛り直し、分銅を直したりすること。
- (一六) 吾氣持よいやうに相手になること。
- (一七) 各自自宅に歸つて、一様に吉野をばめた。

- (一八) 妻にせよと。
- (一九) 婚禮を急ぎ。
- (二〇) 共に婚禮用。杉折は祝品。
- (二一) 蓬萊島臺。

と。御言葉を下られ。庭の花櫻も盛なれば。女中方申入度のよし。觸狀つかはされけるに。何かにくみはふかからずと。其日乗物とも入て。久しく見捨られし。築山の懸作。大書院に並居て。酒も半を見合。吉野は淺黄の布子に。赤前だれ。置手拭をして。へぎに切髪斗の取肴を持て。中でもお年を寄れた方へ。手をつかえて。私は三すぢ町にすみし。吉野と申遊女。かゝるお座敷に出るは。もつたひなく候へ共。今日お隙を下され。里へ歸るお名残に。昔しを今に一ふしをうたへばきえ入斗。琴彈歌をよみ。茶はしほらしくたてなし。花を生替土圭を仕懸なをし。姫子達の髪をなで付。碁のお相手になり。笙を吹。無常咄し内證事。万人さまの氣をとる事ぞかし。勝手に入ば呼出し吉野独のもてなしに。座中立時を忘れ。夜の明方に。めいゝ宿に歸て申されしは。何とて世之介殿の。吉野はいなし給ふまじ。同じ女の身にさへ。其おもしろさ限なく。やさしくかしこく。いかなる人の婬子にもはづかしからず。一門三十五六人の中にならべて。是とは似た女もなし。いづれも御堪忍あそばし。内義にそなえられと。よろしく取なし申て。ほどなく祝義を取急ぎ。樽杉折の山をなし。嶋臺の粧

(四)婚禮の席の謡の文句。もと謡曲高砂の一節。「千秋樂には民を撫で、萬歳樂には命を延ぶ、相生の松風、颯々の聲ぞ樂しむ」

(四)盆開歌の「そなた百まで、わしや九十九まで、共に白髪を生えるまで」に取る。

(一)古寺は園城寺を指す。ここは謡曲三井寺の文句「おもしろの鐘の音やな、我故郷にては清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れしに、是は又さゝ波や、三井の古寺鐘はあれど、昔にかへる聲は聞こえず」の同音に依つて、鐘を金銀に轉じて用ゐてある。

(二)近江大津の遊里。

(三)惜し。

(四)變化の甚だしきをいふ諺。長柄山は三井寺の所在。

(五)あれば幸であるの意。

(六)會話の詞。「いざゆかん」心得た」

(七)京都栗田口三條の橋。

(八)蟬丸の有名な歌の句に據り、逢坂の關を過ぎて八町に著くことをいふ。八町は大津。

(九)「廣うて綺麗な」は宿引きの詞を採つてある。

(一〇)此の地の遊女の中、今の流行兒は何といふ妓だと問ひかけた詞。

(一一)わざと答へをそらせて洒落た返事。

(一二)人を見くびる。

ひ。相生の松風。吉野は九十九まで

### ねがひの搔餅

三井の古寺。つかひ捨るかねはあれど隙なくて。終に柴屋町をみぬ事新し。昔し長柄の山の芋が。雞になるとや。もしも替つた事のあればなり。

いざゆかん心得たと白川橋より。大津へのもどり駕籠に。のつたりや勘六。是は俄に。ゆくも歸るも。はや八町に着ば。泊りじや御さらぬか。廣

ふてきれいな宿をとりて。なんと女郎衆。今爰ではやるは誰じやと問へば。石山の觀音様が。時花ますといふ。さても人を見立るやつかなと。其

後亭主にあふて。傾城町の案内頼むと申せば。是は無用になされ。六匁や

七匁ではたらぬといふ。勘六齒切をして腹を立。忍べはこそ供をも連す。

風俗も野躰にて出しにと。滅多せきにせくを。世之介笑しが。我に預

た。金子出して見せひと。笑ふて居る。臺所には大声をあげて。今夜は傾

城買さまの御泊りじや抔と。勘六を見ては。指さして笑しがる。世之介

も今は堪忍ならず。表に出れば。京より結構成いせ參があるはと。門立さ

(二三)野暮の風。

(二四)人々が門口に出て立ち騒ぐ。

(二五)祭禮の練りもの。

(二六)街道筋の交通機關であつた駄馬。荷の定量二十貫に一人を限りとして乗せた。

(二七)七枚重ねの蒲團。

(二八)白縮緬で馬の胴に堅く結ぶ。

(二九)唐糸編みの沓を用ゐた。

(三〇)兩袖と上前の色がはり。

(三一)諸侯入府の折の馬子唄。

(三二)宿驛に到着すること。

(三三)二人の馬子が馬の口を取る。

(三四)あなた様。

(三五)頭が痛いから按摩しろ。

(三六)柴屋町の南の入口。

(三七)はしは店先き。局は部屋。

(三八)遊女の位の高下の別なく。

(三九)琵琶湖に用ゐた特殊構造の舟。

(四〇)顔見知りに、心易さの悪口を遠慮なくいふ。

はぎ。踞物をみるごとくぞかし。大坂の黒舟といふ乗懸馬。伏見の漣浪。

淀のはんくはい。かれ是三疋揃て。七つ蒲團を白縮緬にしめかけ。馬の沓

にも唐糸をはかせ。何れも十二三成娘の子。四ツ替の大ふり袖。萱笠に紅

裏うつて。なひませの紐を付。其時は小室ぶしの寢中。宿入にうたひて。

馬子も兩口をとるぞかし。世之介を見るより。申くと抱おろされて。三

人ながらしなだれて。お伊勢さまへまいます。かたさまは何として。爰

には御ざります。勘六が女郎狂ひの太鞍を持にきたが。あたまかいたひう

とあれば。独かしらひとりあし。独は御腰をひねる。しばらく我宿へ

はゆかず。其柴屋町を見せさんせ。下向してから。太夫さまに咄しのたね

にもなります。見物したひとといふ。さらば連てゆかんとて。三人さきに立

て。南の門に入。都に近き女郎の風俗も替りて。はし局に物いふ声の高

く。道ありくも大足にせはしく。着物も自墮落に帯ゆるく。化粧も目たつ

程して。よしあし共に三味線をにぎり。頭をふつてうたひける。立よる者

は馬かた。丸太舟の水主共。浦邊の獵師。相撲取館屋のむすこ。小問屋の

若き者。戀も遠慮もむしやうやみに。見しりごしなる悪口。或は小尻とが



(三) 結はない髪。

(三) 荒馬を御する道具。

(三) 堅氣の一人前の人。

(三) 知り合ひの揚屋。

(三) 遊女の名。

(三) 旅に出發の祝ひ酒。

(三) 旅の見送り。もと京より東方に旅する人を逢坂の關まで見送つたに出た言葉。

(三) 店に出る遊女。

(三) 晝夜の約束をつける。

(三) 御神酒。

(四) 迷惑。

(四) 小形の低い屏風。

(四) 駕籠早き人夫。

め。又は男だて。一町に九所の喧嘩。ふむのたゝくの頭巾を取。羽織が見えぬのと。只さはがしくさばき髪して。片肌ぬぎ。懷にはなねぢ。手に白刃取。此所の色町を。鬨の場にするぞかし。命しらすの寄合身を持つたる者の夜ゆく所にあらず。しるべある揚屋に。兵作小太夫虎之介などあつめて。面白う遊びて。其あけの日は。禿共が立酒。さいはい關送りとして。隔子の女郎ひとりも残さず。一日買とふれをなし。御三寸過し酔のまぎれに三人の禿が何にても。道中望にまかせて。まいらすべしおもひ／＼にこのめといふ。太夫さまから万に御こゝろ付させられ。ひとつも此上に。願ひの事もなし。され共乗懸あとさきに隔り。こゝろのまゝ咄しのならぬ事氣のどく也。三人一所に昼も寝ながら。手づから搔餅を焼て。それをなぐさみにして。ゆく事ならばと申す。それこそ何よりやすき望なれと。即座に乗物貳ちやうならべて。中のへだてを取はなち。釘録にてとち合。中に火鉢を仕懸。角に棚をつらせ。枕屏風手拭掛まて入て。六尺十貳人すぐりて。ちいさき家のありくがごとし。何事もなればなる物ぞかし

## 欲の世中には又

(一) 近江坂田郡。今の米原町。  
(二) 播磨揖保郡。  
(三) 縞布。

(四) 漁撈に用ゐる大形の綱。

(五) 商賈をやめて資産で生活する家。

(六) 氣の軽い人。

(七) 拔駈けする舟。期を待たず急行する舟。

(八) 夕燒の空に現はれること。

(九) 游里のある港。

(一〇) 勘定のこと。

(一一) 大勢集まつて踊る盆踊り。

(一二) 選んで呼ぶ。

本朝遊女のはじまりは。江左の朝妻。幡笏の室津より事起りて。今國となりぬ。朝妻にはいつのころにか絶て。賤の屋の淋しく。嶋布を織。男は大綱を引て。夜を送りぬ。室は西國第一の湊。遊女も昔にまさりて。風義もさのみ大坂にかはらすといふ。浮世の事は。しまふた屋の金左衛門を誘引て。同じころの瓢金玉。ぬけ舟を急がせ。其夕暮の空ほでりして。戀の湊に押付。まづは錠をおろさせける。然も七月十四日の夜なり。此所は十三日切に。万世のやかましき事をも互にすまして。盆の有様をみて。男はちいさき編笠をかづき。女は投頭巾に。大小を指もありて。女郎まじりの大踊。みるから此身は馬鹿となつて。袖の香ひに引る。立花風呂丁子風呂。すなはち爰の揚屋也。廣嶋風呂に行て。亭主八兵衛にあないさせて。丸屋姫路屋あかし屋。此三軒に。八十余人の姿を見盡し。其中で天神かこひ七人抓て。誰に思はくもなく。酒になして。あるじに私語しは。七人のうちにて。何れなりとも氣に入らば。それに枕定めんといふ

- (一) 普通より大きく切つて焼く香木。
- (二) 香をきくこと、即ちその種類をききわけること。
- (三) 風雅の心なく。
- (四) 香爐を次ぎの人へ廻す。
- (五) 脇のあいた着物を着る年若い女。
- (六) 上の着物を半ば脱いで肩の下まですべらしたさま。
- (七) 下に着る帷子。

### (三〇) 香木の銘。

- (三二) 江戸吉原の妓の名。
- (三三) 記念に。

### (三三) 深く思ひつく。

を聞て。女郎おもひく<sup>一</sup>の身嗜<sup>み</sup>。みる程笑し。酔覺<sup>めいさふ</sup>しに千年川<sup>ちとせがは</sup>といふ香炉<sup>かうろ</sup>に。厚割<sup>あつわり</sup>の一木<sup>ひとき</sup>を焼て。きかせけるに。こゝろもなくそこ<sup>二</sup>に取あけてまはしける。いとはしたなし。末座<sup>ぼつざ</sup>にまだ脇あけの女。さのみかしこ顔もせず。ゆたかに脱懸<sup>ぬぎかけ</sup>して。肌帷子<sup>はだかたびら</sup>の紋所<sup>もんじろ</sup>に。地藏<sup>ぢざう</sup>をつけて居るこそ。いかさま子細<sup>しさい</sup>らしく見えける。手前<sup>てまへ</sup>に香炉<sup>かうろ</sup>の廻る時<sup>とき</sup>。しめやかに聞とめ。すこし頭をかたふけ。二三度も香炉<sup>かうろ</sup>を見かへし。今おもへばといふて。しほらしく下にをきぬ。世之介<sup>よしのすけ</sup>葉をとがめ。此木は何と御候と申。正しくもろかづらといふ。さても名譽<sup>めいよ</sup>の香き<sup>かう</sup>かなと。懷<sup>ふところ</sup>へ手を入又取出す。所をおさえ。申くわたくしなどか。何としてか聞候べし。其木は江戸の吉原にて。若山<sup>わかしやま</sup>さまの所縁<sup>ゆかり</sup>ではあらずやといふ。いかにもくあふての名残<sup>なごり</sup>に。もらひましてといふ。さぞあるべし。私の興風<sup>わたくし</sup>申候は。備後福山の去御方<sup>きよみかた</sup>。江戸にて若山<sup>わかしやま</sup>さまの香包<sup>かうづみ</sup>と。假初の袖<sup>かりぞめ</sup>にとめさせられ。同じ枕の夜。いつよりは。うれしさのまゝに忘れず。いまにおもひ出し候と申。横手<sup>よこて</sup>をうつて。ゑんはしれぬ物かな。其備後衆<sup>びんごしゆ</sup>の十がひとつ。かはいがられたひとつなづめは。亭主床<sup>ていしゆど</sup>とつて。蚊屋釣懸<sup>かやつりかけ</sup>て。是へと申程に。夢見<sup>ゆめみ</sup>よかと

(二四)連句の短句一句を詠んで、附句を求めたもの。

(二五)貨幣の數。

(二六)一文二文。

(二七)素性。

(二八)郷里丹波に送りかへした。

(二九)その後の様子を知らず。

(一)全く。ひたすらに。

(二)男色遊び。

(三)京都東山の一峯。靈山寺一名正法寺がここに在る。

(四)能役者自身の催す稽古のための能。

(五)麩の油揚げ。

はいりて。汗を悲しむ所へ。襦までのこる螢を敷包て。禿に遣は。蚊屋の内に飛して。水草の花桶入て。心の涼しきやうなして。都の人の野とやみるらんと。いひさまに。寢懸姿のうつくしく。是はうごきかとられぬと。首尾の時の手たれ。わさとならぬすき也。假にもさもしき事はいはず。かはいさのまゝに。人のほしがる物は是ぞと。巾着にあるほど打あけて。物數四十切はかり包て。袖に投入れば取敢ず。夜もあけて別れさまに。旅の道心者の。こゝろさし請度といふ。彼女郎。袖の包がねを。其まゝとらせける。修行者何ごゝろもなくもらひて。四五丁も行て立歸。是は存もよらぬ事。一錢二錢こそ申請しに。今の女郎にかへすと投捨てゆく。昔はいかなる者ぞとゆかし。世之介此女の心入をおどろき。様子をきけば。隠れもなき人の御息女なり。請出して直に。丹波に送りぬ。行方しらす。

### 命捨ての光物

ひらに若衆狂ひも。面白ひ物じやと。世之介を様と勸て。靈山に誘引。稽古能過て。人の歸しあとは。暮の松風。あげ麩の音。精進腹では酒も

△六△玉川千之丞、伊藤小太夫か。共に京の女方。

△七△加茂川の東、四條の南。若家宿の所在。

△八△急行の駕籠。

△九△一轉瞬の間。

△一〇△來ました。

△一一△男色遊びは始めが恐ろしく、遊女遊びは末が氣づかはれるの意。

△一二△木枕をもてあそぶ遊戲。

△一三△螺の殻を廻す遊戲。

△一四△指で摘んで扇を引き合ひ勝負を爭ふ遊戲。

△一五△碁石などを手にして、相手の持つ數の當てつこをする酒間の遊戲。

△一六△澤山の玉の光が見えた。後で、それは樹上の人の持つ水晶の珠數の珠の光と知れる。

△一七△寺の住職の室。

△一八△男一疋。

△一九△普通の弓の半分位の長さの弓。

△二〇△鳥の舌の恰好した矢の根。

△二一△縁の板のかまちと平行した縁。

△二二△京の俳優。女方。

△二三△縁側と相當距たつた榎の木の高。

△二四△星空。

飲れず。さあ爰が。分別所。何と仕やるぞ。けふはかはつて。玉川伊藤其

外四五人取よせよと。宮川町に早駕籠。目をふるうちに。ござりました。

是を見ては。いやといはるゝ事か。或人警て申せしは。野郎。翫ひは。ち

り懸る花のもとに。狼が寝て居ることし。けいせいに馴染は。入懸る月

の前に。挑灯のなひ心ぞかしとは。いかなる人も此道には。迷ふべし。夜

終夢もむすばす。枕躍よい年をして。螺まはし扇引。なんこよびて。お

のづと子共こゝろに成て。立噪き。身は汗水になして。風待顔に南おもて

に出て。おりふし五月の空聞かりしに。高塀の見越に。榎木の有しが。茂

の下葉より。數ある玉の光り物。おのゝ驚き。庫裏方丈にかけこみ。氣

を取失ひ。或は。臥まろびぬ。中にも男ひとりといはれて。すこし力瘤あ

る者。半弓に鳥のしたの。矢の根をつがひ榎縁より下に。飛下るを。滝井

山三郎と申。少人つゞきて。彼男を押止め。譬ば何者にもせよ。さばかり

の事もあるまじ。暫く御待候へ。手捕にも成べしと。遙なる木陰に行て。

見あぐればなを星の林のごとく。又一かたまり眞黒なる物うごきぬ。山三

こゝろをしづめ。あやしや何者と。言葉をかくれば。さてもく御うらみ

△三〇若衆俳優の草履取り。

△三一先刻の光り物はこの水晶の珠數の光であつたと。

△三二言ひわけ。

△三三貧乏寺。

△三四僧。

△三五壺入と書いた。遊女や若衆の自宅に行つて客の遊ぶこと。

△三六男色に於ける兄弟分の契約書。

あり。矢先に懸つて果れは。此うき目は見ず。御情にて御とめあそばし。なを思ひは胸にせまり。こゝろの鬼骨を碎き。火宅のくるしみも今ぞと。こぼるゝ泪袖に懸れば。湯玉のごとし。さては。誰をか戀たまふといふ。問れてつらし。毎日芝居にて御面影おがみ。樂屋歸の。御あとにしのび。御門口に。イ御声をきく時。死入事いくたびか。けふは東山への御會と。こんがうどもひそめくを聞て。今一度はいし。首くゝりて。浮世の隙を明むと。是なる梢にのぼり。然も御こと葉をかはず事。思日は残さし。不便におぼしめされば。なき跡にて。一へんの御廻向と。水晶の珠數を捨る。さてこそ。思ひ合候事。わたくしも。こゝろに懸ればこそ。あやしめる人をとめて。是まで尋ね候。一念通ふこそうれしけれ。争其まゝ。そのこゝろざしを。捨置きや。御望にまかせ申べし。今宵の明るを待給ひて。明日はかならず。わが宿にと申を。人々聞もあへず。松明とほし連て。大勢取まはし。あらく引おろす時。山三色く。斷も聞いれず。様子をみれば悲しき寺の同宿也。此道のしんてい。殊勝なる事ぞと。世之介取もつて。こゝろまかせに逢する事。後はすこし壺煎自慢して。かため證文

人三)當時の風習で、兄弟分の仲に刺青するには、相手の名の一字に一大事の三字を添へた。遊女の場合は命の一字を添へた。

(一)櫻花の季節に捕れる鯛。この期特に多く漁獲がある。

(二)泳いでゐる態。

(三)住吉神社のことであらう。

(四)北端。境の一區の舊名。

(五)客の人数だけ妓を呼んで。

(六)二階座敷を選択する。

(七)客に出てゐる遊女を暫く他の客に出すこと。

まだ疑ひ。左の腕の下に。慶一大事と。いれ入墨有しは。かの法師を。慶順と申けるとや。此事江戸にて。此好人。役者まじりに。懺悔咄しせし時。何隠すべしと。段く山三郎。身の上の事を。昔を今に愁歎してかたりぬ。本じや

### 一日かして何程が物ぞ

堺の浦の櫻鯛。地引をさせて。生たはたらきを見せんと。京にて明くれ。山計詠居る末社召連。津守の神やしる過て。北のはしにいれば。高列の色町中の丁。袋町に着て。かれ是よせてみるまでもなし。あたま數よびで。いくらが物ぞ。天神小天神とせちがしこくきはめぬ。二階座敷に品を定め。酒もいまだ末ぐにはまはらぬ内に。かづらきさまちよつと。借ませうといふ。はや立て行。又女出て。高崎さまと呼立る。座につけば。入替り立替り。一時程のうちに。七八度宛かす程に。さてもはんじやうの所ぞ。馴染の客數も有かと。下を睨けば。物をいふ男もみえず。手枕して。煎じ茶がぶく吞盡し。あくびしてはあがり。おりては淨璃瓊本など

△(八)興をさました。

△(九)堅苦しく、窮屈に。

△(一〇)淀川の乗合船。

△(一一)世間の經驗を積むこと。

△(一二)眠り過ぎぬ用心に。

△(一三)揚屋の圖取り。

△(一四)根つけ。

△(一五)灸所の一。膝の下外部の凹んだところ。

△(一六)綾とりの遊戲。

△(一七)腕相撲。

△(一八)迷惑な夜。

△(一九)祈願の人の通夜する堂。

△(二〇)口の利ける賢い人。

△(二一)大阪の遊里。

△(二二)手に合ふ妾。相應の妾。

△(二三)吝嗇な蘭ひ女をおくこと。

△(二四)布の小片(こぎれ)類を賣る女。

△(二五)太夫の揚錢の定額。

讀。何の用もなきに。一座をさましぬ。此里の習ひにて。たび／＼かしに立事を。全盛に思はれるとみえたり。よろづかちくろしく。あたら夜終新三十石に。乗合のこゝ地するなり。足をのばせば寢道具みちかく。蒲團はひえわたる。なんと世之介様。旅の悲しさを。よく御合点あそばして。京の女郎さまの。御氣に入やうにあそばせといふ。いかにも此浦のしほを踏で。老ての咄しにもとおもふぞ。寢覺のきづかひさに。人にはだをゆるさず。帶仕ながら寢入とあれば。同じ枕の友ども。一人は硯引よせ。家の差圖を書いて居る。又一人は。只居よふはと寝ながら。編笠の緒こしらえける。独は象牙の掛羅より。もぐさを取り出し。三里にすえて貞をしかむる。女郎は女良でかたより。更ゆくまで。糸取手相撲して。折ふしは眠。きのどくなる夜の明るを待は。そのまゝ籠り堂のごとし。面白からずとて。此所にて。口きく程の若き人。新町に手あひを拵え。ためて置て一度に。嶋原で。遣ひ捨る事尤也。傾城狂ひのしまつと。下手に月代刺すほど。世にいやなる物はなし。きたなきかこひするも。切賣の女に。よい。着物をきせて見るも。同じ事ぞと思ふ。一文惜みの。四十六匁をしらず。唯一



△(六)行きつけの揚屋、茶屋。

△(七)先客の寢息をかけておいた夜具を用ゐること。

△(八)ちよつと氣をつけたらいやな事だ。

△(九)島原の揚屋。

△(一〇)梨子の肌のやうに金銀粉を散らした漆塗り。

△(一一)汚い病人。

△(一二)身分高い貴族。公卿を指す。但し男子は笏を持ち、女は檜扇を持つた。作者の混同か。

△(一三)前客の身分の僉議は出来ない。

△(一四)澤山の長櫃。

△(一五)當世風。元祿頃の豪華風流を指す。

△(一六)昔菅原道真九州流謫の時、京で愛した梅樹が九州に飛んで行つたといふ傳説を利かせて、世之介が京から九州に行くことをいつてある。

△(一七)筑前博多の遊里。

△(一八)かぶきは輕佻、はねあがりをいふ。

度<sup>ど</sup>にても。太夫の寢姿<sup>ねすがた</sup>を見るべし。色<sup>いろ</sup>の替りたる紅裏<sup>こうり</sup>。際<sup>ま</sup>づきし肺布<sup>ふせふ</sup>をせず。よごれたる枕<sup>まくら</sup>に。たよらず。さりとは。大きに違<sup>ちが</sup>ひのあるものなり。されば田舎<sup>いなか</sup>の人。適<sup>あた</sup>々の遊興<sup>ゆうきやう</sup>は是非<sup>ぜひ</sup>なし。定宿<sup>ていしゆく</sup>をきはめ。大臣<sup>たいじん</sup>といはるゝ程<sup>ほど</sup>の人。いかなる者か寢息<sup>ねいき</sup>とめし。其跡<sup>そのあと</sup>を肌馴<sup>はだな</sup>るゝ事。すこしのこゝろをつけず口惜<sup>くちおし</sup>き事也。去人京<sup>さるひとやう</sup>にて。丸屋<sup>まるや</sup>の七左衛門方<sup>しちざゑもんかた</sup>に。梨子地<sup>なしぢ</sup>の塗長<sup>ぬりなが</sup>持<sup>も</sup>に。定紋<sup>ていもん</sup>を付て。四季<sup>き</sup>の寢道具<sup>ねだうぐ</sup>とゝのえて。枕箱<sup>まくらばたばこ</sup>煙草<sup>えんそう</sup>盆<sup>ぼん</sup>其外<sup>そのほか</sup>うつは物<sup>もの</sup>。水吞<sup>みづのみ</sup>まできよらかにあそばしける。何<sup>なん</sup>か奢<sup>おご</sup>りにあらず。思<sup>おも</sup>へば大事<sup>たいじ</sup>の御身<sup>みみ</sup>なれば。世之介<sup>よしのけ</sup>様にも。是程<sup>これほど</sup>の事はとかたりぬ。まことにさる太夫<sup>たふ</sup>に。わけもなき病<sup>ひやうにん</sup>人のあひけるに。又の日は。檜扇<sup>ひやうせん</sup>をもたせらるゝ程<sup>ほど</sup>の御<sup>ご</sup>かたも。それまではあらため給<sup>たま</sup>はず。我都<sup>われみやこ</sup>に歸<sup>かへ</sup>たらば。分別<sup>ぶんべつ</sup>があると。數長櫃<sup>かずながびつ</sup>をこしらえ。遊女<sup>ゆうにょ</sup>參會<sup>さんかい</sup>。入程<sup>いりほど</sup>の諸道具<sup>しよだうぐ</sup>をいれて。ゆくさきく。もたせ侍<sup>さむらい</sup>るとなり

### 當流<sup>たうりう</sup>の男<sup>おとこ</sup>を見しらぬ

都<sup>みやこ</sup>より飛梅<sup>とびうめ</sup>。筑前<sup>ちくぜん</sup>の柳町<sup>やなぎ</sup>を見にまかりぬ。昔<sup>むかし</sup>しは博多<sup>はくた</sup>小女郎<sup>せうによう</sup>と申て。冠<sup>かん</sup>

(五)事件不詳。但し近松門左衛門の博多小女郎浪枕の海賊騒ぎに類した事件か。

(六)誰にしても面白くない。

(七)嚴島。

(八)六月十六日祭禮の日にここに市が立つた。

(九)豊國神社本殿。

(一〇)客同土間の口喧嘩。

(一一)興行浅く。

(一二)浴衣特有の染め模様。

(一三)小唄。糸竹初心集に見える「おかざきじよろしゆはゑい上らうしゆ」といふ唄であらう。

(一四)若みどりといふ小唄集卷三ありまふしの中に「しんきしのだけなやれすのすだれかけておもひはわれひとり」

(一五)誰でも。

(一六)成るべく。

(一七)太鼓女郎。既出。

(一八)粗檜垣。粗い檜垣の模様。

(一九)太織り布。

(二〇)文盲。野暮な風俗。

(二一)遊女仲間の客にわかつぬやう密談する合言葉。

(二二)並大抵でなく。

氣者ありける。人の命を取て。袖の湊の大噪ぎよりこのかたは。夜の道をとめられて。昼さへ門をさして。獨々くぐりよりの出入。然も武士はとがめ侍る。いづれかおもしろからず。比は水無月のはじめ。舟路もこゝろよく安藝のみや嶋に着ぬ。此所の市とて。五里七里の人。こゝにあつまりぬ。神前の千疊じきに。假寝をせし。里の小郷をそゝのかし。芝居子に氣をとられ。遊女の買論。夜屋のわかちもなく。又類ひなき事どもなり。揚屋といふも内あさく。表にみえすき。女郎は浴衣染の帷子に。中紅の肺布を。わざと見せかくる。其初心さ何程。やうく此ほと。岡崎を覺たる手つきして。只やかましき撥をと。しんきしの竹。かけてはすだれと。所のはやり歌。ぎくに笑しく。様子見合て。宿をかりて。どれでもかまはぬ。此所である程いき過て。男ふるほどの。女郎よべと。太鞍は貳人。已上三人双て世之介も。金左衛門勘六一所に。あらひがきの。拾帷子に。ふと布の花色羽織に。さし渡し四寸五分計の紋に。鎌と。輪と。ぬの字を付て。蚊蛇なる出立。わが身ながら。是はく醜ひ物といふ。女郎も笑しがつて。盃も指す。中間であいもんの言葉をつかひ。大形ならずなぶる。折ふし山がつ

(三) 林檎。苹果であらう。但し九州には産しなかつた。  
(四) 他のこと。

(五) 屋内でする職人。

(六) 不思議によく當つた。

(七) 勝ち誇つた様子。

(八) さて。

(三) 芝居の家體を小さく造り、折り疊みの出来るやうにしたもの。

(三) 人形操りの舞臺に關するもの。雍州府志に依ると、上幕と面隠し幕とは同一の様である。人形遣ひの顔の見物席から見えないやうにする幕。首落しは不明。

(三) 六段淨瑠璃中のすべての人形。

(三) 淨瑠璃の外題。山本角太夫の淨瑠璃で、安倍保名が信田森の狐と契つて晴明を生み、晴明後蘆屋道滿と方術争ひして勝つことを綴つてある。

(四) 保名の妻、即ち葛の葉狐。

(三) 風俗。

の手籠に入。檜棚の盛を見せける。それかへとて。晋に付たる。はした錢を授れば。君達声をあげて。ゆふべの事はと。余の事にして笑ひぬ。世之介中にも。子細らしき女に。さてわれくは。何者とみえますといふ。人間と見ゆると申。それはふるひ。商賣はといふ。眞面目から見たてました。疊の上で育つ人じや。たぶんこなたは。筆屋どの。そなたは張箱屋。又は組帶屋殿で。あるべしと。思案しすまして申。さてもく。名譽じや。そこな者が獨。組帶屋が違ふた。兩人はさてもと。おどろく。顔をすれば。なをかつにのる事有。されば人の身持は。たとへいかなる着物にもせよ。晋の物のこしらえ。手足にてあらましみゆる事ぞ。殊更我召つれしは。堀川の勝之丞とて。廣ひ京にもならびなき。小草履取。諸人の目にたつ僕也。是をつるゝ程の者を。かるく思ふは。こゝろのはたらかぬゆへぞ。逆も床に入てもよしなし人形まはしして遊べと。梓箱より。たゞみ家鉢取組。上幕つらがくし首落し。五尺にたらぬ内に。金銀をちりばめ。自由を仕懸。六段ながらの出来坊うごき出ける。去程に。信太妻の女房。江戸風のしよていと申。世之介様それは其まゝ。吉原の。かの太夫さまに。

(三)同一の扮装。

(三)新吉原の揚屋。

(三)けたたましく。

(三)本當の大盡、即ち某大名。

(四)黄色染め。

(四)この人と思ふ人に盃を獻すること。

(一)薄櫻。

(二)勘助島の一部三軒屋町。難波島の對岸に當る。

(三)全歌詞は不詳。

(四)新古今集西行「津の國の難波の春は夢なれや」の枯葉に風わたるなり」

いきうつしといふ。よくも見るやつかなそれに似せて作らせ侍る。此女郎を去大名のしのびて。三人同じ出立にて。市左衛門座敷にして。此内に思召の方へ御盃をと申せしに。すこしもせかずして。神ならぬ身なればゆるし給へと。勝手へ立て。禿に私語。手飼の鶯を取放させ。庭山にけはしく。申くと声を立る。三人一度に。何かと障子をあけて。立出る所を。様子見すまして。本大臣さまへ盃をまいらせける。此首尾いづれもほめて。偷に尋ければ。三人ながら桑染の木綿足袋はかれしに。獨はな緒すれの跡なき御方あり。地を踏給はぬ御方さまいかさまにもと。思ひざしせしと也

### 今爰へ尻が出物

見ぬ所もあれど。遠國の傾城の。曾而おかしからぬに。こりはてゝ。のぼり日和幸に。難波江のうれしや。水串もちかよりて。三軒屋に着ぬ。むかしは爰も。遊女ありて。淡路にかよふ。鹿のまき筆とうたひしが。それも夢なれや。芦の上葉に。龜の初風をとづれて。笛太鼓世間はとかるけし

(五)遊山用の屋形舟。

(六)實在した役者の名。下の松島半彌、坂田小傳次、島川香之介、松本常左衛門、鶴川染之丞、山本勘太郎、岡田吉十郎も同じ。

(七)船中假りに設けた浴場。

(八)生簀。水中に魚を活かす箱。

(九)水上の遊戯。

(一〇)夜空の明るい形容。

(一一)詞花集大中能宣「み垣守衛士のたぐ火の夜はもえて晝は消えつつ物をこそ思へ」の文句を、上の内裏様の縁で利かせてある。

(一二)水の多い、薄い雑炊。

(一三)酒のふざけた飲み方。

(一四)今の有名な四つ橋と同じ場所。

(一五)遊廓なれば、夜の花の名所の意。

(一六)新町廓の町名。

(一七)相當のとしごろの。

きもなく。天下の町人の思ひ出に。御座舟のうちには。外山千之介。小嶋妻之丞。同梅之介など。取のせてゆく。かしこには。松嶋半彌。坂田小傳次。嶋川香之介。盃入日をあらそひ。波立さはぐも心知よし。向ひの岸には。松本常左衛門。鶴川染之丞。山本勘太郎。岡田吉十郎。竿指のべて。尋釣風情詠也。笹簀の假湯殿。鯛鱈の生舟。昼はらく書して。ゆく水に扇流し。夜は花火のうつり。おのづと天も酔り。いやまた。此舟遊び京の山にはまさりしを。内裏様にも見たし。衛士の焼火の薄銅に。燃て。ざつと。水雑水をと。このみしは。下戸のしらぬ事成べし。ひとつなる口なれば。大坂に逗留の中に。一日は野郎もよしや。けふのうらやましさはといふ。声を聞て。世之介ではなひか。誰じや。小倉にかはひがるゝ男と申。してなんと。其後は上へものぼらぬか。まづ咄す事もある。此舟へといふ。何角なしに。乗うつりて皆こゝろやすきつき合。見しつた紋付の小盃にて。てんがう飲。とやかくいふうちに。四ッ橋につけて。あがれといふ。又惡所へか。颯と見て歸らう。是吉野。夜の花じやと。東口より入て。九軒の吉田屋に行は。臺所に年がまへなる男が。白き絹縮に。紅裏付

(一八)横柄。

(一九)吉田屋の女房の名。

(二〇)惜しい。

(二一)客のない遊女。

(二二)世之介にしては珍しい註文。

(二三)恐らく當時名の知られた大盡客。

(二四)定座敷。西鶴名作集に好色盛衰記の「其の頃は色遊びの世盛、市橋が定宿、八疊敷の金の間はまくりて、勝手屏風にありぬ」を引いてゐるのは、好い参考である。

(二五)客座敷の飾り用の硯箱。

(二六)筆架。

(二七)座頭の名。

(二八)三味線新調費の寄附金を客に求める帳簿。

(二九)揚屋の男が土間から、大門の閉ぢられる時刻に、客の歸りを促す詞。

て。廣袖着て。女房共を。横平によびける。おなるに何者かときけば。これの阿爺さまといふ。此二三年も來て。亭主見しらぬも新しい。それは何事も。おなるの利發で。埒があく。まづ今夜の埒は。なんでも目と鼻さへ有女郎ならば。堪忍すると。あまりもの有ほど呼にやる。世之介終に申さぬ望。さる天神を。此前から様子ありと。それを名ざして取よする。大二階にあがれば。南の空より。影のさし入。月もむかし爰に。加賀の三郎などが逢し。太夫市橋が定宿。金の間も湊紙の置張に替りぬ。其時見しは。四尺の長机に。書院硯筆掛香箱。さま／＼の唐物道具置捨てかへれども。誰がひとつ。手にとらすあるに。今は木枕もたらず。煙草あけてゆくやら。吸吸が見えぬ事。よもや禿はとらぬ筈と。おもしろからぬ咄にする内に。城春が三味線の奉加帳。心得た。小判の次手に。なんでも無心は御座らぬかと。悪口いふて。女郎衆はまだか。顔見て立ながら。いなす事じやがといふ。所へ。世之介馴染が御座つた。どこでまいつたやら。さゝ過してみえける。其内に。床をとる。めづらしう寝もせうかと。帯もとかずに厭かきて。思はしからぬ夢みる時。御立と庭から呼立る。罷歸と起

(三〇)二度の放屁をした。

(三一)煙管の火皿。煙草をつめる金具。

(三二)自覺しない放屁をいふ。

出る。女郎は酔が醒ぬと。其まゝありて。暇乞もせず。世之介目覺しに。吸嚔はなさず。つゞけさまに七八ふく。灯にて吞侍る。女郎夜着の下より。尻をつき出すを。不思議に思へば。其あたり響ほどの香ひ。ふたつまでこく所を。火皿にて押えける。覺ありてこきぬる。こゝろ入のさもしさ。思すしらずは釋迦も。こきたまふべし。





# 好色一代男

## 卷六目錄

卅六歲

喰<sup>く</sup>さして袖<sup>そで</sup>のたち<sup>たち</sup>三笠<sup>さんかさ</sup>が事<sup>こと</sup>

卅七歲

身<sup>み</sup>は火<sup>ひ</sup>にくぼるとも  
新<sup>しん</sup>町<sup>まち</sup>夕<sup>ゆふ</sup>ざりが情<sup>なさけ</sup>の事<sup>こと</sup>

卅八歲

心<sup>こころ</sup>中<sup>なかつ</sup>箱<sup>はこ</sup>  
しまばらふちなみ執<sup>しつ</sup>心<sup>しん</sup>の事<sup>こと</sup>

卅九歲

寢<sup>ね</sup>覺<sup>さ</sup>の菜<sup>さい</sup>ごのみ  
御<sup>ご</sup>舟<sup>ふね</sup>がまねのならぬ事<sup>こと</sup>

四十歲

鳴<sup>なり</sup>原<sup>はら</sup>かめは初<sup>はつ</sup>す  
初<sup>はつ</sup>音<sup>おと</sup>正月<sup>しょうげつ</sup>羽織<sup>はおり</sup>の事<sup>こと</sup>

四十一歲

江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>吉<sup>きち</sup>原<sup>はら</sup>はかづけ物<sup>もの</sup>  
吉<sup>きち</sup>原<sup>はら</sup>よし田<sup>でん</sup>が利<sup>り</sup>發<sup>はつ</sup>の事<sup>こと</sup>

四十二歲

野<sup>の</sup>ぜん  
秋<sup>あき</sup>兩<sup>りやう</sup>夫<sup>ふ</sup>に目<sup>め</sup>見<sup>み</sup>ゆる事<sup>こと</sup>

(一)生れつき氣の大様なこと。

(二)風姿。

(三)遊女は道中姿を大事としてゐたが、この妓はその道中姿が他の太夫などと違つてゐた。

(四)遊里の特殊語。色道大鏡に「こなたにはさまで思はぬに、さきよりむりに心やすきふりし、いひたきまゝに云などを、にくしと見る所よりいふことは也」と解してある。

(五)貫祿の不足な男。

(六)馴染んでみると。

(七)宴席の取持ちが賑やかで。

(八)不思議に。

(九)どの客にも。

(一〇)駕籠昇きまでも。

(一一)無理のないやうにし向けて。

(一二)さしきりの盃。

(一三)下々一般の人望はこれで持つた。

(一四)大抵の色戀の沙汰は看過してやる。

(一五)揚屋の傭ひ男。

(一六)世間の惡評をうける。

(一七)他聞を避けて訓誡する。

(一八)遣手の慾一方の勸告は聴かない。

(一九)金銀。太夫など金銀を表面に賤しんだ。

(二〇)深夜まで用事に使はれるのだからとて、居睡りを見逃がしてやること。

# 喰さして袖の橘

情あつて。大氣に生れつき。風俗太夫職にそなはつて。衣裳よくきこなし。道中たいていに替り。すこしすしに見えて。幅のなき男は。おそれてあふ事希也。取入てはよき事。おほき人にして。座配にきやかに。床しめやかに。名譽。おもひを残させ。別るゝよりはや。重てあふ迄の日を。いづれの敵にも。待兼させ。召連の者。駕籠までも。嵐ふく夜は。わざとならぬ。首尾に仕懸て。さし捨の盃。御ころさしは。是でもつた。太鞍女良にも大形成わけは見ゆるし。宿の男などとの事は。末に名の立を。ひそかにしめし。やり手がよく計の。算用もきかず。いやしき物は手にもたず。禿が眠るをもしからず。夜更過る迄。用の事ありてあのはすと。万よしなに申なしては。よろこばせ。太夫さまの事ならばと。常々思はせて置。點しき子細ありける。世之介は其年々宿も定めず。權左衛門方にて。みかさにあいそめ。何事も命ぎりと申あはせて。初の程はおもしろく。中程はおかしく。後は氣毒かさなり。宿よりは前廉の書出し。親方

(二五)平生禿などを尊義で手なづけておいて、陰で情夫に會ふ時にこれを利用するやうな小狡いところもある。  
 (二六)この話の首から某太夫とある。その妓の名をあらはに出したものの。  
 (二七)みかさと世之介の關係を三段に分けてある。  
 (二八)前からの借金、即ち勘定の未拂ひの請求書。  
 (二九)關係を邪魔される。  
 (三〇)萬一の僥倖で金銀を手に入れる事。  
 (三一)加越能の藩主前田家をいふのであらう。百萬石の大名だから、その一言でわが借金はどうにでもなるはず。それの出來ないのが残念の意。  
 (三二)金銀の面影。  
 (三三)世之介の忍び來る時刻。  
 (三四)客の變名であらう。  
 (三五)不快な意。  
 (三六)對手の敬稱。  
 (三七)關係を絶つて。  
 (三八)五月の蜜柑は時節はづれである。それで若し五月雨の候といふことを忘れたら、盛りの時節の物と思ふやうな見事な蜜柑。  
 (三九)ちよつと食べかけた。  
 (四〇)蜜柑の袋を毛髪で括つて猿の形を作る遊戲。

よりはせかるゝ。死なふならば。今なれども。太夫がおもはくを見捨兼。  
 自由にあはれぬ人目をしのひ。今すこしききに。爰を通つたあとぞと。其道すぢを。行ては歸り。もしもかゝるくら間に。鬼の落した。小判もがな。加賀殿の。お言葉ひとつで。濟事じやにと。おもふて甲斐なき。欲先だつて。まぼろしにも。面影をみる事千度也。又いつもの時分とて。太夫のび出て。今宵は中立賣の。竹屋の七さまの一座に。紀房の人。きちじよに。はじめて出合。おもはしからず。きさまの事をあらため。是非にみきれとはつらし。是が見かぎらるゝ物かと。左の袖口より。手をさし入。脇腹をいたくは。つめらす。泪まじりのそら。五月雨の比忘れては。盛か  
 と見し。蜜柑ひとつ。我口添し跡ながら。手から手に渡して。かたさまは覺てか。過にし穢。自が黒髪を。ぬかせられ。猿などして遊ひし夜は。誰しのぶともなくさはぎて。あんま取の休齋が。二階より落てと。はや口にかたるうちに。太夫さまはと。声／＼に尋ねこそ。身に答て悲しく。あすの夜は。人見の見ゆるうちも。くるしからずと。なき別しに。門をしめるとよははる。或は主持。さはりある人。かへるにまぎれて。出口のあ

(三七)廊の大門を閉ぢる。

(三八)大門口。

(三九)以前ここに見送られた記憶に對して残念に思ふ。

(四〇)先斗町。京都市東山區。

(四一)土間働きの下女にして。

(四二)仕立直しの着物。

(四三)豆腐の殻。

(四四)十一月。

(四五)五日間、七日間もの意。

(四六)遊里の詞としては男女兩方よりその對手をいふ。

(四七)自分の悪いことを知つてゐるから、逃げ隠れはしない。

(四八)死装束。

(四九)一緒に駈けつけ。

(五〇)圓滿に解決して。

んどんうるさく。横貞<sup>よこさだ</sup>して走出<sup>でしで</sup>。むかしはと口惜<sup>くちおし</sup>く。ぼんと町の小宿<sup>こしゆく</sup>にかへりぬ。かくれなき沙汰<sup>さた</sup>して。太夫折檻<sup>せうかん</sup>すれども。止<sup>やめ</sup>ず。むごうあたれども。なを聞<sup>き</sup>ず。せんかたなく。庭<sup>には</sup>におろして木綿<sup>もめん</sup>のときあけ物をきせて。味噌<sup>みそ</sup>こしを持<sup>も</sup>たせ。豆腐<sup>とうふ</sup>より出し。こまかなる物を。買<sup>か</sup>につかはしけるに。是<sup>は</sup>をも恥<sup>は</sup>ず。おもふ人故<sup>ゆへ</sup>なればと。其年<sup>そのとし</sup>の雪見月<sup>ゆきみづき</sup>。はしめてふり積<sup>つ</sup>る。にくさもつもりて。丸裸<sup>まるはだか</sup>になして。廣庭<sup>ひろには</sup>の柳<sup>やなぎ</sup>に。くもり付<sup>つ</sup>て。重而<sup>かさねて</sup>あひ見る事<sup>こと</sup>是<sup>これ</sup>でも。やめぬかと。責<sup>せめて</sup>而も。あふましきとはいはず。死<sup>し</sup>ぬるをきはめ。五七日<sup>四五</sup>もしよくじをたつて。或日<sup>あるひ</sup>泪<sup>なみだ</sup>をこぼすを。妹女<sup>いもめ</sup>郎<sup>らう</sup>が。見る目も情<sup>なさけ</sup>なしと申<sup>まを</sup>せば。我身<sup>わがみ</sup>の成行<sup>なりゆき</sup>を思<sup>おも</sup>ひし。泪<sup>なみだ</sup>にはあらず。是程<sup>ほど</sup>におもふとは。よもや敵<sup>てき</sup>さまは。しらすやと申<sup>まを</sup>せし所<sup>ところ</sup>へ。匂<sup>にお</sup>ひ油賣<sup>あぶらうり</sup>の。太左衛門<sup>たさゑもん</sup>是<sup>これ</sup>を歎<sup>なげ</sup>きぬ。此<sup>この</sup>ものは世<sup>よ</sup>之<sup>の</sup>介<sup>け</sup>方<sup>ほう</sup>へも。年比<sup>としごう</sup>出入<sup>でいり</sup>をおもひ合<sup>あ</sup>。此<sup>この</sup>繩<sup>なは</sup>をときて給<sup>たま</sup>はれ。我身<sup>わがみ</sup>あしきを覺<sup>おぼ</sup>侍<sup>へ</sup>ると。繩<sup>なは</sup>をとかして。白編子<sup>しろりんず</sup>の二布<sup>ふたの</sup>引き。右<sup>みぎ</sup>の小指<sup>こゆび</sup>を喰<sup>く</sup>きり。心のまゝ書<sup>か</sup>つゝけて。頼<sup>たの</sup>むと太左衛門<sup>たさゑもん</sup>に渡<sup>わた</sup>して。もとのこしく成<sup>な</sup>て。けふをかぎりに。舌<sup>した</sup>かみきる所<sup>ところ</sup>へ。世<sup>よ</sup>之<sup>の</sup>介<sup>け</sup>是<sup>これ</sup>を聞<sup>き</sup>もあへず。死<sup>し</sup>出立<sup>でたち</sup>にて。かけこみしを。おのく懸合<sup>かけあはせ</sup>。義理<sup>ぎり</sup>をつめ。至極<sup>しごく</sup>にあつかひ。

- (一) 生玉神社前の池。この池の蓮花は大坂名物の一つであつた。
- (二) 蓮の花を切ること。
- (三) 鎌で蓮を切る刃の音。
- (四) 遊廓新町の町名。
- (五) 遊女屋。
- (六) 寢覺め揚げ重。遊山に辨當詰め物して携行する重箱。
- (七) 黍餅。
- (八) 揚屋と察する。
- (九) 揚屋の名。
- (一〇) 西鶴名作集には子孫大黒柱に依つて、二代目岩井半四郎の手代と推測してある。
- (一一) 大阪道化役者。
- (一二) 陸と橋でつないだ島。
- (一三) 伊達政宗の作と傳へる「さんざ時雨か、菅野の雨か、音もせで來て濡れかゝる」。この歌のしよがいな節は當時流行したものである。
- (一四) 拍子の揃つたことに、五人の粹人がよく揃つたことを懸けてある。
- (一五) 利けもの。
- (一六) 遊女の手管についての批判。
- (一七) 萬事打明け、また妓についても彼此の鼻眞心なしに。
- (一八) 太夫の名。年季の終に近づいてゐる意を懸けてある。

其後太夫を手に入侍る。かゝる心底。又あるまじ大坂屋のやつこみかさと。名をのこしぬ

### 身は火にくばるこも

生玉の御池の蓮葉。毎年七月十一日に。かる事ありて。汀に小舟をうかめ。鎌のは音におどろく。鯉鮒。泥龜のさはぎ。鳶鳥を。追まはし。罪も神前も。忘れ果て。おもしろや。其日は越後町。扇屋のあるじ。龜の寢覺に。もろこし餅。酒など持せて。友とせし人。住吉屋の何。吉田屋の誰。の平といへるおのこ。佐渡嶋傳八。世之介まじりに。東南の嶋崎に。居流れて松の木陰は。時雨の雨か。ぬれ懸るかゝると。はやり哥同し口拍子に。なんでも是は。よう揃た。五人ながら。今の世のきゝ男。手くたの勘定。懷にありし。文をみるに。ひとつも返事はなし。皆女良のかたより。思ひをつくしての數く。うき勤の身にも。ほれたといふ事。うれしく思へばなり。色道まれもの。寄たこそ幸。万隠しづくなし。鼻眞なしに。今での。太夫の品定め。けふの暮までのなくさみ。入日も背山にかた

## (一九) 缺點。

## (二〇) 過失を見せず。

## (二一) お洒落で。

## (二二) 少し鋭に。

## (二三) 爪はづれ。指。手の先き。

ふき。名残おしきは。今すこしの年前。小作り成こをおもひど。顔うつくしく。け高く。心立もかしこし。大橋は。せい高くうるはしく。目つきすどやかに。口つき賤しく。道中思はしからず。座につきての有様。哥よまぬ小町に等しく。心さはよはくとして。諸事。禿のしゆんが。智恵をかすぞかし。お琴は。ふつゝか成貌。いやらしき所。それをすく人も有。万かしこ過て。欲ふかく。首すぢの出来物。ひとつの數也。一座のさばき。終に怪我を見付ず。どこやらに。よき風義そなはりぬ。朝妻は。立のびて腰つきに。人のおもひつく所も有。脇顔うつくしく。鼻すぢも指通つて。氣毒は其穴。くろき事煤はきの。手傳かと。おもはる。され共花車かつて。おとなしく。すこしすんに。みゆる時もあり。いつれか太夫にして。いやとはいはじ。朝日より。晦日までの勤。屋内繁昌の。神代このかた。又類ひなき。御傾城の鏡。姿をみるまでもなし。髪を結ふまでもなし。地顔素足の。尋常。はづれゆたかに。ほそく。なり恰合。しとやかに。しゝのつて。眼ざしぬからず。物ごしよく。はだへ雪をあらそひ。床上手にして。名譽の。好にて。命をとる所あつて。あかず酒飲て。哥に声

(四)書き手。上手。

(五)情を受けた。會うた。

(六)わが身の體面を考へる人。

(七)聲高に抗辯などしたものが。

(八)人に笑はれ、人を笑はせるを本業とする道化役者傳八も。

よく。琴の彈手。三味線は得もの。一座のこなし。文づかけ高く。長ぶんの書て。物をもらはず。物を惜まず。情ふかくて。手くだの名人。是は誰が事と。申せば。五人一度に。夕霧より外に。日本廣しと申せ共。此君く」と口を揃えて譽ける。いつれも。情にあづかりし。過にし事共。語るに。あるは命を。捨る程になれば。道理を語て。遠ざかり。名の立かゝれば。了簡してやめさせ。つのれば。義理をつめて。見ばなし。身おもふ人には。世の事を異見し。女房のある男には。うらむべき程を。合点させ。魚屋の長兵衛にも。手をにぎらせ。八百屋五郎八までも。言葉をよくこばせ。只此女郎の。人をすてずに。まこと成こゝろを思日合。はじめの程は。高声せしが。いつとなく。靜に成て。いつれか涙を。こぼさぬはなし。人に笑しかられ。人に笑はるゝを。ほんとする傳八も。此太夫さまにはと。なづみぬ。是を聞に。其座にたまり兼て。作りわづらひして。人より先に歸りおもふ程を。書くどきて。よすがを求つかはしける。雨の夜風の夜。雪の道をもわけて。此戀かなふ迄と通へば。心の程を見定。其年の十二月廿五日。さも閑しき折ふし。けふこそしのべとの。御内證。さる揚

△(九)奥の用を達す女中。

△(三〇)寒さの烈しいこと。

△(三一)店から座敷へ呼繼ぎに傳へた。

△(三二)火燵の火を消させた先刻の用意を考合はせ。

△(三三)權七が怪しむやうに。

屋に。いつよりははやく。御出あつて。待給ふこそ嬉しく。上する女に。心をあはせ。小座敷に入て語りぬ。如何思召しけん。火燵の火を消せて。折柄のはげしきに。是をふしぎに。思ひながら。數くわけもない事共して。興ある所へ。其日のお敵。權七さま御出と。呼つぎぬ。すこしもせかず。火燵の下へ隠れけるこそ。最前をおもひ合て。かしこき御心入。忝くて。譬。やけ死ぬるとも。爰ぞかし。彼男。不思議のたつやうに。べつの事もなき。文持ながら。臺所へ。逃られしを。男追掛みる。見せぬのあらそひ。屢し隙入うちに。世之介は裏へ。戀のぬけ道有ける

心中箱

- △(一)色道大鏡に「抑達人の家に心中箱といふ物あり。指爪、誓紙等をあつめ入る箱なり」とある。
- △(二)四條河原の納涼の設備。
- △(三)柳の馬場。京都の町の名。
- △(四)一緒に手に持ち。
- △(五)人を罵る語。心易さからいつた意。
- △(六)長七自身の妻。
- △(七)臨時雇ひの腰元。

風待暮。河原の涼み床を。見わたせば。柳の場々の。長七提煙草盆に。大團を持ませ。人たづぬる風情。やれ。うつけもの。外より見ての笑しさ。誰をか慕ふと。きけば。物いはす笑ふて。指さす方に。我が女房を。常ならぬ。出立。やとひ腰本。やとひ下女。おのれも。與七になつて。主あしらひ。是は替つた仕出しと。様子を問へば。日來は手づから。食を焼



△八〇自分の妻を主人扱いにすること。  
△九〇趣向。

△一〇世間は他所向き、内證は家内のこと。  
△二〇身分ある人の奥様並みに。

△三〇戀からの夫婦仲。

△四〇少々の貯金。

△五〇渡世のつらさ。

△六〇夫婦顔を寄せ合はせて、異しみを話してゐる。

△七〇極秘の大切な物。

△八〇小さい座敷。

△九〇起請文。

せ。釣瓶繩を。たぐりあぐるも。此男をおもふ故ぞかし。毎夜更て歸れども。一度も戸を。たゝかせず明て。今宵は。待兼ねうち。はやきお仕舞。御機嫌は。首尾はと。世間内證ともに。心を付ぬる。かはゆさに。責めつけこそ。人のおかさま並に。被をきせて出懸。暮たらば。あの姿を其まゝ。横にこかして。我世の思ひ出さす事なり。いつも独寝のうらみ。いはねばこそなれ。太鞍持の女房には。成まじき。物とおもふぞかし。尤も長七がいふ所。まことに。此女は。もと彼里にて。藤なみにつきし。はるといへる。やり手なり。互におもしろつくの。御えんへん。春がもらひためし。少金はへらさぬかといへば。長七苦ひ顔して。それはいつの事。まだ子をむまいで仕合と。身ぶるひして。世のからき事を語る。是からすぐに。我方にて。夜ともに。昔しを聞たし。きかせ度事もありとて。伴ひ人まれ成。奥座敷に入れば。あしからぬ匂ひ。しきりに。油嗅きは。かゝなんと。合点がゆかぬと。夫婦。鼻つき合ありけるに。けふは傳受物の。土用ほしすると。仰られける。小書院に一つの箱あり。上書に。御心中箱。承應貳年より。已來としるして。此中に。女郎わか衆。かための證文。大

(一九)大抵は血書のもの。

(二〇)遊女から起請文と同意味で客に贈つた、わが毛髪。

(二一)これも起請文と同意で贈つた生爪。

(二二)寺院の梵鐘を鑄造に當り、信者達が各種の金物を寄進して鑄つぶさせた。それに一々寄進者の名が附けてあつた。この有様に比していつてある。

(二三)これも本尊佛に結縁するため、信者達が善の綱と稱する糸を本尊の御手にかけて持つた。それを世之介一人に多くの女の關係のあつたことに比してある。

(二四)遊女達が自分達の緋無垢の衣に文句を自書して贈つたもの。

(二五)自分の血で染めた白無垢。

(二六)後朝の情を記した着物。

(二七)未詳。

(二八)腰巻の布を天地に、帶を左右の布に

して作つた懸物。

(二九)遊女の肖像繪。

(三〇)執念。怨み。

(三一)縮緬の織出し模様のあるもの。

形は血文なり。床柱より。琴の糸を引はえ。女にきらせたる黒髪。八十三迄は。名札を讀ぬ。其跡は計るに。暇なし。右のかたの。違棚の下に。肉つきの爪。數をしらず。其外服紗に。包し物。山のごとし。是も何ぞで有べし。只此有様は。執心の鐘鐺の場。善の綱かとおもはれ。なを御次の間をみれば。らく書の緋むく。血しぼりのしろむく。後の朝の名残を。そめくと。書つゝけたる着物。十六形の地紫。あれは。花崎さまの念記。紋つきの。三味線。きやふを。上下。帶を中へりにして。委繪の懸物。其かぎりなく。是程までは。おほくの女に。思ひをさせ。執着御のがれあるまじと。申言葉の下より。床の上なるかもじ。忽四方へさばけ。のひては縮み。二三度飛あがりて。物いはぬ計。生あるけしき。みるに身の毛たつて。おそろしく。是はと尋ければ。是ははるも覺があらう。段々わけあつて。藤なみにきらせたる。髪と爪也。中にも。今にわすれねば。かく置所までを。うす高く。假にも。化には思はず。或時は夢。或時はまぼろし。又は現に見えて。今請られてゐる。男の首尾かたる。更にあはぬとはおもはず。人には咄れぬ事までもありて。殊に前夜の。別れさまに。織出

(三) 恍惚として見とれるほど似合はしい  
羽織。ぬけるは魂の脱ける。

(三) 夢中の縮縮縮が實際にここに在る。

(三) 藤波様の略。かかる省略は當時遊里  
の風習。

(三) これも藤波様の略。

(一) 新町廓の揚屋。

(二) 後の文で世之介と御母と知られる。

しの鳴縮縮。貴様にきせたらば、ぬけるほとよき。羽織ならんと。置て歸る。夢にもせよ。是があるこそ不思議。是をかたらうとおもふて。よれとは申侍る。春も。長七もおどろき。誠に藤さまは。いかなる事にや。かたさまには。身捨。命を惜み給はず。此事京都に。隠れもなしと。語り捨て。それより春は。藤浪さまへ見舞へば。かの縮縮。一卷見えぬはと。せんさく半へ行懸り。偷になみさまへ。様子語れば。太夫泪をながし。いかにも世之介様に。是をとおもひし。心の通ひけるか。寐ても覺ても。忘れねば。ながらえて。此勤せんなしと。手つから髻をはらひ。出家の望の暇を申。世上を見限り。尼寺に懸こみ。願ひの道に入ぬ。女良一代のほまれ。勝てかそえ難し。

### 寢覺の榮好

京屋仁左衛門が。自慢せし。庭の松さへ。枝おれて。すこしは惜まるゝ夜の大雪。おのつから。風がのまする酒に成て。さあ。是からは。枕かる山。蒲團に肌もつけあへず。同じ寝姿。つれ寝。いつとなく。出てけり。

(三)同室に寝ること。

(四)わが言に偽りのない。きつと。

(五)慌てて言ひわけしてさわぐ。

(六)世間體を思ふから。

(七)自殺もしさうなさま。

(八)漸く説得し、元氣づけて。

(九)太夫の道中には、男が傘をさしかけた。

(一〇)遊女の去つた後の座敷の淋しさ。

(一一)遊女屋からそれぞれ遣はす迎への使

あい床には。新屋の金太夫。植屋の万作にきかれて。笑はるゝもしらず。こゝろよく。夢ひとつ二つ見しうちに。御舟額に浪立。眼をひらき。声あらく。弓矢八幡。大事は今。七左さまのがさじと。左の肩さきに。かみつき。齒ぎりして。こぼす泪雨のごとし。是をおどろき。我は世之介なるがと。せはしく断てどよめば。御舟まことの。夢覺て。何事も。御ゆるし有べし。我がうき名。隠す迄もなし。丸屋七左衛門との。現に目みえて。世をおもふゆへに。戀をやむるとの一言。さりとは悲しく。今の有様はづかしやと。身もすつる程のけしき。漸くいさめて。かく馴めしより。己來の難義を聞に。またの世につゞきて。出来まじき女なり。起別るゝ風情も。しとやかに。さゝもよき程に飲なし。よびましやといふ声も。更に聞いれず。客こゝろを。のこさぬ迄ありて。内義女房共にも。うれしかる程の。暇請。塗下駄のをと靜に。さしかけから笠もれて。ふる雪袖をいとはす。大やう成。道中何とて京にては。太夫にはせなんだぞ。尤うつくしからず。たはけとも。太夫は。それによるものかと。歸さのうしろ姿を。詠盡し。独さひしき。二階にあかれは。迎の遅き女郎茶釜近くあつまり

- (三)置いてある膳箱を邪魔にしてゐる。
- (四)座頭の名。
- (五)臺所に設けた横木で、それに食料品を掛けておくもの。
- (六)遊女達の仕うち可憐しさに、生命のないものも動き出したり躍つたりしさに思はれる。
- (七)ここを立つて各家に歸る時。

(八)大阪に近い淀川南岸の一部落。

(九)綾絹。

(一〇)小判のこと。

(一一)盗難などの多い十二月の夜行。

(一二)人の目の届かないところ。

(一三)新町廓の町名。

(一四)遊女屋の格子内に。

(一五)ねむた聲。

(一六)眞名經。

(一七)話の前後。

(一八)一々聞き覚えある遊女達の聲。

て。取置とくおき腕箱わんげうの。じやまなし。こゝりこゝり鮎あやの。鉢はちをあらし。湯ゆの水のと。口の隙ひまなく。丸盆まるぼん割わりて。さらぬ鉢はちに直なし置置き。城浪じやうなみが。三味線さんみせんふみおりて。しらぬ顔かほにして。置所おきどころかへらるゝなど。くらがりより。見ての笑わらしさ。肴さかな懸かけの。千鳥せんぢう賊めも動き。煎海鼠いりこも。躍おどほと。の事ぞかし。立たさまに。着物きものひとつになり。或あるは下上げかみに着替か。軒のきの玉水たまみづに。おどろき。責せめ而して。門口もんぐち計はかりには。竹樋ひを。懸かけられう事じや。氣きのつかぬ仁左衛門にざゑもんと。声高こゑたかにのしり。賤いやしき事ぞかし。或太夫わたりは吉田屋きちだやにて。毛馬けうまの里人りじんの。緋縮緬ひぢくめんの下帶おな。無理取むりとりにして。あけの日はやく。胸布むすふにせらるゝとや。去太夫きわたりは。肌はだにあやけんと巾着きんちやくはなさず。其中そのうちには。黄色きいろにして。飯櫃いひひつなりなる物。したゝか入いて置れしを。みる子細しさいあつて。用心時ようしんときの夜道よみち。こゝろもとなきと申せし事ぞかし。此心根こころねいやな事にぞ有ける。此外見たうとがめて。五とせあまりの事共其かぎりしらず。名を書事なをきもむごし。只影ただかげを著かみ給たまへと。人のいふ事よく。合点あてんする。女郎ぢやうらうにうなづかせて行いに。越後町えちごまちの北きたかわ。中程ちゆうほどの隔子かかしに。寢覺ねさめかち成声なりこゑして。學經まなかつねの指身さしみが。喰くたいと。いはれし。尾おもかしらしもしらず。是は聞所きこどころじや。いづれもだまれと。耳みみの穴あなひろげて。ひとつ

(二九)土塙。

(三〇)柔かく煮て、汁を含ませた煮物。

(三一)仕出し料理屋か。

(三二)帆船の形した容器。

(三三)不詳。

(三四)遊女の名。好色盛衰記にこの妓の出處のことが見えてゐる。

(三五)遊女の名。

(三六)或人の悪戯。

(三七)遊女か。

(三八)御華足。佛前に供物を盛る足高盆。

(三九)誰のことか不明。

(一)遊里通ひの鴛籠。

(二)鴛籠異き。

(三)丹波街道の出口で、島原通ひのため茶屋のあつた所。

(四)新年の慶びの言葉。

(五)丹波口から島原大門への中間の野。

(六)太夫らの揚屋へ禮回りする晴れ姿の美しさ。

(七)島原大門口の茶屋。

(八)茶屋主人の名か。

(九)大福茶。元日早朝飲む茶で、煎茶に昆布梅干など入れたもの。

く覺<sup>おぼ</sup>侍る。太夫殿の声として。おれはくるみあえの。餅<sup>もち</sup>をあく程<sup>ほど</sup>とあれば。又のぞみ替て。庭島<sup>にわじま</sup>の骨ぬき。或<sup>ある</sup>は山の芋<sup>いも</sup>のにしめ。つちくれ塙<sup>はたけ</sup>。芹<sup>せり</sup>やき。あるへいたう。生貝<sup>なまかい</sup>のふくら煎<sup>いり</sup>を。川口屋<sup>かわぐちや</sup>の。帆船<sup>はんせん</sup>の。重箱<sup>じゆうせう</sup>に一ぱいと。思ひく<sup>おもひく</sup>に。好まるこそ笑<sup>わら</sup>し。是をきいたか。初音<sup>はつおん</sup>の。太兵衛まじりに。四人口<sup>しにんぐち</sup>を揃<sup>そろ</sup>えて。おもひ出<sup>で</sup>申<sup>まう</sup>ましたと。笑<sup>わら</sup>ひ捨て<sup>すて</sup>ぞかへりぬ。過<sup>す</sup>にし夏<sup>なつ</sup>。よし岡<sup>おか</sup>に。西瓜<sup>すいか</sup>ふるまひ。出齒<sup>では</sup>をあらはし。妻木<sup>つまぎ</sup>に。海藻凝<sup>きり</sup>を喰<sup>く</sup>はせ。むまひなあと。いはせし事も。人<sup>ひと</sup>の仕業<sup>しわざ</sup>ぞかし。一とせ住吉屋<sup>すまきや</sup>の納戸<sup>なと</sup>にして。きぬかへ。初雪<sup>はつゆき</sup>。火燵<sup>かたう</sup>の火にて。おけそくの。團子<sup>だんご</sup>を。手にふれ。茶事<sup>ちや</sup>せし事見て興<sup>き</sup>あり。女<sup>を</sup>のまじはりさもあるへしと。伏見堀<sup>ふしみほり</sup>の惡<sup>わる</sup>口<sup>くち</sup>いひも。これをよしとぞ申侍<sup>まうし</sup>る

詠<sup>なみ</sup>は初姿<sup>はつすた</sup>

姿<sup>すた</sup>の人物<sup>にぶつ</sup>。おろせがいそけば。丹波口<sup>たんはくち</sup>の初朝<sup>はつあさ</sup>。小六<sup>せうろく</sup>が罷出<sup>はで</sup>て。御慶<sup>ごけい</sup>と申<sup>まう</sup>納<sup>な</sup>。朱雀<sup>すざく</sup>の野邊<sup>のべ</sup>近く。はや鶯<sup>うぐひす</sup>の。初音<sup>はつおん</sup>といふ太夫<sup>たふ</sup>の。けふの礼<sup>れい</sup>を見いで。はと。出口<sup>でぐち</sup>の茶屋<sup>ちやや</sup>に。腰懸<sup>こしかけ</sup>ながら。さこか。大福祝<sup>おほふくいは</sup>ふて三度<sup>さんど</sup>。御さりませ

(一〇)揚屋の亭主。

(一一)ありますの變化。廓詞。

(一二)人を強く魅する美しい顔。

(一三)散らし模様。

(一四)金銀など五つの色の切付け模様。物の形(こゝでは羽子板、破魔弓など)を切った金銀紙を貼り付けて、衣裳の模様としたもの。

(一五)染め形であらう。

(一六)鷺。

(一七)遊女道中の歩き風。

(一八)遊女屋またその主。

(一九)ほめておだてて。

(二〇)堅くなること。

(二一)得意な風をいふ。

(二二)このままでは置かれまい。

いと。御使誰しや鶴屋の傳左かたより。であんすあんすと申。さらば。それへいかふかの。揚屋町に。さし懸れば。人の命をとる面影。あれは小太夫さま。是は野風さま。それは初音様と申。春めきて。空色の御はたつき。中にはかば縹子に。こほれ梅のちらし。上は緋緞子に。五色のきり付。はね羽子板。破魔弓。玉ひかりをかさり。かたには注連縄。ゆづり葉。おもひ葉。數をつくし。紫の羽織に。紅の絆紐を。結びさげ。立木の白梅に。名をなく鳥をとまらせ。ぬきあしの。ぬめり道中。見てなを。戀をもとむる。女郎はうは。氣らしく見えて。心のかしこきが上物と。くつはの。又市が申せし。さも有へし。正月廿五日までは。もらひもならず。やうく廿六日七日を定。はしめて。あいさつ。折節はかたさまも目馴て。となたか。あはせらるゝ人の仕合。よき風なる殿ふりと。かしらから。いたゝかせて。皆うれしがらせ。こなたから申事。跡に成て。おのづから。身のたしなみ出来て。言葉もせまり。汗をかきて。座つきむつかしくなつて。酒もでかしだてに飲て。伽羅も惜まず焼すて。中二階の。古きに氣をつけ。亭主よひ出し。是では置れじと。普請をうけあひ。口鼻

(三) 上等の三味線を奮發してやる。

(四) 太夫へのほこりにする全盛ぶり。

(五) 初心な。

(六) 自分の妻へ愛を見せる振舞をするこ  
と。

(七) 迷惑がつて。

(八) 無用な贅澤をしようとする所を。

(九) 不思議に粹な。

(一〇) 神でも愚かな神はこの女に騙される  
であらう。

(一一) 合噺。

(一二) そこまで來ること。

(一三) 太夫附屬の圍女郎。

によき物をとらせ投ぶしうたふ女に。したんの接棹をはづみ。太夫手前  
の。全盛。すこし前かたなる。おかた狂ひのやうに見えて。伴ひし金右衛  
門も。きのどくがりて。奢出る所を。幾度かまぎらかしける。世之介日來  
は。名譽の上手なれども。又初音が座配。世間の格をはなれ。外の太夫  
の。手のとどく事にもあらず。しめやかになれば笑はせ。すいらしき男は  
はまらせ。初心なる人には。泪こぼさせて。よろこばし。一度く。仕  
懸の替る事。うろたへたる。神もだまされ給ふへし。まして人間の智恵  
に。およびなき女郎也。床の手たれ賤しからず。今宵は眠きなど。そこ  
に氣をつけさせ。身ごしらえに立せたまふを。金右衛門こゝろを。配りて  
みるに。鵜飼百度。髪いそかすなで付させ。香炉ふたつを。兩袖にとど  
め。室の八嶋と書付の有し箱より。立のぼる煙を。すそにつみこめ。鏡  
に横良までをうつし。小座敷に。指かゝり。しきりの。襖明させて。引ふ  
ねの女は。あとにかへし。禿計を。召つれ。とし火のうつり。枕近く立よ  
り。それく申く。めつらしき。蜘蛛がくと。申されければ。世の介夢  
おとろき。いやな事と。起あがる所を。しかとしめつけ。女郎蜘蛛が。取つ



(三) 床を起き騒いで踏まれた。

(二) 諺。京は容色の美を以て勝り、江戸は遊女の張りを以て特徴とし、大阪は揚屋の設備を以て勝つてゐたことをいふ。但しこれに「長崎の衣裳着せて」を加へたものもある。長崎は唯一の貿易港として衣類の華美であつたのである。

(二) 風俗。

きますといひさま。帯とかせ。我もときて。是がわるひかと。肌まで引よせ。うしろを。さすりおろして。今まではどの女が。こゝらを。いらひ候

もしらずと。下帯のそこまで。手の行時きゆるかとし。今はたまり兼ね。断りなしに。腹の上にのり懸れば。下より胸をおさえて。是は聊尔な

さるゝといふ。堪忍ならぬ。ゆるし給へといふ。又時節も有べし。先今晚

はといふ。世之介せんかたなく。かやうの事にて。江戸にてもおろされ。

無念今にあり。独はおられず。貴様に抱おろされてならば。おりやうと

いふ。兎や角いふうちに。かんじんの物。くなつきて。用に立難し。是非

なくおるゝを。初音下より。兩の耳捕へ。人の腹の上に。今迄ありなが

ら。只はおろさぬと。こゝろよく首尾をさせける。まれ成床ぶりなり。跡

口舌して。起さはぎて。踏れける。何か申て。氣に違ひける。しらずかし

### 句ひはかづけ物

京の女郎に。江戸の張を。もたせ。大坂の揚屋で。あはば。此上。何か

有べし。爰に吉原の名物。よし田といへる。口舌の上手あり。風義は一文

(三) 島原の遊女。

(四) 遊女の名を詠み込んだ發句。

(五) 客の名を詠み込んだ脇の附句。

(六) 唄がうたへ、三味線が弾ける。

(七) 誰ともわからぬが、後世之介となつてゐる。

(八) 仕向け方。

(九) 遊女に指を切らせたり、また小指の生爪を放させたりして、實意を誓はせたこと。

(一〇) 眞の愛情と變つて。

(一一) 妓との關係を絶つこと。

(一二) 難癖をつけ、難題を持ちかける。

(一三) 體よく縁を切つて。

(一四) 揚屋。

(一五) 横車を押す。

(一六) 機嫌をそこなはない。

(一七) 無理に妓を苦しめて酒を飲む。

(一八) 酒の燗鍋からこぼれるさま。

(一九) 流れる酒を堰き止めても止まらぬ。

(二〇) 上前(うはまへ)の糖。

(二一) 残らすしみ込ませ。

字屋じやの。金太夫きんたふに。見ますべし。手は野風のふう程書かて。然しかも哥道かだうに。こゝろさし深ふかし。或時あるとき飛入とひいといへる。俳諧はいかい師し。涼すずしさや夕ゆふよし田でが座敷ざしきつきと。有あに。螢ほたる飛入とひい我床われどのうちと。即座そくざの脇わき。是にかぎらす。毎度まいど聞きふれし事ことぞかし。一いふしうたふて。引ひて。自然しぜんと此勤このつとめに。そなはりし女をなり。万まかしこき事こと。おもひの外ほか也。山の手てのさる御方ごほう殊更ことさらに。不便ふびんがらせたまひ。數々いくくかたしけなき。御おしなし。いやといはれす。外ほかをやめて。指ゆびに疵きずなどつけて。まことのこゝろになつて。御尤おいそ愛いとしさもます時とき。さる太夫たふを戀こ初はじめ。よし田でのきはを。色々いろ仕懸かたまへども。一つも。憎にくむべき事ことあらす。或暮あるくれ方に。小柄屋こづみやの小兵衛斗こへい。召連めしづれられ。何なにによらす。けふをかぎりに。難義なんぎを申懸まか。手てをよく退ひて。あそびを。替かるぞいそげと。清十郎方せいじうに行いて。太夫たふにあひて。抑おさより横よこをゆけ共ども。はや。合点かてんして。すこしも氣きやふらす。常つねの酒さかぶり。かさね飲のみになつて。無理むりを肴さかなに。なすぞかし。大じんわざと。醉狂すいきやうして。あたりあらく踏立ふみだて。間鍋かんなべより。漣波さなみたつて。いと見ぐるしく。小兵衛こへい。はな紙かみにて。せけ共どもとまらず。よし田でが上うへがへの。裙つばまで流ながれよる時とき。禿かぶらの小林こばやし。我われぬぎ置をし。黒茶宇くろちやうの。きる物ものにて。殘のこら

(三) 無言の内に稱揚する。

(三) 蘇東坡、春夜待中の「春宵一刻直千金」の句のもぢり。衣服一枚を捨てた功。金一枚は七兩二分。

(四) 鄭の灯の花と點する時刻。

(五) 放屁すること。

(六) 謡曲田村に「春宵一刻價千金、花に漕香月に陰」とあつて、そのあとに「いづくの春もおしなべて、のどけき影は有明の、天も花も酔へりや、面白の春べや、あら面白の春べや」とある。春邊のへを底の同音に利かせてある。

(七) 種。

(八) 理由を尋ねる時。

(九) 板敷の板。

(一〇) 失禮。

(一一) 折角計畫の悪口が吉田の警戒で封じられたこと。

(一二) 理のわからぬことばかり。腑に落ちぬことばかり。

(一三) お互に厭かれるまで逢はうといふ約束は貴方の方から申された。

(一四) 御見參。會ふこと。

(一五) こちらで斷るの意。

すしたみ。かいやり捨ける。太夫につかはれし程の。心根是ぞと。いはすに響ける。此有様よし田も。うれしかるべし。春宵一衣。價千枚所也。花も火ともす時分になつて。太夫勝手へ立さまに。廊下を半過て。とりはづされて。其音に。疑ひなし。世之介も。小兵衛も。横手をうつて。おもしろの春邊やな。天晴。くぜつのもとだて。重而出たらば。座敷が嗅ふて。ゐられぬといはふ。いや。兩人ともに。鼻ふさぎて。あのほうから。あらためる時に。けふ。よき匂ひを。かぎにきたと申せ。是にきはめて。待ども出ず。よもや出らるゝ所でなひと。大笑ひしてみるに。衣裳仕替て。櫻一本持ながら。立出るより。二人目を付てゐるに。さいぜん。へをこきたる。敷板まで來て。そこにて。こゝろをつけ。障子をあけて。疊の上へ廻らるゝこそ。一代の大事業なり。小兵衛も。聊尔申てはと。屢し。是をだまりぬ。世之介も。二の足を踏で。かの板敷あゆめども。ならざりし。されども。出しおかれて。ゐるうちに。よし田方申出して。此中の御仕方。惣じて。よめぬ事のみ。はしめよりあかるゝまでとの。御つたへ。成程けふ切に。あきました。御げんも。今より後はと申捨。おもての見世に

(三)ちんちん。後足で立つ犬の藝。

(七)口説。

(三八)位の低い遊女。

(三九)難題の言ひがかりしたら。

(四〇)放屁者。

(四一)客のない日。

(四二)乞食坊主の一種。

(四三)謡曲通小町の「山城の木幡の里に馬はあれど、君をおもへばからはだし」

(四四)裏奴。風奴。人を嘲る言葉。

(一)贅澤な古筆の歌切で作つた羽織を示す。

(二)舶來の豎縞織物。サントメ。

(三)流行。

(四)源氏物語に關する繪模樣。

出。犬にさんたさせて。あそぼるゝこそ。すこしは憎し。兩人是非なく。へはかづきながら。論はうらをかゝれ。さらばともいはずに。立かへる。世之介小兵衛。よからぬ仕なしと。此沙汰あつて。望の太夫も。終にはあはざりき。よし田此事をつゝます。末の女郎。宿屋の内義。重都といふ。座頭。やり手まんなど。集めて。其中にて。ありのまゝに。語りける。若難義に申懸ば。それは。賤しき。御申懸。口舌はさもなくとも。ありぬべしと。申さんために。道替て行に。あのほうに。分別して。いはぬこそ笑しけれ。いかにも。こき手は此太夫じやと。おもひ切て。申されける。いつれも。悪くは申さす。此利發を感じ。あき日を。あらそひ。此人しのぶ事。八わうじの。柴賣。神田橋たてる。願人坊主。金柑の。馬宿までも。君を思へば。かちはだしにて。御町の辻に立ながら。雲目。風目と。いはれし身までも。御道中を見て。半分しんでぞ歸ける。

全盛歌書羽織

男は本奥嶋の時花出。女郎も。衣襲つきしやれて。墨繪に源氏。紋所

- (五)比翼紋を指してゐる。  
 (六)幾つか山の峰の續いた形に裾を取つたもの。  
 (七)編み目の小さい編笠。  
 (八)田の畦の形に刺した足袋。  
 (九)時々の流行に随ふがよい。  
 (一〇)多量の香を焚くこと。  
 (一一)林彌は禿の名。林間燐酒樓紅葉の句を利かせてある。  
 (一二)秦の始皇帝の咸陽宮と、日本の銀四萬貫目を比較させても及ぶことでない。  
 雁門は萬里長城から胡地に出る關の名。  
 (一三)古筆鑑定家。  
 (一四)古人の筆蹟を集めた帖。  
 (一五)藤原定家。鎌倉初期の歌人。  
 (一六)老巧の人。  
 (一七)萬葉集などに見えてゐる、菟名日處女を二人の男即ち血沼男、菟原男が戀し、そのために處女は生田川に身を投げ、二人の男もその後を追つて死んだこと。  
 (一八)隔日交り番に會ふ。  
 (一九)二人の競争者のことを互の耳に入れぬ。  
 (二〇)遊女の起請文も、二人以外の客には書かない意を明かにしてゐたこと。  
 (二一)兩手に花といふと同意。  
 (二二)廓の眞の人情を理解しない、淺はか

も。ちいさくならべで。袖口も黒く。裾も山道に取ぞかし。それ迄は。目せき編笠。畦足袋に。紅の絆紐。今の素足見合。笑しき事も。あつて過侍る。世は其時がまし成べし。次第に。奢の煙くらべ。後は焼亡だきにして。林弥に。酒の間をさす事。唐の感陽宮に。四万貫目持せても。終に。雁門を夜ぬけに近し。世之介。初雪のあした。紙子羽織に。了佐極の手鑑。定家の歌切。頼政が三首物。素性法師の長歌。其外世々のうた人の。筆の跡をつがせて。是を着る事。身の程しらす。もつたいなし。尾羽の傳七も。傾城二十三人の。誓紙をつき集め。是も羽織にして。互に。男ぶりをあらそひ。野秋にあひそめ。兩方すれ者。後は金銀の沙汰にもあらず。命あぶなし。野秋是をおもふに。生田川に身捨し。貳人も。是成べし。いづれをおもひ。いづれを。おもふまじきにあらねば。一日はさみにあひぬ。きのふの噂を。けふいはす。今日の事を。明日かたらず。そなはつての利發。人。文つかはしけるにも。兩方同じころを尽し。起請もおふたり。外はと書ぬ。是名譽の仕なし也。世上とて。必ずあしき評判して。野秋は勤のために。兩の手に。花と紅葉を。詠めつる物といへり。是はあさ

な人の意。

(三三)二人の客の一方を選んで、わが客と決めること。

(三四)蟲虱して。

(三五)樂しむ心當てのない時の一時の興に欠け。

(三六)涅槃會。遊里の紋目。

(三七)華奢。

(三八)餘計なこと。

(三九)わざわざ持ち出して。

(四〇)大勢のある前。

(四一)二日は世之介の、三日は傳七の會ふ日。世之介が二日からの二日酔ひで、また歸らないところに、三日の番の傳七が來合はせることをいつてある。曲水宴は昔上巳の節に行つたこと。宴を縁にかけである。

(四二)風がはりなことばかり。

(四三)銀子。金銀のこと。

瀬をわたる人。此里の戀の淵をしらす。水心覺て。責而は一度引舟に。取つきたまへかし独にかたづけ。五万日にても。勤かぬへき。男にはあらず。今更太夫様の事。取持て申にはあらず。過にし雨の日。おてきも見えず。何してなぐさむべき事かけ。然も二月十五日の事也。内義煎じ茶をあらため。野秋さまのもてなしに。櫻またじ。柳につらぬきし。餅花をちらし。炮烙に香らせ。一座花車づくをやめて。向ふ齒のつづくほど喰へと。禿やり手のひさまじりにはちす。心やすき内證咄しの。たりあまりの事まで。打明て。物語せしおりふし。世之介様傳七様。おふたりの事は。車の兩輪。大形は因果のめぐり。是程ゆかしさ。尤愛しさ。此上に。身がなふたつほしきと。人しらぬ涙にて。仰せられし事もあり。此ころさしからは賤しかるへき。おほしめし入にあらずと。太鞍の清介が。持てひらいて。大よせの中にて語りぬ。さも有べし。其後三月の二日酔は。世之介。三日は曲水の宴にたよりて。傳七があふ日也。不思議の出合。此時和談して。三人同じ枕をならべなから。下卑て首尾するわけもなく。あちな事共計。前代未聞の傾城ぐるひ。男はよし。おんつうは有。親はなし。浮

△西△世間の人の贅澤を壓倒する意。  
△東△評判記の類か。未詳。

△三△唐の玄宗の寵妃。

△三△宇治に近い山の名。

△三△遊女の性器を指す。昔は茶に初昔、後昔の名があつたのに取つてゐる。むかしむかしもそれに出た句。

世は隙。此兩人榮花をきはめ。世間の盛をやめさせ。いよく諸わけまさり草懷鑑にも。此女の事。ありのまゝ書記す外に。あはねばしれぬよき事ふたつ有。生れつきての仕合。帶とけば。肌うるはしく暖にして。鼻息高くゆい髪の龍るゝをおします。枕はいつとなく外に成て。目付かすかに。青み入。左右の脇の下うるをひ。寐まき汗にしたし。腰は疊をはなれ。足の指さきかどみて。万につけて。わざとならぬはたらき。人のすくへき第一也。まだ笑しきは。折くなく声。鶴に似て。蚊屋の釣手も落る所を。九度までとつてしめ。其好いかな強藏も。龍れ姿になつて。短夜の名残。さて火をともし。うつくしき顔をみるに。繪に書し。虞子君は物いはず。さらばやといふ。其物こし。あれは。どこから出る声ぞかし。親はく〜と尋ければ。都のたつみ。朝日山の近き里とや。さてこそ御茶のよいといふも。むかし〜





# 好色一代男 卷七目錄

四十九歳

其妻は初むかし  
船原右の高橋事

五十歳

未社らくおそひ  
今のかはる装束好の事

五十一歳

人のしらぬわたくし  
新町より状付る事 銀

五十二歳

さす盃は百二十里  
江戸よし原高雄紫が事

五十三歳

諸分の日帳  
新町木の村屋和助事

五十四歳

口そえてさか輕箆  
同ふちやあづま事

五十五歳

新町の夕暮鳩原の曙  
今の高はしがみだれかみの事

(一)目録には、其姿は初むかしとある。其姿は話中の高橋の姿。初むかしは話中の茶の湯を匂はして、茶の初音を出して以前の高橋たることを示してある。初音は春分から廿一日以前に摘んだ葉で製した茶をいふ。

(二)石上はふるに懸り、ふるきは以前の高橋の意。

(三)新茶の壺に納めてあるのを、十月頃になつて、その口の封を切つて取出し、始めて茶を點すること。

(四)島原遊女屋の一。

(五)茶の湯の第一に著く客。

(六)島原の揚屋、八文字屋。

(七)座敷の一部を屏風で圍んで、臨時の茶席を設けること。

(八)雛祭に用ひる折敷形の盆に脚の附いたもの。菓子盛るもの。

(九)茶の湯の道具の一。

(一〇)高橋の紋所。

(一一)當座だけに使ふ道具。

(一二)場合柄として似つかはしく興ある。

(一三)水汲みに行つた下僕の名。

(一四)宇治橋の西詰から三番目の橋柱のところ。そこから汲んだ水を、茶の湯の水として上質とした。

(一五)墨を磨ること。

(一六)當座の連句。

## 其面影は雪むかし

石上ふるき高橋に。おもひ懸さるはなし。太夫姿にそなはつて。顔にあ

いきやう。目のはりつよく。腰つき。どうもいはれぬ。能所あつて。まだ

よい所ありと。帯といて寝た人語りぬ。そふなふてから。髪結ぶ。物

ごし利發。此太夫風義を。万に付て。今に女郎の。鏡にする事ぞかし。初

雪の朝。俄に壺の口きりて。上林の太夫まじりに。世之介正客にして。喜

右衛門方の。二階座敷を。かこふて。懸物には。白紙を表具して。をかれ

けるは。ふかき心の有さうに。みえ侍る。茶菓子。雛の行器に入。天目

水翻も。橘の紋付。つかひ捨の。新しき道具も。所によりておもしろ

し。屢しありて。勝手より久次郎が。宇治から。唯今歸ましたと申。水こ

しの僉義ありさては三の間の水を汲み。やられしと。一入うれしく。御客揃へ

ば。高橋硯をならし。此雪其まゝ。詠たまふ事とは。當座を望み。かの懸

物に。めいゝ書の五句目迄。こと更に聞事也。中立あつての。をとつれ

に。獅子踊の。三味線を弾るゝ。いづれもこゝろ玉にのつて。すこしうか

- (一七)句の作者が各自に書くこと。  
 (一八)發句から五番目までの句。  
 (一九)見事である。結構である。  
 (二〇)茶の湯の中間に、一旦客の座を立つこと。  
 (二一)一旦座を立つた客達の、再び席に入るべき知らせの鉦などの音。  
 (二二)鹿踊。糸竹初心集にその歌詞は見えてゐる。「うら／＼の關の清水は、夜毎に落つれど、名も立たぬ、えいそりや」  
 (二三)人々の魂が三味線の調子に乗ることを、逆にいつてある。  
 (二四)茶席。  
 (二五)花生けの筒。  
 (二六)桃色の濃いもの。  
 (二七)刺繍で三番叟をあらはした模様。  
 (二八)茶の湯の方式に従つた所作。  
 (二九)茶道の達人、利休居士、千宗易。  
 (三〇)形式的な茶の湯から、自由な酒宴、作法ばつたことのない酒宴になる。  
 (三一)客、遊女大勢の中では。  
 (三二)榮華の一日。盧生の邯鄲の一夜の間に、榮華の限りを盡した夢を見たことに起る。  
 (三三)島原揚屋の一。  
 (三四)始めての客に出てゐる遊女は、中途に他の客より貰ふことをしない風習であつた。

れながら。罎かまに入いば。竹たけの筒つ斗はかり懸かられて。花はなのいらぬ事こと不思議ふしぎに。此心こころを思おもひ合あひに。けふは太夫たふさま方かたのつき合あひ。花はなは是こゝにまざるべきやと。おぼしめさるゝ事ことにぞ有あける。高橋たかはし其日そのひの漿束しやうそくは。下したに紅梅こうばい。上うへには。白繻子じゆすに。三番叟さんぱんそうの縫紋ぬいもん。萌黄ももぎの薄衣うすぎに。紅くわいの唐房からぶさをつけ。尾長鳥おながすのちらし形かたち。髪かみちご額ひたいにして。金きんの平髻ひらこづめを懸かけて。其時そのときの風情ふうせい。天津乙女てんじんいづめの妹いもうとなどゝ。是こゝをいふべし。手前てまへのしほらしさ。千野利休せんのだいしやうも。此人このひとに生なまれ替かられしかと疑うたがはれ侍さむらいる。ことすぎて。跡あとはやつして龍りゆうれ酒さけ。いつにかはりてのなぐさみ。酔よめのまぎれに。世之介よのすけ金錢銀錢きんせんぎんせん。紙入かみいれより打明うちあけて。兩りやうの手にすくひながら。太夫たふ戴いたけやらうといふ。此中こゝでは戴いたかれぬ所ところぞかし。初心しんしんなる女郎ぢやうらうは。脇わきからも赤面せきめんして。ゐられしに。高橋たかはししとやかに打笑うちわらひ。いかにも戴いたきますと。そばにありし。丸盆まるぼんに請うけて。今目いまめの前まへでいたゞくも。内うち證しょうにて。狀じやうで戴いたくも。同し事ことと申まをて。禿かぶを呼よよせ。なふて叶かなぬ物ものじや。取とてをけと申まをされし。其見事そのまじさ。いつの世よか。又有またべしする程ほどの事こと笑わらしく。女郎ぢやうらうも客きやくも。かんたんの一日いちにち暮惜くれしむむ所ところへ。丸屋方まるやかたより。尾張おはりのお客きやく様さま。先さき程ほどから御出ごでと。せはしき。使つかひかさなりぬ。初はじめて而しなれば。もらひもならず。

(三)客に届ける長い文句の手紙を書く。

(三〇)周旋顔。

(三〇)島原の遊女。

(三〇)丸屋七左衛門方。

(三〇)断然たる決意を示した語。

(四〇)ここは無理に連れに来る意。

(四〇)三味線を弾かせて。

(四〇)「歎きながらも月日を送る、さても命はあるものを」

(四〇)多くの人々。

何の因果に。けふの約束はしたぞと。高橋泪ながら。勤る身の悲しさは。先まいりて。断を申て。今くるうち。世之介さまの淋しさは皆さまを頼むと。門口へ出さまに。二三度も。小戻りして。わが居ぬうちは。小盃で。進ませいと。禿も残して。丸屋に行。すぐに座敷へはゆかず。臺所について居て。世之介方への。とどけのかきりもなく書程に。亭主も内義も。色くわびて。先すこしの間。奥へと申せど。それは耳にも。聞いれぬ内。お膳が出まする二階へ御出と。太鞍持ども。肝煎貞に申せば。おのくは太鞍持ならば。爰の女郎のやうすも。しらりやう事しや。それ程急な人には。あふて面白からずと。喜右衛門方に戻りぬ。七左方。呼立れ共歸らず。世之介も戀は互とおもひ。太夫をいさめ。是非行と申せば。けふにかぎつて。日本の神ぞくゆかぬと申。能く分別きはめ。よもやさきにも。此まゝはをかじ。抓にくる時。腰半分切てやつて。かしら此方に。をくがと申。いかにも覺悟と。世之介に引せて。膝枕して。さても命はと授節。聞てゐられぬ所ぞと。尾張の大臣。刀ぬきながら。切て懸れども。目もやらず。まして声もふるはせず。うたひける。めいく取付。さ

(四) 仲裁すれども。

(五) 町役人達が禮儀を正して。

(六) 高橋抱への遊女屋の亭主。

(七) 自宅。

(八) 世之介を指す。

(一) 末社は幫間。樂遊びは職業的でない遊び。

(二) 遊女の名のかほるの縁で、古今集の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を聯想した修辭。

(三) この妓の全盛に由つて、抱へ主上林の家の繁昌すること。

(四) 衣裳の好みのよさをほめない人はないの意。それを素仙の名の似よりで、喜撰法師の詠、「我庵は都の辰巳しかぞすむ世を宇治山と人はいふなり」の口調を利かせてある。

(五) 探幽門人。久隅守景の女。

(六) 秋野の繪に因んだ和歌。

(七) 八人の公卿が各自の筆蹟で書く。

(八) 着て人目に觸れないところに、緋無垢を用ひる贅澤をいふ。

(九) 馴染みの遊女や若衆の多くの紋所。

(一〇) 古代織りに似せた織物。

(一一) 今いふごろ。舶來の毛織物の一種。

ま／＼あつかへ共聞ず。兩揚屋。町中袴着て兩方のわび事。入龍れて。親方かけ付。今日は。尾張のお客へも。世之介殿へも賣ぬとて。高橋たぶさをとつて。宿にかへる。それにもあかず。世之介様。さらばといふこそ。こゝろつよき女。此男にあやかり物ぞかし。

### 末社らく遊び

昔しの人の袖のかほるより。今の太夫まさりて。上林の家の風をぞ吹し侍る。ことには衣裳の物すき。能事はよしと。人はいふなりと。素仙法師の語りぬ。万の花かづらも。鹽こそまされと。白繻子の衿に。狩野の雪信に。秋の野を書せ。是によせての本歌。公家衆八人の。銘／＼書。世間の懸物にも希也。是を心もなく着事。いかに遊女なればとて。もつたいなし。とは申ながら。京なればこそ。かほるなればこそ。思ひ切たる。風俗と。すいぶん物に。おどろかぬ人も。見て來ての。一つ咄しぞかし。世につれて次第に。奢がつきて。人の見しる程の大臣は。肌着に隠し緋むく。上には。卵色の縮緬に。思日入の數紋。帯は薄鼠のまがい織。羽織はこ

(三) 綿天鷲絨。

(四) 町人好みの作り、裝飾の脇差。

(五) 脇差の七所即ち縁(ふち)、縁頭(ふちがしら)、目貫などを對の金物で造つたもの。

(六) 藍色の鮫皮を柄か鞆に巻いたもの。

(七) 金の目貫を柄の両面に二つつつ附けたもの。

(八) 平たい形の印籠。

(九) 著色の草。

(一〇) 印籠の根付。

(一一) 十二本の扇。上等物。

(一二) 友禪(京都の畫工)の書いた扇の繪。

(一三) 和紙。鼻紙に多く用ゐた。

(一四) 運齋また雲齋。織文の斜に出た織物の一種。その發明者の名を以て運齋といふ。

(一五) 表裏とも木綿で製した足袋。

(一六) 草履の一種。

(一七) 絹織物の一種。もと上野日野の産。

(一八) 人間一度は死なねばならぬものだから、金銀があつたら、生きてゐる内につかへ。

(一九) ためては買ひ切りにすること。

(二〇) 世之介の定紋つきの揃ひの浴衣。

(二一) 解いたま髪を結はないこと。

(二二) 楊屋の一。

(二三) 一町内鳴りをしづめて。

ろふくれん。くろきに。嶋天鵝絨の裏をつけ。町人こしらえ。七所の太脇

指。すこし反して。あい鮫を懸。鉄の古鏝ちいさく。柄長く。金の四目貫

うつて。鼠屋が藤色の糸。平印籠に。色革の巾着。瑤瑤のふたつ玉。唐木

細工の根付。扇も十二本祐善か浮世繪。こぎくの鼻紙。運齋織の袋。足踏

中ぬきの細緒をはき。大草履取に。笠杖もたせて。名ある太鞍のつくこ

そ。くらがりにも。御女郎買と。しるぞかし。日野の洗濯着物。横鼻禪

の。かき替もなき人。ゆく所にあらすと。藤屋の市兵衛が申事を。尤と思

は。始末をすべし。それもしなぬ身か。あらばつかえと。或日世之介風

呂をとめて。もろくの末社をあつめ。けふ。らくあそびと定め。瞿麥の

揃浴衣。みなさばき髪に成て。下帯をまかす。かれ是九人。一筋になら

びて。八文字屋の二階にあがりて。さはげば。一町のなりをやめて笑しが

る事。京中の。そげものの寄合。さも有へし。弥七井欄箒に。四手切て。

むしこよりによつと出せば。丸屋の二階より。大黒恵美酒を指出す。是を

見て。かしは屋のかいより。懸小鯛見せければ。庄左衛門は。炮烙に。釣髭を作り出せば。隣より。三社の詫言を拜ます。又むかひより。かな槌

- (三) 變りもの。  
 (四) 願西彌七。當時京の幫間四天王の一人。  
 (五) 御幣を作つて。  
 (六) 虫籠窓。格子の目の細いのをいふ。  
 (七) 揚屋。  
 (八) 揚屋。但し八文字屋、丸屋と町の反對側に立つた。  
 (九) 正月神前などの飾り綱。  
 (一〇) 神樂庄左衛門。京の幫間四天王の一人。  
 (一一) 伊勢、八幡、春日を三社といふ。その神託。  
 (一二) 鸚鵡吉兵衛。京幫間四天王の一人。  
 (一三) 油皿を載せて佛前に吊す燈火用の佛具。  
 (一四) 小形の錨。  
 (一五) 火消し壺。  
 (一六) 當時佛神の賽銭は十二文を定めとした。佛説十二因縁に起つた。  
 (一七) 八文字屋、丸屋、柏屋の二階。  
 (一八) 即席に作る洒落、地口の類。  
 (一九) 一步金。  
 (二〇) 山の如く積つて。

を出す。其時あふむは。懸灯蓋に。火ともしてみせる。丸屋から。佛に頭巾着せて出せば。かしは屋より。釣瓶取を出す。八文字屋より。末那板みすれば。丸屋に牛房一把。みせ懸る。猫に大小指せて出せば。干鮭に。齒枝くはえさせて見する。炭けしに。注連縄はりて出せば。竹の先に。醬油の。通ひを付て出す。弥七烏帽子着て。あたま指出せば。むかひより。十二文の。包錢を投る。北から。摺粉木に。綿ぼうしまいて出せば。南から。障子に上と吉子おろし藥あり。同日やとひの。取揚婆ふもありと。書てみする。中の二階よりは。簇天蓋。葬禮の道具を出せば。泣やら。大笑ひやら。揚屋町に。其日出懸たる。女郎も男も。のこらす表に出て。こゝろは空に成て。三所の二階を詠暮して。古今希成。なぐさみ是成べしと。興に乗じて。まだ所望くといふ程に。後は大道に出て。もんさく。いつれか腰をよらざるはなし。外の遊山は。いつとなくきえて。面白からず。なを立噪で。やむ事なし。これを今のまに。しづめる程の事も。あるべきかといふ。忽聲をとめて見せむと。東側の。中程の揚屋見世より。太夫なぐさみに。金を拾はせて。御目に懸ると。服紗をあけて。一步山をうつして

《五》興さめて。

《五》乞食僧。

《五》天部村。賤民の部落があつた。

《二》大阪新町廓内の揚屋。

《三》無署名の手紙。

《三》何のための、また誰の手紙かをいはず。

《四》氣にかかることは。

《五》太夫の名。

《六》自宅に歸つてから見るのを間だるく思ひ。

《七》新町廓から東への通り筋に當る。

《八》辻行燈の光でひそかに讀んで十分に解らないところがあつた。

《九》殺し文句で書いた艶書。

《二〇》男自慢の自惚心になつて。

有しを。小坊主に申付て。雨のごとく。表に蔭共。誰取あぐる者もなく。只末社の藝尽しを。見て居るこそ。石流都の人こゝろ也。かね捨ながらし。らけて。人に笑はれ内に入れば。其跡にて。はちひらき。紙屑拾ひが集て。あまべに歸る。

### 人のしらぬわたくし銀

申く。先御歸なされませいと。高嶋屋の女子に。呼懸られて。何の用かと思へれば。御かたからと。名書もなき文ひとつ。懷にさし込。やうすも申さず。逃てゆく。心元なき事は。兼く滝川に。戀する者ありて。きもをいり。返事待事あるがそれかと。宿に歸てみる迄は遅し。順慶町の辻行燈に。立忍び。よめぬ事共ありける。滝川が文のかへしにはあらずして。我にほれたとの。こゝろ入深く。命をとる程に書ておくりぬ。すこし男自慢して。伴ひし者に。是見たか。此方より話きても。埒のあかざる事もあるに。あなたからのおぼしめし入。然も去太夫さまからじや。世上に若き者もおほけれど。拙者が贅厚きゆへぞかし。世之介にあやかれ



(二)その人とわざと明白にいいひ方。

(三)遊女の名。

(四)工夫。

(五)廓で定めた特殊な日。この日遊興に多額の費用を要するのであつた。

(六)深く思ひつく意。

(七)遊女自身揚代を拂つて、勤めを休むこと。

(八)物を買つた未拂の代金。

(九)實意。

(一〇)一度水に浸して搗いた麥を再び搗いたもの。

(一一)仁和寺近くの堤防が切れて洪水のあつた時のやうに、不意に人を驚かす難題を持たされて、愚弄されるのが残念。

と。戴せば。合点かゆかぬと。笑ふてゐる。せき心になつて。我にうそをいふ物か。是みよとありし時。みるまでもなし。其文はそんじやう其。太夫殿はまいらぬかと申。何として此わけを存したぞ申せ。いや其女郎ならば。さのみよろこび給ふな。子細は貴様にかきらす。近き比も。半太夫さまのお敵にも其ごとく。又さつまさまの客にも。狀を付人の男をとらるゝ事。此中の仕出し也。此心入の否な所は。更と戀に非ず紋日かゝさぬ程の大じんに斗。其仕形ぞかし。男ぶりにもかまはれぬ證據には。河内の庄屋に鼻のなき人あり。是にも執心の狀を付て。此三年が間の。身あがり。買懸り濟させて。其後は目ふさいで。抱れて寝ても。頭が氣にいらぬと。口舌仕懸られ。かの男是非もなく。それが今日にみえましたか。何やかや貰ふて置てから。あまりむごひ仕方御座る。此方替らぬ心中には。やり手に小麥をやれと。いはしやつたによつて。眞春にして。二俵迄けふも運ばせ。親達の方に。木綿が入とあれば。塵までよらして百斤迄。四五日跡にも進上申。干蕪瓜茄子までを。遠ひ天満のはて迄續て。こなたの氣に入やうにした物を。今年の夏。仁和寺の堤がきれて。水が入たと思ふ

(二)承諾の返事。

(三)密かに遊女が情夫に會ふと同様の會ひ方。

(四)同じ揚屋。

(五)行き著くと直ぐに。

(六)反古紙。

(七)中庭。

(八)すぐにそこへ參られます。

(九)陳腐な手段。

(一〇)一度だけは騙される手である。

(一一)百文さしの錢さしから錢をぬき取つて。  
(一二)概算。

て。みたてらるゝが口惜ひと。男泣にして歸るを。居合て聞たものあまた也。ひらに是はととめける。世之介聞て。憎さにもくし。こいつ只是置れじと。うれしきかへり事遣し。手くだであいぶんにして。或時豊後の人。初而あふ時。世之介も同じ宿に。ゆき懸るを。太夫みるより小紙につい書て。うらへ廻つて。御座れと申程に。末はともあれ。今宵はと。柴部屋にしのびて。物の陰より睨けば。さす盃も。ろくには手に持ず。俄に腹いたむとなやめば。田舎大じん印籠あけて。いく藥かあたえけるを。のむ顔して灰吹に捨て。禿に紙燭灯させ。雪隠の入口に付置て。其身は世之介に取付。かやうの首尾うれしいといふ。大臣はまことの心から。坪の中の戸を明かけ。太夫さまはお隙が入が。まだいたむかとときく。禿それへ御座りますと申。ふるき事ながら。此手たて。一度つゝはくふ事也。世之介と炭俵のあいより。起別れて。はや着物のよごれしを悲しみ。いかひ損をしたと。人のみるをもかまはず。しべ帯にて。禿に背をたゝかせ。それ座敷には行ず。佛壇の前に居て。大角豆食の茶漬に。干鰯むしり喰て。其後手元にありし。百錢をぬきて。心覺に目の子算用。何の事にもせよ。女

(三) 憎さに面上に水をそそぎたし。

(三) 時々金銭を恵むつもりで會つてやつた。

(四) 他の人を騙して金銀を取るがよい。

(五) 日歩の貸金。

(六) 私の方は多忙で。

(一) 露にから開山までは高雄といふ遊女の名に冠した序である。同音の高尾の紅葉の名所に因んで、露に時雨に兩袖を濡れといひ、それを濡れ即ち色情の意に轉じてある。ぬれの開山は色の道の達人の意。

(二) 紅葉軍ねは重ねの色目の名であるがここは單に高尾に因んで、それを旅衣の枕にしたまでである。

(三) 一挺の駕籠に八人の昇夫の附いたもの。

(四) 諸冊二神をいへど、好色本には葉平を色道の神といつてある。併しこれは戯れに過ぎないであらう。この邊の文、語句を拾つて見ると、旅路を急ぎ行くことに、猥褻な滑稽を保たせたものと思はれる。一々には註しない。

郎はせまじき事也。大臣此淋しさ。座にたまり兼ねて。立さまに此有様を見て。まづ安堵いたした。勘定あそばす程の。御機嫌なればと。宿へも礼いふて歸ける。是を何とも思はず。人の若ひ者らしきを近付。小判がしの利は。何程にまはる物そといふ。つらへ水が懸たし。かゝる者も太夫とて。賣物に成ぞかし。儲もくうるさき女。爰に名をかくまでもなし。後にはしるゝ事成べし。四五度も忍びあふてから。正月の入用御無心の書簡。はいしまいらせ。時分から忝存候。かねを出して。女郎狂ひ仕れば。御存の通この方に。好申候太夫と。久く申かはし候。貴様よりは。只のやうに。御申し候程に。戀に隙のなき身なれども。折節合力に。あふて進じ申候。余人を御かせぎあるべし。日借の金子御かしなされ候は。きもいり申べく候。手前取こみ。早と申のこし候以上

### さす盃は百二十里

露に時雨に。兩袖をぬれの開山。高雄が。女郎盛を見んと。紅葉かさねの旅衣。八人肩の大乗物。五人の太鞍持。ぱつとしたる出立に。陰陽の神

(五)京都へ歸る旅人に言傳てて島原の馴染みの遊女の許に便りしたいと思ふ。伊勢物語に東に下る業平がここで京へ歸る僧に言傳てしたことに因む。

(六)島原太夫の名。

(七)江戸吉原太夫の名。

(八)鉛筆のこと。

(九)鳶の細道を指す。西鶴の一目玉鉾にも「鳶の細道ひとしほ淋しき所也、業平都おもはれしことも、旅ごとに思ひ出さるゝ山路也」とある。

(一〇)はかなき命も全うして、この旅を終へて京に歸ることが出来たら。

(一一)鳶の細道を通つた記念として鳶の葉を贈るのである。

(一二)この名物で、十箇づつ串にさした色附けの小團子。

(一三)一目玉鉾、手越の里の條に「むかし重衡鎌倉に取われし時、頼朝公あはれみ給ひ、千壽をつかはされし其親の里手越の長者の跡とて酒屋して有」とある。

(一四)五寸位の薄板を多く連ねた樂器。

(一五)歌詞の全き形は未詳。

(一六)端折つた裾をおろし。

(一七)本海道を行く旅人の持つた扇。この扇には道中の里程その他の案内記事が記してあつた。

(一八)實際に行つて見て失望した意をのべ

ものりうつり給ひて。世に有程のわけしり男。夜やり日やりに行ば。宇津の山邊にのぼり詰。嶋原への傳手かなとおもふ所に。三条通の龜屋の清六。乗懸よりおりもあへず。もろこしは替らすつとむるか。江戸では。小紫にあふてのやりくり。都へさす盃を。ことつかり行など。立ながらかたりぬ。聞に東の戀しく。京の事なを忘れがたく。屢しまてとて。鼻紙に石筆をはやめ。けふ此細道にて。清六にあふて。やつれたる姿を見せ。そこゆかしさは何程。露といふ命きえずば。又みるまでのしるしぞと。岩根の鳶の葉を手折て。假初に包みこめて。金太夫かたへと渡しぬ。五人の者もおもひ／＼の泪。申／＼まだ忘れた事は。上林のまんじ。首すぢをよく洗へと。慮外ながら御つたへと。跡は大笑ひして別れて。苔地のつたひ道おるれば。草薺の幽に。十團子賣女さへ美しく。見えて。招けば。手越といふ里に。酒ばやし有。是こそむかし千手の前の。親仁の所よと語る。安部川をわたれば。東の方に。びんざさらにのせて。こすに待する。殿はうらみとうたひしは。やれ。爰の傾城町とや。見すには通らじと。尻からげをおろし。道中付の扇をかざして。とかくはみぬさきと。沙

である。

(一) 島原の下級の遊女。

(二) 話にのみ残つてゐる遊女龜鶴の遺跡まで探つた意。頼朝富士の裾野に狩した時、黄瀬川の長の女龜鶴といふ美人が酒席に侍したといふ話が傳はつてゐた。

(三) 箱根の關所を越えたこと。當時幕府の命で諸大名の夫人の江戸脱出を防ぐために、箱根の關では婦人の通行を特に嚴に監視した。

(四) 染屋の序として、武藏野名物の紫草と、世之介が旅の目的の色戀を含めて書いてある。

(五) 吉原遊女の紋を集めた書の意で、内容は遊女評判であらう。

(六) 高尾の紋所は紅葉であつた。

(七) 一刻も早く高尾に會ひたい意。

(八) 吉原行き。

(九) 待乳山。淺草寺の東に在る。

(一〇) 隅田川の一支流。當時支流の船宿から船をやとつて隅田川に出で、水路を溯つて行くのが吉原行き順路であつた。

(一一) 二挺で漕ぐ舟。

(一二) 淺草寺の南、隅田川の岸に在つた。

(一三) 吉原への路に當つて、聖天町から三の輪の方につづいた堤。

(一四) これに續け原を加へて三つの野を三野といつた。

汰なしにすること。よく／＼おもしろからずや。京の北むきよりはおとり

ぬ。三嶋には絶て。遊女の跡までを捜し。女あらたむるは。是そ戀の關の

戸を越て。武藏野の戀草の所縁。紫を染屋の。平吉かたにつきて。先吉

原の咄し聞たし。新板の紋盡し。紅葉は三浦の太夫と。讀るめるより色に

そまり。朝の嵐もしらず。散ぬさきに此君を抓めと。以上六人戀の山入。

金龜山を目當に。淺草川の二挺立。駒形堂も跡になして。日本堤にさし懸

り。あさちが原こつか原。名所の野三ッあるに付て。三野と申侍り。又三

谷とも書り。大門口の茶屋にて身ぶりを直し。清十郎といへる揚屋に行

て。上方のお客と申。御名は先立て承及。自然御宿を申事もと。心待

は是ぞと。襖障子を明れば。八疊敷の小座敷。万新しく。京世之介様御

床と。張札して置こそ。かはいらしき。亭主が仕懸。是にかぎらず盃間

鍋吸物椀まで。瞿麥のちらし紋。きのついたる事ぞかしさて太夫はと尋け

れば。九月十月兩月は。去御方。市左衛門方にて。其跡霜月中は。利右衛

門方に御入の約束。年忘れ三十日は。是に御けいやく。はや正月も定り。

年内に御隙とは。一日もなし。此方に年を御取あそばし。春の事に。な

(三三)揚屋主人の名。

(三四)揚屋主人の名。

(三五年)忘れの遊び、師走三十日は、揚屋清十郎方の客に揚げられる約束。

(三六)高尾の客。

(三七)十月三度の亥の日の中初の亥の日。支猪で紋日。

(三八)揚げてゐる客に隠れて會ふこと。

(三九)揚屋の女房。

(四〇)紹介のための盃事。

(四一)もどかしく。

されませいと申。いづれもあきれて。其敵は何者じやときけば。小判は。木になる物やら。海にある物やら。しらぬ人也。世之介も此度つかひ捨かね千兩の光杯では。中く及難し。十月二日。はつの家の日より話懸て。やうく其月の廿九日に。清十郎平吉がはたらきにて歎すまし。盗あひと申事に定ぬ。しのへば平吉斗御供にて。暮方より歸姿をみるに。惣鹿子唐織類ひ。帯は胸高にして。身を居てのあし取。また上方とは違ふて目に立ぬ物かは。近付にも言葉懸す。禿も對の着物貳人引つれやり手六尺までも。御紋の紅葉。色好の山よ。更に動がことし。是非今宵はと待詫て。夜半の鐘もやるせなく。あはぬ先より恨かぞふるに。人しづまつて。女房乗物入ば。勝手灯けして。御面影外へは見せず。かゝ刃が引わたしのさゝ事過て。はやかぎりある夜とて。床取て。世之介寢させまいらせ。平吉もかせ山といふ女良と。しみくとの枕也。屢しあつて。高雄ばかりと來て。我より先へはねさせじと。世之介を引き起し平吉かせ山に。戀のじやまなして呼よせ。皆ふとんの上にあげて。謎懸てとけしなく。是も面白からずと。かせ山平吉を。銘くの床にかへし。其後帶をときて御

- (一) 諸分は遊里の作法、規定など。それらに關する日記帳。  
 (二) 枕草子の筆法に擬してある。  
 (三) 遊女屋の店の土間から奥へ通ずる界の格子戸。  
 (四) 情夫との密會の喜び。  
 (五) 木村屋は遊女屋。和州はその家抱への遊女。  
 (六) 三月三十日間の日記。但しこの話にはその十四日迄が記されてある。  
 (七) 出羽に冠した歌名所戀路山のこと。  
 (八) 米の産地として有名である。  
 (九) 出羽から大阪への船の航路は、日本海から下の關を過ぎて瀬戸内海に入つた。  
 (一〇) 三月朔日の日記。  
 (一一) 遊里の大門の開くを待つて入り込み遊女を揚げて遊ぶこと。  
 (一二) 昨夜の疲勞の残つて。

寝なれと。仰られてもおそろしくてとかず。申。それは私の志し。無に成といふ物じや。初のはどは。ふとんも冷て有しを。よしなき二人をあたゝめさせ候甲斐もなしと。様子よく帶とかせて。直付に肌をゆるして。又ちかくにあふ事も希也。御心まかせにと。初而の床の仕懸。各別世界に。又あるまじき太夫也

### 諸分の日記帳

うれしき物。其日の男はやういぬるの。中戸であふての別れ。やり手煩うて居る内かさの高き文。かたじけなく詠入よしは。木村屋の和笈一盛は。吉野の花を見越。全盛の春にぞありける。三月三十日の。日記を書ておくられける。是ぞ戀の山。出羽の國。庄内といふ所へ下りて。米など調て。大坂への舟便もまはり遠く。此里の事をゆかしきにと。封じ目切て。あけそむるより朝こみの客は。中の嶋の。塩屋の宇右衛門手代にて。屋は隙なき身とて。高嶋屋にてあひ初。宵の勤残りて。紙筆を持たながら。おのづと。氣を尽しての手枕。かたさまの御事。まざくといよい夢見

(一) 言ねぶたがりの。

(二) 遊女は客に出る前に行水した。

(三) 新町廊の遊女屋。

(四) 思ふ男の世之介に比べて、思はぬ男の客の前では、自分の態度に大きな相違があること。

(五) 揚屋。

(六) 清水理兵衛。竹本義太夫の師匠。

(七) 道行の一節。原曲の名未詳。

(八) 誰の聲とも明らかに聞き分けられなかつた。

(九) 新町遊女の名。

(一〇) 二十日以上に及んで。

(一一) 道頓堀。

(一二) 野小ざらし。若衆方役者。

(一三) 世之介の弟分で、男色関係のあるもの。

(一四) 揚屋。

懸りしに。惜や隔子をたゝき起されて。其にくさいか平。暫し返事もせぬに。頻にをとつるゝに。寝ごい八千代さへ目覺て。申くくと。呼つがるゝも是非なく。行水とれと。いふ声を聞て。男それまでは待す。腹の立ながら独ゆくとみえしが。車屋の黒犬にとがめられて。又西の横町へ廻るも笑し。おもはぬ男。是ほど違ひの有物かと。我こゝろのおそろしく。宿より使來て。ゆきて。朝日早よからの口舌。二日は川口屋に。はしめて肥後の八代の衆。一座には。八木屋の霧山。伏見屋の吉川。清水の利兵衛など参て。淨瑠璃道行に成て。東の空は其方ぞと。語出すより耳おどろかし。我も世之介様を。尋ゆかるゝ身ならばと。哀にもなひ所にて。泪をこぼすを。脇より見ては。此戀ゆへとはしるまじ。床迄もなく暮て其まゝ歸るさに。紋挑灯の瞿麥。今に替らぬかと。闇よりの惡口。声聞違えて。見もどれば。天満の又さま。介さまのお歸の程はと。御尋候。是も越前殿とは。わけあつて。廿日にあまつて。此里うとく成せられ。南にて小ざらし。にくからずと。毎日是も。替りたる御なぐさみぞかし。かたさま御弟ぶんの。吉弥様も。いよく美しく御入候。三日四日は。住吉屋長四郎方



(二七) 孟蘭盆は紋目。この日客となつてもらつた。

(二八) 小さい貝の名。

(二九) 貝殻。

(三〇) 揚屋。

(三一) いやみの客。

(三二) 自分がやつたのに對して先方からよこした起請文。

(三三) 揚屋。

(三四) 大阪市浪速區。法善寺の別名。

(三五) 揚屋の亭主。

(三六) 揚屋。亭主の名は喜兵衛。

(三七) 播磨揖保郡。

(三八) 遊女屋。

(三九) 不都合でない縁の切り方とわかつた上で。

(四〇) 和歌の浦の名。

(四一) 趣向。好み。

(四二) 和歌の浦近くの名所。

(四三) 確かさを表はす語。

(四四) 春霞。

へ出候。唐津の庄介様。是は去年の盆をしてもらひ候客也。昼の内はすみよしの汐干に御行。櫻貝うつせ貝など。手つから拾ひて。あはぬさきから。袖ぬらすと。しほらしき御人に候。五日はいばらきやにて。御存の。いや男にあひ申候。勤のために。こゝろの外の誓紙。一枚書申候。則あのかたよりの一札。此たび遣し。かたさまに預申候。六日灸すゆるとて。隙をさいはいにいたし候。七日は茨木屋に有しを。井筒屋にもらはれ。寂上の衆にあひ申候。八日も同じ一座。九日は母人の十三年にあたり。千日寺へ石塔を立。心ざし仕申候。十日は八郎右衛門取持にて。馳堀のお敵と。中なをり申候。十一日は折屋にて。播磨の網干衆に初而。是は八木屋の。霧山さまに御あひ候が。わけあしからぬ。退やう。吟味の上あひ申候。十三日は宿に居申候。内と蒔繪屋の治介に。御申付あそばし候。硯箱出来もたせ遣し候。和哥の風景。御物好殊更。布引の松。さも有そうに。能と筆を尽し候。八まん氣に入申候。けふつかひ初て。此文を書まいらせ候。さてかたさま。御残し置候独笑ひの御肌着。十四日に。興風。御事共思ひ出し。下に着て出申候を。庄介様に。もらひ懸られ。否とはいは

（四）深い理由はない意。

（五）わけ。事情または理由。

（六）京へ鞍替への相談。

（七）この頃少し客の落ちたこと。

（一）繩を編んだ四角の網の四隅に紐をつけ、物を運ぶものを輕籠といつた。それに似せて紙縹で作つた小さいものに酒盃を載せたから、酒輕籠といつてある。  
（二）雜書。人々日常生活に必要な、いろいろな事を載せた書。それに記してある通り。

（三）山崎與次兵衛を指す。三百兩の身代金で吾妻を身請けしたといふ男で、坂上與次右衛門が本名。攝津山本村の人。

れぬ首尾しゆびにて。こゝろよく進すすじ申候。何なんの子細しさいもなく候。一日二日過すて。ちよろけん一卷。有合ありあひて送おくるのよし。其中そのうちに一步五十。此事は。何とも書ず。人しれずたまはりける。其まゝ明あけても見ず。せはしく申せし。呉服屋の左兵衛に遣つかはし申候。只わが身の事。万に付つけて。かたさま爰いもと元に。御入なきこそ。悲かなしき事共。積つり申候と。こまゝと話氣書續わたりかきつけしを。泪なみだにくれて。讀ようちに。面影おもかげうしろに立添たそわたくしは。いよく京きやうへの談合極だんごうきやくり。大坂をつれなく。あさつてのぼると鳴声なきこゑにて申けるは。此このほどすこし淋さびしきとて。京へはむごきしかたぞかし。我は京へのほりたらば。追付死おつけとしますといふそれはと悲かなしく。見あぐれは。四足五足あし晉をよして。あじきなく。跡見あとみ歸りて消ぬ。是まぼろしなればとて。此俵は捨難すてがたしと。二たひ難波なみだの色里いろざとにかへりぬ

口添くちて酒輕籠さか

戀ひはざつしよの通り。はじめよし。後のちわるし。金性かねしやうの男有ける。此かね三百兩の金也。吾妻請出あづまうけだして。いつか此首尾しゆび。待兼まちかねの。山本近き。一里に

(四)立派な歡樂の暮らし。

(五)吾妻は身請け後の境遇を好まぬが。  
(六)悪い評判の立たない死に方をしたい  
と決心した意。  
(七)若い人生の春を捨てた原因。  
(八)五月。

(九)禿と耳うちなどしない。

(一〇)型の如く。

(一一)初見の客。

(一二)座にきちんと著いて。

(一三)便所に立つこと。

(一四)おかいどりすること。

(一五)便所へ通ふ戸。土佐野根産の杉板。

(一六)窓を切り開いて窓下地を見るやうに  
作つた便所の明り取り窓。

(一七)香のこと。

むかえて。活計歡樂の暮し。是をうれしくはおもはず。うきころのか  
さなりて。まゝならぬ身のゆく末を歎きぬ。世之介と申かはせし事を忘れ  
ず。書置して。刺刀手にふれし事もありしと也。一たび塚の苦患のがれし  
を。我こそ心にそまね。其恩のほど黙止しがたし。只名の立ぬ。死ぎは  
め。かく思日つくこそ夢の春。花のしほるゝことく。湯水もたつて。いつ  
となく。延宝五年。あやめ八日の曙に。空しくなりぬ。惜や此太夫  
は。ころざしふかく物やはらかにかしこく。行義ほんとして。座に付て  
より。假にも勝手へ立す。禿の私語事もなく。とゞけの文も。人の目をし  
のばす。ありべい懸りを。つい書て。其日の敵の心をそむかず。まして。  
初而の出合には。なを一座をかため。立て叶ぬ用事にも。前裁におりて。  
萩の袖垣など。物靜に詠めて。露分衣。かいどり前して。のね板の。戸  
明るをも音せず。下地窓より。外を睨かず。立さまに。紙を惜ますちらし  
て。出ても座敷に。しばらくあからず。築山のけしきを。様子ありげに見  
渡し。いつとなく。手水つかひて。其後一焼すそにとめて。なをらるゝこ  
そ。身持はかくありたき物なれ。常々此人勤の外は。忘れても人に。手も

○人の目に著くところにあて。

○心間違つても。

○情夫。

○客の座敷でする踊り。

○徒然草の一節、仙人が女の白隠を見て通力を失つたこと。

○光を暗くして。

○遺手などであらう。

○もと甲斐郡内産の絹布の縞。

○間抜け。

○七新町廓の町名。

握らせず。まして客まつ日は。臺所に居て。假にも片陰に。引込ずして。其身正しく。うろたえても。手くだ男はよもや。あるまじきとおもひしに。其二とせあまり。世之介と浅からぬ。中立は越後町の。或宿の口鼻。きもいりて。座敷踊の仕舞。龍れ姿の暮方。召替の浴衣。腰より下の一重も。けふの汗に逆。そこく。に。とき捨て。行水の。御裸身みるに。久米の仙も。こんな事なるべし。眞木の戸袋に。立しのぶを。釣行燈光を。わざとしめして。それ。そこと。内義に押よせられ。こはん湯殿にかけこみ。こゝろのせくまゝに。ちよと物して。出る所を。よしに見付られて。悲しや。様く口がため。ぐんない嶋のおもてを。約束するこそ。きのどくなれ。あひそめて後。毎日かたじけなき御事共也。銀つかふ男。今此目からは。空氣のやうに。おもはれ侍る。其年の霜月廿五日。九軒の紙屋にて。平野の綿屋の吉さまにあへども。暮よりかならず。御歸。ひそかにまいれのよし。前裁に。身かくし。有様をみれば。京都といふ。座頭を残して。太夫様の。お伽をせよと申付て。吉左もどられし。跡を大事とはなれぬこそ。きのどく爰ぞかし。宵は待。夜中過より。降雪袖をはらひ

(二〇)粗末な下駄。庭下駄として風流な下駄。

(二一)遊女屋の名。

(三〇)熱燗の酒。

(三一)半分以上飲んで。

(三二)鹽漬けの山椒の實。

(三三)座頭久都。

(三四)前の佛の縁語。

兼。踏石の上なる。引下駄を枕に。凝えていつとなく。夢をむすびぬ。下座敷の床は。扇屋のながつ。馴染の人と寢覺に。障子を明て。下駄はと。禿にとはるゝ時。身をすくめ。椽の下に隠れぬ。世之介が面影を見て。下駄尋ぬるまでもなし。よしと。禿をしづめ給ふは。深き戀しりぞかし此時のうれしさ。あの君七代まで。太夫冥加あれとぞ。願ふ。二階には。久都はしのこの。上り下まで。吟味しをるこそ憎し。吾妻しんきの片手に。文共引さき。くはんぜこよりをのべて。ちいさきかることを仕懸。天目をのせて。暑間の酒をつぎ。我口添て。そろ／＼下へおろせば。世之介此心入を感じ。三度戴き。喉通る間の樂。千代も經ぬべし。半分過引て。息をつく所へ。なかつ漬山椒を一房。肴は是にと。小声に成て給ふこそ。又忝し。夫よりなかつは。二階に世之介を手引して。久都に取付。尤愛らしき坊さま。此胸のつかへを。さすれと。うれしがるやうに。手を取て。そこら。其下まだ其下と。かんじん邊まで。手をやらして。久都ときめく内に。吾妻に。思日をはらさせ。かしこき仕業。目の見えぬ者こそ。しらぬが佛。あゝ有難き。太夫さまの。黄金のはだへと。うか／＼とさすつて。

(三) 前夜の客の歸る、大門の開いた知らせの詞。

(一) 當世人とは思はれぬ。

(二) 見知つた人に知らぬ顔すること。こは重陽の節供に改まつた他人行儀で、平常よく見知つた人の來て口狀いふさまをいつてある。

(三) 重陽前後三日間遊女達が揚屋の座敷を借りて、所有の衣裳を飾つて見せた風習をいふ。

(四) 菊慈童の故事を利かせてある。

(五) 團でも簾越しだと美しく見える。

(六) 遊女の名。音讀してあるのは一種の洒落れた呼び方。

(七) 新町廓九月九日重陽の日の光景を、謡曲「邯鄲」を頭に持つて、盧生が榮花の夢中の景に見立てて書いてある。「邯鄲」は盧生の故事を綴つたものである。文中に所々邯鄲に取つたところがあるから、それを引くと、「住み馴れし國を雲路のあとに見て、山又山を越えゆけば、そことしもなき旅衣、野暮れ山暮れて、名にのみ聞きし邯鄲の、里にもはやく著きにけり」「雲龍閣や阿房殿、光もみち／＼て、げにも妙なる有様の、庭には金銀の砂を敷き、四方の門邊の玉の戸を、出で入る人までも、光を飾るよそほひは、誠に名にき／＼し、寂光の都喜見城

居内に。お客立しやりませひ

### 新町の夕暮嶋原の曙

淺黄の。あさ上下に。茶小紋の着物。小腕指の仕出し。常とはかはり。すこし智恵の。有やうにして。此世の人とも思はれず。娑婆で見た。弥三郎殿の。御礼。先御祝義。さて今日よりは、色里の。衣襲かさね。これを見る事。命のせんだく。たゞぬれつゝぞ。山水の。香ひもふかき。菊の節句の暮けしき。爰にきて。鶯の太兵衛が軒端に。簾を懸させ。姿をほのかに。名をしらぬ。かこゝさへ。是はとこゝろうごかすは。よき日みるゆへぞかし。ましてや。高聞すぐれて。うつくしく。新艘引て。千里を行も遠からず。是や寂光の都。庭には金吾の。長持をはこび。井筒屋に。出入やり手迄も。光をかさる。桐のとをもらひ。機嫌のよき。顔つきを見る事ぞかし。又所を替て。九軒の住吉やにゆきて。四郎左にせざる。軽口いはせ。あけ巻につきし。禿のるい。に。うれしが。酒を飲せ。はし近く居て。通る程の女良に。ひとり／＼。いやがる事をいふて。たちまち。罪

の、たのしみもかくやと、思ふばかりの  
氣色かな

(八)金吾は團女郎の別稱。庭は揚屋の土  
間であらう。長持は太夫、天神の蒲團を  
運ぶのか、團女郎の衣類を運ぶのか、十  
分明らかにし得ない。

(九)桐の臺。一歩判金。その繪模様から  
この稱があつた。

(一〇)揚屋。

(一一)住吉屋主人の名、四郎左衛門。

(一二)せせるは古語つゞやく意。それより  
出た語で、意が幾分變化したのか、今方  
言に愚痴いふこと、どもることにいふ。  
どもるがここに相應してゐるやうに思は  
れる。

(一三)遊女の名。

(一四)怒らせ。

(一五)迷惑ながら。

(一六)徒然草の「下戸ならぬこそ男はよけ  
れ」より出た洒落。

(一七)二道かけた浮氣な男。

(一八)日本橋通り筋より西へ四つ目。

(一九)遊里通ひの駕籠。四枚肩。

(二〇)河内北河内郡、陸院。

(二一)河内交野。ここは昔一般狩獵を禁止  
された禁野であつた。

(二二)淀川宇治川の合流點に大小の二橋が  
あつて、宇治川の方のを小橋と稱した。

作らせ。不祥ながら腰懸て。小盃も數かさなれば。下戸ならぬ。男のよ  
いをすいたと。兼好といへる。太夫が申侍る。其日は扇屋に有しが。にく  
からぬ首尾ながら。與風都こひしく。おもふこそ二道也。此人を捨置。そ  
れよりすぐに。道頓堀にまかり。疊屋町に。しるべの役者のかたより。科  
なき身にも。しのび駕籠。四人懸りに乗さまに。吉弥と申かはせし事も。  
戀が替れば。そこ／＼に。言傳して。いそぐ心の夜の道。初夜の鐘のなる  
時。佐太の天神と申。太夫は居ずとも。のむまいかと。眞柴折くべ。焼味  
會おかしく。此醉のうちに。交野きんやも跡に。淀の小橋は霧こめて。鳥  
羽の戀塚。合点じやと目覺し。ほどなく四ツ塚の茶屋。あみ戸をあらくた  
ゝき起して。湯まではまたじ。息がきるゝは。水のませと。下／＼声よに  
申侍る。誠に一とせ。森。が。道いそくとて。駕籠の者殺せし野辺も。此  
あたりとおもひ合。北の空ゆかし。星のうすきを待兼。丹波口の。小兵  
衛方に行は。朝歸の人待良に。片見世あけて。起出るより。是はめづらし  
き。御のぼり高橋様も。まちびさしきと。きのふも仰られしに。先きか  
しまして。よろこばしませいと。門をたゝきて。出口の茶屋につたえて。

- (三) 文覺に殺された袈裟の墓。袈裟は源  
頼朝の妻で、文覺に懸想された人。  
(四) 西國街道の辻。今下京區に當る。  
(五) 鵜飼龍昇き達。  
(六) 未詳。  
(七) 島原の方。  
(八) 島原へ行く京都の町の出口に當る。  
(九) 丑店の半分。  
(一〇) 太夫の名。たかはし。  
(一一) 揚屋。  
(一二) 山家集「松島や雄島の磯も何ならず  
たゞきさがたの秋の夜の月」を指してい  
つてゐるのであらう。  
(一三) 片一方。  
(一四) 岩倉は京都の北岩倉山。そこに産す  
る松茸。  
(一五) 中位の大きなの腕。  
(一六) 遊女の名。  
(一七) 身請けされたこと。  
(一八) 遊里を去る名残の今。  
(一九) 喜撰法師の歌によつて宇治を匂はし  
たもの。  
(二〇) 高橋を指す。  
(二一) 度々の使を立てること。  
(二二) 遊女達の名。實在した妓である。

はや三文<sup>さんもん</sup>字屋<sup>じや</sup>に。人をやる。此朝詠<sup>あさよめ</sup>のおもしろさ。西行<sup>さいぎやう</sup>は何<sup>なに</sup>しつて。松嶋<sup>しょうじま</sup>  
の曙<sup>あけぼの</sup>。蛙濁<sup>きさかた</sup>のゆふべを。響<sup>ひび</sup>つるそ。きのふは。新町<sup>しんまち</sup>の暮<sup>くれ</sup>を見捨<sup>みすて</sup>。其目<sup>そのめ</sup>を  
すぐに。けふ嶋原<sup>しまはら</sup>の朝明<sup>あさあけ</sup>。これが唐<sup>から</sup>にもあるべきや。世之介<sup>よしのすけ</sup>なんと。尤<sup>もつとも</sup>  
と。藤屋<sup>ふぢや</sup>の彦右衛門<sup>ひこゑもん</sup>方に立よれば。夜前<sup>やべ</sup>の行燈<sup>あんどん</sup>消<sup>き</sup>かたてに。物さびたる。  
釜<sup>かま</sup>はたぎりて。岩倉<sup>いわくら</sup>の松茸<sup>まつたけ</sup>を焼<sup>や</sup>て。中碗<sup>なかつわん</sup>に。ふたつ飲<sup>のみ</sup>。是はといふ所へ。  
歌仙<sup>かせん</sup>仕合<sup>しあひ</sup>の身清<sup>みきよめ</sup>。妾<sup>めかけ</sup>も人のおかためきて。出<sup>い</sup>られける。御名残<sup>みななご</sup>も今なり。  
何國<sup>いづく</sup>へと申せば。我菴<sup>わいあは</sup>はと計<sup>はかり</sup>。云捨別<sup>いふすわか</sup>れ侍<sup>さむらい</sup>る。なんの。宇治<sup>うぢ</sup>へはゆくまじ。  
しらぬ事か。六角堂<sup>ろっかくだう</sup>の。裏あたりへ。行人<sup>やうじん</sup>よと。申もはてぬに。太夫<sup>たうふ</sup>  
の御使<sup>ごし</sup>。引舟<sup>ひきふね</sup>の對馬<sup>つしま</sup>。三芳士<sup>みつよし</sup>佐<sup>さ</sup>など。宿<sup>やど</sup>よりは次兵衛<sup>しげへい</sup>。其外男<sup>そのはまおとこ</sup>共祇候<sup>きこう</sup>し  
て。只あれへと。祭<sup>まつり</sup>のごとく。人橋<sup>ひなはし</sup>懸るは。高橋<sup>たかはし</sup>今の御威勢<sup>ごゑせい</sup>也。此時<sup>このとき</sup>の有  
様<sup>よう</sup>。大名<sup>だいめい</sup>もこんな物成<sup>ものなり</sup>へし。屋寢<sup>ひるね</sup>てまづ。夜の草臥<sup>くたがへ</sup>を取<sup>と</sup>かへし。暮<sup>くれ</sup>よりお  
もてに。床机<sup>せうぎ</sup>をなをさせ。九月十日の月も。いづれ都<sup>みやこ</sup>の風情<sup>ふうせい</sup>。高橋<sup>たかはし</sup>。野  
風<sup>かぜ</sup>。志賀<sup>しが</sup>。遠舁<sup>あんしやう</sup>。野世<sup>のせ</sup>。藏之介<sup>くらゐのすけ</sup>がかしこさ。對馬<sup>つしま</sup>が利發<sup>りはつ</sup>。三よし土佐<sup>どさ</sup>がつ  
れ彈<sup>はな</sup>。大酒<sup>だいしゆ</sup>に身をなし。過<sup>す</sup>し所縁<sup>ゆかり</sup>とて。もろこしに笑<sup>わら</sup>はせ。かほるが。尻<sup>しり</sup>  
目に懸<sup>かけ</sup>られ。奥舁<sup>おくしやう</sup>にうなづかせ。しのばるゝ事も。おもひをのこさせし事有



（三）粗末。

（四）三枚重ねの蒲團。

べし。女郎のやはらか成所。衣類の數を尽し。爰で外は万あさまに成ぬ。更過て床とるにも。三ッ蒲團替夜着。枕も常ならず。寢巻もありといふ物もなく。かしらから帶ときて。万事はつき添女郎に。身をまかせ。たばこも手してはつかず。ね道具も人にきせられ。やさしきおことばを聞ね入にして。結構な夢をみる事ぞかし



# 好色一代男

## 卷八目錄

五十六歲

末社ちくらの寢ねの車くるまの事

五十七歲

情なさけのかけろく  
江戸えど小むらさき事

五十八歲

一盃いはいたらいて戀こひ里さと

五十九歲

嶋原じまはらよし崎さき事  
姿すがた人形にんぎょう

六十歲

長崎ながさき丸まる山の事  
女め床しどのせめ道具どうぐの事

らく寢の車

(一)この句は下の「氣立のしれぬ乙姫にあふよりは、しれた丸屋の口鼻がまし」にかけて解するといふ。

(二)客に不自由のないやうに出来てゐる(三)遊里を若返り所とするのは、遊興して心を慰めるのを延齡の途と考へたのである。

(四)佛説に依つて、龍宮を大海の底にある淨土としてある。

(五)神樂庄左衛門、幫間。既出。

(六)男山八幡宮。

(七)一月十九日。石清水疫病詣での日。

(八)參詣したい。

(九)極めて容易だ。

(一〇)不承諾の意を示す。

(一一)欣喜雀躍。

人の内には。かならず死し残のこつて居る婆ばあり。世は物にかまはぬがよしとて。松計まつづかりの山にてもおもしろからず。物の自由じゆうをこしらえ。揚屋あきやといふ事。むかし誰たれかははじめて。年としの若わかなる。たのしみ所。遠とほかりし竜宮淨土りゅうぐうじんとを望のぞみ。氣立きだてのしれぬ。乙姫おとひめにあふよりは。しれた丸屋まるやの口鼻くちばしがましと。末社まつじやあつまりて。けふ程ほどの隙ひま又と有まじと。神樂かぐらが申出して。岩清水いはしみづに詣までて賣せて毎日まいにちつく空言うそを。神かみぞ知るらん。厄やくはらひに。いざ思おもひたち。明日あすは十九日。人の疹はこりをかづくもよしなし。夜宮よみやにといふ。道みちすがら酒も飲のんで一所いこに咄はなしながら。參まゐらるゝ事ことかな。世之介よこすけさまの智恵ちゑを。中間なみまから借かりましたひと申。行人ぎやうじんが水へ入よりやすひ事と。御供ごとも申せし手代てだいに。それとあれば。かしこまつて。物陰ものかげより。兩りやうの手を。ひろげて見すれば。神樂かぐら。錢ぜに一貫いっくわんと心得こころえて。それでは。たらぬ顔かほして。かぶりふる。懷ふせよりは。お初尾はつおと。金子きんす十兩じゅうりやう投なげ出せば。諸願しよくわん成就じゆうじゆ。こんな御無心ごむしんばかり申と。歡よろこびの舞まひの袖そで。立噪たちさいで。車くるまをかれと鳥羽とりはに歸かへるを。招まねき。車三輛くるまさんりやうのうへに。

- (二三)花毛氈。
- (二四)酒樽と、折詰め重詰めめの肴。
- (二五)枕入れる箱と同じ形の手まはり道具容れの箱。
- (二六)島原廊の出口。
- (二七)直に三味線を弾き出し。飲みかけは酒のこと。
- (二八)全歌詞未詳。
- (二九)南面して。
- (三〇)王城の地。京都をいふ。
- (三一)他所。大名の領地城下。
- (三二)紀伊郡竹田村。
- (三三)寒さのために出る涙。
- (三四)三味線の音。
- (三五)興覺めたこと。
- (三六)紀伊郡小坂村の橋。
- (三七)島原の太夫の紋盡し。
- (三八)杜詩の「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」を變へたもの。
- (三九)木地のまゝの器具。
- (四〇)雁の肉を杉焼にした料理。杉焼は杉板の上に魚鳥の肉を載せて炙り、杉の香を移したものの。
- (四一)鹽麩。
- (四二)茶の湯に色服紗を用ゐるところから色服紗で點茶をあらはしてある。
- (四三)勝手に喫するやうに出した煙草盆。
- (四四)短い時間の中に。

花簾をしかせ。太夫さまかたへ申遣し。一樣に。水色の鹿子。白縮緬の。授頭巾を着て。四人宛二輛にのりて。一輛には。樽折重肴。枕箱燭臺に。大燭燭を立て。出口の門より。はや引懸。飲懸。なごりおしさは。朱雀の細道すぎて。大みや通を。南がしらにひかせ行。内裏様の國なればこそ。余所でなる事かと。有難くかたじけなく。寒る月の出れば。見わたす。竹田の葉末に。夜あらしの通ひ。袖おのづからしめりて。なげかぬ泪かとおもはれ。引手の音もとまり。あまり慰すぎて。氣鬱かりき。南を見れば。小井田の道橋の詰に。桃灯ひかりをはなつて。彼里の紋盡し是はときけば。太夫さまがたより。おのゝ様見送りて爰にてさゝを進ぜませひと。仰けると。やり手九人。車とどめて。風林の松。夜寒の。もてなしに。京よりいくつか。蒲團もたせて草の戸の内に。置火燵を仕懸。くもり枕もありて。爰に一寝入とは。夢をすゝめられ。銀の間鍋に。名酒の数く。木具ごしらえの茶漬めし。雁の板焼に。赤鯛を置合。しほらしき事どもありて。跡にはめいゝ吞の。色服紗。吞すての煙草盆。いづれかのこる所もなし。間もなき内に。懸る御事ども出来侍るは。大形ならぬ。

（四）斯かる。

（五）改めて申したい。

（六）今すぐ工夫しろ。

（七）願西彌七。既出。

（八）彩色して。

（九）京都室町今出川にあつた菓子屋。饅頭はこの店の名物であつた。

（一〇）石清水參詣者の土産。玩具の弓矢。蘇民將來の疫病除けの御符。

（一一）遊女の年季證文は十年を期限とした。

（一二）物を賭けて勝負を争ふこと。

（一三）乗懸馬。既出。

（一四）京都三條の大橋。

（一五）ちよつとそこまで行つて来るよ。

御ころの付やう。こと更。こたつの御礼は。外に申上たしと。又車をはやめてゆく。世之介申は。今宵の馳走。身にあまつてよろこばし。何か門歡に。成べき事のありや。唯今たくめといふ。弥七。日本一の饅頭ありと申。それはときけは。一つを。五匁宛にして。上を金銀にだみて。其數九。百。二口屋能登に申付て。夜中にこしらえさせ。太夫九人の方へ。送りまいらせける。太鞍共も。御土産にとて。ちいさき弓矢に。蘇民將來の守をととのへて。行末ながく。御息災に。身あがりも遊ばさす。手形の十年より外に。年切まして。御勤のうちに。口舌もなきやうにと申て。太夫さまかたへ。進上申。なを御祈念の御ため。女郎長久

### 情のかけろく

其乗懸を。三条の橋にまたせ。財布はついて有か。今そこへゆくぞと。声聞しく。小者に申付て。世之介様へ。お暇乞に参ました。俄に江戸下るのよしにて。日來目懸し。仕立物屋の十藏といふもの。立ながら御見舞申て。追付。罷のぼりましてと申。取あへず路銀などくれて。門口に出る

(五) 監視役。

(六) 遊女買ひ。

(七) いいきな奴だ。

(八) 生命には別條のないやうに、生殖器を切られる。作藏は男性生殖器の別名の一。

(九) 約束。

(一〇) 立派な客に見せかけること。

をよび返して。此たびは何のために下るといふ。されば。小むらさきさまにあひまして。初對面から。わたくしはふられますまいと。智恵自慢申懸り。去御方。廿日鼠の宇兵衛を。目付にあそばし。かけるくに仕。江戸へ。よね狂ひにまいると申さても氣な。やつかな其かちまけはときく。身どもがふられませねば。木屋町の御下屋敷をもらひます筈。又負ましたればと。顔の色青ふなして。声をふるはす。隠さずとも申せ。別の事でも御座りませぬ。ふられましたれば。命にはかまひのなきやうに。作藏をきられます。御契約とかたる。よい戯氣とおもひ。銀つかふて。慰にすると見えたり。其相手はと。問ども申さぬかためといふ。一生の。一大事は也。よくく。觀念して。未定めなき作藏なれば。かり首に。珠數を懸させ。跡に残して。誰にとらすべし。惜まず共。日外とらしたる。絆綸子の。犢鼻褌かゝせと申せば。律義なやつで。唯今まで。いさみしが。泪をこぼす。さらばといへども。跡へも先へもゆかず。見るに笑しく。是は一興あり。同。道して下らんと。常の風情にて。乗物こしらえさせ。十藏を召連て下りぬ。本町四丁目の店につきて。十藏宇兵衛を仕立。吉原へつか

## (二)紹介狀。

(一)物を與へること。

(二)未詳。

(三)箸のやうな木の一端を打ち碎いて作つた齒磨き楊枝。

(四)手をさし延べて。

(五)無理に酒をつぐ。

(六)迷惑すること。

(七)一反が八反に相當する意から起つた名。

(八)初會の客は寝ないで歸る。

はしける。首尾こゝろもとなし。揚屋利右衛門に尋。京よりの添狀つかはし。十藏を。宜敷大臣と申。むらさきさまを頼むのよし申せば。内義四五日の中を請合。日を定てかへる時。江戸になひめづらしし物じやと。亭主に一包はづむ。宇兵衛が戻さまに。金の出しやうがはやひとしかれば。金ではなひ。此程京での仕出し人の重寶に成物といふ。上書に古沢と記す。明てみれば。扇の要。目釘竹。針。きぬの糸。餅粘。耳搔。うち齒枝。七色ありて。代三文。なんと。是は人のうれしがる物といふ。返事もせずあきれて連てもどる。其後約束日參て。太夫さまにあひて。酒おもしろうまはる時。十藏手をさして。むらさきさまお一つまいれと。あらく押えて。襟から膝くだり打翻し。たんと。きのどくがる顔つき笑し。太夫くるしからぬと座を立て。行水とれと湯殿に入。さいぜんの衣髪付。少しも替す。肌は白編子。中は紅鹿子の。ひつかへし。上は淺黄八丈の。八端懸。召かへられける。又上方女郎のせぬ事也。同し着物。揃て有し事。このもし。初ては。どれとても。寢道具も出ず。太夫寢ころびて十藏を呼て。しみぐとかたり懸。帯。ときて。とかせて。心よく。物して。初て



（一）東寺で飲んだ酒が、ただ一盃足らなかつたのが原因で、遊里の酒宴、更に新造水揚げの贅澤遊びにまで發展したことを示唆した標題。

（二）その後は、挨拶の詞。

（三）三月二十一日弘法大師忌の供養。

（四）五人分の精進料理。

（五）東寺の東側の門。不淨門であつた。

（六）佛法隆昌の時代。

（七）人間必ず死するの意。

（八）佛法に關する話。

（九）納金。酒宴最後の一杯として主人に返す金。

首尾のしるしにと。硯取よせ。十藏さまに身まかせ候。何か僞有べしと。下帶に端書して。むらさき筆と留てわたし侍る。終にかやうの事なし。宇兵衛不思議。におもひ。宿に歸てかたる。世之介かさねて尋ければ。やうす見るにすこしたらぬ人を。賭にして遣しけると。さながら見えますによつて。先さまの人。憎さにくし。あんな男に。あふてとらしましたといふ。世之介。横手をうつて。何をか隠すべし。京よりそればかりに。あれは下けると申。其跡色くくどきても逢ず。心にくき女是也。

### 一盃たらいて戀里

難波男。吳服物とゝのえにのぼりて。室町に有しが。それより後はと。世之介かたへ尋けるに。けふは東寺の御影供。いざと誘引ける。其日の亭主は。御出入申紙屋の吉介。五人前をこしらえ。畜生門の邊に。幕うたせて。誠に佛法の屋なり。人は入日のごとく。誰か一人も。世にとどまらべしと。ほうれんさうのひたし物。椎茸などにて飲懸。ありがたひ咄しばかりして。いづれも酔て立さまに。世之介盃を。亭主にさして。おさ

(一〇)不吉で氣持ちがわるい。

(一一)酒宴を新にする。

(一二)酔ひ倒れて眠る。

(一三)このまま家に歸られようか。

(一四)客のない遊女。

(一五)三月二十一日は島原の大紋日であつた。

(一六)名ある太夫。

(一七)湯屋の女房を洒落れて貴人に擬してある。

(一八)遊女の始めて客に出ること。ここでは大阪から京へ替へした遊女の、始めてここで客に出るのを、それに准じてある。

(一九)御都合。

(二〇)色道大鏡に「金銀のさたなり、物つかふ貌也」と解してある。

(二一)度々使を立てて談判の上、承諾して吉崎が来ることに決つたこと。

(二二)九日間繼續して同じ遊女を揚げることに。

(二三)寛闊。伊達なこと。

(二四)贈り物などを紙上に書きつけて示して、先づ嬉しがらせた。

(二五)眞綿の帽子を被つて。

めといふ。御意次第と載て。一つ請る時。酒雫もなし。是ではきみが惡ひ。酒とつてこいと。又調に遣し。事新しくして。焼塩にて飲出し。まんまと夢になりぬ。此まゝは歸らずか嶋原へをせく。尤と。八文字屋にゆきて。ある者千人でも。呼と申せど。紋日の事なれば。名所は一人もなし。おもはしからぬ。天神取集て。是でも埒はあかぬぞや。身共はともあれ。大坂のお客に。すこしの内も。淋しき事のおかしからずと。太夫のうち。もらひ懸れ共ならず。喜右衛門北の御方出られて。大坂より。おのぼり遊しました。吉崎さまと申太夫さま。今日水揚にて。丸屋七左衛門方に。御出なされて御座りますが。唯今御内證。きかしました。是には様子ありて。もらひがなりそうに御座りますといふ。はじめより。もめる事なれば。それよかるといふ。聲のしたより。七左へ人橋懸て。御座るになつてきた。常の女郎狂ひと替り。水揚の定まり。太夫に引舟。天神二人添て。九日のつゞき。宿への進上。下へ遣し物。奢第一の世之介が。肝煎程に。よろづ官活に申付て。紙に書て。まづよろこばしける。ていしゆはかまたぎ。女房は着物あらため。置わたして。臺所に。大らうそく。亭主袴肩衣。

- (六)そこらを明るくする。  
 (七)料理人が式作法に依つて料理をしたこと。  
 (八)下級の遊女。  
 (九)十二枚の小袖を懸けて飾り。  
 (一〇)小夜着。

- (一一)同一遊女屋抱への遊女。  
 (一二)引き合はせの決まり文句。結婚式で媒妁人の挨拶に「不思議の御縁で」といふの類。  
 (一三)結婚式の飾り臺。蓬萊飾り。  
 (一四)一般の婚禮の通りに。  
 (一五)三々九度の銚子には、加へと稱して別の銚子より酒をつぎ足す。  
 (一六)色直し。婚禮の中途に新婦が衣裳を着かへること。  
 (一七)時候相應の衣裳。  
 (一八)紋日などに揚屋の雇人などに與へる金銭。まきは庭の縁語。必ずしも庭に蒔きはしなかつた。  
 (一九)多數の人が争ひ拾ふさま。  
 (二〇)世間を廣く見ない人。  
 (二一)謡曲高砂中の文句。婚禮の席に謡ふもの。

明りを走る。八百屋。肴屋。いさみをなして。しきしやうの庖丁人。此威勢。一世の思ひ出也。懸る所へ。太夫さまの。御座敷ごしらえに。まいるのよしにて。末の傾城四人まいりて。衣桁に十二の袖を懸。こよる山をかさね。小蒲團錦の峯のごとし。床に懸物。書棚。香箱。文匣。煙草盆。其外手道具。時代蒔繪をひからせける。屢しありて。門口より。聲々に申つぎ。太夫さま御機嫌よく。是へ御出と申せば。ふたつ手燭を。先にたて。階の子靜に。上せられ。上座の申程に。御なをりあそばしける。左の方に。一家の女郎十一人。おくりまいらせて座する。右のかた。うしろより末座まで。かこゐの女郎十七人。皆緋むく着。並居る。御前に。引舟の女郎。禿。手つかえて座する。口鼻出て御引合中。めづらしき出合と。大坂にて見知ながら。申侍る時。鳩臺。金の土器。祝言のごとく。銚子。くはえの。酒過て。色なをし風情ありて。太夫さま。宿への時服。庭鏡まきちらす。禿やり手。御供の男ども。上を下へと返す。方々よりの進物。廊下に置つゞけて。帳付女。取つぎの女。ちいさい目からは。おどろくべし。相生の松風。小歌の声ぞたのしむ。

（一）或人の姿を寫した人形。

（三）後から長崎に行く考へがある。

（三）舶來品。

（四）丸山廓の遊女の中、日本人向きの遊女と、唐人向きの遊女の區別があつたので、その日本人向きの遊女買ひの意を、唐物に對する日本物の語で表してゐる。

（五）手つけ。前金。

（六）長崎の遊里。

（七）祇園會の當日。

（八）祇園會に出た飾り物の鉾の一種で、月の形を上を飾つたもの。

（九）浮世を思ひきつた意。

（一〇）常夜燈を奉獻し。

（一一）若衆役者の輩。

（一二）浪費し残した金銀あり、これを何にかはうの意。

（一三）古今集安倍仲鷹「あまのはらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」この歌は彼が入唐中の詠といふ。

（一四）唐土に近い長崎の月。

（一五）八軒家の岸。八軒家は天滿天神兩橋の中間の南岸。こゝは大坂伏見間の乗合船の發着所であつた。

## 都のすがた人形

貨物取に。長崎へ下る人に。我も跡よりのおもひ立あるのよし。銀箱さきへ。預て遣し侍る。何か唐物。御望あそばし候と尋ければ。日本物を。買べきなげ銀と仰られける。さては。丸山の御遊山計の。御ころさしありや。まなく。あれにてまちたてまつるのよし。六月十四日。けふは都の詠のこす。月鉾のわたる時。我は玉鉾の商ひの道。いそぐとて先立ぬ。世之介は。おもふかぎりありとて。金銀洛中に蒔ちらし。社塔の建立。常灯をとほし。役者。子共に。家をとらし。馴染の女郎は。其身。自由にしてとらせ。毎日遣ひ崩せども。まだ残る所の内藏。何にかすべし。さらば。此度長崎に下り。よろしき慰の有事もと。おもひ立日は八月十三日。いにしへ安部仲鷹は。古里の月を。おもひふかくは讀れしに。我はまた。あつちの月。思ひやりつると。淀の川舟。大坂の南の岸に着て。よき野郎の方に。二三日の壺入。こゝろのある亭主ぶり。暇乞の床ばなるゝ時。金子五百兩。送られける。惣じて。役者子共の。世の暮し。けふあ

(一) 元の木阿彌になつた意。それを雪の積つた柳が雪の消えて、またもとの柳となるに比していつてある。  
(二) 關鶏の流行にかぶれる意。  
(三) 役者の名。

(二) 催情藥。

- (一) 和蘭人居留地。
- (二) 上方人の宿屋。
- (三) 呼び寄せ。
- (四) 自由な遊びの出来ること。
- (五) 京四條河原。
- (六) 京島原。
- (七) 常設舞臺。
- (八) いづれも能の曲名。

つて。明日は雪の柳のごとし。きれいにほどなくもとの木男となりぬ。或時は。鶏をすき。植木をすき。はや其家を賣。京に住。江戸より。大坂に宿を替。一生所も定ず。何の罪なき。銀もなきもの也と。兵四郎が笑はせて。舟ばたまでおくられ。風もころして。時津海。浪をならさず。ころさす所の。大湊に着にけり。入口の櫻町を見わたせば。はやおもしろくなつて来て。宿に足をもためず。すぐに丸山にゆきて見るに。女郎屋の有様。聞及びしよりはまさりて。一軒に。八九十人も見せ懸姿。唐人はへだたりて。女郎替りけるとかや。戀慕ふかく。中／＼人の見る事も惜み。昼夜共に。其藥を吞ては。飽す枕をかさね侍る。日本人のならぬ事は也。紅毛は出嶋によふで戯れ。上方の町宿へも。自由に取よせ。豊なる事共こそあれ。京にて色川原。色里にて一座せし人よ。世之介下りを。めづらしく。女郎共に。能をさせて。御目に懸るのよし。庭に常舞臺ありて。囃しがた。地謡もとより。太夫。脇。番組して。定家。松風。三井寺。かれは三番。しめやかに。物調子。一際ひくうして。なをやさしく又あるまじき遊興也。折節初紅葉の陰に。自在をおろし。金の大間鍋。もろ

(二) 支那の詩文人の酒の功を詩文を以て讃するもの。

(三) 紅絲で綱に編んだ前掛か。

(四) 金絲でよつたもの。

(五) 思葉は病葉。また鴛鴦の尾の側の羽をいふ。未詳。

(六) 謡曲養老に「是も年ふる山住の、千代のためしを松陰の、岩井の水は藥にて光を延べたる心こそ、猶行末も久しけれ」とある。

(七) 長崎の三十五人の遊女に對して、京の三十五兩の鴛を出してある。

(八) 太夫それぞれの服裝を摸した人形。

(九) 工夫。趣向。

(一〇) 媚藥、姪具の類。

(一一) 父の死後世之介の譲りを受けた遺産の類。

(一二) 遊蕩。

(一三) 三十四歳で遺産を受けてから、六十歳までの年數。

こしの酒功讃を還すとて。遊女三十五人おもひくゝの成立。紅みの。網前だれ。より金の玉だすき。あや柑のおもひ葉をかざし。岩井の水は千代ぞとて。龍れ遊びの大振舞。我京にて。三十五兩の鴛を。焼鳥にして。太夫の肴にせし事も。今此酒宴におどろき。風俗も替りて。しほらしと譬れば。都の女郎さまがたの。風情が見たひとといふ。それこそわけ知の世之介様に。尋られといふ。幸このたび持せたる物有とて。長櫃十二さは運ばせ。此中より太夫の衣襲人形。京て十七人。江戸で八人。大坂で十九人。彼舞臺に名書てならべける。めいゝの仕出し。顔つき。署つき。ひとり替て。所によりて是は誰。それはどなた。いづれか。いやらしきはあらず。長崎中寄て。詠め暮しつ

### 床の責道具

貳貳万五千貫目。母親より。すいぶん遣へと。譲られける。明暮はけを盡し。それから今まで。二十七年になりぬ。まことに。廣き世界の遊女町。残らず詠めぐりて。身はいつとなく。戀にやつれ。ふつと浮世に。今

(五) 浮世に生きてゐる間は遊蕩を止めることを知らない。  
(六) 生まれ年の干支にかへる年、即ち齡六十一歳の年。  
(七) 老年になつて足は弱り、耳は遠くなる意。  
(八) 長壽を祝する杖。

(九) 老年の氣短になつた様子。

(一〇) 肩車。

(一一) 世帯じみた姿。

(一二) 移れば變る世の中でも、この上生きたところで、もはや變つた珍しいことはあるまい。

(一三) 後世安樂の種の慈悲善根は蒔いてゐない。

(一四) 俄かに心を入れかへて、殊勝にならうとしても。

(一五) 遺産の財寶。

(一六) 宇治に産する石。

(一七) 一首の歌を詠んで刻した。

(一八) 當時の大坂古圖には、江戸堀川下流にこの島の名が見えてゐる。

(一九) 五月節供に立てるもの。輪形の長い布または紙。風に靡かせる。

といふ今。ころのこらず。親はなし。子はなし。定る妻女もなし。情念見るに。いつまで。色道の。中有に迷ひ。火宅の内の。やけとまる事をしらす。すではや。くる年は。本卦にかへる。ほどふりて。足弱車の音も。耳にうとく。葉の木の杖なくては。たよりなく。次第に。笑しうなる物かな。おれ計にもあらず。見及びし女の。かしらに霜を戴き。額にはせはしき。浪のうちよせ。心腹の立ぬ日もなし。傘さし懸て。肩くまにのせたる嬢も。はや男の氣に入。世帯姿となりぬ。うつれば替つた事も。何か此うへには有べし。今まで願へる種もなく。死だら鬼が喰ふまでと。俄にひるがへしても。有難き道には入難し。あさましき身の行末。是から何になりとも。成べしと。ありつる寶を投捨。残りし金子。六千兩。東山の奥ふかく。掘埋めて。其上に。宇治石を置いて。朝顔のつるをははせて。かの石に。一首きり付て讀り。夕日影。朝顔の咲。其下に。六千兩の。光殘して。と。欲のふかき。世の人にかたられけれ共。所は。どことも。しれ難し。それより世之介は。ひとつころの友を。七人誘引あはせ。難波江の小嶋にて。新しき舟つくらせて。好色丸と名を記し。緋縮緬の吹貫。是

(二〇) 船中の床を設けた間。家の座敷に類したもの。

(二一) 遊女評判の紙で腰張りした腰屏風。

(二二) 船具の一。

(二三) 強精のための食物類。

(二四) 櫓を押す者の立つ所の下を物の貯蔵所としてある。

(二五) 強壯劑。

(二六) 淫書の種類と見てゐた。

(二七) これら草の姿まで、すべて淫具。

(二八) 淫書の種類と見てゐた。

(二九) 以下墮胎用の品。

(三〇) 晴衣裳。

(三一) 風雅集夢窓國師「いづるとも入るとも月をおもはねばこゝろにかゝる山の端もなし」

はむかしの太夫。吉野が名残の肺布也。幔幕は過にし女郎より。念記の着物  
物をぬい纏せて。懸ならべ。床敷のうちは。太夫品定のこしばり。大綱  
に。女の髪すぢをよりませ。さて臺所には。生舟に餘をはなち。牛房。  
薯蕷。卵を。いけさせ。櫓床の下には。地黄丸五十壺。女喜丹貳十箱り  
んの玉三百五十。阿蘭陀糸七千すぢ。生海鼠輪六百懸。水牛の姿二千五  
百。錫の姿三千五百。草の姿八百。枕繪貳百札。伊勢物がたり貳百部。懷  
鼻禪百筋。のべ鼻紙九百丸。まだ忘れたと。丁子の油を貳百樽。山椒藥を  
四百袋。ゑのこづちの根を千本。水銀。綿實。唐がらしの粉。牛膠百斤。  
其外色々。品々の。賣道具をととのえ。さて又。男のたしなみ衣裳。  
産衣も數をこしらえ。これぞ二度。都へ歸るべくもしがたし。いさ途首  
の酒よと申せば。六人の者おどろき。爰へもどらぬとは。何國へ。御供申  
上る事ぞといふ。されば浮世の。遊君。白拍子。戲女。見のこせし事もな  
し。我をはじめて。此男共。こゝろに懸る。山もなければ。是より女護の  
嶋にわたりて。抓どりの女を見せんといへば。いづれも歡び。譬は。腎虛  
して。その土と成べき事。たま。一代男に生れての。それこそ願ひ



の道なれと。戀風こひかぜにまかせ。伊豆いづの國くにより。日和見ひよりみすまし。天和二年てんわにねん。神かみ

(一) 諸冊二神を陰陽神の始めの二柱とする神話。

(二) 當時の鏡臺は二本の柱に鏡を掛けて後に支柱を附けてあつた。二柱のはじめだから、これを鏡台の二本柱のまだ漆塗らないもののことかと思ふ、無知な人の考へ方。

(三) 稻負せ鳥は古今傳授の三鳥の一。それを無知な人が解して、牛のことと考へたといふのである。

(四) 攝津豊島郡。

(五) 天に仰ぎ地に俯すのもぢりで、呆然として聞こえぬ風をして、農民の土のこと以外には何もわからない意。

(六) 論語「飲水曲肱而枕、樂亦在其中」に由つてあるが、井水を汲む農民の境地から、それらの人の見聞の狭く無知なことを、井中の蛙の諺を以て表はしてある。

(七) 西鶴を指す。

(八) 樂寢して四方八方話の序に。

(九) 外へは漏らさぬの意。

(一〇) 戯作。いたづらに書いた稿本。

(一一) 娼田の地名を引いて、嫁の惡口ばかりいふ姑も、その稿本の面白さに、田から駆けあがつて來て聞き、興に夢中になつて、肩けてゐる鍬から、うつかり手を放す。

(一二) 水田庄左衛門。俳人、西鶴門。

一柱のはしめは鏡臺の塗下地とおほえ稻負鳥は羽のなひ牛の  
事か吾すむ里は津國櫻塚の人にたつねても空耳潰して天に  
指さし地に土け放れず臂をまけて桔槔の水より外をしらずひ  
ろき叵波の海に手はこけ共人のころは斟かたくてくます  
或時鶴翁の許に行て穗の夜の樂寐月にはきかしても余所には  
漏ぬむかしの文枕とかいやり捨られし中に轉合書のあるを取  
集て荒猿にうつして稻臼を挽藁口鼻に讀てきかせ侍るに娼  
田より闕あがり大笑ひ止す鍬をかたけて手放つそかし

落月菴西吟

天和二年壬戌陽月中旬

大坂思案橋荒砥屋

孫兵衛可心板

好色五人女



# 好色五人女 卷一

## 姿姫路清十郎物語

### 目 録

① 戀は闇夜を昼の國

室津にかくれなき男有

② くけ帯よりあらはるゝ文

姫路に都まさりの女有

③ 太鞍に寄獅子舞

はや業は小袖幕の中に有

④ 狀箱じやうせうは宿やどに置おて來きた男

心こゝろ當あての世帶せたい大おほきに違ちがひ有

⑤ 命いのちのうちの七百兩ななひゃくりやうのかね

世よにはやり哥聞あはれは哀かな有

(一)男女の歡會は人目を避けて闇の夜に行はれる意と、戀は人の心を闇、盲目にする意を兼ねてゐるのであらう。

(二)遊里を指す。常人の活動は晝であるのに、この遊里は夜を主として行はれる。

(三)直接には諸財貨を積んだ船の靜かに港に碇泊してゐることを表はし、間接に正月二日の夜吉夢を見るために枕下に敷いて眠る習慣のあつた、寶舟を畫がいた紙片のことを聯想して浪枕と續けてある。

(四)振假名のばいには商賈人の略。

(五)在原業平。伊勢物語から後世この稱は起つた。この文破格、むかし男をうつし繪にしたるにも勝りとすべきである。

(六)容色、服裝をこめていふ。

(七)好色の道、好色を武道、茶道などの呼稱に擬した語。

(八)身心を専らにする。耽る。

(九)起請文、遊女の愛を神佛にかけて誓つた文。

(一〇)續つて千束に餘るやうになつた。

(一一)遊女が馴染の客に誠心を誓ふために己が左手の小指の爪を薄く剃ぎ取つて贈つたもの。

(一二)これも遊女の客に誠意の徴として贈つた、己が頭髮を切つたもの。

(一三)女の黒髪には大衆も驚かれるといふ

## 戀は闇夜を昼の國

春の海しづかに寶舟の浪枕室津はにきわへる大湊なり爰に酒つくれる商人に和泉清左衛門といふあり家榮て萬に不足なし然も男子に清十郎とて自然と生つきてむかし男をうつし繪にも増り其さまうるはしく女の好ぬる風俗十四の秋より色道に身をなし此津の遊女八十七人有しをいづれかあはざるはなし誓紙千束につもり爪は手箱にあまり切せし黒髪は大綱になはせける是にはりんき深き女もつなかるべし毎日の屈文ひとつの山をなし紋付の送り小袖其まゝにかさね捨し三途川の姥も是みたらば欲をはなれ高麗橋の古手屋もねうち成まし浮世藏と戸前に書付てつめ置ける此たはけいつの世にあがりて請べし追付勘當帳に付てしまふへしと見る人は是をなげきしにやめがたきは此道其比はみな川といへる女郎に相馴大かたならず命に掛て人のそしり世の取沙汰なんともおもはず月夜に灯燈を屋ともさせ座敷の立具さし籠屋のない國をじてあそぶ所にこさかしき太鞍持をあまたあつめて番太か拍子木蝙蝠の鳴まねやりてに門茶を焼せて哥念仏を申死もせぬ久五

諺を取つたもの。

(四)日文のこと。當時遊女が大切な客に毎日よこした手紙。

(五)馴染の妓が己の紋を付けて贈つた小袖。

(六)奪衣婆。強慾なもの、衣類の多さに慾を忘れる。

(七)大阪高麗橋には古著屋が多かつた。

(八)好色藏の意。當時浮世といふ語は一つの義として好色に用ひた。

(九)相場が上るだらう。上ることのあらう筈はない。愚かなことだ。

(一〇)親が親子の縁を切つて子を家から追出すこと。その筋の人別帳から子の名を削つて、勘當者の名簿に記す手續きをするのが、正式の勘當であつた。

(一一)世間の惡評。

(一二)月夜に提灯とぼすといふ。不要のこととする意と、提灯を畫點すの意とを重ねて、無用の贅澤の意を強調してある。

(一三)番太郎。夜番のこと。

(一四)遣手と普通書いてある。

(一五)接待の茶。

(一六)盂蘭盆の精靈棚を設けて、靈祭りの眞似をする。

(一七)熱帯地方の國、土人の裸體で生活する地。

(一八)園女郎。遊廓に在つて、太夫、天神

郎がためとて尊<sup>べん</sup>霊<sup>れい</sup>の棚<sup>たな</sup>を祭<sup>まつ</sup>楊<sup>やう</sup>枝<sup>し</sup>もやして送り火の影<sup>かげ</sup>夜<sup>よる</sup>するほどの事をしつくして後は世界<sup>せかい</sup>の圖<sup>ず</sup>にある裸<sup>はだか</sup>嶋<sup>じま</sup>とて家内<sup>うち</sup>のこらす女良<sup>めい</sup>はいやがれと無理<sup>無理</sup>に帷子<sup>かたびら</sup>ぬがせて肌<sup>はだ</sup>の見ゆるをはじける中にも吉崎<sup>よしざき</sup>といへる十五<sup>ご</sup>女良<sup>めい</sup>年月<sup>としづき</sup>かくし來りし腰骨<sup>こしほね</sup>の白なます見付て生<sup>い</sup>ながらの弁才<sup>べんさい</sup>天樣<sup>てんぎやう</sup>と座中<sup>ざちゆう</sup>拜<sup>おが</sup>みて興<sup>きやう</sup>覺<sup>かく</sup>ける其外氣<sup>そけき</sup>をつくる程見くるしく後は次第<sup>しだい</sup>にしらけておかしからずかゝる時清十良親仁<sup>しうしやうしん</sup>腹立<sup>はらだち</sup>かさ成此宿<sup>なりこのしゆく</sup>にたづね入思ひもよらぬ俄風荷<sup>ゑふかに</sup>をのける間もなければ是で焼<sup>や</sup>とまります程にゆる給しへとさま／＼詫<sup>わ</sup>ても聞<sup>き</sup>ず菟角<sup>とかく</sup>はすぐにいづかたへもお暇<sup>いそ</sup>申<sup>まう</sup>てさらばとてかへられるみな川<sup>がは</sup>を始女良<sup>はじめい</sup>泣<sup>な</sup>出してわけもなふなりける太鞍持<sup>たいあんもち</sup>の中に闇<sup>やみ</sup>の夜の治介<sup>しげい</sup>といふもの少もおどろかず男は裸<sup>はだか</sup>か百貫<sup>ひやくくわん</sup>たとへてらしても世はわたる清十良樣<sup>しうしやう</sup>せき給ふなといふ此中にもおかしく是を肴<sup>さかな</sup>にして又酒<sup>さけ</sup>を呑<sup>の</sup>かけせめてはうきをわすれけるはや揚屋<sup>あけ</sup>にはげん<sup>ご</sup>を見せて手扣<sup>たて</sup>ても返事<sup>へんじ</sup>せず吸物<sup>すいぶつ</sup>の出時淋<sup>しづ</sup>しく茶<sup>ちや</sup>のといへば兩の手に天目<sup>てんもく</sup>二ツかへりさまに油火<sup>あぶらび</sup>の灯心<sup>とうしん</sup>をへしてゆく女良<sup>めい</sup>それ／＼に呼<sup>よ</sup>たつるさても／＼替<sup>かは</sup>は色宿<sup>いろしゆく</sup>のならひ人の情<sup>なさけ</sup>は一步小判<sup>いっぽこばん</sup>あるうちなりみな川<sup>がは</sup>が身にしてはかなしくひとり跡<sup>あと</sup>に残<sup>のこ</sup>り泪<sup>なみだ</sup>に沈<sup>しづ</sup>みければ清十郎<sup>しうしやう</sup>も口惜<sup>くちやく</sup>きとばかり



めつぎに位した遊女。

△二辨才天に祈つて癪を療する迷信に生じたものであらう。今も地方の辨天祠には鯉の繪馬をよく見受ける。

△三突然意外な父親が遊宴の席に現れたことを、突風の起り火事の生じたのたたとてある。

△四「お暇申て」の下に「出て行け」などを補ふべきであらう。

△五ててらの誤か。またててらをてらといつたものか。ててらは横鼻鐲のこと。鐲一貫でも世間に立つて行ける。

△六驗。効驗のこと。即ち勘當の効驗。(ききめ)。

△七吸物を出さないこと。

△八一步小判は金貨。一步金。金銀の有る無しとで待遇の變る。

△九「言葉も」下に「なく」が省かれてある(省)一緒に死ぬる。

△一〇「昔々」の下に「と諦め給へ」を補へば意義明瞭になる。

△一一「今じや」の上に「死ぬる時は」を補つて解すればよい。

△一二苦提寺。

△一三外科醫者を呼べの意。

△一四氣つけの藥を持つて來いの意。

△一五自害。

△一六まだ何とか助ける方法があらうの意

言葉も命はすつるにきはめしが此女の同し道にといふべき事をかなしくと

やかく物思ふうちにみな川色を見すましかたさまは身を捨給はん御氣色去

迎はくおろかなり我身事もともにと申たき事なれ共いかにしても世に名

残あり勤はそれく替心なれば何事も昔く是迄と立行さりとはおもは

く違ひ清十良も我を折ていかに傾城なればとて今迄のよしみを捨淺ましき

心底かうは有ましき事ぞと涙をこぼし立出る所へみな川白將褰してかけ込

清十良にしがみつき死すにいづくへ行給ふぞさあく今じやと剃刀一對出

しける清十良又さしあたり是はと悦ふ時皆く出合兩方へ引わけ皆川は親

かたの許へ連かへれば清十郎は人く取まきて内への御詫言の種にもと且

那寺の永興院へおくりとつけける其年は十九出家の望哀にこそ

### くけ帯よりあらはるゝ文

やれ今の事じやは外科よ氣付よと立さはく程に何事ぞといへば皆川ぢが

いと皆くなけきぬまだどうぞといふうちに脉があがるとやさても是非な

き世や十日あまりも此事をかくせば清十郎死おくれつれなき人の命母人

△五〇經。日數の立つてゐる間に。

△六一「いい目にも逢はう」出世すること  
もあらう」の意が、この句の下に省かれ  
てゐる。

△七一宿即ち家からの意。

△八〇律義の下に「に」が省かれた形。

△九〇さて。

△二〇この句の下に生れただらうの意を補  
つて見るべきである。

△二〇美人。

△三〇綾紋。絹布の一種。地厚く、光澤な  
く、織目の斜目に見えるもの。

△四〇早く。早速。

△五〇戀の名残の手紙。

△六〇清十郎の遊里での呼び名。

の申こされし一言におしからぬ身をながらへ永興院をしのび出同國姫路に  
よしみあればひそかに立のき爰にたづねゆきしにむかしを思ひ出てあしく  
はあたらす日數ふりけるうちに但馬屋九右衛門といへるかたに見せをまか  
する手代をたづねられしに後／＼はよろしき事にもと頼にせし宿のきもい  
られてはじめて奉公の身とは成ける人たるものゝそだちいやしからずこゝ  
ろさしやさしくすぐれてかしく人の氣に入べき風俗なり殊に女の好る男  
ぶりいつとなく身を捨戀にあきはて明くれ律義かまへ勤けるほとに亭主も  
萬事をまかせ金銀のたまるをうれしく清十郎をすへ／＼頼にせしに九右衛  
門妹におなつといへる有ける其年十六迄男の色好ていまに定る縁もなし  
されは此女田舎にはいかにして都にも素人女には見たる事なし此まへ嶋原  
に上羽の蝶を紋所に付し大夫有しがそれに見増程成美形と京の人の語ける  
ひとつ／＼いふ迄もなし是になぞらへて思ふへし情の程もさぞ有へし有時  
清十郎竜門の不斷帶中のかめといへる女にたのみて此幅の廣をうたてし  
よき程にくけなをしてと頼しにそこ／＼にほどきければ昔の文名残ありて  
取乱し讀つゝけるに紙數十四五枚有しに當名皆清さまと有てうら書は遠

へろ室の遊女。

（七）思ひをかける。

（八）勤め氣、商賣氣からの飾り言。

（九）色狂ひ、好色の遊びに耽けること。

（一〇）春花秋月の美もその心を引かね。

（一一）目つきや言葉の端から、戀してゐる  
ことが他人に知られる。

（一二）「何とぞ」の下に「かなへてやりた  
し」の意が省かれてゐる。

（一三）腰元、仲居の女など。

（一四）文法上破格。連體法が正しい。

ひて花鳥うきふね小太夫明石卯の葉筑前千壽長<sup>ちんじやう</sup>市之丞<sup>しやう</sup>こよし松山小左衛  
門出羽みよしみなく室君の名ぞかしいづれを見ても皆女良のかたよりふ  
かくなづみて氣をはこび命をとられ勤<sup>つとめ</sup>のつやらしき事はなくて誠<sup>まこと</sup>をこめし  
筆のあゆみ是なれば傾城<sup>けいせい</sup>とてもにくからぬものぞかし又此男の身にしては  
浮世<sup>うきよ</sup>ぐるひせし甲斐<sup>かい</sup>こそあれさて内證<sup>ないしやう</sup>にしこなしのよき事もありや女のあ  
まねくおもひつくこそゆかしけれといつとなくおなつ清十良に思ひつきそ  
れより明暮<sup>あけくれ</sup>心をつくし魂身<sup>たましひ</sup>のうちをはなれ清十良が懷<sup>ふだう</sup>に入て我は現<sup>うつつ</sup>が物  
いふごとく春<sup>はる</sup>の花も闇となし秋の月を昼となし雪の曙<sup>あけぼの</sup>も白くは見えず夕  
されの時鳥<sup>ほととぎす</sup>も耳に入ず盆<sup>ぼん</sup>も正月もわきまへず後は我を覺<sup>おぼ</sup>ずして耻<sup>はづ</sup>は目より  
あらはれいたづらは言葉にしれ世になき事にもあらねば此首尾<sup>しゆび</sup>何とぞとつ  
きんくの女も哀れにいたましく思ふうちにも銘<sup>めい</sup>くに清十郎を戀託<sup>こひたく</sup>お物師  
は針<sup>はり</sup>にて血をしぼり心の程を書遺<sup>かきつ</sup>しける中居<sup>なかい</sup>は人頼<sup>ひとたの</sup>みして男の手にて文を  
調<sup>なと</sup>へ袂<sup>たもと</sup>になげ込腰元<sup>こしもと</sup>ははこばでも苦<sup>くる</sup>しからざりき茶を見世にはこび抱姥<sup>だそうば</sup>は  
若子<sup>わこ</sup>さまに事よせて近寄<sup>きよよ</sup>お子を清十良にいだかせ膝<sup>ひざ</sup>へ小便<sup>せうべん</sup>しかけさせこな  
たも追付<sup>おひ</sup>あやかり給へ私もうつくしき子を産<sup>う</sup>でからお家へ姥<sup>うば</sup>に出ました其

- (二) 夫婦で持つてゐた世帯をやめた時。  
(三) 離縁狀。

(七) 小形の鮭。

(八) 船場煮と書く。鹽物の魚を煮たもの。

(九) 色戀のこと。

(一〇) 覺めて夢見る様子。

(一一) 心ばかりあせる。

(一二) 店の土間から奥の方に行く境界の戸  
(一三) 火の警戒に夜中家内を廻る者。その  
者の通る時の引き合はせの戸の車の音。

(一四) 尾上の櫻は古來歌文に有名なもの。  
橋麿加古川畔に在る。

(一五) 容色勝れた娘。

男は役に立ずにて今は肥後の熊本に行て奉公せしとや世帯やぶる時分暇の  
狀は取てをく男なししやに本におれは生付こそ横ぶとれ口ちいさく髪も少  
はちどみしにとしたゝるき獨言いふこそおかしけれ下女は又それゝに金  
じやくし片手に目黒のせんば煮を盛時骨かしらをゑりて清十良にと氣をつ  
くるもうたてしあなたこなたの心入清十良身にしては嬉しかなしく内かた  
の勤は外になりて諸分の返事に隙なく後には是もうたてくと夢に目を明風  
情なるになをおなつ便を求めてかずゝのかよはせ文清十良ももやゝとな  
りて御心にはしたがひながら人めせはしき宿なればうまひ事は成がたくし  
んいを互に燃し兩方戀にせめられ次第やせにあたら姿の替り行月日のうち  
こそ是非もなくやうゝ声を聞あひけるをたのしみに命は物種此戀草のい  
つぞはなびきあへる事もと心の通ひちに兄姉の關を居へ毎夜の事を油斷な  
く中戸をさし火用心めしあはせの車の音神鳴よりはおそろし

### 太鞍による獅子舞

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢色ある娘は母の親ひけらかして花は見

(三)女は化粧、服装で醜いものも美しく  
見せるの意。

(四)姫路城中に祭られた老狐。當時有名  
であつた。

(五)自家備への女子用駕籠を昇かせて。

(六)萬般の世話、宰領。

(七)高砂の松も、曾根の松も共に古來有  
名。

(八)松葉掻き。

(九)袖と色を競ふの意。

(一〇)當時所持の美麗な女小袖を多く、綱  
に掛け連ねて幕の代りにして、その中で  
花見、酒宴など催した。豪華を誇つたも  
のであらう。

(一一)覗きおくれて。

(一二)駕籠昇などの下人。

(一三)盃の代りに天目茶碗を用ひて酒を飲  
むこと。

(一四)十分に飲んで、酔うて眠る。

(一五)息枝は駕籠昇の縁で、ながくの枕に  
置いた語。

(一六)もと伊勢神宮の大神樂から出たもの  
といふが、後は太鼓を叩き獅子舞などす  
る乞食藝人となつた。

(一七)面白い藝。

すに見られに行は今の世の人心なり菟角女は化物姫路の於佐賀部狐もかへ  
つて眉毛よまるべし但馬屋の一家春の野あそびとて女中駕籠つらせて跡よ  
り清十郎萬の見集に遣しける高砂曾根の松も若縁立て砂濱の氣色又有まじ  
き詠ぞかし里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ松露の春子を取などすみれ  
つはなをぬきしやそれめつらしく我もととりくの若草さこしうすかりき所  
に花薙毛纏しかせて海原靜に夕日紅人くの袖をあらそひ外の花見  
衆も藤山吹はなんともおもはず是なる小袖幕の内ゆかしく眼をくれて歸ら  
ん事を忘れ樽の口を明て酔は人間のたのしみ萬事なげやりて此女中をけふ  
の肴とてたんとうれしがりぬこなたには女酒盛男とては清十良ばかり下  
く天目吞に思ひ出申て夢を胡蝶にまけず廣野を我物にして息枝ながくた  
のしみ前後もしらず有ける其折から人むら立て曲太鼓大神樂のきたりおの  
くのあそび所を見掛獅子がしらの身ぶり扱もく仕くみて皆く立こそぞ  
りて女は物見だけくて只何事をもわすれひたもの所望くとやむ事をおし  
みけり此獅子舞もひとつ所をさらす美曲の有程はつくしけるおなつは見す  
して独幕に残て虫齒のいたむなどすこしなやむ風情に袖枕取乱して帯はし

（一）逢ふ瀬。

（二）町家の女。素人女

（三）幕の布に縫ひ目を開いておきたるもの。

（三）頭隠して尻隠さず。（諺）

（三）手段、策略のために出したもの。

（三）知るべし。知るべきが正しい。

やらほどけを、其まゝにあまたのぬぎ替かへ小袖せうそでをつみかさねたる物陰ものかげにうつゝ、  
なき空そら軒心のきにくしかゝる時はや業わざの首尾しゅびもがなと氣のつく事町女房まちにようはまた  
あるましき帥すしさま也清十良おなつばかり残りおはしけるにこゝろを付松む  
ら／＼としげき後道うしろみちよりまはりければおなつまねきて結髪ゆいがみのほどくるもか  
まはず物もいはす兩人鼻息はないきせはしく胸むねばかりおどらして幕まくの人見より目を  
はなさず兄あに姫よめこはく跡あとのかたへは心もつかず起おきさまにみれば柴人しば登荷かをお  
ろして鎌かまを握にぎしめふんどしうごかしあれはといふやうなる貞かほつきしてこゝ  
ちよげに見て居いともしらず誠まことにかしらかくしてや尻しりとかや此獅子舞ししうまひ清十良  
幕まくの中より出しをみてかんじんのおもしろひ半なまにてやめけるを見物興けんきよう覺さて  
残り多き事山／＼に霞かすみふかく夕日ゆふひかたふけば萬を仕舞しまて姫路ひめぢにかへるおも  
ひなしかはやおなつ腰こしつきひらたくなりぬ清十良跡にさかりて獅子舞ししうまひの役  
人やくにけふはお影かげ／＼といへるを聞ば此大神樂たみぎくは作り物三にして手くだの爲ために  
出しけるとはかしこき神もしらせ給ふまじましてやはしり智恵ちへなる兄あに姫よめな  
んどが何としてしるべし

## 状態は宿に置いて来た男

(一)地名。飾磨。播磨飾磨郡に在る。

(二)海濱の小家。

(三)山城醍醐寺の僧。法印は僧侶の位。

(四)高山は大和の地名。茶筌の産地。

(五)常陸鹿島神宮の神託と稱した、その年の吉凶の豫報を諸國に觸れ歩いた者。

(六)船玉様とも稱した。住吉明神は船の神として、船頭などが信仰した。

(七)柄杓。

(八)各人より出さしめる錢。

(九)酒の煙をする鍋形の器。

(一〇)鑪の正面から吹く風。順風。

(一一)八分目。

(一二)われさま。今貴様といふやうな意。  
(一三)大聲で物いふ。

乗かゝつたる舟なればし、かまづより暮をいそぎ清十良おなつを盗出し、上方へのぼりて年浪の日數を立うき世帯もふたり住ならばとおもひ立取あへずもかり衣濱びさしの幽なる所に舟待をして思ひくゝの旅用意伊勢參宮の人也有大坂の小道具うりならの具足屋醍醐の法印高山の茶筌師丹波の蚊屋うり京のごふく屋鹿嶋の言ふれ十人よれば十國の者乗合舟こそおかしけれ船頭声高にさあ／＼出します銘くゝの心祝なれば住吉さまへのお初尾とてしやく振て又あたま數よみて呑ものまぬも七文づゝの集錢出し間鍋もなくて小桶に汁椀入て飛魚のむしり肴取いそぎて三盃機嫌おの／＼のお仕合此風眞體で御座ると帆を八合もたせてはや一里あまりも出し時備前よりの飛脚横手をうつて扱も忘たり刀にくゝりながら状態を宿に置いて来た男、錢のかたを見てそれ／＼持佛堂の脇にもたし掛けて置ましたと働きけるそれが爰から聞ゆるものかありさまにきん玉が有かと船中声／＼にわめけば此男念を入てさぐりいかにも／＼二ツこざりますといふ、これも大笑になつて何事

(四)大阪の地名。

(三)美人。美貌。

もあれじや物舟をもどしてやりやれとて楫取直し湊にいればけふの首途あしやと皆く腹立してやうく舟汀に着ければ姫路より追手のもの爰かしこに立さはぎもし此舟にありやと人改めけるにおなつ清十良かくれかねかなしやといふ声計哀れしらずども是を耳にも聞いれずおなつはきびしき乗物に入清十良は繩をかけ姫路にかへりける又もなき歎見し人ふびんをかけざるはなし其日より座敷簞に入て浮難義のうちにも我身の事はなひ物にしおなつはくと口ばしりて其男目が狀箱ぬすれねは今時分は大坂に着て高津あたりのうら座敷かりて年寄たかゝひとりつかふて先五十日計は夜昼なしに戻もかへずに寐はすにおなつと内談したものの皆むかしになる事の口惜や誰どころしてくれいかしさてもく一日のながき事世にあきつる身やと舌を齒にあて目をふさぎし事千度なれどもまだおなつに名残ありて今一たび最後の別れに美形を見る事もがたと耻も人のそしりもわきまへず男泣とは是ぞかし番の者ども見る目もかなしく色くにいさめて日数をふりねおなつも同じ歎にして七日のうちはだんじきにて願狀を書て室の明神へ命乞したてまつりにけり不思議や其夜半とおもふ時老翁枕神に立せ給ひあ



(二六)人妻と忍び逢ふ。

(二七)無事。

(二八)當時の通貨の一種。薄い橢圓形の金貨。

らたなる御告なり汝我いふ事をよく聞べし惣じて世間の人身のかなしき時  
いたつて無理なる願ひ此明神がまゝにもならぬなり俄に福德をいのり人の  
女をしのび悪き者を取ころしてのふる雨を日和にしたいの生つきたる鼻を  
高ふしてほしひのとさまぐのおもひ事とても叶はぬに無用の佛神を祈り  
やつかいを掛ける過にし祭にも参詣の輩壹万八千十六人いつれにても大  
欲に身のうへをいのらざるはなし聞ておかしけれ共散錢なけるがうれしく  
神の役に聞なり此参りの中に只壹人信心の者あり高砂の炭屋の下女何心も  
なく足手をくさいにて又まいりましよと拜て立しがこもどりして私もよ  
き男を持してくださりませいと申それは出雲の大社を頼めこちはしらぬ事  
といふたれどもゑきかずに下向しけりその方も親兄次第に男を持ば別の事  
もなひに色を好て其身もかゝる迷惑なるぞ汝おしまぬ命はながく命をおし  
む清十良は頓寂期ぞとあり／＼との夢かなしく目を覺して心ほそくなりて  
泣明しける案のごとく清十良めし出されて思ひもよらぬ詮義にあひぬ但馬  
屋内蔵の金戸棚にありし小判七百兩見えさりしこれはおなつに盗出させ清  
十良とりてにげしと云觸て折ふし悪敷此事ことはり立かね哀や廿五の四月

「お長持の底部に車を取りつけて、火災などの際運び出すに使したもの。」

(一)當時流行した唄「清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしやうよりも」

(二)これも當時流行した唄の文句。

(三)拍子詞であらう。

(四)狂人風の笑ひ。

(五)共亂れ。お夏に同情の餘り、共に狂氣じみた風になる。

(六)狂亂人。氣ちがひ。

(七)數年來懇意に交はりし人。

十八日に其身をうしなひけるさてもはかなき世の中と見し人袖は村雨の夕暮をあらそひ惜みなしまぬはなし其後六月のはじめ萬の虫干せしに彼七百兩の金子置所かはりて車長持より出けると也物に念を入べき事と子細らしき親仁の申き

### 命のうちの七百兩のかね

何事もしらぬが佛おなつ清十良がはかなくなりしとはしらずとやかく物おもふ折ふし里の童子の袖引連て清十良ころさばおなつもころせとうたひける聞ば心に懸ておなつそだてし姥に尋ければ返事しかねて泪をこぼすさてはと狂亂になつて生ておもひをさしやうよりもと子共の中にまじはり音頭とつてうたひける皆と是をかなしくさまゝとめてもやみがたく間もなく泪巾ふりてむかひ通るは清十良でないか笠がよく似たすげ笠がやはんはゝのけらゝゝ笑ひうるはしき姿いつとなく取亂して狂出ける有時は山里に行暮て草の枕に夢をむすめば其まゝにつきんゝの女もおのづから友みたれて後は皆ゝゝ亂人となりにけり清十良年ころ話し人どもせめては其跡残し

(八) 皆々の指圖通りにしよう。

(九) 陰曆七月十四日から七月十六日までをいふ。安居(あんご)の期である。

(一〇) 大般若經。

(一一) 稱揚すべき、立派なこと。

(一二) 藤原豐成(とよなり)の女、大和の當麻寺(たうまし)で剃髪し、蓮の糸を以て曼陀羅(まんだら)を織つたと傳へる。

(一三) 歌舞伎。

(一四) 名を流す、新川舟、のせて、泡、縁語で綴つてある。

をけとて草芥(くさい)を染(そめ)し血(ち)をすゝき尸(しかばね)を埋(う)みてしるしに松柏(まつかきは)をうへて清十良塚(きよじうら)といひふれし世の哀(あはれ)は是ぞかしおなつ夜毎(よごと)に此所(ここ)へ來りて吊(とどろ)ひける其うちになまざくゝとむかしの姿(すがた)を見(み)し事(こと)うたがひなしそれより日(ひ)をかさね百ヶ日にあたる時塚(ときづか)の露草(つゆくさ)に座(ま)して守(もも)り脇指(わきさし)をぬきしをやうゝ引(ひ)とよめて只今むなしうなり給(たま)ひてやうなしまことならば髪(かみ)をもおろさせ給(たま)ひすへゝゝなき人(ひと)をとひ給(たま)ふこそぼだいの道(みち)なれ我(われ)ゝも出家(しゆつけ)の望(のぞみ)といへばおなつこゝろをしづめみなゝが心底(こてい)さつしてともかくもいづれもがさしづはもれしと正覺寺(しやうかくじ)に入(い)て上人(じやうじん)をたのみ十六(じゅうろく)の夏衣(なつころも)けふより墨染(すみぞめ)にして朝(あした)に谷(たに)の下水(したみづ)をむすびあけ夕(ゆふ)に峯(みね)の花(はな)を手折(てり)夏中(げちゆう)は毎夜(まいよ)手灯(てんぢ)かゝげて大經(だいきやう)のつとめおこたらす有難(ありがた)きとはなりぬ是(こゝろ)を見る人(ひと)殊勝(じゆつしやう)さまして傳(つた)へきく中將姫(なかつしやうひめ)のさいらいなるべしと此庵室(このあしむ)に但馬屋(たにまや)も發心(はつしん)おこりて右(みぎ)の金子(ごんぎ)仏事(ぶつじ)供養(くやう)して清十良(きよじうら)を吊(とどろ)ひけると也(なり)其比(そのひ)は上方(かみかた)の狂言(きやうげん)になし遠國村(えんこくむら)ゝ里(さと)ゝ迄(いた)ふたりが名(な)を流(なが)しける是ぞ戀(こひ)の新川舟(しんかわふね)をつくりておもひをのせて泡(うたかた)のあはれなる世(よ)や



# 好色五人女 卷二

情なさけを入し樽屋物かたり

## 目録

㊦ 戀こひに泣輪なみわの井戸替

あい釣瓶つるべもおもひに乱みだるゝ繩有

㊦ 踊おどはくづれ桶夜更きつよふけて化物

人はおそろしや蓋ふたして見せぬ心有

㊦ 京の水もらさぬ中忍しのひて合釘あいくぎ

目印の錐紙きりかみに書付て有

④ こけらは胸の焼付新世帯

心正直の細工人天満に有

⑤ 木屑の杉楊枝一寸先の命

りんきに逆目をやる杉有

(一)桶の最底部の輪、また一種の器具。

(二)棺桶。

(三)鉋屑の燃ゆることの速きと、細い世帯の意と。

(四)大阪の地名。

(五)土氣はなれて、上品なこと。

(六)土地の總收穫の三分の一を上納する代りに、金銀で納むることが許されてゐた。その金銀をいふ。

(七)奥勤めの女中。

(八)金銀財寶などの値高いものを納める藏。

(九)色戀に誘ふ所作。

(一〇)七月七日七夕祭の日。織女に貸小袖といふことをし、また種々の供物をなし井戸替をする風習のあつたことは、年中行事の書類に見えてゐる。

(一一)雄鳥羽。左を上を右を下にするをいふ。疊み方の一方式。反對なるを雌鳥羽といふ。

## 戀に泣輪の井戸替

身はかぎりあり戀はつきせず無常は我手細工のくはん桶に覺へ世をわたる業とて錐のこぎりのせはしく鉋屑のけふりみぢかく難波のあしの屋をかりて天満といふ所からすみなす男有女も同じ片里の者にはすぐれて耳の根白く足もつちけはなれて十四の大晦日に親里の御年貢三分一銀にさしつまりて棟たかき町家に腰もとつかひして月日をかさねしに自然と才覺に生れつき御隠居への心づかひ吳さまの氣をとる事それよりすへゝの人に迄あしからず思はれ其後は内藏の出し入をもまかされ此家におせんといふ女なふてはと諸人に思ひつかれしは其身かしこきゆへぞかしされ共清の道をわきまへず一生枕ひとつにてあたらず夜を明しぬかりめにたはふれ袖つま引にも遠慮なく声高にして其男無首尾をかなしみ後は此女に物いふ人もなかりき是をそしれど人たる人の小女はかくありたき物なり折ふしは秋のはじめの七日織女に借小袖としていまだ仕立てより一度もめしもせぬを色く七ッめんどりばにかさねかちの葉に有ふれたる哥をあそばし祭給へば下く

△(二) 胡瓜。

△(三) 一世帯を持つものの義務。

△(四) 残り水を汲みあげることに。

△(五) 庖丁の一種。

△(六) 呪咀のためのものと察せられる。

△(七) 錢貨の一種。人の駒を牽く圖を表してあるからこの稱がある。

△(八) 地方向けの下等品。

△(九) 刀の柄の目釘の上にさす金具で、二つある内一方違つたもの。

△(一〇) 多くの異種の布帛の片を集め纏ぎ合はせて作る涎掛。

△(一一) 最底部の井戸側。

△(一二) 老女の妻をいふ詞として、古來用ひてゐるが、その意十分明らかでない。

△(一三) 蝶鰐。

△(一四) 大阪天満天神の前通りを北方に行つたところに路を狹んであつた二つの池。

△(一五) この職業。

△(一六) 世上に禁止になる。

もそれ／＼に唐瓜枝柿かざる事のおかし横町うら借屋迄電役にかゝつてお家主殿の井戸替けふことにめつらし濁水大かたかすりて眞砂のあがるにまじり日外見えぬとて人うたがひし薄刃も出昆布に針さしたるもあらはれしが是は何事にかいたしけるぞやなをさがし見るに駒引錢目鼻なしの裸人形くんだり手のかたし目貫つき／＼の涎掛さま／＼の物こそあがれ蓋なしの外井戸こゝろもとなき事なり次第に涌水ちかく根輪の時むかしの合釘はなれてつぶれければ彼樽屋をよび寄て輪竹の新しくなしぬ爰に流ゆくさゞれ水をせきとめて三輪組すがたの老女いける虫をあひしけるを樽屋何ぞと尋しに是はたゞ今扱あげし井守といへるものなりそなたはしらすや此むし竹の筒に籠て煙となし戀ふる人の黒髪にふりかくればあなたより思ひ付事ぞとさも有のまゝに語ぬ此女もとは夫婦池のこさんとして子おろしなりしが此身すぎ世にあらためられて今は其むごき事をやめて素麵の確など引て一日暮しの命のうちに寺町の入相の鐘も耳にうとく淺ましいやしく身に覺ての因果なをゆくすへの心ながらおそろしき事を咄けるにそれは一ツも聞もいれずして井守を焼て戀のたよになる事をふかく問におのづと哀さもまさ



(二七) すぐに。

(二八) 氣やすく請合ふ。

(二九) 金錢の世の中だからの意。

(三〇) 晒布は奈良の名産であつた。

(三一) 九月九日重陽の節供。

(三二) 一代茶を沸かす薪は買いでやる。

(三三) 盆踊の一團の輪がくづれ、その人々が仲間から去ることを、桶屋の縁に因つて壊れ桶に續けてある。

りて人にはもらさじ其思ひ人はいかなる御方さまぞといへば樽屋我をわすれてこがるゝ人は忘れず口の有にまかせて樽のそこを叩てかたりしは其君遠にあらす内かたのお腰もとおせんがく／＼百度の文のかへしもなきと泪に語れば彼女うなづきてそれはいもりもいらす我堀川の橋かけて此戀手に入てまなく思ひを晴させんとかりそめに請かければ樽屋おどろき時分がらの世の中金銀の入事ならば思ひながらなりがたしあらば何かおしかるべし正月に櫛着物染やうはこのみ次第盆に奈良ざらしの中位なるを一ツ内證はこんな事で埒の明やうにとたのめばそれは欲にひかるゝ戀ぞかし我たのまゝゝは其分にはあらずおもひつかする仕かけに大事有此年月數千人のきもいりつゝにわけのあしきといふ事なし菊の節句より前にあはし申べしといへば樽屋いと／＼かしもゆる胸に焼付かゝさま一代の茶の薪は我等のつゞけまいらすべしと人はながいきのしれぬうき世に戀路とて大ぶんの事をうけあふはおかし

踊はくづれ桶夜更て化物

(二)大阪三十三所の一、天満の北部に在る。

(三)神明社。曾根崎の北方に在る。

(四)淀川筋の北岸、難波橋の上天神橋の下。

(五)北區川崎町淀川の西岸。當時郊外。

(六)北區池田町。神橋筋。

(七)長柄。

(八)人の慾に迷ふ心を闇にたとへてある。その闇は下の廿八日の闇夜にも縁を引いてゐる。

(九)盆踊のこと。

(一〇)色戀のいたづらの媒介する老婆。

(一一)母屋。おせんの奉公する家を指す。

(一二)都合よしと見合はせ。

(一三)臺所につづく廣い板敷きの間。

(一四)命の瀬戸きは。

(一五)主婦と隠居してゐる先代の主婦。

(一六)無用の夜歩き。

(一七)正徳の攝津大阪圖鑑綱目大成には鍋島の屋敷は堂島に鍋島岩松殿、江戸堀北側の一丁目に鍋島攝津守と見えてゐる。

(一八)道念節といふ小唄は貞享頃道念山三郎といふものうたひ出した盆踊口説から出たものと傳へる。道念仁兵衛の名は嬉遊笑覽に松の落葉を引いた中に見えてゐるが、如何なる人か詳かでない。

(一九)口眞似。

(二〇)歌謡の曲節の名。

天満に七ツの化物有大鏡寺の前の傘火神明の手なし兒曾根崎の逆女  
十一丁目のくびしめ細川崎の泣坊主池田町のわらひ猫うくひす塚の燃か  
らうす是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし世におそろしきは人間ばけて命  
をとれり心はおのづからの闇なれや七月廿八日の夜更て軒端を照せし灯笼  
も影なくけふあすばかりと名残に声をからしぬる馬鹿踊もひとりく己か  
家くに入て四辻の犬さへ夢を見し時彼樽屋にたのまれしいたづらかゝ面  
屋門口のいまた明掛てありしを見合戸さしけはしく内にかけ込廣敷にふし  
まろびやれくすさましや水が呑たいといふ声絶てかぎりの様に見えしが  
されども息のかよふを頼みにして呼生けるに何の子細もなく正氣になりぬ  
内儀隠居のかみさまをはじめて何事か目に見えてかくはおそれけるぞ我事  
年寄のいはれざる夜ありきながら宵より寐ても目のあはぬあまりに踊見に  
まいりしほどに鍋嶋殿屋敷のまへに京の音頭道念仁兵衛が口うつし山くど  
き松づくししはらく耳にあかずあまたの男の中を押わけ團かざして詠ける  
に闇にても人はかしく老たる姿をかづかす白き帷子に黒き帯のむすびめ  
を當風にあちはやれどもかりそめに我尻つめる人もなく女は若きうちの物

(三) 欺かれず若い女と見違へない。

(三) 當世流行の風。

(三) 一日。ひとひの詠。

(三) この家中の人人。

(三) 住吉は堺の住吉神社。御はらひは祭禮。祭禮の神輿の渡御の行列の先頭に立つ猿田彦を指す。猿田彦神の像は鼻高く所謂天狗の形である。

(三) 渡世の業、生業。

(三) 實直。

(三) 夜半の鐘。

ぞとすこしはむかしのおもはれ口惜てかえるに此門ちかくなりて年の程二十四五の美男我にとりつき戀にせめられ今思ひ死ひとへ二日をうき世のかぎり腰もとのおせんつれなし此執心外へは行まし此家内を七日がうちに豈人ものこさず取ころさんといふ声の下より鼻高く貞赤く眼ひかり住吉の御はらひの先へ渡る形のごとくそれに魂とられ只物すごく内かたへかけ入のよし語ばいづれもおとろく中に隠居泪を流し給ひ戀忍事世になきならひにはあらずせんも縁付ごろなれば其男身すぎをわきまへ博奕後家くるひもせずたまかならばとらすべきにいかなる者ともしれず其男ふびんやとしばし物いふ人もなし此かゝが仕懸さても戀にうとからず夜半なりてをのゝに手をひかれ小家にもどり此うへの首尾をたくむうちに東窓よりあかりさし隣に火打石の音赤子泣出し紙帳もりて夜もすがら喰れし蚊をうらみて追拂二布の蚤とる片手に佛棚よりはした錢を取出しつまみ茶買なと物のせはしき世渡りの中にも夫婦のかたらひを樂み南枕に寐筵しとげなくなりしはすきつる夜きのへ子をもかまはず何事をかし侍るやう／＼朝日かゝやき秋の風身にはしまざる程吹しにかゝは鉢巻して枕おもげにもてなし

(二九)煎藥の火熱で第一に吹き上がること

(三〇)氣分。

(三一)竪に二つに割つた片方。

(三二)一種の製法に依る醬油。まいらばはまるらばで、食べるならば、持つて來てあげようの意。

(三三)うみたる亭を入れる桶。

(三四)各種の布片をついで造つた袋。

(三五)知れるが正しい。色戀の道を知るの意。

(三六)好き。

(三七)當時傭人などが主人の許諾を得ずして伊勢参宮をする風習があつた。それをいふ。

岡嶋道齋といへるを頼み藥代を當所もなく手づからやくはんにてかしらせんじのあがる時おせんうら道より見舞來てお氣相はいかゞとやさしく尋ひだりの袂より奈良漬瓜を片舟蓮の葉に包てたばね薪のうへに置將油のたまりをまいらばと云捨てかへるを。かゝ引とゞめて我ははやそなたゆへにおもひよらざる命をすつるなり。自娘とても持さればなき跡にて吊ひても給はれとふるき亭桶のそこより紅の織紐付し紫の革たび一足つぎぐの珠數袋此中にさられた時の暇の狀ありしを是はとつて捨此二色をおせんに形見とてわたせば女心のはかなく是を誠に泣出し我に心有人さもあらば何にとて其道しるゝこなたさまをたのみたまはぬぞおもはくしらせ給はゞそれをいたづらにはなさじと云かゝよき折ふしとはじめを語り今は何をかくすべしかねく我をたのまれし其心ざしの深き事哀とも不便とも又いふにたらず此男を見捨給はゞみづからが執着とても脇へはゆかじと年比の口上手にていひつゞければおせんも自然となびき心になりてもだぐと上氣していつにても其御方にあはせ給へといふにうれしく約束をかため一段の出合所を分別せしと小語て八月十一日立にぬけ參を此道終契をこめ行

(三)寝物語り。  
(五)好い男ぶり。

(四)當時流行の男の髪風。

(四)共に大阪京都間海道の驛名。

(一)涼しさの下に勝らんの省かれた心  
(二)花毛氈。  
(三)菓子を入れる重箱。  
(四)一寸位の長さに毛の束を三つに折つて結んだ髪の結ひ方。  
(五)飛び飛びに紋様をあらはした白地の腰巻。

(六)召し使ひの人々。

(七)大和川に架けた大阪の長橋の一つ。

(八)蚊帳の四隅に附けた鈴。

すへ迄互たがいにいとしさかはゆさの枕物まくらのもの語かたしみんぐとにくかるまじきしかも男おとこぶりしやとおもひつくやうに申せばおせんもあはぬさきより其男をこがれ物も書きやりますかあたまは後うしろさがりで御座るか職人しやくじんならば腰こしはかゞみませぬか爰こゝ出た日は守口もりぐちか牧方ぼくかたに昼ひるからとまりましてふとんをかりてはやう寐ねましよと取まぜて談合だんごうするうちに中居なかにの久米くみが声こゑしておせんどのおよびなされますといへばいよく十一日の事と申のこしてかへりける

### 京きやうの水もらさぬ中忍しゆびてあひ釘くぎ

朝貞あさかほのさかり朝詠あさなみはひとしほ涼すいしさもと宵よひより奥さまのおゝせられて家居いえはなれしうらの垣かきねに腰掛こしかけをならべ花氈はなせんしかせ重菓子じゆうかしに焼飯やきはんそぎやうし茶瓶ちやびんわするな明六めいろくのすこし前まへに行水ぎやうすいをするを髪かみはつゐみつをりに帷子かたびらは廣袖ひろそでに桃色ももいろのうら付つけを取とり出でせ帯おビは鼠繻子ねずみじゆすに丸まるづくし飛紋とぎもんの白きふたの物萬に心をつくるは隣町となりより人も見るなれば下くだくにもつぎのあたられぬかたびらを着きせよ天神橋てんじんばしの妹いもが方かたへはつねの起時おきときに乗物のりものむかひにつかはせよと何事をもせんにまかせられゆたかなる蚊帳かちょうに入給いれたまふへば四ッの角すみの玉たまの鈴音すずをな

- (九) 交番に。  
(一〇) 仰々しい。  
(一一) 浮華輕佻な。  
(一二) 掛け持。兩人を同時に寵愛する。  
(一三) 大阪の本願寺別院。御堂筋に在る。  
(一四) 早曉遊廓の大門の開くのを待つて、入込み遊ぶこと。

- (一五) 忪心もとなく。心醒に思つて。  
(一六) 銀貨に換算して一匁に當る高の錢を纏にさしたるもの。  
(一七) 小粒銀。散彈に類する形の小銀貨。  
(一八) 白米。  
(一九) 對のさし櫛。  
(二〇) 煤色に少し白のかかつた色。  
(二一) 水に扇の流れる模様の中古の浴衣。  
(二二) 女用の被り菅笠。

- (二三) 同伴してやらう。  
(二四) 淀川を上下して、京と大阪とを連絡した交通の乗合船の夜行するもの。  
(二五) 大阪城の北西に當り網島に渡る橋。

して寐入給ふまで番手に團の風靜なり我家のうらなる草花見るさへかくやうだいなり惣して世間の女のうはかぶきなる事是にかきらす亭主はなをこりて嶋原の野風新町の荻野此二人を毎日荷ひ買して津村の御堂まいりてかたぎぬは持せ出しが直に朝ごみに行よし見へける八月十一日の曙まへに彼横町のかゝが板戸をひそかにたゝきせんで御座るといひもあへずそこゝにからげたる風呂敷包一ツなげ入てかへる物の取おとしも心得なく火をともしてみれば壹匁つなぎの錢五ツこま銀十八匁もあるふか白突三升五合ほと鯉節一ツ守袋に二ツ櫛染分のかゝへ帶ぎんすゝたけの拾あふき流しの中なれるゆかたうらときかけたる櫛たびわらんじの緒もしどけなく加賀笠に天満堀川と無用の書付とよごれぬやうに墨をおとす時門の戸を音信かゝさま先へまいると男の声していひ捨て行其後せんが身をふるはして内かたの首尾は只今といへばかゝは風呂敷を提て人しれぬ道をはしりすぎ我も大義なれ共神の事なれば伊勢迄見届てやろふといへばせんいやな貝して年よられて長の道思へばく及がたし其人に我を引合せ菟角伏見から夜舟でくだり給へとはやまき心になりて氣のせくまゝいそぎ行に京橋を

(二六)大阪城に勤務せる幕府の城代の交替する行列見に。

(二七)旅行の費用につかふ銀。

(二八)伊勢神宮は男女の不淨を忌み給ふと俗に傳へてゐた。

(二九)歸り途。

(三〇)面倒である。

(三一)本願寺參詣。六條は本願寺の所在。

(三二)京都の西に在る地名。

(三三)粧を飾る。めかす。

(三四)都合の悪いこと。

わたりかゝる時はうばいの久七今朝の御番替りを見に罷りしが是はと見付られしは是非もなき戀のじやまなりそれがしもつね／＼御參宮心懸しにねかふ所の道つれ荷物は我等持べし幸遣銀は有合す不自由なるめは見せましとしたしく申は久七もおせんに下心あるゆへぞかしかゝ氣色をかへて女に男の同道さりととは／＼人の見てよもや只とはいはじ殊更此神はさやうの事をかたく嫌ひ給へは世に耻さらせし人見及び聞傳へしなりひらに／＼にまいりたまふなといへば是はおもひもよらぬ事を改めらるゝさらにおせん殿に心をかくるにはあらず只信心の思ひ立それ戀は祈ずとても神の守給ひ心だにまことの道つれに叶ひなば日月のあはれみおせんさまの情次第に何國迄もまいりて下向には京へ寄て四五日もなくさめ折ふし高尾の紅葉嵯峨の松茸のさかり川原町に旦那の定宿あれどもそこは萬にむつかし三条の西づめにちんまりとした座敷をかりておかゝ殿は六条參をさせましよと我物にして行は久七がはまり也やう／＼秋の日も山崎にかたむき淀堤の松陰なかばゆきしに色つくりたる男の人まち貞にて丸葉の柳の根に腰をかけしをちかくなりてみれば申かはせし樽屋なり不首尾を目まぜして跡や先になり

〔三〕素性のわからぬ人。

〔三六〕つきあげ戸。

〔三七〕世繼曾我。近松門左衛門作。

〔三八〕奉公の年季即ち契約の期限の済み次第。

て行こそ案の外なれかゝは樽屋に言葉をかけこなたも伊勢参と見へまして然もおひとり氣立もよき人と見ました此方と一所の宿にと申せば樽屋よろこび旅は人の情とかや申せし萬事たのみますといへば久七中／＼合点のゆかぬ貞して行衛もしれぬ人をことに女中のつれには思ひよらずといふかゝ情らしき声して神は見通しおせん殿にはこなたといふ兵あり何事か有べしとかしま立の日より同じ宿にとまりおもわくかたらずすきをみるに久七氣をつけ間の戸しやうじをひとつにはづし水風呂に入てくび出して翌日暮て夢むすぶにも四人同じ枕をならべし久七寐ながら手をさしのばし行燈のかはらけかたむけやがて消るやうにすれば樽屋は枕にちかき窓蓋をつきあけ秋も此あつさはいへば折しも晴わたる月四人の寐姿をあらはすおせん空鼎を出せば久七右の足をもたす樽屋是を見て扇子拍子をとりに戀はくせもの皆人のと曾我の道行をかたり出すおせんは目覺してかゝに寐物かたり世に女の子を産ほどおそろしきはなし常とおもふに年の明次第北野の不動堂のお弟子になりてす／＼は出家の望と申せばかゝ現のやうに聞てそれがまし思ふやうに物のならぬうき世にと前後をみれば宵に枕の久七



（三九）戀の邪魔をする。

（四〇）馬の鞍の左右に人乗せる箱を取り附け、一人は鞍に、二人は左右の箱に乗ること。三寶荒神が佛法僧の三寶を守る神なるに依つて、この稱が起つたといふ。

（四一）一つには體の疲勞もあり、また一つにはおせんに寄する野心もあるのだ。

（四二）内宮や二見が浦へかけては廻らずに

（四三）神符の幣。

（四四）大略に計算すること。

（四五）目じるしにする紙片。錐と鋸は樽屋の商賣道具でそれと知らせる意。

（四六）夫婦契約の盃を交はすこと。三三九度の盃事が一般の夫婦契約のしるしである。

は南かしらにふんどしときてゐるは物参りの旅ながら不用心なり樽屋は蛤貝に丁子の油を入小杉のはな紙に持添むねんなる貞つきおかし夜の内は互に戀に悶をすへ明の日は相坂山より大津馬をかりて三ぼうかうじんに男女のひとつにのるを脇からみてはおかしけれ共身の草臥或は思ひ入あれば人の見しも世間もわきまへなしおせんの中に乗て樽屋久七兩脇にのりながら久七おせんが足のゆびさきをにぎれば樽屋は脇腹に手をさし忍びくたはふれ其心のほとおかしいづれも御参宮の心さしにあらねは内宮二見へも掛す外宮ばかりへちよつとまいりてしるし計におはらひ串若和布を調べ道中兩方白眼あひて何の子細もなく京迄下向して久七が才覺の宿につけば樽屋は取替し物共目のご算用にして此程は何分御やつかいに成ましてと一礼いふて別ぬ久七今は我物にしてそれ／＼のみやけ物を見出して買てやりける日の暮も待ひさしく烏丸のほとりへちかしき人有て見舞しうちにかゝはおせんをつれて清水さまへ参るのよし取いそき宿を出てゆきしが祇園町の仕出し弁當屋の釣簾に付紙目印に錐と鋸を書置しが此うちへおせん入ると見へしが中二階にあかれは樽屋出合すゑくやくそくの盃事して其後か

(三)階子段の後面に物を容れる箱を取り附けたもの。

(四)前に在る夜舟に對して、晝間に往來するもの。

(五)方廣寺を指す。京都東山五條に在る。

(六)元紀伊郡深草村に在る稻荷神社。今京都市伏見區に屬する。

(七)元紀伊郡深草村今京都市伏見區深草町に在る藤の森神社。

(一)木の削り屑。屋根を葺く木片。ここは前者。

(二)出發地から目的の到着地まで、乗り換へず行く駕籠。

(三)往來の駄馬。人や荷物の運搬に任じた。規定として一人と荷物二十貫迄乘坐したもの。

(四)坂迎とも書いてあるが、もとは境迎である。遠方から歸る人を村などの境まで出迎へたのに起り、旅から歸る人を或る地點まで出迎へて、これを祝すること。

(五)諺。無心の者に惡智慧をつける意。

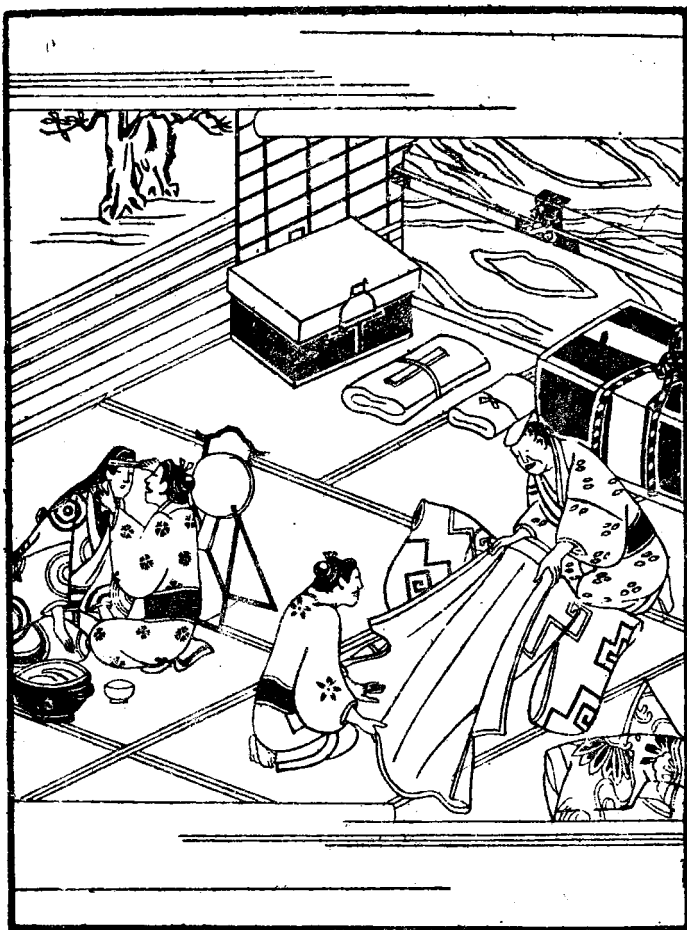
(六)奉公人の出替りは、當時九月五日と三月五日とであつて、この間を半季とした。

(七)大問屋に奉公した下女兼賣色の女。

は箱階子をりて爰はさてく水がよいとてせんじ茶はてしもなく呑にける是を契のはじめにして樽屋は昼舟に大坂にくだりぬかゝおせんは宿にかへりて俄に今からくだるといへば是非二三日は都見物と久七とゝめけれ共いやく奥さまに男ぐるひなどしたとおもはれましてはいかゞと出て行風呂敷包は大義ながら久七殿頼といへばかたがいたむとて持す大仏稻荷の前藤の森に休し茶の錢も銘く拂ひにしてくたりける

こけらは胸の焼付さら世帯

参るならばまいると内へしらして参ば通し駕籠か乗掛てまいらすに物好なるぬけ参りして此みやけ物はどこの錢でかふたぞ夫婦つれたちてもそのくそんな事はせぬそやうもく二人つれで下向した事しや迄久七やせんが酒迎に寐所をしてとらせあれば女の事しやが久七がすゝめて智恵ない神に男心をしらすといふ物じやとお内儀さまの御腹立久七が申わけ一ツも埒あかず罪なふしてうたがはれ九月五日の出替りをまたず御暇申て其後は北濱の備前屋といふ上問屋に季をかさね八橋の長といへるはすは女を女房に



(八)煮大豆を搗き、糊を和して、しこみ置いた味噌。

(九)生業を身に附けてをれば、それで十分。  
(一〇)衣服の八つ口を縫ひ塞いで、大人並みにすること。  
(一一)鐵漿を附け、齒を黒めて人妻のしるしとする。

(一二)中位の大きさ。

(一三)衣類を容れる小形の葛籠。和漢三才圖會の葛籠の解に「小者名三伏見三寸、民家嫁婦必用之衣籠也」と見える。

(一四)主婦からお下りの古著。

(一五)被衣。

して今みれば柳小路にて鮮屋をして世を暮しせんが事つゝわすれける人は  
みな移氣なる物ぞかしせんは別の事なく奉公をせしうちにも樽屋がかりの  
情をわすれかね心もそらにうか／＼となりて屋夜のわきまへもなくおのづ  
から身を捨て女に定つてのたしなみをもせず其さまいやしげに成て次第／＼  
やつれけるかゝる折ふし鶏とぼけて宵鳴すれば大釜自然とくさりてそこ  
をぬかし突込し朝夕の味噌風味かはり神鳴内藏の軒端に落かゝりよからぬ  
事うちつゝきは皆自然の道理なるに此事氣に懸られし折から誰がいふと  
もなくせんをこがるゝ男の執心今にやむ事なく其人は樽屋なるはと申せば  
親かた傳へ聞て何とぞして其男にせんをもらはさんと横町のかゝをよびよ  
せ内談有しにつね／＼せん申せしは男もつ共職人はいやといはれければ心  
もとなしと申せばそれはいらざる物好み何によらず世をさへわたらば勝手  
づくとさま／＼異見して樽屋へ申遣し縁の約束極め程なくせんに臨みさが  
せかねを付させ吉日をあらためられ二番の木地長持ひとつ伏見三寸の葛籠  
一荷糊地の袂宮一ツ奥さま着おろしの小袖二ツ夜着ふとん赤ね縁の蚊屋む  
かし染のかつき取あつめて物數廿三銀貳百目付ておくられけるに相生よく

(二) 女の齒を染める材料、即ち五倍子と  
鐵漿とを以て染めた繡物。  
(七) 借金取りを避けること。

(一) さて。

(二) 歌舞伎狂言。

(三) 大阪四天王寺。

(四) 大阪今の東區玉木町に在る。ここに  
有名な藤があつた。

(五) 自分を一生生涯まこと養つてくれる男即ち夫

(六) 河内道明寺村に在る、眞言宗の尼  
寺。

(七) 大和添上郡佐保村に在る律宗の尼寺

仕合しあひよく夫は正直ちやうじきのかうべをかたふけ細工さいくをすれば女はふしかね染そめの嶋しまを  
織オリならひ明あけくれかせぎける程に盆前ぶんまへ大晦日たいげふじにも内を出遣いせ ちゆふほどにもあらず  
大かたに世をわたりけるが殊更ことさら男を大事だいじに掛雪かゆきの日風の立時たちときは食やしつぎを包  
をき夏なつは枕まくらに扇あふぎをはなさず留守るすには宵よひから門口かどぐちをかため夢ゆめ／＼外ほかの人には  
めをやらす物を二ツいへばこちのお人／＼とうれしかり年月としづきつもりてよき  
中にふたり迫おそりまれて猶なほ男の事をわすれざりきされば一切いっけつの女移うつり氣な  
る物にしてうまき色咄いろはなしに現うつしをぬかし道頓堀だうとんぼりの作り狂言まうげんをまことに見なし  
いつともなく心をみだし天王寺てんわうじの櫻さくらの散前ちりまへ藤ふじのたなのさかりにうるはしき  
男にうかれかへりては一代いちだいやしなふ男を嫌きらひぬ是これほと無理むりなる事なしそれ  
より萬よろづの始末しやうまつ心を捨て大焼たやうする籠かごをみず塩しほが水になるやらいらぬ所に油火あぶらび  
をとすもかまはず身しん躰たいうすくなりて暇いとまの明あけを待まちかねけるかやうのかたら  
ひさりととは／＼おそろし死別しにわかては七日も立ぬに後夫ごふをもとめさられては五  
度七度の縁ゆかりづきさりととは口惜くちをき下／＼の心底しんぞこなり上／＼にはかりにもなき  
事ぞかし女の一生しやうにひとりの男に身をまかせさはりあれば御若年ごにやくねんにして河  
島かしまの道明寺みちみでら南都なんとの法花寺ほふけでらにて出家しゆけをとげらるゝ事も有しになんぞかくし男

(二五) 悪い噂。

(二六) 謝罪の金銀を受けて示談にして済ます。

(二七) 不倫の男女關係。

(一) 樽屋に因んで木屑を以て製した杉の楊枝。その楊枝の長さに因んで一寸先きと續けてある。杉楊枝、危き命いづれもこの假の世話中のもの。

(二) 粗末の食事と自遜せる意。

(三) 知名の順序不同の意で、順序はなきものと承知して欲しいの意。

(四) 誦もうたひ、酒も飲む事をゆるす。

眞の精進には酒肉を斷つた。

(五) 巾をせぬ。法事を営まぬ。

(六) 豆子、様子。豆子は内の深い壺形のもの。様子は淺くて高い糸底の附いたもの。

(七) 縁の高い折敷。

(八) 美しく盛ること。

をする女うき世にあまたあれ共男も名の立事を悲しみ沙汰なしに里へ歸しあるひは見付てさもしくも金銀の欲にふけて噎にして済し手ぬるく命をたすくるがゆへに此事のやみがたし世に神有むくひあり隠してもしるべし人おそるべき此道なり

### 木屑の杉やうじ一寸先の命

來ル十六日に無茶の御齋申上たぐ候御來駕におゐてはかたじけなく奉存候町衆次第不同糲屋長左衛門世の中の年月の立事夢まぼろしはやすぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ我なからへて是迄吊ふ事うれし古人の申傳へしは五十年忌になれば朝は精進して暮は魚類になして諺酒も其後とはぬ事と申せし是がおさめなればすこし物入もいとはずばんじその用意すれば近所の出入のかゝども集り椀家具壺平るすちやつ迄取さばき手毎にふきて膳棚にかさねける爰に樽屋が女房も日比御念比なれば御勝手にてはたらく事もと御見廻申けるに兼て才覚らしく見えければそなたは納戸にありし菓子品の品々を椀高へ組付てと申せば手元見合まんちう御所柿唐ぐるみ落

(九)大より小に至る鉢の順次に重ねられるやうに出来たものを入子といふ。

(一〇)入子になつた七個の鉢。

(一一)彼是といろいろに。

(一二)一旦立てられた浮名。それが無實であらうと容易に拭ひ去り難い。  
(一三)出しぬいて困らせる。

(一四)當時婦人の正月の楽しみ事の一つとして行つた、今の福引の類。

鷹櫃たかぶ杉すぎやうし是をあらましに取合時亭主ときていしゅの長左衛門ちやうざゑもん棚たなより入子鉢はまをおろすとておせんがかしらに取おとしうるはしき髪かみの結目ゆいめたちまちとけてあるじ是をかなしめばすこしもくるしからぬ御事と申でかい角つうぐりて臺所たいどころへ出けるをかうじやの内儀うちぎ見とがめて氣をまはしそなたの髪かみは今のさきまてうつくしく有しが納戸なんどにて俄にわかにとけしはいかなる事ぞといはれしおせん身に覺なく物しづかに旦那殿だんなどの棚たなより道具を取おとし給ひかくはなりけるとありやうに申せど是を更に合点がてんせずさては昼も棚たなから入子鉢はまのをつる事も有よいたづらなる七ツ鉢はちめ枕まくらせずにはしく寐ねれば髪かみはほどくる物じやよい年をして親の吊とらひの中にする事こそあれと人の氣きつくして盛形もりかたさしみをなげこぼし酢すにあて粉こなにあて一日此事いひやます後は人も聞耳きみみ立て興覺きやうかくぬかゝるりんきのふかき女おんなを持合もちあはすこそ其男の身にして因果いんぐゐなれおせんめいわからんき聞暮きくくらせしがおもへばくにくき心中こころとてもぬれたる袂たもとなれば此うへは是非におよばすあの長左衛門殿になさけをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより各別かくべつのころざしほとなく戀となりしのびくんに申かはしいつそのしゆびをまちける貞享ていきやう二とせ正月廿二日の夜戀よこひは引手の寶引繩たしなひなは女子

（吾見つけな以上、見のがしにしてはおかぬ。

（二百むね先き。

の春なくさみふけゆくまで取みだれてまけのきにするも有勝にあかずあそぶもあり我しらず躰を出すもありて樽屋ももし火消かゝり男は屋のくたびれに鼻をつまむもしらずおせんがかへるにつけこみないく約束今といはれていやがならず内に引入跡にもさきにも是が戀のはじめ下帯下紐ときもあへぬに樽屋は目をあきあはゝのがさぬと声をかくればよるの衣をぬぎ捨丸裸にて心玉飛かごとくはるかなる藤の棚にむらさきのゆかりの人有ければ命からゝにてにけのびけるおせんかなはしとかくごのまへ鉈にしてこゝろもとをさし通しはかなくなりぬ其後なきからもいたづら男も同じ科野に耻をさらしぬ其名さまゝのつくり哥に遠國迄もつたへけるあしき事はのがれずあなおそろしの世や



# 好色五人女 卷三

## 中段に見る曆屋物語

### 目 録

㊦ 姿すがたの關守かんしゅ

京きやうの四よ条ぢやうはいきた花見有はなみ

㊦ してやられた枕まくらの夢ゆめ

灸やひすゆるよりおもひに燃有もゆる

㊦ 人をはめたる湖みづうみ

死しもせぬ形見かたみの衣い襷有たすけ

④ 小判しらぬ休み茶屋

都に見し土人形有

⑤ 身のうへの立聞

夜の編笠子細もの有

## 姿の關守

- (一)書き初め。
- (二)語義いろいろの説があるが、ことは夫婦交會の初めの意で用ひてある。
- (三)鵲鳩。神代に於てこの鳥より男女交會のことを知るといふ俗説に依る。
- (四)前の句の山をうごかしの聯想で、祇園神社の祭禮に出る飾り物の月鉾を出し更にそれから月の縁で桂の眉とつづけてある。
- (五)紅葉の名所。その紅葉の色を出してある。
- (六)新しい意匠の工夫を凝らした衣裳。
- (七)今の第一人、代表者などに當る。
- (八)京都東山安井門跡の驛。
- (九)美装の人の山。
- (一〇)遊蕩者仲間。
- (一一)遺産。
- (一二)京都の遊里。
- (一三)歌舞伎芝居に出る俳優ら。
- (一四)若衆と遊女と兩方の遊蕩。
- (一五)茶飲み茶屋。茶屋と稱するものには三種あつた。葉茶屋、料理茶屋、水茶屋に二素人女。良家の女。
- 天和二年の曆正月一日吉書萬によし二日姫はじめ神代のむかしより此事戀しり鳥のをしへ。男女のいたづらやむ事なし。爰に大經師の美婦とて浮名の立つとき。都に情の山をうごかし祇園會の月鉾かつらの眉をあらそひ。姿は清水の初櫻いまだ咲かゝる風情。口びるのうるはしきは高尾の木末色の盛と詠めし。すみ所は室町通。仕出し衣裳の物好み當世女の只中廣京にも又有へからず。人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて。安井の藤今をむらさきの雲のごとく松さへ色をうしなひたそかれの人立。東山に又姿の山を見せける。折ふし洛中に隠なきさはぎ中間の男四天王。風義人にすぐれて目立親ゆづりの有にまかせ。元日より大晦日迄一日も色にあそばぬ事なし。きのふは鳴原にもろこし花崎かほる高橋に明しけふは四条川原の竹中吉三郎唐姿哥仙藤田吉三郎光瀬左近など愛して。衆道女道を昼夜のわかちもなくさまゝ遊興つきて。芝居過より松屋といへる水茶屋に居ながれ。けふ程見よき地女の出し事もなし。若も我等が目につくしき

- (一七)美人鑑定役の長。  
(一八)婦人用の駕籠、自家用であつた。良家の立派な婦人はそれに乗つて行くのでその容貌を見ることの出来ないのが遺憾である。  
(一九)ぞろぞろと路を行くこと。

- (二〇)白色の紬。紬は絹布の一種。  
(二一)表と裏とに同一の布を用ひること。  
(二二)縹色の紬。  
(二三)吉田兼好。徒然草の著者。

- (二四)市松の碁盤模様の天鷲絨の折帶。  
(二五)御所または貴族の邸に仕へた女の用ゐた被衣の風。  
(二六)薄紫色の絹布製の足袋。  
(二七)その女の夫。  
(二八)十五六歳と見えて、十七歳とは見えない年端頃の娘。  
(二九)駕籠昇の供。

と見しもある事もやと役者のかしこきやつを目利頭に。花見がへりを待暮  
ゝ是ぞかはりたる慰なり。大かたは女中乗物見ぬがこゝろにくし。乱  
ありきの一むれいやなるもなし。是ぞと思ふもなし荳角はよろしき女計書  
とめよと硯紙とりよせてそれを移しけるに。年の程三十四五と見えて首筋  
立のび目のはりりんとして額のはへぎは自然とうるはしく鼻おもふにはす  
こし高けれども。それも堪忍比なり下に白ぬめのひつかへし。中に淺黄ぬ  
めのひつかへし上に栳つめのひつかへしに本絵にかゝせて左の袖に吉田の  
法師が面影。ひとり燈のもとにふるき文など見てのもんだんさりとは子  
細らしき物好帯は敷瓦の折ひろろど御所かづきの取まはし薄色の絹足袋  
三筋緒の雪踏音もせずありきて。わざとならぬ腰のすはり。あの男めが果  
報と見る時。何かしたくへ物をいふとて口をあきしに下齒一枚ぬけしに  
戀を覺しぬ。間もなふ其跡十五六七にはなるまじき娘。母親と見えて  
左の方に付右のかたに墨衣きたるびくにの付て。下女あまた六尺供をかた  
め大事に掛る風情。さては縁付前かと思ひしに。かね付て眉なし良は丸く  
して見よく。目にりはつ顯れ耳の付やうしほらしく。手足の指ゆたやかに

(一〇) 一面に鹿の子に絞つたもの。總鹿の子。

(一一) 切付模様。模様の形を切つて作り、それを附けて模様としたもの。

(一二) 段だら染めの大幅帯。

(一三) 金具であらう。

(一四) こよりを澤山合せた緒。

(一五) 仕立直し。

(一六) かたちんぼの。

(一七) 奈良で出来た草履。

(一八) 綿帽子の一種。當時婦人の前髪から後ろへ、頭上に被つたもの。

(一九) しどけなく。

(二〇) 目口鼻などをいふ。顔の諸部分。

(二一) 物思ひの原因。

(二二) 華奢贅澤。

(二三) 裾まはし。

(二四) 金の透かし模様。

皮薄に色白く衣類の着こなし又有べからず。下に黄むく中に紫の地なし  
鹿子。上は鼠じゆすに百羽雀のきりつけ。段染の一幅帯むねあけ掛て身  
ぶりよく。ぬり笠にとら打て千筋ごよりの緒を付。見込のやさしさは一度  
見しに脇貞に横に七分あまりのうち疵あり。更にうまれ付とはおもはれ  
ず。さぞ其時の抱姥をうらむべしと。皆く笑ふて通しける。さて又二十  
一二なる女の櫛の手織嶋を着て。其うらさへつぎを風ふきかへされ耻  
をあらはしぬ。帯は羽織のおとしと見えて物哀にほそく。紫のかわたび  
有にまかせてはき。かたしぐのなら草履ふるき置わたして髪はいつ櫛の  
はを入しや。しどもなく乱しをついそくからけて。身に様子もつけ  
ず独たのしみて行をみるに。面道具ひとつもふそくなく。世にかゝる生付  
の又有物かと。いつれも見とれてあの女によき物を着せて見ば人の命を取  
べしまゝならぬはひんふくと哀にたましく其女のかへるに。忍びて人を  
つけける誓願寺通のすへなる。たはこ切の女といへり聞に胸いたく煙の種  
ぞかし。其跡に廿七八の女さりととは花車に仕出し。三ツ重たる小袖皆くろ  
はぶたへに裾取の紅うら金のかくし紋帯は唐織寄嶋の大幅前にむすびて。

(四〇) 根下りの島田髷。

(四一) 未詳。

(四二) 彼者上村吉彌好みの綱笠。

(四三) 四種の色變りに出來たくけ紐。

(四四) 足の運び方は抜き足風で、腰づきが左右の足の運びにひねるやうな歩きかた

(五) 大聲に物を言ふ。

(五二) 五分は櫛の厚みであらう。

(五三) 墨繪模様。

(五四) 意匠を凝らした。

(五五) 帶芯なしのもの。

(五六) 花の色、いたづら。今小町の名の縁で、小野小町の「花の色はうつりにけりな徒らにわが身世にふるながめせし間に」に取る。

(五七) 淫婦。

髪はなげ嶋田に平髻かけて。對のさし櫛はきかけの置手拭。吉弥笠に四ツかはりのくけ紐を付て。貞自慢にあさくかづき。ぬきあし中びねりのありきすがた是く是しやだまれとをのく近づくを待みるに。三人つれし下女共にひとりく三人の子を抱せける。さては年子と見へておかし。跡からかゝさまくといふを聞ぬ振して行。あの身にしては我子ながらさぞうたてかるべし。人の風俗もうまぬうちが花そと。其女無常のおこる程どやきて笑ける。またゆたかに乗物つらせて。女いまだ十三か四か髪すき流し先をすこし折もどし。紅の絹たゝみてむすび前髪若衆のすなるやうにわけさせ。金髻にて結せ五分櫛のきよなるさし掛。まつはうつくしさひとつくいふ迄もなし。白しゆすに墨形の肌着上は玉むし色のしゆすに孔雀の切付見へすくやうに其うへに唐糸の網を掛さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帶素足に紙緒のはき物。うき世笠跡より持せて。藤の八房つらなりしをかざし。見ぬ人のためといはぬ計の風義今朝から見盡せし美女とも是にけをされて其名ゆかしく尋けるに室町のさる息女今小町と云捨て行。花の色は是にこそあれいたづらものとは後に思ひあはせ侍る

## してやられた枕の夢

(一)化粧、服装などにしやれた女。

(二)「詫びぬれば身を浮草の根をたえて勝ふ水あらばいなむとぞおもふ」といふ小町の歌を引く。

(三)藤の花の色の感じであること勿論であるが、徒然草十九段の「山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる云々」に取る。

(四)何彼の面倒の手續きなどを省き。

(五)頼み樽。結納に贈る酒樽。

(六)印度のベンガル地方から舶來したといふので、この名の附いた糸の種類。それを執心に造る意。

(七)手づから紬の糸を績み機に織る。

(八)小遣の支出をよく調べ記入する。

男世帯も氣さんになる物ながら。お内義のなき夕暮一しほ淋しかりき。  
爰に大經師の何がし年久しくやもめ住せられける。都なれや物好の女もあるに品形すぐれてよきを望ば心に叶ひがたし。詫ぬれば身を浮草のゆかり尋て。今小町といへる娘ゆかしく見にまかりけるに。過し春四条に閑居て見とがめし中にも。藤をかざして覺束なきさましたる人。是ぞとこがれてなんのかのなしに縁組を取りそくこそおかしけれ。其比下立賣烏丸上ル町に。しやべりのなるとて隠もなき仲人がゝ有。是をふかく頼樽のこしらへ。願ひ首尾して吉日をゑらひておさんをむかへける。花の夕月の曙  
此男外を詠もやらすして天婦のかたらひふかく三とせが程もかさねけるに明暮世をわたる女の業を大事に。手づからべんがら糸に氣をつくしすへくの女に手紬を績せて。わが男の見よげに始末を本とし。體も大きくべさせす小遣帳を筆まめにあらため。町人の家に有たきはかやうの女ぞかし次第に榮てうれしさ限もなかりしに。此男東の方に行事有て。京に名

(九)店の商賣用務。

(一〇)家計上の事。

(一一)正直頭の意と、頭髮は人任せに結はせて構はないの意とを重ねてある。

(一二)額際の毛を抜いて額を廣くした當時の風に構はないこと。

(一三)子供三歳の時頭髮を蓄へる祝ひごと

(一四)得意なれば。

(一五)下女の通名。

(一六)灸の最後に鹽をその跡に塗ること。

(一七)態とならず。

(一八)浮名の立つたこと。

残は惜めど身過程悲しきはなし思ひ立旅衣室町の親里にまかりて。あらましを語しに我娘の留守中を思ひやりて萬にかしこき人もがな跡を預て表むきをさばかせ内證はおさんが心だすけにも成べしと。何國もあれ親の慈悲心より思ひつけて年をかさねてめし遣ひける茂右衛門といへる若きものを掣のかたへ遣しける此男の正直かうべは人まかせ額ちいさく袖口五寸にたらず髪置して此かた編笠をかぶらず。ましてや脇差をこしらへず。只十露盤を枕に夢にも銀もふけのせんさくばかりに明しぬ。折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて。身の養生の爲とて茂右衛門灸おもひ立てるに腰元のりん手かるく居る事をゑたれば。是をたのみて。もぐさ數捻てりんが鏡臺に嶋の櫛ふとんを折かけ。初一ツ二ツはこらへかねて。お姥から中ぬからたけまでも其あたりをおさへて貞しかむるを笑ひし跡程煙つよくなりて。塩灸を待兼ねに自然と居落して。背骨つたひて身の皮ちどみ苦しき事暫なれども。居手の迷惑さをおもひやりて目をふさぎ齒を喰しめ堪忍せしを。りんかなしくもみ消して是より肌をさすりそめて。いつとなくいとしやとばかり思ひ込入しれずこゝちなやみけるを後は沙汰してお



(二) 日數「經る」のふるに「降る」時雨と懸けてある。十月の時雨を偽りの時雨といひ、また十月を時雨月といひ馴らはしてゐるのは、拾遺愚草藤原定家の「偽りのなき世なりけり神無月誰が誠より時雨れそめけむ」の歌に起る。結局、日數を経て十月の初頃となりの意である。

(三) 痴話文。戀の手紙。

(一) 戀の手紙であるから、習慣に依つて茂右衛門の頭の字だけを宛名に書いた。(二) わが名も隠して、身よりとか、御存じよりとか書くのが習慣であつた。

(三) 古來の結文としたのである。結文は文言を書いた紙を折り、それを結んで、封筒に入れないもの。

(四) 何時か來べき好き機會。

(五) わが手紙をわが手で先方に届ける。

(六) わが濁點は誤であらう。中に書いた手紙の文句のこと。

(七) 懷妊すべきことを指す。それを面倒とする意である。むつかしは面倒の義。

(八) 出費を辨じてくれる。

(九) 露骨失禮な文章。

んさまの御耳にいれどなをやめがたくなりぬ。りんいやしかるそだちにしてお物書事にうとく。筆のたよりをなげき久七が心覺ほどにじり書をうらやましく。ひそかに是をたのめば茂右衛門よりは先へ。戀を我物にしたがるこそうたてけれ。是非なく日數ふる時雨も偽のはじめごろおさんさま江戸へつかはされける御狀の次手に。りんがちは文書でとらせんとざらんと筆をあゆませ茂のじさまいる身よりとばかり引むすびて。かいやり給ひしをりんうれしく。いつぞの時を見合けるに見せよればこの火よといへ共折から庭に人のなき事を幸に其事にかこつけ彼文を我事我と遣しにける茂右衛門もながな事はおさんさまの手としらず。りんをやさしきと計にもしろおかしきかへり事をして又渡しける。是をよみかねて御きげんよろしき折ふし。奥さまに見せ奉れはおほしめしよりておもひもよらぬ御つたへ此方も若ひものゝ事なればいやでもあらず候へどもちぎりかさなり候へば取あげばゝがむつかしく候去ながら着物羽織風呂錢身だしなみの事共を其方から賃を御かきなされ候はいやながらかなへてもやるべしとうちつけたる文章去迎はにくさにくし世界に男の日照はあるまじりんも大かた

(三〇)しみじみと。

(三一)日待月待のこと。日の出、月の出を待ち、人人集まつて遊樂する習慣があつた。

(三二)乳切木は人の立つて、地面から胸の場まである棒。

(三三)引き寄せ。

なる生付茂右衛門め程成男をそもや持かねる事や有とかさねて又文にしてなげき茂右衛門を引なびけてはまらせんとかづ。書くどきてつかはされける程に茂右衛門文づらより哀ふかくなりて始の程嘲し事のくやしくそめく返事をして五月十四日の夜はさだまつて影待あそばしけるかならず其折を得てあひみる約束いひ越ければおさんさまいづれも女房まじりに声のある程は笑てとても事の事に其夜の慰にも成ぬべしとおさんさまりんに成かはらせられ身を木綿なるひとへ物にやつしりん不斷の寐所に曉がたまで待給へるにいつとなく心よく御夢をむすび給へり下くの女どもおさんさまの御声たてさせらるゝ時皆くかけつくるけいやくにして手毎に棒乳切木手燭の用意して所くありしが宵よりのさはぎに草臥て我しらず躰をかきける七ツの鐘なりて後茂右衛門下帯をとさかけ闇がりに忍び夜着の下にこがれて裸身をさし込心のせくまゝに言葉かはしけるまでもなくよき事をしまして袖の移香しほらしやと又寐道具を引きせさし足して立のきさてもこさかしき浮世やまだ今やなどりんが男心は有ましきと思ひしに我さきにいかなる人か物せし事ぞとおそろしく重てはいかなく

(一) 浮名即ち悪い評判の立つ。

(二) 姦通者は死罪の規定であつたから、死の覺悟をして姦通する。

(三) 謡曲通小町の「山城の木幡の里に馬はあれど君を思へはかはだし」に出てゐる。これは「山科の木幡の里に馬はあれど徒歩よりぞ來る君をおもへば」拾遺集に出づる。またこの歌はもと萬葉集の「山科の木幡の山を馬はあれどからより我が來汝をおもひかねて」である。

(四) 生と死とのいづれかを選ぶべきことをいふ。

(五) 振假名のうしは誤と思はれる。目錄の通りみづうみが正しい。

(六) 源氏物語中の意を取つたもので、このままの文句は見えない。

(七) 源氏物語と石山寺とは紫式部が石山寺で源氏物語を書いたといふ世傳に依つて縁を有する。

(八) 顧みざる意。

(九) 逢坂の關。後撰集の蟬丸の歌「これやこのゆくもかへるも別れては知るも知らぬも逢坂の關」に依つてある。

(一〇) 當世風の派手な女風俗。

(一一) 石山寺の本尊如意輪觀音を指す。

(一二) 魚をする舟。

(一三) 瀬田の長橋。橋の縁で頼みをかけると續けてある。この邊の文は道行風に擬

おもひとまるに極めし其後おさんはおのづから夢覺ておとろかれしかは枕はづれてしどけなく帶はほどけて手元になく鼻紙のわけもなき事に心はづかしく成てよもや此事人にしれざる事あらじ此うへは身をすて命かきりに名を立茂右衛門と死手の旅路の道づれとなをやめがたく心底申きかせければ茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひのりかゝつたる馬はあれど君をおもへば夜毎にかよひ人のとがめもかへりみず外なる事に身をやつしけるは追付生死の二ッ物掛是ぞあぶなし

## 人をはめたる湖

世にわりなきは情の道と源氏にも書残せし爰に石山寺の開帳とて都人袖をつらね東山の櫻は捨物になして行もかへるも是や此關越て見しに大かたは今風の女出立ちどれかひとり後世わきまへて參詣けるとはみへさりき皆衣襲くらべの姿自慢此心ざし觀音様もおかしかるべし其比おさんも茂右衛門つれて御寺にまいり花は命にたとへていつ散べきもさだめがたし此浦山を又見る事のしれざればけふのおもひ出にと勢田より手ぐり舟をかりて長橋

してあるから、地名の読み込み、縁語、掛詞が多い。一は註しない。

(二〇)上の枕の事を承けて露顯するまでの疏通と覺悟する意を表はしてあるが、あらはるるを浪の縁語と意識したかどうかは詳にしたい。

(二一)心配ある二人が顔を鏡に寫して見れば、涙に鏡も曇るやうに見える意を、所在に近い鏡山の名に掛けていつてある。

(二二)鵜の口の逃れ難いといふ諺を持つて湖畔の地名にいひかけてある。岬の音に身裂をかけて刑死を匂はしてある。

(二三)生きながらへても長からずといふ意に長柄山をいひかけて、下に續けてある

(二四)比叡山、伊勢物語の東下り、富士山を見るとところに「ひえの山を二十ばかり重ね云々」の文句があるのに取つて、その二十をおさんの年齢のことにつづけてある

(二五)海岸などの神社に不思議の灯が上つて見えるといひ傳へ、それを龍燈と稱してゐることがあるか、こは神燈を指してゐるやうである。

(二六)滋賀郡小松村に在る。

(二七)極樂淨土に於て晴れての夫婦とならう。

(二八)わが家を指す。

(二九)遺書を書き残し。

(三〇)我くより以下うき世の別まで、遺

の頼をかけても短は我くがたのしひと浪は枕のこの山あらはるゝま  
での乱髪物思ひせし良はせを鏡の山も曇世に鵜の御崎のがれかたく堅  
田の舟よばひも若やは京よりの追手かと心玉もしづみてながらへて長柄山  
我年の程も爰にたとへて都の富士廿にもたらずして頓て消べき雪ならば  
と幾度袖をぬらし志賀の都はむかし語と我もなるべき身の果ぞと一しほに  
悲しく竜灯のあがる時白髭の宮所につきて神いのるにぞいと身のうちへは  
かなし菟角世にながらへる程つれなき事こそまさされ此湖に身をなげてな  
かく仏國のかたらひといひければ茂右衛門も惜からぬは命ながら死ての  
さきはしらすおもひつけたる事こそあれ二人都への書置残し入水せしとい  
はせて此所を立のきいかなる國里にも行て年月を送らんといへばおさんよ  
ろこび我も宿を出しより其心掛ありと金子五百兩挿箱に入來りしとかたれ  
ばそれこそ世をわたるたねなれいよく爰をしのべとそれくに筆をのこ  
し我く悪心おこりてよしなきかたらひ是天命のかれず身の置所もなく今  
月今日うき世の別と肌守に壹寸八ぶの如來に黒髪すへを切添茂右衛門  
はさし馴し壹尺七寸の大脇差關和泉守銅こしらへに卷龍の鉄鏢それぞと人

書中の意味。

(三)美濃關の住人。刀工、兼定。

(三)調練して。練習すること。

(三)水泳の上手な人。

(四)荒けき、荒荒しき。

(五)麿の本草を分けて。

(六)世間の評判を憚ること。

(七)耳迅き。世間の噂の擴がり易いこと

(八)世間の人の正月面白がつてする噂。

(一)欠落。京都を欠落するものの、多く丹波路に逃げたことから起つた言葉。

(二)殆ど道路もないやうな草の中を分けて旅をする意味に、旅衣といふ詞を附けて少し變へたもの。

の覺しを跡に残し二人が上着女草履男雪踏これにまで氣を付て岸根の柳がもとに置捨此濱の獵師ちやうれんして岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて金銀とらせて有増をかたれば心やすく頼れてふけゆく時待合せけるおさんも茂右衛門も身こしらへして借家の笹戸明掛皆くをゆすり起して思ふ子細のあつて只今寂期なるぞとかけ出あらけなき岩のうへにして念仏の声幽に聞えしが二人ともに身をなげ給ふ水に音ありいづれも泣さはぐうちに茂右衛門おさんを肩に掛けて山本わけて木ふかき杉村に立のけばすいれんは浪の下くどりておもひもよらぬ汀にあかりけるつきくの者共手をうつて是を敷き浦人を頼さまくさがして甲斐なく夜も明行ば泪に形見色く巻込京都にかへり此事を語れば人く世間をおもひやりて外へしらさぬ内談すれども耳せはしき世の中此沙汰つりて春慰にいひやむ事なくて是非もなきいたづらの身や

### 小判しらぬ休み茶屋

丹波越の身となりて道なきかたの草衣茂右衛門おさんの手を引てやう

△(三)旅の路に迷ふ意と、人の道を踏み迷ふ意とを兼ねてゐる。

△(四)今の下にでを添へて解すべきである

△(五)木の葉の下に受けてなど語を補つて解すべきである。

△(六)介抱の意。

△(七)憂さ。辛さ。

△(八)戀慕の外に他なき身。

△(九)淋しく貧しい村里。

△(一〇)杉葉は酒屋の目印であつた。

△(一一)豆太鼓。紙膠を張つて作つた太鼓の左右に絲の先に大豆を附けたものを結びそれを振つて音を立てる玩具。

△(一二)丹波水上郡に在る。

／＼<sup>みね</sup>峯高くのぼりて跡<sup>あと</sup>おそろしくおもへば生<sup>いき</sup>ながら死<sup>しん</sup>たぶんになるこそ心  
なからうたてけれなを行<sup>しよ</sup>さき柴<sup>しほ</sup>人の足<sup>あし</sup>形<sup>かた</sup>も見えず踏<sup>ふみ</sup>まよふ身<sup>み</sup>の哀<sup>あはれ</sup>も今<sup>いま</sup>女<sup>め</sup>の  
はかなくたどりかねて此<sup>こ</sup>くるしさ息<sup>いき</sup>も限<sup>かぎ</sup>と見えて貞<sup>まこと</sup>色<sup>いろ</sup>替<sup>か</sup>りてかなしく岩<sup>いは</sup>  
もる<sup>しづく</sup>雫<sup>しづく</sup>を木<sup>き</sup>の葉<sup>は</sup>にそゝぎさま／＼養生<sup>やうじやう</sup>すれども次第<sup>しだい</sup>にたよりすくなく脉<sup>みやく</sup>  
もしづみて今<sup>いま</sup>に極<sup>きは</sup>まりける藥<sup>くすり</sup>にすべき物<sup>もの</sup>とてもなく命<sup>いのち</sup>のおはるを待<sup>まち</sup>居<sup>ゐ</sup>る  
時<sup>とき</sup>耳<sup>みみ</sup>ぢかく寄<sup>よ</sup>せて今<sup>いま</sup>すこし先<sup>さき</sup>へ行<sup>い</sup>ばしるべある里<sup>さと</sup>ちかしさもあらば此<sup>こ</sup>浮<sup>うき</sup>をわ  
すれておもひのまゝに枕<sup>まくら</sup>さだめて語<sup>かた</sup>らん物<sup>もの</sup>をとなげゝは此事<sup>このこと</sup>おさん耳<sup>みみ</sup>に通<sup>とほ</sup>  
しうれしや命<sup>いのち</sup>にかへての男<sup>おとこ</sup>じやものと氣<sup>き</sup>を取<sup>と</sup>なをしけるさては魂<sup>たましひ</sup>にれん  
ぼ入<sup>い</sup>かはり外<sup>へ</sup>なき身<sup>み</sup>いたましく又<sup>また</sup>戻<sup>かへ</sup>て行程<sup>こうてい</sup>にわづかなる里<sup>さと</sup>の垣<sup>かき</sup>ねに着<sup>つ</sup>け  
り爰<sup>こゝ</sup>なん京<sup>きやう</sup>への海道<sup>かいだう</sup>といへり馬<sup>うま</sup>も行<sup>お</sup>違<sup>ちが</sup>ふ程<sup>ほど</sup>の岨<sup>さな</sup>に道<sup>みち</sup>もありけるわら齧<sup>は</sup>る軒<sup>のき</sup>  
に杉<sup>すぎ</sup>折<sup>お</sup>掛<sup>け</sup>て上<sup>うへ</sup>と諸<sup>もろ</sup>白<sup>はく</sup>あり餅<sup>もち</sup>も幾<sup>いく</sup>日<sup>ひ</sup>になりぬほこりをかづきて白<sup>しろ</sup>き色<sup>いろ</sup>なし片<sup>かた</sup>  
見<sup>み</sup>世<sup>よ</sup>に茶<sup>ちや</sup>筭<sup>せん</sup>土<sup>つち</sup>人<sup>にん</sup>形<sup>ぎやう</sup>かぶり太<sup>たい</sup>靴<sup>こ</sup>すこしは目<sup>め</sup>馴<sup>な</sup>れ都<sup>と</sup>めきて是<sup>こゝ</sup>に力<sup>ちから</sup>を得<sup>え</sup>しばし  
休<sup>やすみ</sup>て此<sup>こ</sup>うれしさにあるじの老人<sup>らうじん</sup>に金<sup>かね</sup>子<sup>し</sup>一<sup>ひと</sup>兩<sup>りやう</sup>とらしけるに猫<sup>ねこ</sup>に傘<sup>かさ</sup>見<sup>み</sup>せたる  
ごとくいやな貞<sup>まこと</sup>つきして茶<sup>ちや</sup>の錢<sup>ぜに</sup>置<sup>お</sup>給<sup>たま</sup>へといふさても京<sup>きやう</sup>が此<sup>こ</sup>所<sup>ところ</sup>十五<sup>じふご</sup>里<sup>り</sup>はなか  
りしに小<sup>こ</sup>判<sup>はん</sup>見<sup>み</sup>しらぬ里<sup>さと</sup>もあるよとおかしくなりぬそれより栢<sup>かしはら</sup>原<sup>はら</sup>といふ所<sup>ところ</sup>に

△三上流の女性。品高き女。

△四公卿屋敷。

△五身分を落して、土の上の仕事をした希望。農民の地位に身分を下げて、百姓業をした希望。

△六持参金。

△七その座だけの處置。その場のがれ。

△八縁つづきの仲。

△九迷惑。

△一〇この句の下に人間の中に生れたやうの意を含む。

△一一古布片を細く割いて織つたもの。

△一二藤臺を組んで作つた帯。

△一三昔の火繩銃に用ひた、短く切つた火繩。

△一四以、獲物を容れるための。

△一五亂暴者といふほどの意。

行てひさしく音信絶て無事をもしらぬ姨のもとへ尋入て昔を語れば石流  
よしみとてむごからず親の茂介殿の事のまいひ出して泪片手夜すがら咄し  
明ればうるはしき女臆に不思議を立いかなる御かたぞとたづね給ふに是さ  
しあたつての迷惑此事までは分別もせずして是はわたくしの妹なると年久  
しく御所方にみやづかひせしが心地なやみて都の物がたき住ひを嫌ひ物し  
づかなるかゝる山家に似合の縁もかな身をひきさげて里の仕業の庭はたら  
き望にて伴ひまかりける數銀も二百兩計たくはへありと何心もなく當座さ  
ばきに語りける何國もあれ欲の世中なれば此姨是におもひつきそれは幸  
の事こそあれ我一子いまだ定る妻とてもなしそなたものかぬ中なれば是に  
と申かけられさても氣毒まさりけるおさんしのびて泪を流し此行すへいか  
ゝあるべしと物おもふ所へ彼男夜更てかへりし其様すさしやすくれてせ  
い高かしらは唐獅子のごとくちゞみあがりて髭は熊のまぎれて眼赤筋立て  
光つよく足手其まゝ松木にひとしく身には割織を着て藤繩の組帯して鉄炮  
に切火繩かますに菟狸を取入是を渡世すと見えける其名をきけば岩飛の  
是太郎とて此里にかくれもなき悪人都衆と縁組の事を母親語りければむく

△(六)鑒鏡。鏡の小形のもので、鑒を直し

などするに用ひたもの。

△(七)結婚の盃事の用意。

△(八)小形の鮪の鹽物。

△(九)屏風代りに用ひる蕨。

△(一〇)床を附けない疊表のやうな藁の編んだもの。

△(一一)燈火用に細く割つた肥え松。

△(一二)短氣である。

△(一三)丙午の年の女は男を食ふといつて、結婚することを忌まれた。

△(一四)青蜥蜴。有毒といはる。

△(一五)優柔なること。

△(一六)親類たる不幸、因果。

△(一七)丹波九世戸の文珠堂。與謝郡に在る

△(一八)通夜。

つげなる男も是をよろこび善はいそぎ今宵のうちにとびん鏡取出して面  
を見るこそやさしけれ母は盃の用意として塩目黒に口の欠たる酒徳利を取  
まはし蕨屏風にて貳枚敷ぼとかこひて木枕二ツ薄縁二枚横嶋のふとん一  
ツ火鉢に割松もやして此夕一しほにいさみけるおさんかなしさ茂右衛門迷  
惑かりそめの事を申出して是ぞ因果とおもひ定此口惜さまたもうきめに近  
江の海にて死べき命をながらへしとても天われをのがさずと脇差取て立を  
おさん押とどめてさりと短かしさま／＼分別こそあれ夜明て爰を立のく  
べし萬事は我にまかせ給へと氣をしづめて其夜は心よく祝言の盃取かは  
し我は世の人の嫌ひ給ふひのへ午なるとかたれば是太郎聞てたとへばひの  
へ猫にてもひのへ狼にてもそれにはかまはずそれがしは好て青どかけを  
喰てさへ死なぬ命今年廿八迄虫ばら一度おこらず茂右衛門殿も是にはあや  
かり給へ女房共は上方そだちにして物にやはらかなるが氣にはいらねども  
親類のふしやうなりとひざ枕してゆたかに臥けるかなしき中にもおかしく  
なつて寐入を待かね又爰を立のきなを奥丹波に身をかくしけるやう／＼  
日數ふりて丹後路に入て切戸の文珠堂につやしてまどろみしに夜半とおも



(三)世に類なき不義。

(四)取り返しのつかぬこと。

(四)未來世をいふ。

(四)本筋でないこと。不義のこと。

(四)文珠師利といふから、師利の音を尻に通はせて、男色のみ知ると洒落たのである。

(四)文珠堂に近き、天の橋立の松林を吹く風。

(四)塵の如くつまらぬ、はかない人生。

(一)わが身に都合の悪いことは、その身にひどく、いやに心苦しくおもふものである。だから博奕打ちが負けた話には人に聞かせない云々と續く。

(二)喧嘩師。喧嘩、強請などを職業のやうにするもの。

(三)商品を多量に買つて置き、値上りの機会を待つて賣らうとするもの。

(四)闇がりて犬の糞を踏みつけること。

(五)淫奔性の女を妻に持ち合はせた男。

(六)自分の好みに合はせて調製した小袖

(七)簾、天蓋。共に佛殿裝飾の具。

ふ時あらたに<sup>れいむ</sup>霊夢あり汝等<sup>なんぢら</sup>世になきいたづらして何國<sup>どこく</sup>までか其難<sup>そのなん</sup>のがれがたしされどもかへらぬむかしなり向後<sup>きやうご</sup>浮世<sup>うきよ</sup>の姿<sup>すがた</sup>をやめて惜<sup>おし</sup>きとおもふ黒髪<sup>くろかみ</sup>を切出家<sup>しゆつげ</sup>となり二人<sup>ふたり</sup>別<sup>わか</sup>れに住<sup>すま</sup>て悪心<sup>あくしん</sup>さつて菩提<sup>ぼだい</sup>の道に入<sup>い</sup>ば人も命<sup>いのち</sup>をたすくへしとありがたき夢<sup>ゆめ</sup>心にすへくは何にならふともかまはしやるなこちや是<sup>これ</sup>がすきにて身に替<sup>か</sup>ての脇心<sup>わきしん</sup>文珠<sup>もんじゆ</sup>さまは衆道<sup>しゆどう</sup>ばかりの御合点<sup>かてん</sup>女道<sup>にようち</sup>は曾<sup>かつ</sup>てしろしめさるまじといふかと思へばいやな夢覺<sup>さめ</sup>て橋立<sup>はしたち</sup>の松の風<sup>かぜ</sup>ふけは塵<sup>ちり</sup>の世じや物となをくやむ事のなかりし

## 身の上の立聞

あしき事は身に覺<sup>は</sup>て博奕<sup>はくち</sup>打<sup>うち</sup>まけてもだまり傾城<sup>けいせい</sup>買<sup>か</sup>取<sup>と</sup>あげられてかしこ貞<sup>ちか</sup>するものなり喧嘩<sup>けんか</sup>しひけとる分<sup>ぶん</sup>かくし買置<sup>かき</sup>の商人<sup>あきんど</sup>損<sup>そん</sup>をつゝみ是皆闇<sup>やみ</sup>がりの犬<sup>いぬ</sup>の糞<sup>ふ</sup>なるべし中<sup>ちゆう</sup>にもいたづらかたぎの女<sup>を</sup>を持<sup>も</sup>あはす男<sup>おとこ</sup>の身<sup>み</sup>にして是程<sup>これほど</sup>なさけなき物はなしおさん事も死<sup>し</sup>ければ是非<sup>ぜひ</sup>もなしと其通<sup>そのとほ</sup>りに世間<sup>よこ</sup>をすまし年月<sup>としげ</sup>のむかしを思<sup>おも</sup>ひ出<sup>で</sup>てにくしといふ心<sup>こころ</sup>にも僧<sup>そう</sup>をまねきてなき跡<sup>あと</sup>を吊<sup>た</sup>ひける哀<sup>あはれ</sup>や物好<sup>ものずき</sup>の小袖<sup>こそで</sup>も旦那寺<sup>だんなでら</sup>のはたてんかいと成無常<sup>むじやう</sup>の風<sup>かぜ</sup>にひるかへし更<sup>さら</sup>に

(へ)さて。

- (九)京都市中に在る。古來有名の池。  
(一〇)影の下にありといふ語を添へて解し  
空と水との二つの月を見るにつけてもの  
意に取るべきである。  
(一一)鳴瀧は今の御室川の上流。般若寺の  
南の急湍。山はその邊の山を指すのであ  
らう。今京都市に屬する。  
(一二)共に地名。いづれも今京都市。元の  
葛野郡に屬する。  
(一三)罪ある身の人目を恐れるさまをいふ  
(一四)江戸から來べき爲替の銀。  
(一五)仕立の手ぎはに就いて批評する。

又なげきの種となりぬされば世の人程だいたんなるものはなし茂右衛門そ  
のりちぎさ闇には門へも出さりしがいつとなく身の事わすれて都ゆかしく  
おもひやりて風俗いやしけになし編笠ふかくかづきおさんは里人にあづけ  
置無用の京のぼり敵持身よりはなをおそろしく行に程なく廣沢のあたりよ  
り暮くになつて池に影ふたつの月にもおさん事を思ひやりておろかなる  
泪に袖をひたし岩に數ちる白玉は鳴瀧の山を跡になし御室北野の案内しる  
よしゝていそげば町中に入て何とやらおそろしげに十七夜の影法師も我な  
がら我をわすれて折く胸をひやして住馴し旦那殿の町に入てひそかに様  
子を聞ば江戸銀のおそきせんさく若ひもの集て頭つきの吟味櫛着物の仕  
立ぎはをあらためける是も皆色よりおこる男ぶりぞかし物語せし末を聞に  
さてこそ我事申出しさてもく茂右衛門めはならびなき美人をぬすみおし  
からぬ命しんでも果報といへばいかにもく一生のおもひ出といふもあり  
また分別らしき人のいへるは此茂右衛門め人間たる者の風うへにも置やつ  
にはあらず主人夫妻をたぶらかし彼是ためしなき悪人と義理をつめてそし  
りける茂右衛門立聞して慥今のは大文字屋の喜介めが声なり哀をしらずに

○予預り證文。これには一定の形式があつた。

覺

一金 ⑧ 兩也 但有合金

右之通牒に請取申候此手形を以相渡可申候以上

年月日 何屋某⑨

何屋某殿

○七今いつてゐる惡口の代りに。

○八齒ざしりして。切齒して。

○九据風呂。普通家庭に据ゑ付けた桶風呂。

○一〇陰曆十七日夜の月の出を待つ月待の代理を勤めると稱して門門を廻つた物貰ひの一種。

○一一燈明料と稱した錢十二文。十二文の額は佛教の十二因縁に起つたといふ。

○一二茲通の惡事。

○一三山城靈宕山に祭つた神を指す。

○一四しのび／＼の下に見物する意の語が省略されてゐる。

○一五四條川原は芝居小屋のあつた所。その芝居の中の俳優藤田小平次の歌舞伎狂言。

○一六芝居小屋で用ひた見物人の敷き物。

○一七後の方に座を取つて見物する。

○一八極めて危険な場合にあること。

○一九九月九日の重陽節。

○二〇主人もそこにあるので都合悪くて。

くさけに物をいひ捨つるやつかなおのれには預り手形にして銀八拾目の取替あり今のかはりに首おさへても取べしと齒ざしめして立けれ共世にかくす身の是非なく無念の堪忍するうちに又ひとりのいへるは茂右衛門は今にしなすにどこぞ伊勢のあたりにおさん殿をつれて居るといふよい事をしほると語る是を聞と身にふるひ出て俄にさむく足ばやに立のき三条の旅館屋に宿かりて水風呂にもいらす休けるに十七夜代待ちの通しに十二灯を包て我身の事すへ／＼しれぬやうにと祈ける 其身の横しまあたごさまも何としてたすけ給ふへし明れは都の名残とて東山しのび／＼に四條川原にさがり藤田狂言つくし三番つゞきのはじまりといひけるに何事やらん見てかへりておさんに咄しにもと圓座かりて遠目をつかひもしも我をしる人もと心元なくみしに狂言も人の娘をぬすむ所是さへきみあしくならび先のかた見れはおさんさまの旦那殿たましひ消てぢごくのうへの一足飛玉なる汗をかきて木戸口にかけ出丹後なる里にかへり其後は京こはかりき折節は菊の節句近付て毎年丹波も栗商人の來しが四方山の咄しの次手にいやこなたのお内義さまはと尋けるに首尾あしく返事のしてもなし旦那にかい良して

（三）死去した意。

（三）天の橋立に近き古來有名な文珠堂のある所。

（三）同罪と認められ、同じ刑場に引かれ

（三）京都東山に近き、昔の刑場。

（三）おさんが刑死の時の著物。

それはてこねたといはれける栗賣重而申は物には似た人も有物かな是の奥  
さまにみぢんも違はぬ人又若人も生うつしなり丹後の切戸邊に有けるよと  
語捨てかへる亭主聞とがめて人遣し見けるにおさん茂右衛門なれば身うち  
大勢もよふしてとらへに遣し其科のかれす様とのせんぎ極中の使せし玉  
といへる女も同じ道筋にひかれ栗田口の露草とはなりぬ九月廿二日の曙  
のゆめさら／＼寂期いやしからず世語とはなりぬ今も浅黄の小袖の面影見  
るやうに名はのこりし

# 好色五人女 卷四

戀草からけし八百屋物語

## 目 録

㊦ 大節季はおもひの間

かり着の袖に二ツ紋有

㊦ 虫出し神鳴もふんとしかきたる君さま

化物おそれぬ新發意有

㊦ 雪の夜の情宿

戀の道しる似せ商人有

④ 世に見をさめの櫻さくら

惜をしやすかたのちる人有

⑤ 様子あつての俄坊主にわかぼんず

前髪まへかみは又花またはなの風かぜより哀あはれ有

## 大節季はおもひの闇

ならひ風はげしく師走の空雲の足さへはやく春の事共取いそぎ餅突宿の隣には小笹手毎に煤はきするもあり天秤のかねさへて取やりも世の定めとていそがし棚下を引連立てこん／＼小目くらにお豈文くだされませいの声やかましく古札納めざつ木賣櫃かち栗かまくら海老通町にははま弓の出現世新物たび雪踏あしを空にしてと兼好が書出しおもひ合て今も世帯もつ身のいとまなき事にぞ有けるはやおしつめて廿八日の夜半にわや／＼と火宅の門は車長持ひく音葛籠かけ硯かたに掛けてにぐるも有穴藏の蓋とりあへずかる物をなげ込しに時の間の煙となつて焼野々雉子子を思ふがごとく妻をあはれみ老母をかなしみそれ／＼のしるべの方へ立のきしは更に悲しさがぎりなかりき。爰に本郷邊に八百屋八兵衛とて賣人むかしは俗姓賤しからず此人ひとりの娘あり名はお七といへり。年も十六花は上野の盛月は隅田川のかげきよくかゝる美女のあるべきものか都鳥其業平に時代ちがひにて見せぬ事の口惜是に心を掛ざるはなし此人火元ちかづけば母親につ

(一) 東北の風。物類稱呼に據ると、「北國にては、東風をあゆの風と云ふ。……東北の風をちあゆと云。……江戸にては東南の風をいなさといふ、東北の風をならいと云」とある。この話は江戸の話であるから、西鶴はわざと江戸のことばを用ゐたものか。

(二) 正月の支度。正月行事の準備。

(三) 年末行事の一。家中の大掃除。當時十二月十三日以後家例に依つて行つた。

(四) 天秤で秤る金銀貨の音。

(五) 店の檐下、みせさき。

(六) 乞食者の詞。こめくらは、小簪と米藏との兩同音語を懸けた、縁起を祝ふ意を含めた語。

(七) 當年中の神佛の守札などは、年の改まると共に新しいものにかへるので、その古札を各戸から集めて處理すると、米錢を貰つた乞食。

(八) 折敷を賣るもの。

(九) いづれも正月儀式用の品。鎌倉鯉は伊勢鯉に同じ。

(一〇) 江戸商賣の中心地日本橋の通り筋。

(一一) 多く破魔弓と書いた。正月の祝品として男児のある家に贈つた玩具。板に弓と矢を取りつけ、それに飾りを施してあつた。

(一二) 袋雪駄の類は正月には新しい物を

穿くを常習とした。

(二) 徒然草第十九段「晦日の夜いたく暗きに松どもともして夜半過ぐるまで人の門たゞき走りありきて何事にかあらん事々しく罵りて足を空にまどふが……」とある。

(三) 騒ぐ様子をいふ。

(四) 佛教では現世をいへど、こは文字通りに火災の家の意に用ひてある。

(五) 懸子になつた硯箱。上部が硯箱で、下部が物を容れる抽斗のある箱になつてゐる。

(六) あきんど。

(七) 火先近づけばか、火元近ければか、いづれかの誤用であらう。

(八) 菩提寺といふに同じ。

(九) 今も文京區駒込吉祥寺町に在る。

(一〇) 腰巻。

(一一) いづれも佛寺に用ゐる樂器。

(一二) 佛前に茶を供ふるに用ゐる茶碗。

(一三) 檀越の僧。

(一四) 梧桐と銀杏と二種の紋を比翼にした紋。所謂比翼紋で、情人同士の間に用ゐたもの。

(一五) 山の形をつづけた裾模様。

(一六) 焼きこめた香のにほひ。

(一七) わか死なされ。

(一八) 死人の遺品として供養のために寺に

き添年比頼をかけし旦那寺駒込の吉祥寺といへるに行て當座の難をしのぎける此人／＼にかきらずあまた御寺にかけ入長老様の寐間にも赤子泣声仏前に女の二布物を取ちらし或は主人をふみこへ親を枕としわけもなく臥まろびて明れば鍔鉢鉦を手水だらいにしお茶湯天目もかりのめし椀となり此中の事なれば釈迦も見ゆるし給ふべしお七は母の親大事にかけ坊主にも油斷のならぬ世中と萬に氣を付侍る折ふしの夜嵐をしのぎかねしに亭坊慈悲の心から着替の有程出してかされける中に黒羽二重の大ふり袖に梧銀李のならべ紋紅うらを山道のすそ取。わけらしき小袖の仕立焼かけ残りてお七心にとまり。いかなる上臈か世をはよふなり給ひ形見もつらしと此寺にあがり物かと我年の比おもひ出して哀にいたましくあひみぬ人に無常おこりて思へば夢なれや。何事もいらぬ世や後生こそまことなれとしほくとしづみ果。母人の珠數袋をあけて願ひの玉の手につかけ口のうちにして題目いとまなき折からやことなき若衆の銀の毛貫片手に左の人さし指に有かなきかのとげの立けるも心にかゝると暮方の障子をひらき身をなやみおはしけるを母人見かね給ひ。ぬきまいらせんとその毛貫を取て暫なや



遺族から納めた物。

(三〇)珠數を指す。

(三一)男子の前髪を取つて髪を結つた青年

(三二)迷惑と譯するがよく當る。

(三三)青年期の視力の強き時。

(三四)お七を指す。

(三五)知つてゐながらわざとの意。

(三六)事務を掌る僧。下位の僧。

(三七)双方の文の使の人が入れ違ひになる意。

(三八)双方同時に文を送つたので、共に返事が必要がなくなり、それで兩人共に返事をせず。

(三九)好機會。

(四〇)古今集、光孝天皇の「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ」の歌を利かしてある。正月初の子の日に若菜を食して祝ふ習慣は遠くからあつた。

み給へども老眼のさだかならず見付る事かたくて氣毒なる有さまお七見しより我なら目時の目にてぬかん物と思ひながら近寄かねてたゞすむうちに母人よび給ひて。是をぬきてまいらせよとのよしうれし。彼御手をとりにて難儀をたすけ申けるに。此若衆我をわすれて。自が手をいたくしめさせ給をはなれがたかれども母の見給ふをうたてく是非もなく立別れさまに覺て毛貫をとりて歸り又返しにと跡をしたひ其手を握かへせば是よりたがひの思ひとはなりけるお七次第にこがれて此若衆いかなる御方ぞと納所坊主に問ければあれは小野川吉三郎殿と申て先祖たゞしき御浪人衆なるが。さりととはやさしく情のふかき御かたとかたるにぞなをおもひまさりて忍びくくの文書て人しれずつかはしけるに便りの人かはりて結句吉三郎方よりおもはくかづくの文おくりける心ざし互に入龍て是を諸思ひとや申べし兩方共に返事なしにいつとなく淺からぬ戀人こはれ人時節をまつうちこそうき世なれ大晦日はおもひの間に暮て明れば新玉の年のはじめ女松男松を立飭て曆みそめしにも姫はじめおかしかりきされどもよき首尾なくつゝに枕も定ず君がため若菜祝ひける日もおはりて九日十日過十一日十

(四)正月十五日まで。所に依つて期間に異ひがあつた。

(四)千載集、周防内侍の「春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなくなつたゝむ名こそをしけれ」を利かしてある。

(一)その年はじめての雷鳴。この雷鳴を土中に聞いて、諸の虫はその穴を出るといふより起つた名。

(二)鰐鼻輝は雷神に縁のある語であるが武家の男兒は十三歳かで、ふんどしかきの祝ひをした。即ち十三歳を過ぎた青年の意である。

(三)古今集僧正遍昭の「朝みどりいとよりにかけて白露を玉にもぬける春の柳か」を利かしてある。

(四)全僧。寺中の僧達。

(五)豫期してゐた死人。

(六)臺所の用、炊事をあづかる老女。

(七)佛門に入つて問もない人、子僧。

(八)追離に福は内鬼は外と唱へてまく大豆であるから、同じ鬼の類としての雷神除けになると信じられてゐたものであらう。

(九)天井が落雷を避ける用に立つと信じてゐたものと察しられる。

(一〇)後撰集藤原兼輔の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」を利かしてある。

二十三十四日の夕暮はや松のうちも皆になりて甲斐なく立し名こそはかなけれ

### 虫出しの神鳴もふんごしかきたる君さま

春の雨玉にもぬける柳原のあたりよりまいりけるのよし十五日の夜半に外門あらけなく扣にぞ僧中夢をどろかし聞けるに米屋の八左衛門長病なりしが今宵相果申されしにおもひまふけし死人なれば夜のうちに野邊へおくり申度との使なり。出家の役なればあまたの法師めしつれられ晴間をまたず傘をとりく御寺を出てゆき給し跡は七十に餘りし庫裏姥ひとり十二三なる新發意豈人赤犬ばかり殘物とて松の風淋しく虫出しの神鳴ひどき渡りいづれも驚て姥は年越の夜の煎大豆取出すなど天井のある小座敷たづねて身をひそめける母の親。子をおもふ道にまよひ我をいたはり夜着の下へ引よせきびしく鳴時は耳ふさげなど心を付給ひける女の身なれば。おそろしさかぎりもなかりきされ共吉三良殿にあふべき首尾今宵ならではとおもふ下心ありて扱もうき世の人何とて鳴神をおそれけるぞ。捨てから

(一)よき機會の意。

(二)下賤のもの。

(三)寺の表座敷。

(四)寺小姓の吉三郎を指す。

(五)麩を油揚げした精進料理であらう。

(六)香爐。香の絶えないやうに、香の燃え盡きると仕掛けた鈴の落ちて、それを知らせるやうに出来てゐるもの。

命すこしも我はおそろしからずと女のつよからずしてよき事に無用の言葉  
すゑくゝの女共まではをそしりける。やうく更過て人皆をのづからに寐  
入て解は斬の玉水の音をあらそひ雨戸のすきまより月の光もありなしに靜  
なるをりふし客殿をしのび出けるに身にふるひ出て足元も定かね枕ゆた  
かに臥たる人の腰骨をふみてたましる消かごとく胸いたく上氣して物はい  
はれず手をあはして。拜みしに此もの我をとかめざるを不思議と心をとめ  
て詠めけるに食たかせける女のむめといふ下子なりそれをのり越て行を此  
女裙を引とゞめける程に又胸さはぎして我留るかとおもへばさにはあらず  
小半紙壹折手にわたしけるさてもくいたづら仕付てかゝるいそがしき折  
からも氣の付たる女ぞとうれしく方丈に行てみれども彼兒人の寐姿見えね  
はかなしくなつて臺所に出ければ姥目覺し今宵鼠めはとつぶやく片手に  
椎茸のにしめ。あけ麵葛袋など取をくもおかししあつて我を見付て吉  
三郎殿の寐所はそのく小坊主とひとつに三疊敷にと肩たゝいて小話ける  
思ひの外なる情しり寺には惜やといとしくなりて。してゐる紫鹿子の帯と  
きてとらし姥がをしへるにまかせ行に夜やハッ比なるべし常香盤の鈴落て

（七）常香盤の香を盛る役を受持つこと。

（八）待ち遠しく。

（九）淫奔のもの。

（一〇）僧侶の祕姿。大黒は印度の臺所を掌る神の稱であるから、それが轉じた僧間の隠語の類から起つた語。

（一一）同じ蒲團にあべこべに寝ること。

（一二）香ぶくめのつまりたる語。

（一三）香の名。

（一四）香のこと。

（一五）松葉屋で賣る牌。松葉屋は未詳。

ひときわたる事しばらくなり新発意其役にや有つらん起あがりて糸かけ直し香もりつぎて座を立ぬ事とけしなく寐所へ入を待かね女の出来こゝろにて髪をさばきこはひ貞して闇がりよりおどしければ石流佛心をなはりすこしもおとろく氣色なく汝元來帶とけひろげにて世に徒もの也たちまち消され此寺の大黒になりたくは和尚のかへらるゝ迄待と目を見ひらき申けるお七しらけてはしり寄こなたを抱て寐にきたといひければ新発意笑ひ吉三郎さまの事か。おれと今迄跡さして臥ける其證據には是そこぶくめの袖をかざしけるに。白菊などいへる留木のうつり香どふもならぬとうちなやみ其寐間に入を新発意声立て。はあ。お七さまよい事をといひけるに又驚き何ゝ而もそなたのほしき物を調進すべし。だまり給へといへはそれならば錢八十と松葉屋のかるとと浅草の米まんぢう五ツと世に是よりほしき物はなひといいば。それこそやすい事明日ははやく遣し申べきと約束しける此小坊主枕かたむけ夜が明たらば。三色もろふはず必もらふはづと夢にもうつゝにも申寐入に靜りける其後は心まかせになりて吉三郎寐姿に寄添て何共言葉なくしとげなくもたれかゝれば吉三郎夢覺てなを身をふる

(二六)下谷谷中。

(二七)谷中附近の地名らしいが、未詳。地圖に小石川に吹上の名は見えてゐるが、餘り遠いのでそれではあるまい。

(二八)伊勢物語芥川の條の、男が女を盗み出して、共に逃げる途中で、雷鳴に逢ひ、破れた藏に女を押し入れて、戸口に番をしてゐる中に、鬼が女を一口に食つてしまつたといふことのあるのを指す。

(二九)證人になる。

はし小夜着の袂を引かぶりしを引のけ髪に用捨もなき事やといへば吉三郎  
せつなくわたくしは十六になりますといへばお七わたくしも十六になりま  
すといへば吉三郎かさねて長老さまがこはやといふをれも長老さまはこは  
しといふ何とも此戀はじめもどかし後はふたりながら涙をこぼし不埒なり  
しに又雨のあがり神鳴あらけなくひゞきしに是は本にこはやと吉三郎にし  
がみ付けるにぞをのづからわりなき情ふかくひへわたりたる手足やと肌へ  
ちかよせしにお七うらみて申侍るはそなたさまにもくからねばこそよし  
なき文給りながらかく身をひやせしは誰させけるそと首筋に喰つきけるい  
つとなくわけもなき首尾してぬれ初しより袖は互にかざりは命と定ける  
程なくあけぼのちかく谷中の鐘せはしく吹上の榎の木朝風はけしくうらめ  
しや今寐ぬくもる間もなくあかねは別れ世界は廣し昼を夜の國もがたと  
俄に願ひとても叶はぬ心をなやませしに母の親是はたとつね來てひつたて  
ゆかれしおもへばむかし男の鬼一口の雨の夜のこゝちして吉三郎あきれ果  
てかなしかりき新発意は宵の事をわすれず今の三色の物をたまはらずは今  
夜のありさまつげんといふ母親立歸りて。何事かしらね共お七が約束せし

- (一) 昔旅をする人が、長い袋を作つて、その中に入れ、袋を腹部に巻いて、紛失を難を防ぎ、大切に所持した金銀。  
(二) 世を捨てて僧侶となつた人。  
(三) 警戒し、監視し。  
(四) 今東京都中に在る。昔は中仙道の宿驛であつた。

(五) ありての下に一夜を明かしなどの句が省かれてゐる。

(六) 筥笠。筥の皮で製した笠。

(七) 殆ど。

(八) 下女下人などの使用する茶碗。

物は我が請にたつといひ捨て歸られしいたづらなる娘もちたる母なれば。  
大かたなる事は聞ても合点してお七よりはなを心を付て明の日はやく其も  
てあそびの品く調ておくり給ひけるとや

### 雪の夜の情宿

油斷のならぬ世の中に殊更見せまじき物は道中の肌付金酒の酔に脇指娘  
のきはに捨坊主と御寺を立歸りて其後はきびしく改て戀をさきけるされ  
共下女が情にして文は數通はせて心の程は互にしらせける有夕板橋ちか  
き里の子と見えて松露土筆を手籠に入て世をわたる業とて賣きたれりお  
七親のかたに買とめける其暮は春ながら雪ふりやますして里までかえる事  
をなけきぬ亭主あはれみて何ごゝろもなくつゝ庭の片角にありて夜明なば  
かへれといはれしをうれしく牛房大根の筵かたよせ竹の小笠に面をかくし  
腰簀身にまとひ一夜をしのぎける嵐枕にかよひ土間ひへあかりけるにぞ  
大かたは命もあやうかりき次第に息もきれ眼もくらみし時お七声して先  
程の里の子あはれやせめて湯成共吞せよと有しに食焼の梅が下の茶碗にく

(九)御深切。

(一〇)男色關係の兄分の者。

(一一)奇特に。稱すべきの意。

(一二)接吻のこと。

(一三)店の土間と奥との通路に當る間の戸

(一四)出産のこと。

(一五)男の兄。

(一六)昔生まれの孩兒に飲ませた毒下しの藥。甘草は藥に甘味を附けて、飲み易くしたもの。

(一七)かたちんばの草履を穿いて、慌て急いで出で行くさま。

(一八)待て。待つてくれと呼びかへして、土間の村の子を見ようとすること。

みて久七にさし出しければ男請取て是をあたへける。忝かたじけなき御心入といへばくらまぎれに前髪まへかみをなぶりて我も江戸にをいたらば念者ねんじやの有時分じやが痛いたしやといふいかにも淺あましくそだちまして田をすく馬の口を取眞柴ましか茹ゆより外の事をぞんじませぬといへば足をいらひてきどくにあかゞりを切さぬよ是こなら口くちをすこしと口をよせけるに此悲かなしさ切きなさ齒はを喰くしめて泪なみだこぼしけるに久七分別きんぶんしていや／＼根深ねぶかにんにく喰くし口中もしれすとやめける事のうれし其後寐時ねときに成て下／＼はうちつけ階子はしを登のぼり二階にかいにともし火影ひかげうすくあるしは戸棚とだなの錠前おとづまへに心を付れば内義は火の用心能く云付てなを娘に氣遣きづかいせられ中戸なかつどさしかためられしは戀路こいぢつなきれてうたてしハッの鐘かねの鳴時なるとき面の戸おもての戸扣て女おんなと男おとこの聲こゑして申姥うはさま只今ただいまよろこひあそばしましたがいしも若子わこさまにて旦那だんなさまの御機嫌ごきげんと頻しきりによばはる家内起いへうちをきさはぎてそれはうれしやと寐所ねどころより直ただに夫婦連立ふうふつたたち出でさまにまくりかんぞうを取持と持ちてかたし／＼の草履くすりをはきお七に門の戸をしめさせ急心いそこばかりにゆかれしお七戸をしめて歸りさまに暮方里くれかたさとの子思ひやりて下女に其手燭しよくまでとて面影おもかげをみしに豊ゆたかに臥ふていと哀あはれの増りける心よく有しを其まゝおかせ給へと下女のい

ニむ香の名。匂ひ袋に入れて肌に附けて所持したもの。

(110)戀人を。

三 くはしく、細かに。

（三）二人手を組み合はせて、吉三郎を手に載せて。

(三) 幾服かの藥を飲ませ。

(三) 金箔、銀箔をすり附けて模様としたもの。

へるを聞ぬ良<sup>よ</sup>してちかくよれば肌<sup>はだ</sup>につけし兵部卿<sup>しやうぶきやう</sup>のかほり何とやらゆかし  
くて笠<sup>かさ</sup>を取除<sup>とりのけ</sup>みればやことなき脇<sup>わき</sup>良<sup>よ</sup>のしめやかに鬢<sup>びん</sup>もそゝけさりしをしば  
し見<sup>み</sup>とれてその人の年比<sup>としくら</sup>におもひいたして袖<sup>そで</sup>に手をさし入て見るに浅黄<sup>あさぎ</sup>は  
ぶたへの下着<sup>したぎ</sup>はとはとこゝろをとめしに吉三郎殿なり人のきくをもかまはず  
こりや何としてかゝる御すかたぞとしがみ付てなげきぬ吉三郎もおもてみ  
あはせ物ゑいはざる事ししばらくありて我かくすかたをかへてせめては君<sup>きみ</sup>を  
かりそめに見る事ねがひ宵<sup>よひ</sup>の憂思<sup>うれし</sup>ひおほしめしやられよとはじめよりの事  
共<sup>とも</sup>をつどゝにかたりければ菟角<sup>とかく</sup>は是へ御入有て其御うらみも聞まいらせ  
んと手を引まいらすれども宵<sup>よひ</sup>よりの身のいたみ是非<sup>せひ</sup>もなく哀<sup>あはれ</sup>なりやうゝ  
下女<sup>しやうにょ</sup>と手<sup>て</sup>をくみて車<sup>くるま</sup>にかきのせてつねの寐間<sup>ねま</sup>に入まいらせて手のつどくほ  
どはさすりて幾<sup>いく</sup>薬<sup>くすり</sup>をあたへすこし笑<sup>わら</sup>ひ良<sup>よ</sup>うれしく盃<sup>さかづき</sup>事<sup>こと</sup>して今宵<sup>こんよひ</sup>は心<sup>こころ</sup>に有<sup>ある</sup>  
程<sup>ほど</sup>をかたりつくしなんとよろこふ所へ親父<sup>おやぢ</sup>かへらせ給ふにぞかさねて憂<sup>うれ</sup>め  
にあひぬ衣桁<sup>いかけ</sup>のかげにかくしてさらぬ有さまにていよゝおはつさまは親<sup>おや</sup>  
子<sup>こ</sup>とも御まめかといへば親父<sup>おやぢ</sup>よろこびてひとりの姪<sup>めい</sup>なれはとやかく氣遣<sup>きざ</sup>せ  
しに重荷<sup>おもに</sup>おろしたと機嫌<sup>きげん</sup>よく産着<sup>うぶぎ</sup>のもやうせんさく萬祝<sup>まんしゆ</sup>て鶴龜松竹<sup>かくきまつたけ</sup>のすり



（五）鼻紙を折つて木枕の上で雛型を切る  
こと。

（六）雛型を切る時間が終つて。

（七）襖のこと。襖と障子とではない。

（八）鴛鴦の襖を、啞の灸に懸けてある。

（九）書きくどきて。筆談の情話をするこ  
と。

（一）再び火災があつたら。

（二）放火と明らかにいつてないが、下の  
文句から放火のことと知られる。

（三）近頃迄不明とされてゐたが、最近眞  
山青果氏の西鶴語彙考證第一が出て、神  
田昌平橋のことであることが明かにされ  
た。昌平橋はもとの筋違橋今の萬世橋の  
西に在るもの。

（四）四谷は四谷門外、芝は芝札の辻、淺  
草は淺草橋、日本橋は今の日本橋、芝の  
の字は衍か。またはその下に語を省い  
たのか未詳。以上に昌平橋を合はせて、  
火刑者の晒し場とされてゐた。諸方を重  
罪人として引廻した上、晒しものにした  
のである。

箔はと申されけるにおそからぬ御事明日御心靜にと下女も口／＼に申せば  
いや／＼かやうの事ははやくこそよけれと木枕鼻紙をたゝみかけてひな形  
を切るゝこそうたてけれやう／＼其程過て色ゝたらしてねせまして語たき  
事ながらふすま障子ひとへなればもれ行事をosoろしく灯の影に硯帟置  
て心の程を互に書て見せたり見たり是をおもへば鴛のふすまとやいふべし  
夜もすから書くどきて明かたの別れ又もなき戀があまりてさりとては物う  
き世や

### 世に見をさめの櫻

それとはいはずに明暮女こゝろの墓なやあふべきたよりもなければある  
日風のはげしき夕暮に日外寺へにげ行世間のさはぎを思ひ出して又さもあ  
らば吉三郎殿にあひ見る事の種とも成なんとよしなき出こゝろにして惡  
事を思ひ立こそ因果なれすこしの煙立さはきて人々不思議と心懸見しに  
お七か面影をあらはしけるこれを尋しにつゝます有し通を語けるに世の  
哀とぞ成にけるけふは神田のくづれ橋に耻をさらし又は四谷芝の淺草日

(五) 覺悟してゐることなれば。

(六) 十七歳で死刑に處せられること。

(七) 原本にははじめの下に句點をわざわざ打つてあるので、卯月の初、姿最期ぞとよむべきものと察せられる。姿最期ぞは美しいこの世の姿は今日が最後ぞ、即ち今日死刑に處せられるぞの意と知られる。すゝめけるは覺悟を促す意。

(八) 人生を顧じて夢幻の中に在るはかなきものといふのである。

(九) お七が辭世の歌。意は暮春の遅櫻と共に、はかなく散り行くわが身は、うき名を残して世の人達にあはれまれるであらう。

(一〇) 芝に近き鈴の森(もと荏原郡)の刑場で火刑になつて死んだこと。

(一一) 人は皆一度は茶毘の煙となることをのがれぬ。

(一二) さてに同じ。

(一三) 甲斐國郡内地方より産した稿の絹織物。

(一四) 吉三郎を指してゐる。

本橋に人こぞりてみるに惜まぬはなし是を思ふにかりにも人は惡事をせまじき物なり天是をゆるし給はぬなり此女思ひ込し事なれば身のやつるゝ事なくて毎日有し昔のごとく黒髪を結せてうるはしき風情惜や十七の春の花も散るゝにほとゝきすまでも嫩鳴に卯月のはじめ。すかた寂期ぞとすゝめけるに心中更にたかはす夢幻の中ぞと一念に仏國を願ひける心ざし去迎は痛しく手向花とて咲おくれし櫻を一本もたせけるに打詠て世の哀春ふく風に名を残し。おくれ櫻のけふ散し身はと吟しけるを聞人一しほにいたまはしく其姿をみおくりけるに限ある命のうち入相の鐘つく比品かはりたる道芝の邊にして其身はうき煙となりぬ人皆いつれの道にも煙はのかれず殊に不便は是にぞ有けるそれはきのふ今朝みれば塵も炭もなくて鈴の森松風ばかり残て旅人も聞つたへて只是通らず廻向して其跡を吊ひけるされは其日の小袖郡内嶋のきれくゝ迄も世の人拾もとめてすへくの物語の種とぞ思ひける近付ならぬ人さへ忌日くにしきみ折立此女をとひけるに其契を込し若衆はいかにして寂後を尋問さる事の不思議と諸人沙汰し侍る折節吉三郎は此女にこゝちなやみて前後を弁す憂世の限と見えて便す

（一）吾心をつけること。深切な心やり。

（二）支度。處置。

（三）人の死んで四十九日目に、四十九個の丸餅を靈前に供へること。

（四）見給ふなればの下にお會ひなさる方がよいが、意の文句が省かれた心持ちでよまねばならぬ。さうして、それを受けて、よしよし御希望通りに吉三郎殿にお會はせしませうと續けると意はよく通ずる。

（五）氏素性の立派な人であるから。この話のはじめに「八百屋八兵衛とて賢人むかしは俗姓賤しからず」とあるのを想起すべきである。

（六）病氣も癒えて、達者な身となられた時分。

（七）逆縁の世。子が親に先だつて逆縁とする。

（八）人の命は生きようと望んでも生きられず、また死なうとおもつても死なれないものなることをいつてある。

くなく現のことくなれば人々の心得にて此事をしらせなばよもや命も有へきかつねく申せし言葉のすへ身の取置まして最期の程を待居しにおもへは人の命やと首尾よしなに申なしてけふ明日の内には其人爰にましまして思ふまゝなる御けんなどいひけるにぞ一しほ心を取直しあたへる藥を外になして君よ戀し其人まだかとそぞろ事いふほどこそあれしらすやけふははや三十五日と吉三郎にはかくして其女吊ひけるそれより四十九日の餅盛なとお七親類御寺に參てせめて其戀人を見せ給へと歎きぬ様子を語て又も哀を見給ふなればよし其通にと道理を責ければ石流人たる人なれば此事聞ながらよもやなからへ給ふまじ深くつゝみて病氣もつゝがなき身ノ折節お七が申残せし事共をも語りなくさめて我子の形見にそれなりとも思ひはらしにと卒塔婆書たてゝ手向の水も泪にかはかぬ石こそなき人の姿かと跡に残りし親の身無常の習とて是逆の世や

### 様子あつての俄坊主

命程頼みすくなくて又つれなき物はなし中く死ねればうらみも戀もな

(二) 病床を出て境内を始めて散歩するところ。

(三) 戀人お七。

(四) 臆病で死ねないやうに噂するだらう

(五) 念者であつた人。次ぎに「そなたの兄弟契約の御かた」とある人。

(六) その人へといふに同じ、

(七) とかくはいはじの意。

(八) 吉三郎が自殺することを指す。

(九) 刃物。

かりしに百ヶ日に當る目枕始て。あがり杖竹を便に寺中靜に初立しけるに卒塔婆の新しきに心を付てみしに其人の名に驚てさりとてはしらぬ事ながら人はそれとはいはじおくれたるやうに取沙汰も口惜と腰の物に手を掛しに法師取つきさまくどめて逆も死すへき命ならば年月語りし人に暇乞をもして長老さまにも其斷を立最後を極め給へかし子細はそなたの兄弟契約の御かたより當寺へ預け置給へば其御手前への難儀彼是覺しめし合られ此うへながら憂名の立ざるやうにといさめしに此斷至極して自害おもひとまりて荊角は世にながらへる心ざしにはあらず其後長老へ角と申せばおどろかせ給ひて其身は念比に契約の人わりなく愚僧をたのまれ預りおきしに其人今は松前に罷て此秋の比は必爰にまかるのよしくれく此程も申越れしにそれよりうちに申事もあらはさしあたつての迷惑我ぞかし兄分かへられてのうへに其身はいかやうともなりぬべき事こそあれと色と異見あそばしければ日比の御恩思ひ合せて何か仰はれしとお請申あげしになを心もとなく覺しめされては物を取てあまたの番を添られしに是非なくつねなるへやに入て人々に語しはさてもくわが身ながら世

(二〇)死の手段として男らしくない。

(二一)夫婦の縁。親子は一世、夫婦は二世主従は三世と俗にいつてゐた。もと佛教に出たもの。

(二二)顔に舌喰ひ切つて自殺する覺悟の見られた時。

(二三)お心に從つて、自殺を思ひ止りませうの意。

(二四)お七の戀、吉三郎のお七との戀、念者との戀、それぞれに哀なる戀であるの意。

上のそしりも無念なりいまだ若衆を立し身のよしなき人のうき情にもだしかたくて、剩其人の難儀此身のかなしき衆道の神も佛も我を見捨給ひしと感涙を流し殊更兄分の人歸られての首尾身の立へきにあらずそれより内に最後急たしされ共舌喰切首しめるなと世の聞へも手ぬるし情に一腰かし給へなにながらへて甲斐なしと涙にかたるにぞ座中袖をしほりてふかく哀みける此事お七親より聞つけて御敷尤とは存なから最後の時分くれゝ申置けるは吉三郎殿まことの情ならはうき世捨て給ひいかなる出家にもなり給ひてかくなり行跡をとはせ給ひなばいかり忘れ置まじき二世迄の縁は朽まじと申置しと様々申せ共中へ吉三郎聞分すいよく思ひ極て舌喰切色めの時母親耳ちかく寄てしばし小語申されしは何事にか有哉らん吉三郎うなづきて菟も角もといへり其後兄分の人も立歸り至極の異見申尽て出家と成ぬ此前髪のちるあはれ坊主も剃刀なげ捨盛なる花に時のまの嵐のごとくおもひくらふれば命は有ながらお七最期よりはなを哀なり古今の美僧はおしまぬはなし惣して戀の出家まことあり吉三郎兄分なる人も古里松前にかへり墨染の袖とはなりけるとやさてもく取集たる戀

（二）無常なり、夢なり、現なりは人生を  
いふ。

也哀也無常也夢なり現なり

# 好色五人女 卷五

## 戀の山源五兵衛物語

### 目 録

① つれ吹の笛竹息のあはれや

さつまにかくれなさ當世男有

② もろきは命の鳥さし

床はむかしと成若衆有

③ 衆道は兩の手に散花

中剃はいたづら女有

④ 情はあちらこちらのちがひ

同じ色ながらひぢりめんのふたの物有

⑤ 金銀も持あまつてめいわく

三百八十の鑑あつかる男有



## 連吹の笛竹息の哀や

- (一) 笛の連吹きをした夜の明け方に、一方の青年が死んだことを示した文句。  
(二) 源五兵衛のことをうたつた流行唄は松の落葉の源五兵衛踊の歌。淋敷座の慰み、さんや源五兵衛ふし品々の中の九歌など、それから近松篁林子の淨瑠璃薩摩歌の中の歌詞などが傳はつてゐる。  
(三) 目に立つほど長い。  
(四) 衆道に同じ。男色關係のこと。  
(五) 女性を指す。  
(六) 念者の友としての交り。男色關係の交り。

(七) 現世に實現の出来ない慾。それは下の八十郎のいつまでも若衆であれかしといふ慾望。

世に時花哥源五兵衛といへるはさつまの國かごしまの者なりしがかゝる田舎には稀なる色このめる男なりあたまつきは所ならはしにして後さがり髪先みちかく長脇差もすぐれて目立なれども國風俗是をも人のゆるしける明暮若道に身をなしよはくとしたる髪長のたはふれ一生しらすして今はや廿六歳の春とぞなりける年久しくふびんをかけし若衆に中村八十郎といへるにはしめより命を捨て浅からず念友せしに又あるまじき美兒たとへていはゞひとへなる初櫻のなかばひらきて花の物云風情たり有夜雨の淋しく只二人源五兵衛住なせる小座敷に取こもりつれ吹の横笛さらにまたしめやかに物の音も折にふれては哀さもひとしほなり窓よりかよふ嵐は梅がかはりをつれて振袖に移くれ竹のそよぐに寐鳥さはぎてとびこふ音もかなしかりき灯おのづからに影ほそく笛も吹おはりていつよりは情らしくうちまかせたる姿して心よく語し言葉にひとつく品替て戀をふくませさりとはいとしさまさりてうき世外なる欲心出來て八十郎形のいつまでも

(へ)ひとひの詠。一日。

(九)忘れて。

(一〇)露の如きはかなき命となる。即ち露の如くはかなき命を捨てよう。

かはらで前髪あれかしとぞ思ふ同じ枕しどけなく夜の明かたになりていつとなく眠れば八十郎身をいためて起しあたら夜を夢にはなし給ふといへり源五兵衛現に聞て心さだまりかねしに我に語給ふも今宵をかぎりなりしに何か名残に申たまへる事もといへば寐耳にもかなしくてかりにも心掛りなりひとへあはぬさへ面影まぼろしに見えけるにいかに我にせかすればとて今夜かぎりとは無用の云事やと手を取かはせばすこしうち笑て是非なきはうき世定がたきは人の命といひ果す其身はたちまち脉あがりて誠のわかれとなりぬ是はと源五兵衛さはぎて忍ひし事も外にして男位にどよめは皆くたち寄さまく薬あたへける甲斐なく萬事のこときれてうたてし八十良親もとにしらせければ二親のなげきかぎりなし年月したしくましましける中なれば八十良が最期何かうたがふまでもなしそれからそれ迄菟角は野邊へおくりて其姿を其まゝ大龜に入て筋出る草の片陰に埋ける源五兵衛此塚にふししづみて悔とも命すつべきより外なくとやかく物思ひしがさてもくもろき人かなせめては此跡三とせは吊ひて月も日も又けふにあたる時かならず爰に來て露命と定むべき物をと野墓よりすくに響きりて

(一) 佛教で一夏九十日を特別の修業期とする。

(二) 精靈祭、盂蘭盆。

(三) 精靈を祭つた精靈棚の前に經を誦むこと。

(四) 十三夜門邊に芋殻を焼いて、冥土から死人の靈を迎へるための焚き火。

(五) 盆踊をする太鼓の音。

(六) 法衣。

(一) 脆きは話中の少年の命と、鳥さしにさゝれる鳥の命とにかけていつてある。

(二) 多支度。冬籠りの用意。また雪に對する、防ぎの準備。

(三) 寒冷の地方で、家の周圍に雪害を防ぐために設ける垣。

西圓寺といへる長老に始を語心からの出家となりて夏中は毎日の花をつみ香を絶さず八十良ぼだいをとひて夢のごとく其秋にもなりぬ垣根朝貝咲そめ花又世の無常をしらせける露は命よりは間のあるものぞとかえらぬむかしをおもひけるに此ゆふくれはなき人の來る玉まつる業とて鼠尾草折しきて瓜なすびおかしげにゑだ大豆かれゝにをりかけ燈籠かすかに棚經せはしくむかひ火に麻がらの影きへて十四日のゆふま暮寺も借錢はゆるさず掛乞やかましく門前は踊太鼓ひゞきわたりて爰もまたいやらしくなりて一たび高野山へのこゝろざし明れば文月十五日古里を立出るより墨染はなみたにしらけて袖は朽けるとなり

### もろきは命の鳥さし

里は冬かまへして萩柴折添てふらぬさきより雪垣など北窓をふさき衣うつ音のやかましく野はづれに行ば紅林にねぐらあらそふ小鳥を見掛其年のほど十五か六か七まではゆかじ水色の袷帷子にむらさきの中幅帯金鏢の一ッ脇差髪は茶筌に取乱そのゆたけさ女のごとしさし竿の中ほとを取まはし

(四)色々の鳥。

(五)得意であるの意。

(六)他の事なく嬉しがる。一途に喜ぶ。

(七)渡り廊下。

(八)庭園に作り設けてある鳥籠。

(九)白鵲であらう。白鵲は和漢三才圖會にこの頃舶來して珍玩されてゐたことが記されてゐる。

(一〇)響應であらう。

て色鳥<sup>いろどり</sup>をねらひ給ひし事百<sup>も</sup>たびなれ共一羽<sup>ひと</sup>もとまらさりしをほいなき有さまし  
ましばし見とれてさても世にかゝる美童<sup>びどう</sup>も有ものぞ其年の比は過にし八十  
良に同じうるはしき所はそれに増<sup>ま</sup>りけるよと後世<sup>ごせ</sup>を取はづし暮かたまで詠<sup>よめ</sup>  
つくして其かたちかく立寄<sup>たちより</sup>てそれがしは法師<sup>ほうし</sup>ながら鳥さしてとる事をゑた  
り其卒<sup>そのきは</sup>こなたへと片肌<sup>かたはだ</sup>ぬぎかけて諸<sup>もろ</sup>の鳥共此兒人<sup>このこじん</sup>のお手にかゝりて命を  
捨<sup>す</sup>が何とて惜<sup>をし</sup>きぞさてもく衆道<sup>しゆどう</sup>のわけしらすめと時の間に數<sup>かず</sup>かぎりもな  
く取まいらせければ此若衆<sup>わかしゅ</sup>外なくうれしくいかなる御出家<sup>ごしゆけ</sup>ぞと問<sup>と</sup>せけるほ  
とに我<sup>われ</sup>を忘<sup>わす</sup>れはじめを語<sup>かた</sup>ければ此人<sup>このじん</sup>もだくと涙<sup>なみだ</sup>くみてそれゆへの御執<sup>ごしゆ</sup>  
行<sup>ぎやう</sup>一しほ殊勝<sup>しゆきやう</sup>さ思ひやられける是非<sup>せひ</sup>に今宵<sup>こんしやう</sup>は我篋<sup>わがけつ</sup>竊<sup>ひそ</sup>に一夜<sup>ひとよ</sup>ととめられしに  
なれくしくも伴<sup>とも</sup>ひ行<sup>ゆ</sup>にいかまへの森<sup>もり</sup>のうちにきれいなる殿作<sup>どのさく</sup>りありて  
馬<sup>うま</sup>のいなく音武具<sup>おんぶぐ</sup>かざらせて廣間<sup>ひろま</sup>をすぎて縁<sup>ゆかり</sup>より梯<sup>はし</sup>のはるかに熊篋<sup>くまけつ</sup>むら  
くとして其奥<sup>おく</sup>に庭籠<sup>にわご</sup>ありてはつがんで唐鳩<sup>からばとんけい</sup>金鷄<sup>きんけい</sup>さまの聲<sup>こゑ</sup>なしてすこし  
左<sup>ひだり</sup>のかたに中二階<sup>ちゅうにかい</sup>四方<sup>しやう</sup>を見晴<sup>みはる</sup>し書物棚<sup>しよぶつだな</sup>しほらしく爰<sup>こゝ</sup>は不斷<sup>ふたふた</sup>の学問所<sup>がくもんじよ</sup>とて是  
に座<sup>ざ</sup>をなせばめしつかひのそれくをめされ此客僧<sup>このきやくそう</sup>は我物讀<sup>わがぶつよみ</sup>のお師匠<sup>ししやう</sup>なり  
よくくもてなせとてかずくの御事<sup>ごじ</sup>ありて夜に入ればしめやかに語慰<sup>かどなぐさ</sup>み

(二)江戸の幕府の直轄地即ち天領に派遣された幕府の地方官の類。

(三)高野山。弘法大師空海の開きし所なればかくいふ。

(三)熱に冒されての變語。

いつとなく契て千夜とも心をつくしぬ明れば別をおしみ給ひ高野のおほしめし立かならず下向の折ふしは又もと約束ふかくして互に泪くらべて人しれず其屋形を立のき里人にたづねけるにあれば此所の御代官としかくの事をかたりぬさてはとお情うれしく都にのぼるもはかどらず過にし八十良を思ひ出し又彼若衆の御事のみ仏の道は外になしてやうく弘法の御山にまいりて南谷の宿坊に一日ありて奥の院にも参詣せず又國元にかへり約束せし人の御方に行ば日外見し御姿かはらず出むかひ給ひ一間なる所に入て此程のつもりし事を語り旅草臥の夢むすびけるに夜も明て彼御人の父此法師をあやしくとがめ給ひ起されておどろき源五兵衛落髪のはじめ又このたびの事有のまゝに語ればあるじ横手うつてさてもく不思議や我子ながら姿自慢せしにうき世とはかなく此廿日あまりに成し跡にもろくも相果しが其きは迄彼御法師くと申せしをおかされての事にとおもひしに扱はそなたの御事かとくれぐなげき給ひけるなを命をしからず此座をさらず身を捨てきとおもひしがさりとては死れぬもの人の命にそ有ける間もなく若衆ふたり迄のうきめをみていまだ世に有事の心ながら口惜さるほどに

此二人が我にかゝるうき事しらせける大かたならぬ因果とや是を申べしかなし

衆道は兩の手に散花

人の身程あさましくつれなき物はなし世間に心を留て見るにいまだいたひけ盛の子をうしなひ又はすへく永く契を籠し妻の若死かゝる哀れを見し時は即座に命を捨て我も人もおもひしが泪の中にもはや欲といふ物つたなし萬の實に心をうつしあるは又出来分別にて息も引とらぬうちより女は後夫のせんさくを耳に掛其死人の弟をすぐに跡しらすなど又は一門より似合しき入縁取事こゝろ玉にのりてなじみの事は外になし義理一へんの念仏香花も人の見るためぞかし三十五日の立をとけしなく忍びく薄白粉髪は品よく油にしたしながら結もやらずしどけなく下着は色をふくませうへには無紋の小袖目にたゝずしてなを心にくき物ぞかし折ふしは無常を勸じはかなき物語の次手に髪を切うき世を野寺に暮して朝の露をせめては草のかけなる人に手向なんと縫箔鹿子の衣襲取ちらし是もいらぬ物なれば

(一)入聲のこと。

(二)下著には色物を著ること。

(三)模様のない、無地の小袖。

(四)天蓋、幡、打敷、佛殿の用具、また飾り。

(五)制止すると思はれる人々。

(六)そねませる生れつきが正しからう。  
美貌。

(七)最上。最も勝れたもの。

てんがいはたうち敷にせよといふ心には今すこし袖のちいさきかなし  
ける女程おそろしきものはなし何事をも留めける人の中にては空泣して  
どしけるされば世の中に化ものと後家たてすます女なしまして男の女房を  
五人や三人ころして後よびむかへてもとがにはならしそれとは違ひ源五兵  
衛入道は若衆ふたりまであへなきうきめを見て誠なるころから片山陰に  
草庵を引むすび後の世の道ばかり願ひ色道かつてやめしは更に殊勝さかぎ  
りなし其比又さつまがた濱の町といふ所に琉球屋の何かしが娘おまんとい  
へる有けり年の程十六夜の月をもそねむ生つき心ざしもやさしく戀の只中  
見し人おもひ掛ざるはなし此女過し年の春より源五兵衛男盛をなづみて數  
くの文に氣をなやみ人しれぬ便につかはしけるに源五兵衛一生女をみか  
ざりかりそめの返事もせざるをかなしみ明暮是のみにて日敷をおくりぬ外  
より縁のいへるをうたてくおもひの外なる作病して人の嫌うはことなど  
云て正しく乱人とは見へける源五兵衛姿をかへにし事もしらざりしに有時  
人の語りけるを聞もあへずさりとては情なしいつぞの時節には此思ひを晴  
べきとたのしみける甲斐なく惜や其人は墨染の袖うらめしや是非それに尋

- (八)女としてのこの世の別れであらう。  
 (九)男の髪風にかへるために、月代を剃ること。  
 (一〇)前髪を置いて髪を結びし年配の男、少年青年に互る。  
 (一一)神無月を偽りの時雨月といふことに註した。その意を含んでつづけてある

(一二)そこの一ヶ所にばかり降る雨。

(一三)こんろ。しちりん。

(一四)なげかはしくの誤りか。

(一五)松に待つをいひ懸けてある。

行て一たび此うらみをいはではと思ひ立を世の別と人／＼にふかくかくし  
 て、自よき程に切て中剃して衣類も兼ての用意にやまんと若衆にかはり  
 て忍びて行に戀の山入をめしより根笹の霜を打拂ひ比は神無月偽りの女こ  
 うろにしてはる／＼過て人の申せし里ばなれる杉村に入れば後にあらけ  
 なき岩ぐみありてにしの方に洞ふかく心も是にしづむばかり朽木のたより  
 なき丸太を二ツ三ツ四ツならべてなげわたし橋も物すぐく下は瀬のはやき  
 浪もくだけてたましむ散ることくわつかの平地のうへに片ひさしおろして  
 軒端はもろ／＼のかづらはいか／＼りてをのづからの滴爰のわたくし雨と  
 や申べき南のかたに明り窓有て内を覗べしづの屋にありしちんからり  
 とやいへる物ひとつに青き松葉を焼捨てて天目二ツの外にはしやくしといふ  
 物もなくてさりとてはあさまし／＼る所に住なしてこそ佛の心にも叶ひて  
 んと見廻しけるにあるじの法師ましまさぬ事かけかはしく何國へと尋べき  
 かたも松より外にはなくて戸の明を幸に入てみれば見臺に書物ゆかしさ  
 にのぞけば竹笥の諸袖といへる衆道の根元を書つくしたる本なりさてはい  
 まも此色は捨給はずと其人のおかへりを待侘しにほとなく暮て文字も見え



△二つ小さい松明。

△（七）うつし世（現世に生きてゐた時）の關係の終始を話すの意であらう。かういふ意にはじめを用ひた例は西鶴文にはしばしば見うける。

がたくともし火のたよりもなくて次第に淋しく独明しぬは戀なればこそかくは居にけり夜半とおもふ時源五兵衛入道わづかなる松火に道をわけて菴ちかく立歸りしを嬉しくおもひしに枯葉の荻原よりやことなき若衆同し年比なる花か紅葉かいづれか色をあらそひひとりはうらみひとりは歎若道のいきごみ源五兵衛坊主はひとり情人はふたりあなたこなたのおもはく戀にやるせなくさいなまれてもだ／＼としてかなしき有様見るもあはれ又興覺て扱もさても心の多き御かたとすこしはうるさかりきされ共思ひ込し戀なれば此まゝ置べきにもあらず我も一通り心の程を申ほどきてなんと立出れば此面影におとろき二人の若衆姿の消て是はとおもふ時源五兵衛入道不思議たちていかなる兒人さまそと言葉を掛ければおまん聞もあえず我事見えわたりたる通りの若衆をすこしたて申かね／＼御法師さまの御事聞傳へ身ヲ捨是迄しのびしがさりとあまたの心入それともしらすせつかく氣はこびし甲斐もなしおもはく違ひとくらみけるに法師横手をうつて是はかたじけなき御心さしやと又うつり氣になりて二人の若衆は世をさりし現の始を語にぞ友に涙をこぼし其かはりに我を捨給ふなといへば法師かんるい

流し此身にも此道はすてがたしとはやたはふれける女ぞとしらぬが仏さま  
もゆるし給ふべし

情はあちらこちらの違ひ

(一)美少年の道で、若道に同じ。男色の  
こと。前髪の事も若衆のことで、同じ意  
である。

(二)誓文立てて契約の上で。  
(三)誓紙は起請文の類。それで契約を固  
むること。

我そもく出家せし時女色の道はふつとおもひ切し仏願也され共心中に  
美道前髪の事はやめがたし是ばかりはゆるし給へと其時より諸仏に御断  
申せしなれば今又とがめける人をももたずふびんと是迄御尋有し御情か  
らはすへく見給ふななどたはふれけるにおまんこそぐるほとおかしく  
自ふともくをひねりて胸をさすり我いふ事も聞しめしわけられよ御かた  
さまの昔を忍び今此法師姿をなをいとしくてかく迄心をなやみ戀に身を捨  
ければ是よりして後脇に若衆のちなみは思ひもよらず我いふ事は御心にそ  
ますとも背給ふまじとの御誓文のうへにてとてもものに二世迄の契といへ  
は源五兵衛入道おろかなる誓紙をかためて此うへはげんぞくしても此君の  
事ならばといへる言葉の下より息づかひあらく成て袖口より手をさし込肌  
にさはり下帯のあらざらん事を不思議なる貞つき又おかし其後鼻紙入より

何か取出して口に入てかみしたし給ふ程に何し給ふといへば此入道赤面して其まゝかくしける是なん衆道にねり木といふ物なるべしおまんをおかしくて袖ふりきりてふしければ入道衣ぬき捨足にて片隅へかいやりてぬれかけしは我も人も餘念なき事ぞかし中幅のうしろ帯ときかけて此所は里にかはりて嵐はげしきにと櫛の大袖をうち掛是をと手枕の夢法師寐もせぬうちにしやうねはなかりきおづ／＼手を背にまはしていまだ灸もあそばさぬやら更に御身にさはりなきと腰よりそこ／＼に手をやる時おまんもきみあしかりき折ふしを見合せ空ねいりすれば入道せき心になつて耳をいらふおまんかたあしもたせばひぢりめんのふたの物に肝つぶして氣を付て見る程貞ばせやはらかにして女めきしに入道あきればてゝしばしは詞もなく起出るを引とゞめ最前申かはせしは自がいふ事ならば何にてもそむき給ふまじとの御事をはやくもわすれさせ給ふか我事琉球屋のおまんといへる女なり過し年數／＼のかよはせ文つれなくも御返事さへましますらみある身にもいとしさやるかたもなくかやうに身をやつして爰にたつねしはそもやにくかるべき御事かと戀の只中もつてまいれば入道俄にわけもなふな

(四)眞に菩提を求むる心からしたのでない出家は變りやすき意。  
(五)色慾を指す。

(一)毛髪は切つても一年経てば、元のやうにのびること。  
(二)還俗して俗名にかへること。  
(三)梅の花開くを見て春の來たことを知る、暦のない山中の様子。  
(四)小さき板廂の家。

(五)身分のよろしき人即ち立派な富み榮えた人。

(六)世を捨て、世に捨てられた僧。

(七)語り傳へる話。

つて男色女色のへだてはなき物とあさましく取みだして移氣の世や心の外なる道心源五兵衛にかきらす皆是なるべしおもへはいやのならぬおとしあな釈迦も片あし踏込たまふべし

### 金銀も持あまつて迷惑

頭は一年物衣をぬけばむかしに替る事なし源五兵衛と名にかへりて山中の梅暦うかくと精進の正月をやめて二月はじめつかたかごしまの片陰にむかしのよしみの人を頼てわすかなる板びさしをかりてしのび住ひ何か渡世のたよりもなく源五兵衛親の家居に行て見しに人手に賣かはりて兩替屋せし天秤のひじき絶て今は軒口に味噌のかんばんかけしなど口惜くながめすぎて我見しらぬ男にたよりて此あたりにすまれし源五右衛門といへる人はとたづねけるに申傳へしを語初はよろしき人なるが其子に源五兵衛といへる有此國にまたなき美男又なき色好八年此かたにおよそ千貫めをなくなしてあたら浮世に親はあさましく其身は戀より捨坊主になりけると世世にはかゝるうつけも有ものかなすへ語りくにそいつめがつらを目み

(八)男女の情交をいふ。

(九)世にある時であらう。世に時めく時。

(一〇)俳優と座元とを兼ねてゐた人。俳優としても名優の一人であつた。

(一一)素人のことで、腰つきがきまらない。(一二)唄の文句。但し最後の「中は檜の木」のあらけつり「など」とあるのを、すぐにあらけなきと語を他に轉じたものであらう。

(一三)狂言綺語で歌舞伎狂言を指す。

たい事といへば其良爰にある物とはづかしく編笠ふかくとかたふけやう  
く宿に立歸り夕は灯も見ず朝の割木絶てざりとはかなしく人の戀も  
ぬれも世のある時の物ぞかし同じ枕はならべつれども夜かたるべき言葉も  
なく明れば三月三日童子草餅くばるなど鶏あはせさまんの遊興ありし  
に我宿のさびしさ神の折敷はあれと鯛もなし桃の花を手折て酒なき徳利に  
さし捨其日も暮て四日なをうたてし互に世をわたる業とて都にて見覺し芝  
居事種となりて俄に良をつくり艶戀の奴の物まね嵐三右衛門がいきうつ  
しやつこのくとはうたへとも腰さためかね源五兵衛どこへ行さつまの山  
へ鞆が三文下緒か二文中は松木のあらけなき声して里くの子共をすかし  
ぬおまんなはさらし布の狂言奇語に身をなし露の世をおくりぬ是を思ふに戀  
にやつす身人をもはぢらへず次第にやつれてむかしの形はなかりしをつら  
き世間なれば誰あはれむかたもなくておのつからしほれゆくむらさきの藤  
のはなゆかりをうらみ身をなげきふをかぎりとなりはてし時おまん二親  
は此行方たづね咥しにやうくさがし出してよろこぶ事のかづく菟角娘  
のすける男なればひとつになして此家をわたせとあまたの手代來りて二人

(二) 四藏を開きて、内に納めた品物などを調べること。

(三) 大判金。小判も判金であるが、下にあるから、ここは大判のみを指してゐる。

(四) その時代の極印ある一步の銀貨。

(五) 内藏に對する稱で、外藏のこと。

(六) 以前に舶來した。

(七) 薪のことか。

(八) 刀の柄を巻くに用ひる鯨の皮。

(九) 小堀遠江守の命名した茶入。

(一〇) 人魚の鹽引以下列舉したものは、世に實際にあり得ない、空想上の珍奇物を滑稽的に擧げたに過ぎない。空想のものといへど、併しそれぞれに何かの聯想的關係を保たせてある。

をむかひかへればいづれもよろこびなして物數三百八十三の諸の鑑を源五兵衛にわたされける吉日をあらため藏ひらきせしに判金貳百枚入の書付の箱六百五十小判千兩入の箱八百。銀十貫目入の箱はかびはへて下よりうめく事すさまし牛とらの角に七ツの壺あり蓋ふきあかる程今極め一步錢などは砂のごとくにしてむさし庭藏みれば元渡りの唐織山をなし伽羅掛木のごとしさんごしゆは壹匁五分から百三十目迄の無疵の玉千貳百三十五柄鯨青磁の道具かぎりもなく飛鳥川の茶入かやうの類ごろつきてめげるをかまはず人魚の塩引めのふの手桶かんたんの米かち杵浦嶋か庖丁箱弁才天の前巾着福縁壽の剃刀多門天の枕鎧大黒殿の千石どをしゑびす殿の小遣帳覺へがたし世に有ほと万宝ない物はなし源五兵衛うれしかなしく是をおもふに江戸京大坂の太夫のこらず請ても芝居銀本して捨てても我一代に皆になしがたし何とぞつかひへらす分別出ず是はなんとした物であらふ

武 刃 書 林

青 物 町  
清

兵 衛 店

貞 享 三 龍 集 丙 寅 歲 仲 春 上 旬 日

攝 刃 書 肆

北 御 堂 前  
森 田 庄 太 郎

板

